

山梨県の中世城館跡

— 分布調査報告書 —

昭和61年3月

山梨県教育委員会

山梨県の中世城館跡

— 分布調査報告書 —

昭和61年3月

山梨県教育委員会

序

文

山梨県は戦国武将武田信玄の国であり、「人は石垣、人は城」の甲陽軍鑑の言葉にあるとおり城はないと考えている方も多いと思われます。

しかし、史跡武田氏館跡・史跡新府城跡・史跡勝沼氏館跡など多くの城郭があり、これは中世の山梨を知る上で貴重な文化財であります。それらの実態を把握し、適切な保存対策を行う必要があります。中央道全線開通等の社会動向の中で、知らずに消滅してしまう中世城郭があってはなりません。

そのために、県下全域の分布調査を行ない、中世城郭の状況を知り、記録に残すとともに、それらの保存対策の基礎資料とするため、昭和58年度から3ヶ年計画で文化庁の補助を受けて実施した報告書です。この調査報告書が、山梨の中世史研究に、また各地の中世城郭の保護のために役立てば幸いと考えております。

刊行にあたり、短期間の調査にもかかわらず、快くお引受けいただいた調査委員及び調査員の先生方、関係市町村教育委員会並びに資料を提供して下さったり、現地を案内していただいた方々に心から感謝いたします。

昭和61年3月

山梨県教育委員会

教育長 石川源朗

凡

例

1. 本書は、昭和58年度から3ヶ年事業として、文化庁の補助を受け山梨県教育委員会が実施した山梨県中世城郭分布調査報告書である。

2. 調査委員及び調査員は次のとおりである。

調査委員 磯貝正義（山梨大学名誉教授）

野沢昌康（山梨県文化財保護審議会史跡部会長）

清雲俊元（山梨県文化財保護審議会委員）

吉村 稔（山梨大学教授）

萩原三雄（山梨県考古学協会会員）

調査員

- 手塚和義・弘田文範・山路恭之助（北巨摩郡・韭崎市担当）
- 花輪正徳・今井定一・金丸平甫・清水水小太郎（中巨摩郡担当）
- 北司存良・畑大介（南巨摩郡担当）
- 数野雅彦（甲府市担当）
- 川口義敬・上原政司・雨宮博文（東山梨郡・山梨市担当）
- 清雲俊元（塩山市担当）
- 弦間耕一・野田昭人（東八代郡担当）
- 立川実造・畑大介（西八代郡担当）
- 堀内真・渡辺儀調・渡辺勉（南都留郡・富士吉田市・都留市担当）
- 田中悟道・山田行輝・佐藤正（北都留郡・大月市担当）

1. 調査員は現地調査を行って、調査票を作成した。

1. 分布図は各城郭の位置と範囲を示した。

番号は市町村単位で一連番号とした。

1. 城郭の位置については出来る限り比定を試みたが、不詳なものについては一覧表にした。

1. 各城郭の解説は主要なもののみとした。

1. 城郭関連宇一覧及び甲斐国志士部一覧は今後の調査の基礎資料として掲載した。

1. 本書の編集は県教育委員会文化課で担当した。

1. 本報告書で掲載した分布図は、昭和61年3月17日付け国地調複発第162号で許可を受けたもので

目 次

序
凡例

第 1 章	調査に至る経緯と方法	1
	1 調査に至る経過	1
	2 調査の経緯	1
	3 調査の方法	3
第 2 章	城郭一覧	9
	城郭一覧表	11
	不詳一覧表	62
第 3 章	城郭解説	65
	北巨摩郡	67
	大泉村 谷戸城	
	小瀬沢町 笹尾砦	
	長坂町 長坂氏屋敷・深草館・小和田館	
	高根町 旭山砦・大坪砦址・米倉氏屋敷・上蔵原の砦址	
	白州町 鳥原の城山・鳥原砦址	
	武川村 中山砦・柳沢氏屋敷・一条氏屋敷	
	須玉町 若神子城・霧子吼城・源太ヶ城・比志の烽火台・大渡の烽火台	
	明野村 屋代氏屋敷	
	丑崎市	80
	史跡新府城跡・蔵の前の砦址・相袋砦址・白山城・駒井氏屋敷・秋山但馬守屋敷・松雲寺砦址	
	中巨摩郡	84
	玉穂町 田中氏屋敷・御朱印屋敷	
	昭和町 文賀屋敷	
	櫛形町 笹城	
	南巨摩郡	85
	身延町 穴山氏館・波木井館・波木井城・南部城・南部氏館・小新城・北山城	
	甲府市	88
	史跡武田氏館跡・平瀬の烽火台・湯村山城・要害城・板垣の烽火台	

東八代郡	94
勝沼町	史跡勝沼氏館跡・岩崎氏館跡	
牧丘町	小田野城・浄古寺城	
塩山市	97
於會屋敷		
山梨市	98
栗原氏館跡・御前山の烽火台・迎方屋敷・安田義定館・武田氏落合館・切差の城山・城伊庵屋敷		
東八代郡	100
一宮町	筑前原遺址	
中道町	勝山城・下曾根氏屋敷・金刀比羅山砦	
八代町	小山城	
西八代郡	105
三珠町	一条氏館	
市川入門町	古城山の砦・鴨狩の城山	
六郷町	寺所の烽火台	
上九一色村	内蔵屋敷・渡辺氏屋敷・本栖の城山・関原峠砦	
北都留郡	108
上野原町	大倉砦・四方津御前山烽火台	
大月市	109
岩殿城・駒宮砦・鎌田氏館		
都留市	110
勝山城・中津森館・谷村城		
富士吉田市	111
吉田城山		
南都留郡	112
山中湖村	山中氏屋敷	
河口湖町	城古山	
第4章 甲斐の中世城郭	113
黒川金山と土豪屋敷	清雲 俊元 115
穴山氏の金山経営と土豪屋敷	野沢 昌康 135

資料編……………	149
甲斐国志士底部一覧……………	151
城乳院係子一覧……………	156
城郭分布図……………	187
第 1 図 八ヶ岳西部……………	188
第 2 図 小淵沢……………	190
第 3 図 長坂上条……………	192
第 4 図 鳳凰山……………	194
第 5 図 夜叉神峠……………	196
第 6 図 奈良田……………	198
第 7 図 新倉……………	200
第 8 図 七面山……………	202
第 9 図 梅ヶ島……………	204
第 10 図 八ヶ岳東部……………	206
第 11 図 谷戸……………	208
第 12 図 若神子……………	210
第 13 図 藁崎……………	212
第 14 図 小笠原……………	214
第 15 図 鯉沢……………	216
第 16 図 切石……………	218
第 17 図 身延……………	220
第 18 図 南部……………	222
第 19 図 糠井山……………	224
第 20 図 御所平……………	226
第 21 図 増宮……………	228
第 22 図 茅ヶ岳……………	230
第 23 図 甲府北部……………	232
第 24 図 甲府……………	234
第 25 図 市川大門……………	236
第 26 図 稲造……………	238
第 27 図 人穴……………	240
第 28 図 上井出……………	242
第 29 図 富士宮……………	244
第 30 図 金峰山……………	246
第 31 図 川浦……………	248
第 32 図 塩山……………	250
第 33 図 石和……………	252
第 34 図 河口湖西部……………	254

第35回	鳴沢	256
第36回	富士山	258
第37回	雁坂峠	260
第38回	柳沢峠	262
第39回	大善露峠	264
第40回	笹子	266
第41回	河口湖東部	268
第42回	富士吉田	270
第43回	須走	272
第44回	蟹取山	274
第45回	丹波	276
第46回	七保	278
第47回	大月	280
第48回	都留	282
第49回	御正体山	284
第50回	駿河小山	286
第51回	猪丸	288
第52回	上野原	290
第53回	大室山	292
第54回	青野原	294

第 1 章 調査に至る経過と方法

1 調査に至る経過

山梨県内には国史跡武田氏館跡をはじめ約330ヶ所の中世城郭址が昭和55年10月に発行された『日本城郭大系』第8巻で確認された。県内の中世城郭を大系的に紹介したものは江戸時代中期に編纂された『裏見裏話』・『諸国虎城考』・『甲斐名勝志』等にはじまり、文化11年に完成した『甲斐国志』によってほぼ集成された。この『甲斐国志』は提要・国法・村里・山川・古跡・神社・仏寺・人物・土産の各部からなっているが、城郭については主に古跡部に詳しい。これには約260ヶ所が記述されている。また『甲斐国古城跡志』は、『甲斐国志』の編纂資料から城郭を抄出したもので、国志の内容が編者の考え方が多く述べられているのに比べると、当時の地元伝承等を知ることのできる資料である。明治以降になると郡誌・市町村誌(史)で各地域ごとに解説されたが、国志の域を出るものは少なかった。

大正末から昭和初年に山梨県で発刊した『史跡名勝天然記念物調査報告』第1・3・8輯では後に旧法に基づく史跡指定になった城郭などを中心に紹介している。昭和42年に『日本城郭全集』が人物往来社より出版され、225城がくわしく紹介されている。その後昭和44年には山梨県教育委員会が、甲府城跡の総合調査団による学術調査結果を『甲府城総合調査報告書』としてまとめた。この考え方は、昭和48年12月からスタートした勝沼氏館跡の発掘調査にも生かされ、以後5ヶ年間の7次に及ぶ調査が行なわれ、昭和56年に国指定史跡となった。

山梨県の中世城郭に対する考古学的調査が勝沼氏館跡で本格的に行なわれた以後、岩崎氏館跡、谷戸城址、笹尾墨跡、於曾屋敷、中山砦、深草館等の調査が行なわれるようになった。一方史跡武田氏館跡の現状変更に伴う発掘調査も急速に増加した。このような中で、昭和55年に『日本城郭大系』第8巻が出版され、330城の存在が確認された。中央自動車道の開通、それに伴うゴルフ場建設計画の乱立、農村地域工業導入事業の推進、圃場整備事業の拡充等の広域開発計画が次々と具体化してきたのも、この時期であった。

昭和54年までに実施してきた県内遺跡分布調査のデータ以上に多くの遺跡が存在しており、特に水田下の遺跡については、ほとんど把握されておらず、圃場整備事業の実施に先だち行なわれた試掘調査によって、北巨摩郡大泉村地内で中世土豪屋敷の一隅が確認された。このような状況の基で、県内に分布する中世城郭の実態を把握し、これらの保護対策の基礎資料とするため、昭和58年度から3ヶ年間で県下の中世城郭分布調査を実施する計画を立て、文化庁の補助を受け、総事業費約700万円でスタートした。

発掘調査以外にも縄張りや占地状況を把握する目的で実測調査が行なわれている。この調査は小室栄一のグランドプラン重視の考え方を原点にしたものであるが、考古学的調査の一方法として、御坂城・小山城・谷戸城・新府城・勝山城(都留市・中道町)・於曾屋敷・中山砦・笹尾墨跡・若神子城・深草館等で行なわれている。

2 調査の経緯

山梨県教育委員会では、「山梨県中世城郭分布調査委員会」(以下調査委員会)を昭和58年5月にもうけ、「山梨県中世城郭分布調査実施要項」を定めた。調査委員会はこの要項に基づいて委員5名(歴史2名・考古2名・地理1名)、調査員22名で構成し、事務局は県教育委員会文化課に置くこととした。

調査区は、北都留(大月市含む)郡・南都留(都留市・富士吉田市含む)郡・北巨摩(韮崎市を含む)郡・西八代郡・中巨摩郡・南巨摩郡・東山梨(山梨市・塩山市を含む)郡・甲府市・東八代郡に分け、可能なかぎり地元の調査員に調査を委託した。昭和58年度中の調査委員会は次のような開催した。

昭和58年6月4日 第1回調査委員会(基本方針等について)

昭和58年6月25日 第2回調査委員会(調査票の検討について)

- 昭和58年 8月11日 第3回調査委員会（調査員の委嘱及び調査方法についての説明）
 昭和58年 8月12日～ 現地調査
 昭和58年 11月25日 第4回調査委員会（中間報告について）
 昭和59年 3月10日 第5回調査委員会（第2回中間報告会）
 昭和59年 3月31日 第6回調査委員会（今年度の調査結果について）

第1年次の調査によって、427ヶ所に城郭及びその存在が推測できる地名や伝承が存在していることが確認された。この数字は『日本城郭大系』によって確認されている中世城郭324城より103ヶ所多いもので、今後の調査によって更に増加する可能性が示された。これ以外にも今まで現地比定が不可能であった城郭が可能となるなど多くの成果をあげることができた。

しかし、例年にない大雪のため、現地踏査は極めて難行した。そのため、遺構の残存状況が不明確な城郭が多く、次年度の調査内容が増加することとなった。

なかでも字名や小名によるリストアップ作業によって抽出されたものは、現地に行っても遺構や伝承がないものが多く、その取り扱いについては、意見の分れる場面もあった。しかし、できる限りの現地踏査を原則とし、城郭の存在が確認できなかったものは、今後の考古学的調査が行なわれることに期待して、今回の報告書に関連地名一覧として掲載することとなった。この結論によって、現地即取り調査の重要性が増し、また江戸時代からの地誌や市町村誌（史）の再分析の必要もでてきた。

そのため、調査員に対し、地名・小名からの再検討を中心に再調査を依頼した。

昭和59年度は、50城の実測調査を計画し、前年度に引き続いて新たな城郭の分布調査を行なった。この調査によって主に塩山市周辺での屋敷跡の発見、東八代郡の御坂山系での烽火台の発見等がなされた。委員会の開催は次のとおりである。

- 昭和59年 7月19日 第7回調査委員会（前年度の調査票の検討）
 昭和59年 7月21日 第8回調査委員会（今年度の調査状況報告）
 昭和59年 11月28日 第9回調査委員会（今年度の調査のまとめ）
 昭和60年 3月30日 第10回調査委員会（来年度の調査方針）

実測等の作業は夏期の樹木が繁茂している時期は困難をきわめるため、11月以降に実施することになり、8月から12月までは補足調査を重点に実施した。この調査によって櫛形町の笹城（砦）をはじめとして多くの城郭の所在確認ができた。

実測調査は、地形図の拡大コピーを基本に城郭の各郭の位置関係やおよその形等をおおまかにおさえる程度を目標として行なった。この調査の中で東八代郡中道町の金刀比羅神社山で、屋根の先端にほぼ原形をとどめる砦が発見された。

字・小名等の地名からの調査については、伝承等が失なわれているために困難を極め、予想したとおりの成果をあげることはできなかった。しかし、屋敷や館の所在については地名（小字・小名）、山城等については伝承が有力な手がかりになり得るとの実感をえたのは成果であろう。

このような結果を踏え年度末の調査委員会では、甲府盆地周辺の再調査の必要性が示され、また報告書の内容等について意見が出された。この意見を踏え、甲府盆地周辺の城郭調査を中心に60年度再調査を実施することとした。

昭和60年度は昨年度現地調査ができなかった城について調査を実施するとともに、報告書の原稿執筆及び分布図作成を行なった。

- 昭和60年 5月17日 調査委員会議（報告書の内容について）
 昭和60年 7月28日 調査委員会議（新発見城の原稿について）

昭和 60 年 11 月 20 日 調査委員会議（報告書の原稿について）
昭和 61 年 1 月 14 日 調査委員会議（報告書の原稿について）

3 調 査 の 方 法

城郭の調査方法については、文化庁の指導に基づき要領とともに、山梨県の特徴であると考えられる烽火台や土塁屋敷と水利についても実施することが第 1 回調査委員会が決まった。調査票及び調査要項は次のとおりである。

- (1) 山梨県内には烽火台を「御前山」あるいは「鐘撞堂山」等と呼称する例がある。これについては「国志」がすでに指摘しているので、今回の調査でも十分留意する必要がある。水利については、八ヶ岳南麓における土塁屋敷が周辺に水路を配し、この水路から得る水を利用した水田経営が行なわれていたことが「館と水利慣行」で指摘されているため、峡東方面等でも調査にあたっては十分留意する必要がある。
 - (2) 中世城郭とは、平安時代末から江戸時代初期までに築かれたり使用された城郭を呼び、今回の調査対象はこの時期に限ることとした。江戸時代の関所や陣屋等はこの中には含まれず、奈良～平安時代の国衛・郡衛についても含まれないものとする。
 - (3) 屋敷・館は平地に築かれたものが多いため、既に消滅している例が少なくないと考えられるが、このようなものについては、地名や伝承を中心、さらに周辺の寺や神社についても聞き取りを行う。
 - (4) 城郭遺構の残存状況及び形態が明らかになるような見取図を作成する。
- 以上の点を主な留意点として現地調査に入った。

山梨県中世城郭分布調査要綱

(目 的)

第 1 条 この事業は、近年特に諸種の開発行為による影響が懸念される中世城郭等（平安時代中ごろから戦国時代に築かれたかもしくは、主に当該時期に使用された城郭）について、その現状等を把握し、もって、今後の文化財保護行政並びにその保存に資するために実施する。

(調査主体者)

第 2 条 調査主体者は、山梨県教育委員会（以下「県教委」と呼ぶ。）とする。

(調査期間)

第 3 条 調査期間は、昭和 58 年度～昭和 60 年度の 3 ケ年継続事業とする。

(調査区域)

第 4 条 調査区域は、県内全域とする。

(調査対象)

第 5 条 調査対象は、中世の城、館、屋敷、砦、陣、烽火台、物見台等を中心とする関連遺跡とする。

(調査事項)

第 6 条 調査事項は、下記に掲げるものとする。

- ア 城郭の位置・規模・遺構の残存状況等の調査および遺跡の範囲内の地形測量図（略測図、見取図でも可）、写真撮影。
- イ 城郭に関する文献・記録・絵図・伝承等の調査。
- ウ 附近一帯の公図写しおよび地名調査。

- エ 附近一帯の中世遺跡(集落跡、中世墓地、経塚、窯跡、鍛冶跡、鉱山跡、牧跡、市跡、神社跡、開跡、古銭出土地、青白磁出土地、荘園関係跡、古戦場、交通路等)の分布図及び遺跡地名表の作成。
- オ 城郭附近一帯の神社、小祠、寺院等の位置および由来の調査。用水路等から開発状況の調査。
- カ その他、必要と思われる事項。

(2) 調査事項は、指定調査票「山梨県中世城郭分布調査票」及び、「山梨県中世遺跡カード」に記入する。

(調査報告書)

第 7 条 前条の調査が終了したとき、指定調査票等を基に、A 4 版サイズの報告書 300 部作成する。

(調査委員会の設置)

第 8 条 第 1 条に規定する目的を達成するため調査委員会を設置する。

- (2) 委員会は、5 人以内の調査員で構成する。
- (3) 委員会に、第 6 条の事項を調査するため地元協力員をおくことができる。

(調査委員等の委嘱および任期)

第 9 条 調査員、地元協力員は、第 6 条に規定する調査事業について知識を有する者の中から、県教委が委嘱する。

- (2) 調査員等の任期は、昭和 58 年 4 月 1 日から昭和 61 年 3 月 31 日とする。

(職 務)

第 10 条 調査員は、調査基本方針の策定、協力員の選定、及び調査報告書の作成等を行う。

- (2) 協力員は、担当地域内において、第 6 条に基づく調査を実施し、指定調査票を作成するとともに報告書の作成等を行う。

(庶 務)

第 11 条 委員会の庶務は県教委文化課において処理する。

(そ の 他)

第 12 条 この要綱の実施に関し必要な事項は、県教委が別に定めるものとする。

1-2	<p>★ 資格 (年齢、性別、学歴、職歴、年齢、学歴、年齢、年齢、年齢、年齢、年齢、年齢)</p> <p>★ 学歴</p>
3	<p>7 学歴 (学歴、年齢、性別、年齢)</p> <p>★ 学歴 (性別、年齢)</p> <p>7 学歴 (年齢、性別、年齢、年齢、年齢、年齢、年齢)</p> <p>★ 年齢 (年齢、年齢、年齢、年齢、年齢、年齢、年齢)</p> <p>★ 年齢 (年齢、年齢、年齢、年齢、年齢、年齢、年齢)</p>

4	<p>★ 年齢 (年齢、年齢、年齢、年齢、年齢、年齢、年齢)</p> <p>★ 年齢 (年齢、年齢、年齢、年齢、年齢、年齢、年齢)</p> <p>★ 年齢 (年齢、年齢、年齢、年齢、年齢、年齢、年齢)</p> <p>★ 年齢 (年齢、年齢、年齢、年齢、年齢、年齢、年齢)</p> <p>★ 年齢 (年齢、年齢、年齢、年齢、年齢、年齢、年齢)</p> <p>★ 年齢 (年齢、年齢、年齢、年齢、年齢、年齢、年齢)</p> <p>★ 年齢 (年齢、年齢、年齢、年齢、年齢、年齢、年齢)</p> <p>★ 年齢 (年齢、年齢、年齢、年齢、年齢、年齢、年齢)</p>
---	---

7	<p>7 年齢 (年齢、年齢)</p> <p>★ 年齢 (年齢、年齢)</p> <p>★ 年齢 (年齢、年齢)</p> <p>★ 年齢 (年齢、年齢)</p> <p>★ 年齢 (年齢、年齢)</p> <p>★ 年齢 (年齢、年齢)</p> <p>★ 年齢 (年齢、年齢)</p> <p>★ 年齢 (年齢、年齢)</p>
---	---

7	<table border="1"> <tr> <th>項目</th> <th>内容</th> </tr> <tr> <td>年齢</td> <td>年齢 (年齢、年齢)</td> </tr> <tr> <td>性別</td> <td>性別 (年齢、年齢)</td> </tr> <tr> <td>学歴</td> <td>学歴 (年齢、年齢)</td> </tr> <tr> <td>職歴</td> <td>職歴 (年齢、年齢)</td> </tr> </table> <p>★ 年齢 (年齢、年齢)</p> <p>★ 年齢 (年齢、年齢)</p> <p>★ 年齢 (年齢、年齢)</p> <p>★ 年齢 (年齢、年齢)</p> <p>★ 年齢 (年齢、年齢)</p> <p>★ 年齢 (年齢、年齢)</p> <p>★ 年齢 (年齢、年齢)</p> <p>★ 年齢 (年齢、年齢)</p>	項目	内容	年齢	年齢 (年齢、年齢)	性別	性別 (年齢、年齢)	学歴	学歴 (年齢、年齢)	職歴	職歴 (年齢、年齢)
項目	内容										
年齢	年齢 (年齢、年齢)										
性別	性別 (年齢、年齢)										
学歴	学歴 (年齢、年齢)										
職歴	職歴 (年齢、年齢)										

А И В С D E F G H	
---	--

А И В С D E F G H	
---	--

А И В С D E F G H	T	T	T	T	T	А И В С D E F G H
	+	+	+	+	+	T
	+	+	+	+	+	T
	T	+	+	+	+	T
	+	+	+	+	+	T
	T	T	T	T	T	T

階	7	用途別	構造(用途)	構造(用途)	全高
地	1				kg km
	2				kg km
	3				kg km
	4				kg km
	5				kg km
	6				kg km
状	<p>< 状態</p>				
	<p>= 状態</p>				

地	10	
	11	状態
	12	
	13	状態
	14	
	15	状態

地				
地	地	地	地	地
地	地	地	地	地

地				
地	地	地	地	地
地	地	地	地	地

第2章 城郭一覽

城郭一覽表

北巨摩郡

小淵沢町

地名 (国郡名)	名	称	所 在 地	占地位况	現 状	現 状 况	遺 存 状 况	遺 構・遺 物・起 因 等	築・在 築 者 (推定・伝承)	文 献 (原典資料)	地 名	備 考
② 3-3-1	島氏居敷	上野尾		平地	水 田 宅	酒 蔵			島藤前守	国志、郡誌	滝ノ前、島津敷、 脇心、新田、日向、 根高	
3-3-2	今井氏居敷			不詳		酒 蔵			今井氏	郡誌		
3-3-3	隈子居敷			不詳					馬場次郎守	国志		臨時誌である。 「とんだいろう」
② 3-3-4	茅野氏居敷	上野尾					骨		茅野始次郎守	北巨摩郡勢一		
3-3-5	平井氏居敷			不詳					平井四郎清盛 不明			
③ 3-3-6	龍尾居敷	下野尾		尾根上	山 林	良		郭、空堀 土塁、虎口	金剛氏	国志 大系 佐尾國勝		
3-3-7	尾根美濃守居敷	小淵沢		不詳						大系		
3-3-8	御城岩見守居敷	上野尾山		不詳								
② 3-3-9	御所居敷	下野尾		平地	山 林		なし		不詳			

地名 (図面No.)	名	称	所	在	地	占	地	状	現	状	現	存	現	在	者	文	地	備	考
② 3-3-10	西原	原			平	地	山	林	なし			不詳							

北巨摩郡
長坂町

① 3-5-1	深草橋 (深草原址) (深草橋)		大八甲字橋新井		台	地	山	林	良	劣、堀切(空堀) 土塁、虎口	堀内下藤守 浅見丸長	国志 大系						町史抄	
② 3-5-2	塚川の草垣		塚川		台	地	山	林	不良	土塁(性格不明)	不明	人系							
③ 3-5-3	三井氏墓		長坂下染		平	地	山	林	不良	土塁	三井氏	国志 大系						三井マキ(《軒》)の附碑あり	
④ 3-5-4	長坂氏墓 (長坂村家)		長坂上染		山	地	山	林	良	冢、堀切(空堀) 土塁、虎口	長坂氏	国志 大系						町史抄	
⑤ 3-5-5	小和町		大八甲小和町 古塚		台	上	水	田	不良	堀切、井戸 段(水原新七郎の名 あり)天衣洞 水運、土壘片	不明	小和町誌調査 機軸						昭和57年度より発掘調査を実施し て確認された。	
⑥ 3-5-6	中丸 (中丸原)		下丸		尾	根	山	林	不良	堀切(空堀)	不明	国志 大系							
⑦ 3-5-7	相吉氏墓		長坂下染				毛	地	清	なし	相吉氏	国志							
⑧ 3-5-8	植松氏墓 (上杉)		長坂下染				畑	畑	清	なし	植松氏	国志							氏神 若宮八幡神社

②	3-5-9	菅沼氏屋敷	白井状	山麓	山林	清 滅		菅沼準人	風志	通称 内女(うちめし) 後河原歌 東下屋敷、四下屋敷 菅沼、菅沼林	
③	3-5-10	甲中氏屋敷 (田中土佐守宅跡)	月野	宅	地	不 良	土器	田中土佐守	風志		
③	3-5-11	向井丹下屋敷	月野								見法寺が屋敷の一部と伝承
④	3-5-12	天白屋	上中丸	尾根上	地	清 滅	なし	小尾能登守	郡誌	小尾平、柿平	
④	3-5-13	南新井屋敷	大八田字南新井	尾根上	地	不 良	土器 彌鉢	不明	日本歴史、大系		
④	3-5-14	東原屋址	八八田字北原	台地上	山林	不 良	土器	不明	なし		

北巨摩郡
大泉村

④	3-2-1	谷戸城	谷戸	山	山 境 史	林 内 跡	好 良	湯見清光	谷戸城跡 調査報告書	馬淵、城瀬 綾山、銅芥	長狭内に八幡神社がある 湯見清光の墓が隣の園にある 北東部から多数古銭出土
④	3-2-2	谷戸氏屋敷 (谷戸城跡守宅跡)	谷戸	山	宅	地 清 滅		谷戸城跡守	陶志	なし	
④	3-2-3	寺所屋址	西井出字3所	台	地 宅	地 不 良	土器	不明	なし	なし	浅川關原氏宅の周辺に土器が一部 残る。
④	3-2-4	城下屋址	谷戸城下	台	地 宅	地 不 良	土器	不明	大系	城瀬 城下 城下	谷戸城の南に続く台地に宅地の間に 土器が残る。

地名 (四圍)	名	所	在	地	占	地	現	況	見	存	遺	跡	・	在	遺	者	文	獻	地	名	備	考	
④	3-2-5	下月出屋址	西井出		台	地	宅	不	上	遺				不明			なし		なし				

北巨摩郡
高根町

④	3-4-1	沢川野	浅川		台	林	山	不	良					徳川氏	北条氏	国志	大系	なし	なし		天正10年 御時書		
④	3-4-2	大坪巻 (大坪巻)	取巻		台	林	山	跡	滅	細	跡	尾	根	切	り	不明	国志	大系	成山		御時書		
④	3-4-3	大林巻	安輪		台	林	山	不	良	土	沼	区	區	下	巻	氏	人系	なし	なし				
④	3-4-4	上原の巻址	上原区		台	林	山	不	良	土	沼			中	村	氏	人系	なし	なし		上原原巻の北限をなす土沼の残る。		
④	3-4-5	小宮山氏巻敷	村山四郎		尾	内	根	消	滅	なし				小	宮	山	氏	国志	なし		入正年間 昌隆寺境内		
④	3-4-6	中尾巻敷	安輪		尾	林	根	不	良	土	沼			小	明		大系	なし	なし				
④	3-4-7	西横巻敷	村山比治		尾	田	根			土	沼			棟	根	氏	大系	なし	なし				
④	3-4-8	米倉氏巻敷 (米倉遺跡之北(北限))	下黒沢		尾	林	根	不	良	土	沼			米	倉	氏	国志	大系	なし	なし		北巨摩郡勢一巻	

① 3-4-9	和山荘		村山北郷字占塚跡	平地	山林	山林	やや良 虎口	仲常、空堀 土堀(ま子形)	北条氏	家忠日記 大系 国志		天正10年
② 3-4-10	新井郷		村山北郷字新井	平地	山林	不良 土地	不良 土地	土堀 土地	不明	大系 北三郎源勢一紙	御小幡 町屋	光村寺がある
③ 3-4-11	日向氏墓 (御小幡郷)		村山北郷字御小幡	平地	山林	不良 土地	不良 土地	土堀 土地	日向大和守?	国志 郡誌		
④ 3-4-12	十輪地蔵		賀藤字十輪地蔵	山腹	山林	やや良	帯冨、井了跡		不明	郡誌 国志 大系	1輪地蔵 小手差	一部須良町内へ移く
⑤ 3-4-13	清水氏墓		賀藤久保	谷	地 山林	不良	水踏		清水氏	なし		
⑥ 3-4-14	人平隠址		賀藤大平	尾根上	山林	良	土堀、空堀		不明	なし		
⑦ 3-4-15	浅川地蔵		浅川	台地上	山林	酒 減	なし		山本氏?	国志 大系	どうつう	
⑧ 3-4-16	白倉氏祠		村山北郷	平地	地	良	土堀		白倉氏	大系	なし	
⑨ 3-4-17	五町田御所		五町田	平地	畑	酒 減	五輪塔多数出土		不明	なし	御所	

北巨摩郡
双葉町

地名名 (図面No)	林	所在地	占地位況	現況	現存 状況	遺蹟・遺物・題詞等	祭・在位者 (指定・伝承)	文 献 (原典資料)	地名	備 考
㊦ 3-7-1 上人塚		字津谷字元屋敷	台地上	宅地	消滅 なし		不詳	地蔵村誌		附近に金山古戦場
㊧ 3-7-2 長者屋敷		字津谷字畑松	山麓	畑	消滅 なし	瓦片出土	不明	地蔵村誌		
㊨ 3-7-3 阿部氏所蔵		字津谷字日向	山麓	水田 境内	不良	中国機8070友が 染織されたといわれ る。	阿部加賀守、私は定 村説は断崖絶壁立脚 小瀬門	地蔵村誌	日向	部分(仙石瀬門跡)
㊩ 3-7-4 防山塚 (金山古戦場)		字津谷字金剛寺	台地	畑	消滅 なし		不詳			

北巨摩郡
明野村

㊦ 3-1-1 尾代氏屋敷 (尾代越中守屋敷)	上津原字淵坊原	段丘上	水田 畑地	不良 消滅	上段 庫裏式		尾代越中守	国志 木系 村誌		
㊧ 3-1-2 二井氏屋敷	上手		水田	消滅			三井市兵衛?	国志	尾敷派	
㊨ 3-1-3 小笠原氏屋敷 (小笠原長清墓)	小笠原厚芝			不良	堀、土塁跡?		小笠原長清	国志 村誌 人系		

北巨摩郡
武川村

3-8-1	星山古城	柳沢	不詳	山林	なし			北巨摩郡勢一画 図志		
3-8-2	秋ノ原氏	牧原	平地	不詳	なし	秋原氏				
④ 3-8-3	水倉左木赤毛 (宮脇清盛文)	宮脇字人持原	台地	畑	淵? 所蔵神(2基)	米倉氏		国志		
④ 3-8-4	柳沢氏屋敷 (赤木清盛文)	柳沢	平地	水田	消滅	柳沢氏		国志 郡志 大系		
④ 3-8-5	山崎氏屋敷	山崎	台地	宅地	堀切り 土塁	山崎氏		国志 大系		
④ 3-8-6	一条氏屋敷	柳沢	平地	宅地	堀跡	一条氏			天正年間に現在の地に移り住むと 伝えられる。	
④ 3-8-7	火田寺跡地	山崎	台地	境内	二重土塁 一石五輪塔	不明				
④ 3-8-8	中山砦		山頂	山林	土塁	武川		中山砦 大系 国志	屋敷、古厩敷、飯古 屋(白河町台ヶ原地 内に残っている)	3-6-6に同じ。

北巨摩郡
須玉町

④ 3-8-1	獅子孔城 (城山)	江草字城山	山頂	山林	良好	江草氏 志田氏?		町志、社記、寺記 大系 国志	城山	信州時代の王御海火台と思われ る。 北条氏天正10年修築
------------	--------------	-------	----	----	----	-------------	--	----------------------	----	------------------------------------

地名 (国・郡)	名	称	所在地	占地位況	現況	現況	保存	遺構・遺物・墓跡等	築・在城者 (推定・伝承)	文献 (原典資料)	地名	備考
④ 3-9-2	大渡の峰大台 (城山)		江草字大渡	山頂	山林	良	良	土溝、墓跡、帯郭	不明	人系	城山	鳥作峠を足知らず位置
④ 3-9-3	比志の峰大台 (城山)		比志	山頂	内	不良	不良	土郭	不明	北田兼勝勢一五	城山	小尾明道、湯水台ルートにあたる 御居山頂の入口、 比志の峰落(谷地)を足知らず位 置にある。
④ 3-9-4	藤巻氏屋敷		大生田		田 畑 宅	消滅	消滅		藤巻氏	国志 人系		
④ 3-9-5	湯ヶヶ城		上津金子大和	山頂	山林	良	良	土溝、墓跡、帯郭	出雲大清光?	国志 大系	矢倉	城山に秋葉神社がある。 臨時城郭
④ 3-9-6	二持氏屋敷		東向字中解敷	平地	田 畑 内	消滅	消滅	屋敷の地蔵、墓跡 (屋敷の外、家老屋 敷、用人屋敷)	二持氏	国志 大系	上解敷、中解敷 下屋敷	城山に石室がある。 三持氏の屋敷がある。 金部と間違えられる屋敷があり屋敷 と間違われる。
④ 3-9-7	真田氏屋敷		久蔵		畑 宅	消滅	消滅		真田副政守	国志、人系 郡誌		真田氏の塚という墓石がある。
④ 3-9-8	中解城		小倉字中尾	台地	畑 宅 工場敷地	良	良	井、墨立者の建物址 中倉の土器、刀が出 土したとわわわわわい ている。	伝 丸高染正地	中尾城遺跡 御田遺跡発掘 調査報告書	町原	
④ 3-9-9	古宮屋敷 (古宮城)		下津金子御所	台地	田 畑 内	不良	不良	墓郭式 土堀 内堀が長くのこって いる。	津金氏	国志 郡誌 大系 町誌	御所前	城山内に諏訪神社がある。
④ 3-9-10	大生田砦		大生田	台地	田 畑 宅 内	消滅	消滅	堀跡 土堀跡	北地氏	国志 郡誌 大系		天正10年に北地氏修築
④ 3-9-11	若神子城 (南城)		若神子字跡状天白	山頂	山林	消滅	消滅	墓郭式 堀切り 石臼、堀跡が出土	不明	国志 人系		烽火台の可能性が高い、寺院跡と も伝えられる。

㉔ 3-9-12	若神子城 (北城)	若神子字小手差	台地	山林	良	土塁	北城氏	国志 大系		城域内に伏魔神社がある。
㉕ 3-9-13	若神子城 (占城)	若神子占城			不良	土郭 土塁	伝 新羅五郎盛光	国志 人系		天王壬午の主戦場
㉖ 3-9-14	清水氏居敷	下津金子和田	台地	宅地	不良	なし	伝 清水盛之助	国志		
3-9-15	若下八郎兵衛居敷	境之沢	平地	宅地	不良	なし	若下八郎兵衛	なし		林道沿にある。
3-9-16	小林茂理石南門	山向	段丘上	宅地	不良	なし	小林氏	なし		
㉗ 3-9-17	又十郎居敷	下津金子下原	山麓	畑 宅地	不良	方形の地頭	神念又十郎	なし		河津に「矢嶋(まとは)のしり」といふ所があり、谷越して写矢の練習をしたと伝えられる。
㉘ 3-9-18	小春の烽火台	江草	尾根上	山林			不明	なし		
㉙ 3-9-19	和田の烽火台	和田	尾根上	山林	良	堀廻り	不明	なし		
㉚ 3-9-20	神戸の烽火台		山頂	宅地	清減		不明	なし		
㉛ 3-9-21	新州峠の烽火台		山頂	山林	良	平坦地	不明	なし		

北巨摩郡
白州町

地名 (図面No.)	地名	所在地	占拠状況	現況	現況	現況	遺構・遺物・絵図等	系・在城者 (推定・伝承)	文献 (図典資料)	地名	備考
③ 3-6-1	鳥原城山	鳥原	山頂	山林	不良	単郭式 堀切あり		不明	図志	城山	鳥原遺蹟、菅沼聖道との関係あり
② 3-6-2	教米石氏屋敷	下教米石	平地	宅地	消滅	なし		馬部氏	図志	所業寺、下小戸 後林、二ノ森 他	
④ 3-6-3	鳥原屋敷	鳥原	段丘	畑	不良	堀 段部片		馬部氏部(伝)?	大系	内院敷、馬部場 段部	
③ 3-6-4	曲通氏屋敷	花水	台地	宅地	消滅	なし		曲通氏	図志		
⑤ 3-6-5	馬部氏屋敷	白旗	平地	内 田	消滅	なし		馬部氏	大系	上屋敷、殿町	上屋敷に白元寺という寺があり馬 部氏の邸所がある。
④ 3-6-6	中山砦										3-6-8と同じ
③ 3-6-7	深沢砦	花水字神野	尾根	山林	良	土塁			大系	城川	
⑤ 3-6-8	横手氏屋敷	横手	平地	宅地	消滅	なし		横手氏	大系	古御所(御殿原)	
④ 3-6-9	根古屋	台ヶ原	段丘上	畑	不良	五輪塔		成川家	なし	根古屋	中山砦の根古屋

3-6-10	柳屋	橋手	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	なし		
--------	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	--	--

正 崎 市

9-1	山寺氏宗歌	旭町南宮子山寺	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳	山寺氏	国志 大系	不明	
⑬ 9-2	井村氏節	旭町上北新字宮下	平地	宅地 社寺境内	不良	土塁	不明			井村左衛門尉出忠	国志 大系 市誌	北門、矢立 の堀、大堀	
9-3	青木氏宗歌	穴山町石水	台地	不詳	不詳	不詳	不詳	不詳		青木氏	北巨摩郡誌		
⑭ 9-4	穴山氏節	穴山町次郎窪	平地	山林	良	土塁、空堀	不明			穴山氏	北巨摩郡誌 国志	杖取坊	
9-5	井村氏宗歌	穴山町次郎窪	平地	不詳	良	土塁、空堀	不明			井村氏	北巨摩郡誌 国志		天正
9-6	伊藤氏宗歌	穴山町伊藤窪	台地	不詳	消滅	なし				伊藤氏	北巨摩郡誌		
⑮ 9-7	重久の嫁水台	穴山町次郎窪	山頂	テレビ塔	消滅	なし				不明	国志 大系	なし	
9-8	大学宗歌	穴山町次郎窪	山麓	不詳	消滅	なし				小山田大学?	国志 大系	大学宗歌	なし
⑯ 9-9	堂ヶ坂岩	穴山町百窪	台地上	山林	不良	土塁、空堀				武田氏 柳川氏	国志 大系 市誌	なし	能見城史部

地図名 (図面No.)	地名	名称	所在地	占地状況	現況	現況	現況	保存状況	遺構・遺物・空堀	築・在城者 (推定・伝承)	文 (原典資料)	地名	備	考
⑭ 9-10	長原氏館	穴山町穴部	台地	山林	やや良	上堀、空堀	長原氏	国志 大系 郡誌	穴山氏館の遺跡				穴山氏館の遺跡	
9-11	山本氏館	穴山町伊藤	台地	不詳	消滅	小井	山本氏?	国志 郡誌				馬場	なし	
⑮ 9-12	紙見城	穴山町反目	山頂	山林野毛	不良	土塁、帯濠、空堀	武田勝頼	国志 郡誌 大系				網門 龍口門	天正10年徳川氏修築?	
⑯ 9-13	新井城	小山町上野子城山	山頂	山林	良好	大手、外堀 本丸〜三ノ丸等	武田勝頼 (天正9年)	国志 大系 郡誌 市誌				奥山、オキドノ	天正10年徳川氏修築 国史跡	
⑰ 9-14	丸山の遺址 (徳政殿)	中田町上野子城山	山頂	山林	消滅	なし	真田勝政?	国志				オキドノ	なし	
⑱ 9-15	水上氏館	中田町中条	平地	宅地	消滅	石橋の跡	水士氏?	国志 郡誌				なし	石橋の跡が残る。	
⑳ 9-16	松雲寺遺址	中田町中条	平地	宅地	不良	土器	不明	なし				なし	なし	
㉑ 9-17	柳井氏館	藤井町柳井	平地	宅地畑	不良	土器	柳井右京大夫	国志 郡誌 市誌				国志		
9-18	小山田氏館	藤井町北下朱	平地	不詳	消滅	なし	小山田氏	国志				なし	越波荘に小山田氏の碑がある	
㉒ 9-19	架正屋敷	藤井町架正	平地	山林	消滅	なし	不明	なし				なし	なし	

9-20	藤井氏屋敷	藤井町野井	平地	畑	不良土器		藤井氏	なし	なし	屋敷の北面に用水堀の分水点あり
9-21	飯田邸敷	藤井町北下条字稻田	平地	畑	消滅	土地区画	不明	なし	藤州	地名、七地区画より推定 土師瓦土器出土
9-22	相模遺址	藤井町北下条字田立	平地	宅地	不良土器		不明	なし	なし	なし
9-23	飯の前築址	藤井町北下条 字飯の前	平地	山林宅地	不良土器		今福氏?	なし	なし	なし
9-24	三光寺跡址	藤井町南下条	平地	宅地	不良土器		不明	なし	なし	なし
9-25	藤井寺火石	藤原町藤平	尾根上	山林	良	平礼地	不明	大系 風志	鎌山	秋葉神社、画あり
9-26	日ノ出野 (飯ノ築城) (河原城)	藤原町三之藏 字タカノス	台地上	畑 道	消滅	なし	不明	國志 大系 孤感	なし	天正10年徳川氏修築 昭和47年に藤原康基
9-27	紫江寺	藤原町宮久保 字藤原沢	尾根上	山林	消滅	なし	不明	國志	なし	なし
9-28	中野氏屋敷	藤原町三之藏 字日之藏	山麓	畑	消滅	なし	不明	なし	なし	なし
9-29	米倉式屋敷	内野町下野井字山本	平地	畑	不良	なし	米倉主計	郡誌 國志	龍ノ枕坂	なし
9-30	越石氏屋敷	内野町下野井 字下条小路	平地	不詳	消滅	なし	越石主水	なし	なし	なし

地名 (別名)	名	称	所 在 地	占地位況	現 況	現 状	遺 存 状 況	遺 傳・遺 物・經 因 守	築・在 城 者 (推 定・伝 承)	文 献 (原 典 資 料)	地 名	備 考
⑧ 9-31	入野氏居敷		入野町入野	山麓	畑	消滅	なし		入野又兵衛	四志	上野敷、前田堀切	なし
9-32	伊藤新五郎居敷		入野町上門井	平地	不詳	消滅	なし		伊藤新五兵衛	四志	なし	
9-33	山寺氏居敷		神山町御山字原	不詳	不詳	消滅	なし		不明	なし	陣小路	
⑨ 9-34	武田信盛		神山町武田字稲反段	段丘上	水田	消滅	土塁址		武田信義	市志 四志 入承	御山敷、御坂、御旗部屋、御旗部の町、寺	市史跡
⑩ 9-35	白山城 (御山邸)		神山町御山字御山	山頂	山林	良好	冢、墓、土塁		武田信義?	四志 大承	御山	信濃館の要害
⑪ 9-36	白山城北臺火台		神山町御山	尾根上	山林	良好	平坦地 空堀		不明	なし	なし	
⑫ 9-37	ムク台烽火台		神山町御山	尾根上	山林	良好	平坦地 空堀		不明	なし	なし	
⑬ 9-38	水上氏居敷		清原町水上	段丘上	水田	消滅	なし		水上光普	四志	なし	小原敷という地名他にあり。
⑭ 9-39	折井氏居敷		清原町折原	段丘上	水田	消滅	なし		折井氏	四志	なし	
⑮ 9-40	青木氏居敷		清原町青木	段丘上	水田	消滅	土地区画		青木氏	大承 四志 市誌	東原敷 西原敷	

9-41	若尾上手屋敷	大塚町若尾上手屋敷 (ア)	段丘上	不詳	不詳	不詳	不詳	山寺其左衛門	郡誌	上手屋敷	
⑬ 9-42	秋山尾守屋敷	和町上条北洞	段丘上	宅	地	不詳	なし	秋山尾守光弘	四志	なし	
⑭ 9-43	永明院墓址	和町上条北洞 守佛院跡	平地	墳	内	清	減	不明	なし	なし	
⑮ 9-44	益福寺墓址	中田町中条	平地	墳	内	不	良	不明			

中巨摩郡
若草町

⑬ 7-11-1	加賀美氏廟	加賀美	平地	社	寺境内	やや良	(禊野式) 土塁?	加賀美氏	国志 大系	なし	町指定中継 法善寺境内で、この寺は加賀美氏 の菩提寺
⑭ 7-11-2	寺部八幡社の墓址	寺部	平地	社	寺境内	消	減	不明	国志 大系	なし	

中巨摩郡
郷形町

⑬ 7-2-1	川野家	中野	山頂	林	やや良	(禊野式)		新羅三郎隆久 秋山太郎光朝	大系 中野町誌 国志	城山	
⑭ 7-2-2	小笠原氏廟	小笠原	平地	宅	地	消	減	なし	国志	人眞 的場 新所 御所天神	
⑮ 7-2-3	上野家 (細城)	上野	台地	宅	地	消	減	なし	国志 大系		

地名 (現地名)	名 称	所 在 地	占地状況	現 状	現 況	保存状況	遺構・遺物・絵図等	築・在城者 (推定・伝承)	文 献 (原典資料)	地 名	備 考
7-2-4	桑原氏屋敷	曲輪田	不詳	不詳	不詳	不詳		桑原氏	国志		詳細不明
④ 7-2-5	笹野	平岡	尾根	山林	良好	良好	堀切あり 平地	不明	国志	城の堀	詳細不明
7-2-6	原田氏屋敷	曲輪田	不詳	不詳	不詳	不詳		原田氏	国志		詳細不明
7-2-7	平岡氏屋敷	平岡	台地	畑	不詳	不詳		平岡氏	国志	御手作	

中 巨 摩 郡
龍 王 町

④ 7-10-1	新庄氏屋敷 (山根の屋敷)	西ノ崎	平地	畑 宅地	消滅	消滅	(平郭式)	飯沼氏部小幡屋呂	玉麟村誌	近印村前	
④ 7-10-2	堀の内	堀の内	平地	宅地	消滅	なし		不明	なし		
④ 7-10-3	藤原屋敷	藤原	平地	宅地	不良	堀		不明	大系		

中 巨 摩 郡
八 田 村

④ 7-9-1	金丸氏御殿	徳太	平地	社中境内	やや良	(平郭式) 土塁、空堀、虎口		金丸伊賀守光信ほか	村志 大系 年記、社記 国志	御殿	
------------	-------	----	----	------	-----	-------------------	--	-----------	-------------------------	----	--

中巨摩郡
玉穂町

④ 7-8-1	田中氏祠堂	町領		平地	地	地	地	やや良 土器 漆跡	(単郭式) 土器 漆跡	田中退守氏墓	国志	川久保	天文年間
④ 7-8-2	下河東神社	町領		平地	社寺境内	やや良	やや良	水堀 掘切り	(単郭式) 水堀 掘切り	加藤家文	村誌 山巨百科辞典 国志	扇田	
④ 7-8-3	熊休田屋敷 (本郷人屋敷)	一町領		平地	地	地	消滅	(単郭式) 土器 漆跡 竹やぶ	(単郭式) 土器 漆跡 竹やぶ	田中退前守氏墓	国志	西ノ沖	

中巨摩郡
田舎町

④ 7-7-1	田中氏祠堂	取石屋		平地	地	地	やや良	(単郭式) 漆跡 土器跡	(単郭式) 漆跡 土器跡	田中与右衛門守茂	中略略		人誌記の墓地に田中家の墓
------------	-------	-----	--	----	---	---	-----	--------------------	--------------------	----------	-----	--	--------------

中巨摩郡
白根町

④ 7-6-1	須賀城	大嵐		平地	地	山林	不良	土器 石礫み	土器 石礫み	高師冬 南北朝	国志 人系 町誌		善忠寺境内との関係あり
------------	-----	----	--	----	---	----	----	-----------	-----------	------------	----------------	--	-------------

中巨摩郡
昭和町

④ 7-5-1	上河東屋敷	上河東		平地	社寺境内	不良	不良	(単郭式) 水堀 土器	(単郭式) 水堀 土器	加藤氏?	昭和中誌 山巨百科辞典 国志	田之神田	鎌倉~室町時代
④ 7-5-2	支那屋敷	上河東		平地	水田	消滅	消滅	(単郭式)	(単郭式)	河東(藤)文賀	村誌 山巨百科辞典 国志	田之神田	妙徳寺境内に文賀の石塔あり

地名 (四角丸)	名	称	所 在 地	占 地 状 况	現 状	現 存 状 况	遺 跡・遺 物・絵 図 等	築・在 賦 者 (推 定・伝 承)	文 献 (解 説 資 料)	地 名	備 考
㊦ 7-5-3	瀧清屋敷		西本二区	平地	社寺境内	やや良	(庫郭式) 空堀、土塀 土師瓦土堀出土	新藤清	国志 山陰日日新聞 中野山社記、寺記	前切	町立林 昭和60年に発掘調査
㊦ 7-5-4	金屋敷		旗本字金屋敷	平地	宅地	消滅	なし	不明	なし		
㊦ 7-5-5	豊味		旗本字屋敷派	平地	宅地	消滅	なし	不明	なし		
㊦ 7-5-6	柳屋敷		旗本敷	平地	宅地	消滅	なし	不明	なし		

中 巨 摩 郡 島 町

㊦ 7-4-1	土屋氏屋敷		島上集	平地		消滅	(庫郭式)	土屋右衛門四次?	町誌 社記	大庭	
㊦ 7-4-2	長田氏屋敷		亀沢	平地	山林 宅地	消滅	(庫郭式)	長田清二郎?	町誌 国志	中下	
㊦ 7-4-3	平見屋の井火台		平見屋	山頂	山林	不詳	不詳	不明	なし		
㊦ 7-4-4	堀心の井火台		神戸	尾根	境内地	不良	平地地	不明	なし		

中巨麻郡
甲西町

⑭ 7-3-1	宮田城	戸田	平地	工業団地	消滅	(河野式)	富田対馬守頼良	高山城発見 大系 国志 町誌		町指定史跡
⑭ 7-3-2	武雄三河守屋敷 (阿努比寺)	荒臥	平地	社寺境内	平中良	(単郭式)	武雄三河守	国志		
7-3-3	宗伯氏邸	東海湖	平地	不詳	消滅	なし	宗伯氏	国志 大系 町誌		
⑮ 7-3-4	秋山氏屋敷	秋山	山麓	社寺境内	平中良	園郭、堀切り 土呂、塚 堀久八平塚の経割出 土	秋山氏	国志 大系 町誌	町指定史跡 現在龍野神社	
⑮ 7-3-5	河村下野守屋敷 (河村山常楽寺)	東落合	平地	社寺境内	不良	単郭式	河村下野守	国志	なし	
⑭ 7-3-6	御前山烽火台	字御前山	山頂	山林	消滅	なし	不明	なし	御前山	
⑭ 7-3-7	大井氏蹟	古市場	平地	宅地 水田	消滅	単郭式 土地区画	大井氏	なし	土肥北 畑の森 屋敷 土井	
⑭ 7-3-8	雨鳴城	落合	尾根	山林	良	土塁 平埴地	不明	国志 大系	なし	

南巨摩郡 増穂町

地名名 (図面No)	名称	所在地	占拠状況	現況	保存 状況	遺構・遺物・慰霊等	築・在據者 (推定・伝承)	文 (原典資料)	地名	備考
⑬-4-1	北山城址(林台)	巻米	山麓	山林	消滅	土塁?	秋山入道光朝	町誌	北山(林台)	鎌倉初期
⑬-4-2	仙阿田氏神社 (妙栄寺)	小室	開 小盆地	社中境内	消滅	堀切	仙阿田重清	国志 町誌	仙阿田	
⑬-4-3	殿勝寺砦	城山	山頂	山林	消滅	烽火台	不明	国志 町誌	城山	

南巨摩郡 富沢町

⑬-2-1	万沢氏屋敷	万沢	台地	畑 宅地	消滅	(単郭式) 石塁	万沢通江守君泰	町誌 国志	御座敷	
⑬-2-2	内藤砦 (御座のらし石)	福土	山頂	山林	不良	(単郭式) 土塁 腰郭	原次郎守	郡誌 大系		
⑬-2-3	白砂山城	白砂山	山頂	山林	良	平地	真田氏?	国志 大系		
⑬-2-4	福土の城山 (金山源さん)	福土	山頂	社中境内	消滅	(単郭式)	佐野氏	国志 町誌		
⑬-2-5	城台	万沢	台地	境内 宅地	消滅	なし	不明	なし	御座敷	

高尾郡 高尾町

④	13-1-1	源氏ヶ岳城	山頂	山林	不詳	不詳	新藤三郎鏡光	風志	源氏山	平安時代
⑤	13-1-2	大井氏居敷	八幡町	山麓	不詳	不詳	大井莊司藤六	町誌 増野町誌 風志		

高尾郡 高尾町

⑥	13-5-1	小宮城 (烽火台)	榊原里	不詳	不詳	不詳	不明	「烽火台をたがえて」		
⑦	13-5-2	波木井城 (墓の城)	波木井字占原敷	台地	不詳	消滅	波木井字塚良長	町誌 風志 甲斐藩誌	占原敷、波山 墓原中心、調練場、 旗口など	
⑧	13-5-3	穴山氏館 (下山城)	下山	山麓	不詳	不詳	穴山勝千代	高尾藩誌 甲斐町誌 大塚 風志 甲斐国古城跡志		本町守備所を中心 町見跡
⑨	13-5-4	小谷城 (遠藤の野子、城跡)	大城	峠	消滅	なし	遠藤伊勢守?	高尾藩誌 風志	大城 馬込、古谷城 の跡	
⑩	13-5-5	粟石山の烽火台 (城山)	粟倉	山頂	山林	良	不明	町誌 風志	粟倉 堀切	
⑪	13-5-6	本城山	大島	山頂	山林	消滅	不明	風志	馬込、粟切 の跡、的場川	
⑫	13-5-7	下川の堀切倉	下山	山麓	不詳	不詳	穴山氏	風志	上の段	穴山時代

地図名 (図幅)	名 称	所 在 地	占拠状況	現 状	現 状	現 状	遺構・遺物・跡地等	築・在城者 (権臣・伝承)	文 献 (原典資料)	地 名	備 考
⑬-5-8	下山地原敷		山 麓	山 麓	社寺境内 公有地	不良	溝状の遺構 切り石	下山氏	南田原郡誌		町史誌 鎌倉時代
⑬-5-9	帯金氏別荘	帯金	段 丘	水 畑	田 畑	不良	土塁?	帯金石蔵	町誌 国志	七小路、下小路 附小路	
⑬-5-10	南郷氏別荘 (深木井氏版)	納平	山 麓	山 林	山 林	不良	遺物址	波小井実長	市郷氏別荘発掘調査 概報		昭和57・58年 発掘調査

南 巨 摩 郡
中 富 町

⑬-6-1	大畑原敷	大畑						大畑 段	国志		
⑬-6-2	高森山の烽火台	十日市場	山 頂	山 林	山 林	不良	配石跡	不明	国志		武田時代の烽火台
⑬-6-3	西島の城山	西島	山 頂	畑	畑	不良		小笠原康兵衛	国志	城山	
⑬-6-4	西島の烽火台	西島	尾根上	山 林	山 林	不良			国志		
⑬-6-5	兵部平原敷	飯高	尾根上	山 林	山 林	滅 亡	なし	飯高兵部少輔	国志		
⑬-6-6	久成の城山	久成	尾根上	山 林	山 林	不良	溝(平地地)	不明	大番		

④ 13-6-7	香田城	中沢	台地	宅地	酒蔵	なし	背高瓦葺	国志 大系	
④ 13-6-8	谷木の烽火台	宮本	山頂	山林	不良	平坦地	不明	大系	
④ 13-6-9	佐田氏居敷		尾根上	境内	不良	平坦地	使田氏	町誌	

南巨摩郡
南 部 町

④ 13-3-1	南部城山	南部	山頂	山林	良	郭、堀切り	南部氏 穴山氏	大系 町誌	城山	町史跡
④ 13-3-2	地頭屋敷 (穴石屋敷)	内船	台地	宅地 池田	清蔵	力形土地四角	穴山氏の代官	町誌	古御所 外古御所	中世
④ 13-3-3	建志寺跡	本部	山麓	畑	清蔵	土題跡	穴山弥九郎居敷	町誌	治家(ジケ)	
④ 13-3-4	佐野氏居敷 (天子堀)	佐野	天子堀跡	天子堀	清蔵	なし	佐野部左衛門常世	町誌 国志	天子堀 八幡神	鎌竹期
④ 13-3-5	峰の家 (徳木井さん)	本部	尾根	山林			徳木井藩直	町誌	杉尾	
④ 13-3-6	占城山	南部	山頂	射撃場	清蔵	烽火台	穴山氏? 徳木井氏?		古城山	足跡に円礎あり
④ 13-3-7	御ヶ森 (川の神)	大和	山頂	山林	不良	石垣 烽火台		なし		

地図名 (図面No.)	名	称	所 在 地	占 地 状 况	現 状	現 存 状 况	遺 跡・遺 物・墓 塚 等	築・在 姓 名 (推 定・伝 承)	文 献 (原 典 資 料)	地 名	備 考
⑭ 13-3-8	楠部氏館		南部	平地	地	消滅	大門 製 御 井戸	南部氏	町誌 郡誌 大系 国志		町指定跡 鎌倉期 浄光寺の廟所、五藏印塔を伝える
⑮ 13-3-9	月州城山		井出	山頂	社寺境内	不良	堀切		町誌 国志 大系	城山 城山穴神	
⑯ 13-3-10	越前館		1島	山頂	山頂				国志 大系		

堀 山 市

① 1-1	於曾屋敷		下於曾	平地	宅地 (公有 個人)	良	占拠	加賀美義経	国志 大系 狐史跡於曾屋敷報告 書	下於曾屋敷	甲斐源氏の加賀美遠光の四・五男 が於曾氏を称す。 狐史跡
② 1-2	平城		下於曾	山麓	社寺境内 (社寺有地)		二枝氏	二枝守國の附録か	国志 東山御遺跡		
1-3	萩原山の登		上萩原	不詳	不詳	不詳	不詳	成田氏	大系		標高村にある武田信重墓跡の地
1-4	萩原氏屋敷		中萩原	平地	不詳		上原	萩原源元左衛門	大系 国志		
③ 1-5	西ノ家の址		西ノ原	台地	畑	消滅	なし	不明	大系 国志 東山御遺跡	城坂	
④ 1-6	於曾館		上於曾	平地	宅地			於曾氏	国志 大系		原跡

㊦ 1-7	武田氏旗印神歌	小笠歌	平地	平地	宅地	宅地	消滅	土塁	武田氏神助	国志 郡誌 松原の昔はなし	苗木(じょく)類歌 苗木屋敷	千松山稲巻寺(廃寺)
㊦ 1-8	風間氏屋敷	下六谷	台地	消滅	宅地	宅地	消滅	なし	風間佐渡守	甲斐城品号		
㊦ 1-9	網野氏屋敷	三田市埴原	平地	不良	宅地	宅地	不良	土塁	網野新五左衛門	網野家古文書 網野源山来書 国志	三田市埴 原郡原(武土原)	
㊦ 1-10	二程堂氏邸	小笠歌花園	台地	消滅	境内	境内	消滅	土塁	二程堂公藤	国志、郡誌 角川日本地名大辞典 大系	小笠原、新園	恵林寺、松尾神社建立のため全壊
㊦ 1-11	武田高春館	千野八家口	台地	不良	境内	境内	不良	上屋、堀	武田高春	系承 国志 郡誌	馬場 女中屋敷 八条田	
㊦ 1-12	十輪屋敷	三田市埴原飯盛	平地	消滅	境内 地	宅地	消滅	なし	伊丹氏(兼長須)	国志 東山郡誌	三田市埴 大手先 天王宿	
㊦ 1-13	田辺氏屋敷	下六谷	平地	不良	宅地	宅地	不良	土塁	田辺氏	なし	なし	
㊦ 1-14	網野氏屋敷	小笠歌	平地	消滅	宅地	宅地	消滅	方形の区画 水堀	網野氏	なし	なし	
㊦ 1-15	奥山氏屋敷	小笠歌	平地	消滅	宅地	宅地	消滅	方形の区画 水堀	奥山氏	なし	大土手 一ノ瀬	
㊦ 1-16	武士土屋址	三田市埴原	平地	不良	境内	境内	不良	土塁	不明	なし	屋敷跡え	

東山梨郡
勝沼町

地図名 (政庁No.)	地名	所在	所在地	占地球況	現況	現況 不良	遺跡・遺物・墓園等	築・在城者 (指定・伝承)	文献 (原典資料)	地名	備考
④ 11-4-1	岩崎氏領 (立広派)	下沼崎		台地	宅地・畑	不良	本丸跡の台 地 築き 掘り式	岩崎氏領 築 因志 人系	岩崎氏領発掘調査 報告書 因志 人系		町史跡
④ 11-4-2	勝沼氏領	勝沼字御前		台地	畑 宅地	やや良	掘り式 礎石を伴う土器跡 水跡跡	勝沼氏? 武田悪八郎?	甲斐の中世城郭の研究、勝沼古事記、勝沼氏遺跡発掘調査報告書		国史跡
④ 11-4-3	小生手氏領	小生手		台地	畑	消滅	掘り式	小生手氏	大系 因志	御家敷	
④ 11-4-4	茶臼山跡水台	上沼崎		山頂	山林	良好	堀切り	不明	因志 人系		情報伝達の川端点
④ 11-4-5	新堀氏居敷	御塚		平地	耕地 宅地	消滅 なし	なし	新堀氏	因志		
④ 11-4-6	加賀氏敷	勝沼		平地	耕地 宅地	消滅	水跡跡	不明	なし		
④ 11-4-7	龍田氏敷	勝沼		平地	宅地	消滅 なし	なし	不明	なし		

東山梨郡
大和村

11-5-1	水蔵草止	水蔵		不詳	山林	小評		武田氏			
--------	------	----	--	----	----	----	--	-----	--	--	--

東山梨郡
牧丘町

⑤	11-3-1	丸山御火台	倉科	山頂	山林	不良	平地	不明	大系		
⑥	11-3-2	姥岩	倉科	台地	畑 毛地	消滅 なし	なし	不明	大系	御城塚	
⑦	11-3-3	成沢の烽火台	成沢	山頂	山林	やや良	塚郭式	不明	大系		
⑧	11-3-4	伊庭岩	倉科	台地	畑	消滅 なし	なし	人村氏	国志 大系		
⑨	11-3-5	大村氏居敷	倉科	尾根	毛地	不良	土塁	大村氏	国志 大系		
⑩	11-3-6	鎌古寺城	鎌古寺	丘陵の先端	畑	良	本丸、又守台 堀、土塁	灰山氏、二所登氏 大村氏、徳川氏	国志 大系		
⑪	11-3-7	小山野城	西俣	山頂	山林		本丸 帯郭 幣壇	灰田義定 堀部源家	国志 大系	西御所、灰中居敷 新次居敷、大木口 出跡、今居敷等	

東山梨郡
春日居町

⑫	11-1-1	新誠	鎌目	山頂	山林	消滅	山腹に石垣 石垣	不明	国志		
⑬	11-1-2	占城	鎌目小字日除	山頂	山林	不良	なし	不明	国志	日除、古成	

地名 (図面%)	名	称	所	在	地	占	地	状	現	況	現	存	遺	跡・遺	物・塚	築	・在	遺	者	文	献	地	名	備	考
② 11-1-3	小手城		釜目		山	頂	山	林	消	滅	なし					不明			国志	(原典資料)					
② 11-1-4	赤堀山		釜目		山	頂	山	林	良				石	樋、水	の手	不明			国志					長谷寺あり	
② 11-1-5	小川奥右平野神社				平	地	宅	地	消	滅	なし					小川氏			大月市史						
11-1-6	三頭峠水台				不	評	宅	地	消	滅						不明			国志						
④ 11-1-7	お下野敷				平	地	宅	畑	地	消	滅	なし				武田氏			国志						
② 11-1-8	信濃屋生屋敷		下岩下		平	地	畑	地	消	滅						武田氏			国志	大系					

東山梨郡
三 雷 村

④ 11-2-1	下釜口の峠水台		二宮村		山	頂	山	林	良				集	落	式	武	田	氏	国志									
④ 11-2-2	松原氏屋敷		上野原		山	敷	宅	地	やや				集	落	式	松	原	宗	介	なし				藩	古	屋	敷	山
11-2-3	松原の峠水台		瓜瀬		不	評							不	評					国志									

11-2-4	櫻井神社火台	不詳	小群						国志		
--------	--------	----	----	--	--	--	--	--	----	--	--

甲 府 市

㊦ 5-1	桜井安芸守宅址 (遠野軒祖塚)	桜井町字中屋敷	平地	畑	消滅	遺構	武田清盛町 桜井安芸守	西山郡誌 国志	中屋敷 下屋敷	附近に清盛院あり
㊦ 5-2	松田氏村敷	善光寺町字助地敷	平地	畑	消滅	なし	松田三郎兼信	国志	松田屋敷	鎌倉時代?
㊦ 5-3	東光寺小僧敷	東光寺町小僧敷	平地	市街地	消滅	なし	不明	なし	土居口 所敷ノ内(慶長)	字名から推定
㊦ 5-4	和田の地山? (八王子山)	和田町	山頂	山林	良	平坦地	不明	国志		推定地
㊦ 5-5	法泉寺山の烽火台	和田町	山頂	山林	良	平坦地				
㊦ 5-6	茶澤神社火台	茶澤町	山頂	山林	良	平坦地		国志		
㊦ 5-7	川窪の地山 (谷の城)	川窪町	山頂	山林	消滅		川窪氏	国志	細田屋敷 お郡火、下城	
㊦ 5-8	落合氏屋敷 (落人屋敷)	四王町字一之坪 107番地	平地	畑 宅	良	堀、土塁	落合氏	大系	一之坪	
㊦ 5-9	一条氏御跡	光の内一丁目	独立 丘	公園	消滅	なし	一条氏御忠願	国志 大系		鎌倉時代

地図名 (河内国)	地名	所在	所在地	占拠状況	現況	現況	遺構・遺物・墓等	築・在姓名 (推定・伝承)	文獻 (原典資料)	地名	備考
㊦ 5-10	金竹氏宗教	金竹池田村	平地	市街地	消滅	なし		金竹氏	国志		
㊦ 5-11	藤村城 (藤ノ崎城)	藤村	山頂	山林	良	土器 門柱 井戸址		武田信虎	高白藏記 国志 大系	城崎平	大永三年
㊦ 5-12	小宮氏宗教	小宮町字北原教	平地	水田	消滅	土地区画		小宮宮内大輔 右衛門尉長 石和五郎光 小宮家長経	大系 国志	北原教 玉田堀	玉田寺(高寺)
5-13	今井氏宗教	上今井町下ノ瀬	平地	宅地	不良	堀の遺跡		今井左馬助信兼	壬代記 妙法寺記 国志 大系	北原教 東原教	室町時代
㊦ 5-14	御座の城山 (天狗山)	御座町	山頂	山林	不良	烽火台の跡		御座衆	国志 大系	城山	
㊦ 5-15	横田氏宗教	新田一丁目	平地	宅地	消滅	石段		横田頼朝守	国志	横田	指定地
㊦ 5-16	酒使氏宗教	酒使町宗教丁	山麓	宅地	消滅	石段		酒使頼康守昌元	国志	酒使丁	附近に酒使宮あり
㊦ 5-17	落合氏宗教	落合町	平地	畑地	消滅	石段		落合惣(宗)兵衛	国志		
㊦ 5-18	小宮山土佐守籠	中小宮塚一丁目	平地	宅地	消滅	なし		小宮山土佐守	国志	小宮教	
㊦ 5-19	猪狩の城山 (火打山、城山)	猪狩町	山頂	山林	消滅	烽火台			国志	城山	

5-20	小曲氏神社	小曲町村東	平地	社寺境内	消滅	願壺	小曲五郎長末	国志	村東	鎌倉時代
5-21	大長神社の烽火台 入長神社の烽火台	上野塚寺町	山頂	大長神社 中野所	消滅 なし	なし	武田氏	大系	なし	
5-22	美智城	八幡軍寺町	山頂山腹	山林	良	張櫃、土塙、門址	武田信虎	国志	根小屋	
5-23	美智城東遺跡 (くま城)	上野塚寺町	山頂 (居組)	山林	良	堀切 跡(11ヶ所) 帯郭(3ヶ所)		人系		築城期間 永正17年~大正10年 存続期間 慶長5年
5-24	石田神社	上石山町	平地	平地	消滅	なし	小山田權中守	国志		
5-25	甲府城	丸の内一丁目地	平地 (北丘丘 礎上)	市街地 公園 (東上)	主郭 や表 外郭 消滅	カワラケ、丸	徳川家康	縣志、山梨県の歴史 甲府城総合調査報告 書 国志	旗町、福屋町、工町 旗高町、二十八町 堀	
5-26	鉾推(遠)龜川	鉾野町	山頂	不詳	不詳	平地	武田信虎	内山國雄 甲斐武田氏 加藤院文書 国志		
5-27	総田山の烽火台 (烽火台)	酒折町	山頂	山林	消滅	なし	小野	国志		
5-28	川田神社 (石和館武田氏廟 跡)	川田町	平地	畑 社寺境内 宅地	消滅		(赤田信昌、信綱) 信俊	甲斐武田氏 小系 壬代記 国志		寛永6年
5-29	國護ヶ崎	丸の内町	塚状地	水田 畑 社寺境内 宅地	良	土塙、堀、石液	武田信虎	内山國雄、縣志 武田信玄和信孝 大系、甲斐武田氏 他	古所敷、中野敷 土原敷、清村園敷 高野、長野他	国指定史跡
5-30	半郷の烽火台	半郷町	山頂	山林	やや良	主郭部 石版	駒井氏?	大系 国志		

地名 (四国記)	名	称	所在地	占地位況	現況	現況	現況	遺跡・遺物・絵図等	築・在城者 (推定・伝承)	文献 (原典資料)	地名	備考
㊦ 5-31	神宮寺氏屋敷		下福野寺町御所様下	平地	相 宅地 個人所有地	やや良 良	石段で区画 区画				御所様下	
㊦ 5-32	御所		地所町	平地	相 宅地 個人所有地	消滅 なし	なし	不明		国志	御所村	
㊦ 5-33	藤原ヶ崎亭		占所川町 岩所町	山 尾根	山林	良	平地	武田氏		国志		
㊦ 5-34	柳の内		柳町	平地	宅地	消滅 なし	なし	不明		なし		
㊦ 5-35	内市場		大田町	平地	宅地	消滅 なし	なし	不明		なし		
㊦ 5-36	荒川屋敷		荒川一丁目	平地	宅地	不良 土堀	土堀	不明		なし		

山梨市

㊦ 2-1	武田金吾屋敷	東徳屋敷		平地	宅地	消滅 なし	方形土堀区画	武田金吾		国志 大系		
㊦ 2-2	武田氏落合館	落合		平地	宅地	消滅 なし	なし	武田氏		国志	落敷	
㊦ 2-3	仏塚		水口字山口	山頂	山林 公有地	不良	平地	不明		国志		

㊦ 2-4	関金平歴史	一町山中字第ノ木 1181~1~3	平地	宅地	出地		土地区画	不明	関金平止之	国志	栗ノ木	慶長年間
㊦ 2-5	丸山の烽火台	水口字丸山	山頂	山林	消滅	なし		不明	大系	大系		「お天狗さん」
㊦ 2-6	切懸登山の烽火台	切懸	山頂	山林	良	石段、自然石が新岩をなしている		御陀染正?	国志	国志		「お山の神さん」
㊦ 2-7	明神山の烽火台 (うまかくし)	上岩下	山頂	山林		幅2~3mほどの隙部		不明	大系	大系		
㊦ 2-8	上野氏歴史	東768	平地	宅地 雇人持地	良	石垣、土塁、濠 土蔵家敷		ササキヨシユウロウ ミナモトのダンプク	国志	国志 山形県の民家		
㊦ 2-9	岩下館	上岩下	不詳	不詳	不詳							
㊦ 2-10	兜山烽火台	上岩下 <i>新(6)館?</i> 下云	山頂	山林	良	平地		不明	なし	なし		
㊦ 2-11	棚山烽火台	久保	山頂	山林	良	平地		不明	なし	なし		
㊦ 2-12	物見山烽火台	岩手地区	不詳						国志 大系	国志 大系		
㊦ 2-13	中村氏歴史	一丁目中	平地	宅地	不良	土塁			なし	なし		
㊦ 2-14	越伊地歴史	上岩内川	平地	宅地	消滅	なし		堀氏	国志 大系	国志 大系		

地図名 (図面No.)	地名	所在	所在地	占拠状況	現況	現存状況	遺跡・遺物・墓園等	築・在築者 (推定・伝承)	文献 (原典資料)	地名	備考
② 2-16	通方所敷	三ヶ所	平地	平地	毛畑	土堀 堀		不明	国志 大系 山梨県の文化財		
② 2-17	女山氏墓敷	小岩敷	平地	平地	毛畑	なし		安山氏	国志		
② 2-18	桑原氏墓敷	上栗原	平地	平地	内小良	土堀 堀		桑原氏	国志 大系		
② 2-19	川原氏墓敷	下井尻	平地	平地	毛畑	木路		井尻氏			

東八代郡 御坂町

⑤ 10-3-1	大野屋敷	尾山字人蔭	山頂	山頂	山林	平地		大野対馬守	大系 国志	御山	大野山御光園寺
⑤ 10-3-2	小野山	人野寺	山頂	山頂	山林	平和地 空堀 堀		人野氏?	なし	御山	烽火台 鎌倉街道の地見
10-3-3	二之宮氏墓敷	二之宮字箱通り	平地	平地	毛畑	不詳		二宮氏			
⑤ 10-3-4	黒野氏墓敷	上黒野	台地	台地	山林	消滅		黒野九郎高基の家城 黒野氏ひきつぐ	国志、大系 二組人伝説 国志、位牌	黒野集 上野京下之清 沼澤類	臨時誌

東八代郡
八代町

㊦ 10-5-1	高家三郎藤政	高家		平地	宅地	平地	消滅なし	高家氏	国志		
10-5-2	くさびの屋敷	岡		不詳	不詳	不詳		不明	国志		
㊦ 10-5-3	下野氏御殿敷	南		平地	宅地	消滅なし		下氏	国志 大系		
㊦ 10-5-4	米倉氏御殿敷	米倉		平地	宅地		水路、土塁	米倉氏			
㊦ 10-5-5	小山城	高家		台地上	園地	長	空堀、土塁 単郭	穴山氏 徳川氏	国志 町誌 大系		天正10年移築
㊦ 10-5-6	波山氏館	北		台地上	宅地 境内地	良	土塁 方形単郭	波田留守?	町誌 大系		慶正元年 消滅跡内
㊦ 10-5-7	奴口御殿	南		平地	宅地	不良	水路		町誌 大系		消滅跡?
㊦ 10-5-8	波人御殿	南		平地	宅地	消滅		中村氏	町誌 大系		
㊦ 10-5-9	夕日長者	岡		尾根上	山林	不詳					
㊦ 10-5-10	朝日長者	岡		尾根上	山林	不詳					

地名 (国名)	地名 (町名)	所在 地	占拠 状況	現 況	現 状	遺跡・遺物・墓等	築・在城者 (相定・伝承)	文 献 (原典資料)	地 名	備 考
10-5-11	飯田氏居敷	北	不詳	不詳	不詳					
㊦ 10-5-12	屋敷の内	増利	不詳	不詳	不詳					
㊦ 10-5-13	(米倉)居敷	米倉	不詳	不詳	不詳					

東八代郡
豊富村

㊦ 10-8-1	三枝土佐守居敷	木原	平地	畑	消滅	なし	三枝氏	国志 大系		
㊦ 10-8-2	浅利氏居敷	浅利	丘陵	畑	消滅		浅利子一			浅利田見堂
㊦ 10-8-3	城平	城平	丘陵	畑	不明	なし	不明	なし	城平	
㊦ 10-8-4	阿部源兵衛居敷	大島原					阿部衛?			

東八代郡
石和町

㊦ 10-1-1	八田氏朝奉印居敷	八田		宅地	良好	土器 十地区跡 堀跡	八田氏	郡誌、中世武田氏 国志、大系 山梨県の文化財	大塚	縣史跡
-------------	----------	----	--	----	----	------------------	-----	------------------------------	----	-----

㊦ 10-1-2	武田信山原	小石和神明	平地	平地	内	消滅	無跡	武田信重	郡誌 国志 武田信重	上屋敷	
㊦ 10-1-3	遠見氏屋敷	小石和神明	平地	宅地	地	消滅	なし	遠見又四郎陣跡?	人系 国志		
10-1-4	春日氏屋敷	市部広岡	平地			消滅	なし	春日氏	大系 国志	広岡	
10-1-5	武田信光畑	市部字上屋敷	平地	市街地	地	消滅	なし	武田信光?	大系	上屋敷	
㊦ 10-1-6	平井氏屋敷	上平井字村中	平地	宅地	地	消滅	なし	平井清隆	人系、国志	村中	

真八代郡
一 宮町

㊦ 10-4-1	須原原野址	須原	平地	山 地	林 内	不良	土塁	不明	国志 大系 町誌		
㊦ 10-4-2	特城	千米寺	山地	山 頂	林	良	帯郭 主郭 堅堀	須原氏 岩崎氏	国志 大系		
㊦ 10-4-3	河宮氏屋敷	木木	平地	地	内	不良	土塁、石室	河宮御津守	大系 国志		
㊦ 10-4-4	早川氏屋敷 (武田屋敷)	中尾	平地	畑	地	消滅	なし	早川氏	国志 大系	現早川氏	
㊦ 10-4-5	三枝氏屋敷	南野出	平地	宅地	地	消滅	なし	三枝守国	大系	東隣所 西隣所	

地図名 (図面No.)	地名	所在	所在地	占拠状況	現況	現況	現況	現存	遺構・遺物・墓園等	築・在城者 (推定・伝承)	文献 (原典資料)	地名	備考
② 10-4-6	比呂堂	南野呂	平地	宅地	地	地	消滅	なし		比呂氏衛	大系		天正年間
⑤ 10-4-7	占屋氏小堂	上塚	平地	宅地	地	地	不良	土塁		占屋寺蔵?	大系		
⑤ 10-4-8	旭山跡大台	金沢	山頂	山林	良	良		常盤 主郭 石積み 堀切?		小明	同志 大系		
⑤ 10-4-9	燧燧寺		平地	境内地	不良	不良		土塁、堀跡		不詳	なし		
④ 10-4-10	新巻新敷		台地	宅地	地	地	消滅	天正年間の墓 中世の掘堀跡出土		占部氏	同志		
⑤ 10-4-11	堀田小敷		平地	宅地	地	地	消滅	なし		古部氏	なし		新巻の占屋氏と同族
⑤ 10-4-12	浜人小敷	田分	平地	宅地	地	地	土塁						

東八代郡
境川村

⑤ 10-2-1	金北羅山跡大台	森谷	山頂	境内	良	好	主郭、密郭			不明	大系		
⑤ 10-2-2	黒野氏神敷	小黒原		境内	消滅	なし				黒野氏	村誌 大系 烈威臣光部忠状		

㊦ 10-2-3	石澤氏屋敷	石橋	平地	宅地	消滅	なし	石澤八郎屋敷	村誌 国誌	矢野家、南仲ノ町東 部、南仲ノ町西側、 北中ノ町東部、北中 ノ町西側 他
㊦ 10-2-4	原氏屋敷	原	平地	宅地	消滅	なし	原氏	村誌	畑野家、御門口
㊦ 10-2-5	平川氏屋敷	前陣田	平地	宅地	消滅	なし	平川弥三左衛門幸 徳川家康文書 藩文書記、位牌	村誌、大系	

東八代郡
中道町

㊦ 10-7-1	石左口屋	石左口	山頂	山林	良	宿禰	不明	国誌 大系	鏡山 屋敷	天正10年
㊦ 10-7-2	藤山城	上青根	山頂	畑	良	土蔵、堀	油川彦八郎信忠	国誌 大系		
㊦ 10-7-3	下青根氏屋敷	下青根	平地	境内	中々良	土塁	下青根中務人輝賢住	国誌 大系		
㊦ 10-7-4	向山氏屋敷	上向山	台地	境内	消滅	なし	向山氏	国誌 大系 町誌		
㊦ 10-7-5	金比羅大神烽火台	石左口	尾根			空堀、土塁、曲輪	不明	なし	なし	

西八代郡
下都町

㊦ 8-5-1	赤池氏屋敷	柳塚					赤池左衛門	なし		
------------	-------	----	--	--	--	--	-------	----	--	--

地図名 (図面No.)	地名	所在地	占拠状況	現況	現況	現況	保存状況	遺構・遺物・秘蹟等	築・在城者 (権足・伝承)	文献 (附属資料)	地名	備考
② 8-5-2	念山御竹	赤城	山	山	林	不明	不明			なし		
④ 8-5-3	馬場氏居敷	常葉							馬場丹後守	国志		
8-5-4	三沢氏居敷	三沢	不詳	山	林	不明	不明					
⑤ 8-5-5	⑤ 互の烽火台	浦	尾	山	林	良	平掘地					「城の台」と呼ぶ
8-5-6	常葉氏居敷	常葉	不詳	不詳	不詳	消滅	なし		常葉二郎光季			

西八代郡
三 珠 町

⑥ 8-2-1	関原峠	芦川	山	頂	山	林	不詳		不明	国志 家忠日記		
⑦ 8-2-2	一条氏館 (上野城)	上野	台	地	畑	不 良	穴堀 土塁		一条行権門大夫右衛門	町誌 大系 西八代郡誌	相崎	

西八代郡
六 郷 町

⑧ 8-3-1	城山 (寺所の城山)	寺所	山	頂	山	林	やや良	堀り	不明	西八代郡誌 町誌 国志	馬表崎 城山	烽火台
------------	---------------	----	---	---	---	---	-----	----	----	-------------------	-----------	-----

④ 8-3-2	城山	鴨打津向	山頂	山林	不良	平坦地	不明	西八代郡誌 町誌	城山、井戸場	烽火台の中継点
------------	----	------	----	----	----	-----	----	-------------	--------	---------

西八代郡
上九一色村

④ 8-1-1	本郷の城山 (柳郷内沼澤)	本郷	平地	山林	良好	1. 土字形石壁 2. 簡單な石壁 3. 2と似た遺跡		村誌 山郷志古		
④ 8-1-2	大内郷屋敷	本郷		水田 宅地	減 地		土堀及び溝	国志 村誌		
④ 8-1-3	渡辺氏屋敷	本郷	平地	山林	不良	磨石の石壁 (当時のものか不明) 石壁	渡辺氏屋敷	本郷町調査報告書 国志 村誌		
④ 8-1-4	本郷の城山	本郷	山頂	山林	良好	土郭(45×10m) と郭4つ	渡辺氏	西八代郡誌 日本経済大系 村誌	城山	

西八代郡
市川大門町

④ 8-4-1	大内氏屋敷		台地	畑 社寺境内	減 地		大木取壊	町誌 国志	大木 陣平	
8-4-2	御前山岩	黒沢	山頂	山林	不詳			西八代郡誌	院外	弘治年間から徳川初陣まで
④ 8-4-3	黒沢の口御番所	黒沢	平地	水田 宅地	減 地	なし	武田氏			
④ 8-4-4	熊鷹山の烽火台	下大内邸	山頂	山林	減 地		武田氏	西八代郡誌		

地名 (河内国)	名	称	所	在	地	占	地	状	況	現	現	況	存	遺	集	・	在	文	地	備	考
② 8-4-5	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城
② 8-4-6	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城
② 8-4-7	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城
② 8-4-8	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城	城

南都留郡 秋山村

⑤ 14-1-1	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
-------------	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

南都留郡 山中湖村

⑥ 14-6-1	和	和	和	和	和	和	和	和	和	和	和	和	和	和	和	和	和	和	和	和	和
⑥ 14-6-2	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山	山
⑥ 14-6-3	平	平	平	平	平	平	平	平	平	平	平	平	平	平	平	平	平	平	平	平	平

南都留郡
河口湖町

④ 14-3-1	赤坂遗址 (稲俣清河の古址 伝玄葉石)	河口湖町	尾根上	畑 畑 宅	内 地	消滅 なし	なし	武田氏?	国志 山梨縣志 南都留郡志	なし	
14-3-2	新倉館	河口湖町	不詳	不詳	不詳	不詳					
⑤ 14-3-3	大石鑪つちの口	大石	平地	原	野	消滅 なし	なし	大石氏	国志	能登戸	
④ 14-3-4	大石の城山	大石	山頂	山	林	不詳		大石氏	国志	城山	
④ 14-3-6	大石氏陣敷	大石	平地	宅	地	消滅 なし	なし	大石氏	国志	御殿敷	
④ 14-3-6	河口氏屋敷	河口	平地	宅	地	消滅		河口左衛門?	国志	大釜池	
④ 14-3-7	瓜栗の城古山	大石	山頂	山	林					城古山	
④ 14-3-8	御成城	御成町 河口湖町	尾根	山	林	良 好	土器、空堀	北条氏 (天正10年)	人系 国志 御成町志	同町史跡	
④ 14-3-9	天女山烽火台		山頂	山	林	良	平地		大系		
④ 14-3-10	船井御成堂	船井				消滅 なし	なし	不明	国志 大系	船成堂	

南都留郡
西桂町

地区名 (図面No.)	名称	所在地	占拠状況	現況	現況	保存状況	遺構・遺跡・施設等	築・在城者 (推定・伝承)	文献 (原典資料)	地名	備考
④ 14-5-1	倉見原歌 (内野歌)	倉見	平地	水田	山地	不良	方形土地区画	倉見新九郎	国志	内城敷、瀬	主要居住者 小泉新九郎 後に内村勘十
14-5-2	小沼の姥山	小沼	不詳	不詳	不詳	不詳					
④ 14-5-3	長者原歌	下森地字寺町		山林	山林	良	帯塚状の平坦地	不明	国志	内野、長者原	

南都留郡
忍野村

④ 14-2-1	忍野姥山	忍野字姥山	山頂	山林	山林	良	瀬、菅 帯塚	不明	人系 国志	姥山、姥の腰	
14-2-2	渡辺氏原歌	内野	山麓	不詳	不詳	不詳		渡辺氏	国志		

南都留郡
道志村

⑤ 14-4-1	道志御座堂	久保	山頂	山林	山林	不詳		不明	国志 道志七理 久保		
-------------	-------	----	----	----	----	----	--	----	------------------	--	--

大 月 市

㊦ 3-1	化野遺跡	大月町花咲	尾根上	境	内	消滅	なし	不明	なし	なし	
㊦ 3-2	綱ヶ谷遺跡	笹子町白野	尾根上	山	林	消滅	なし	不明	なし	なし	
㊦ 3-3	藤田氏館	宮原田鳥沢 字南郷之内	台	内 宅	地	消滅	なし	鎌田氏	大月市史 国志 大系	北郷之内、南郷之内 南郷之内、西郷之内	
㊦ 3-4	芥野御前山	柳山町柳の上字芥野	山	頂	山	林	不良 平地	不明	国志 大月市史	なし	烽火台か
㊦ 3-5	岩殿遺	熊野町岩殿山	山	頂	園	良	常郭、門址	小山田氏	国志 大系	一ノ瀬、二ノ瀬、 木殿、野場、 八門口、蔵原敷	電波塔の第一部長塚、 烽火台、ト中継点
㊦ 3-6	影宮磐	七保町影宮	山	頂	山	林	良	不明	大系 国志	御前	
㊦ 3-7	河内屋敷	初狩町初狩	段丘上	園	鉄線	消滅	なし	初狩五郎?	国志 市史	長殿、上ノ屋敷 地台敷	
3-8	黒野田御蔵敷	笹子町黒野田	不詳	不詳	不詳	不詳		天野宮内左一門?	国志		
3-9	土澤屋敷	初狩町中初狩	段丘上	不詳	不詳	不詳		武田氏?	国志		
㊦ 3-10	柳野御前山	大月町柳野	山	頂	山	林	良	不明	市史	なし	

地図名 (図面No.)	名	称	所 在 地	占拠状況	現 状	現 況	現 状	遺構・遺物・絵図等	築・在城者 (築定・伝承)	文 献 (原典資料)	地 名	備 考
④ 3-11	庄子峠烽火台		庄子町	山 頂	山 林				不明			
④ 3-12	孫橋の城山		孫橋町孫崎	山 頂	山 林		一段の郭		不明	国志		
④ 3-13	赤堀屋敷		人月市	段丘上	宅 地	消 滅	絵図		小山田出陣守	市史		
④ 3-14	丹波屋敷 (新島屋敷)		人月市跡	段丘上	宅 地	消 滅				国志		
④ 3-15	朝之上御所山		朝之上御所の上	山 頂	山 林	良	平地			国志 大系		
3-16	火堀屋敷		七段御門口	不 詳	不 詳	不 詳	なし		長瀬氏	国志 大系	上段家、下段家 馬場	
④ 3-17	赤光屋敷		初野町中御府	段丘上	宅 地	消 滅	なし			国志 市史		
④ 3-18	近ヶ原屋敷ノ中堂		初野町下御府	山 頂	山 林	良	平地		不明	国志		

都 留 市

④ 6-1	朝日馬場		朝日馬場	平 地	水 田	消 滅	なし		不明	国志 大系	馬場 川馬場	内に御堂(仏寺)が有り
----------	------	--	------	-----	-----	-----	----	--	----	----------	-----------	-------------

6-2	人権館	大橋	不詳	不詳	不詳	不詳	不明	国志	厨裏 ミタチ	
6-3	中津森館 (金井館) (小山田氏館)	金井	段丘	内田	不良	堀 土堀	小山田氏	大月市史 大系 国志	金井	大永七年築城 伊豫五ヶ谷村に移す
6-4	塚館 (小山田康正遺教)	荒	平地	宅地	消滅	力形土地区画	小山田康正	国志	境	小山田康正(平朝臣)は境と倉見 の豪住
6-5	大渡城山の烽火台	鹿沼子城山	山頂	社寺境内	不良	土堀、笹野	小山田氏	国志 大系	城山	複郭式 土堀と笹野で防備
6-6	柳原屋敷	下谷子徳直	平地	水堀	不詳	なし	徳直家者	国志	徳直	
6-7	勝山城	字川原	山頂	山林	良好	空堀 郭	小山田氏 榎野氏	国志 大系	城山	
6-8	谷村城 (谷村館) (小山田館)	谷村城	平地	水堀	消滅	なし	小山田氏所有	国志 甲州谷村城築城		複郭式 天文元年(1532年)築城
6-9	谷村の烽火台 (茶臼山の烽火台)	谷村、菅岩	山頂	山林	良好	堀あり 笹野	小山田	国志		複郭時代 複郭式
6-10	与瀬館 (日影城) (平城)	与瀬子日影	河原段丘	堀	良好	堀	谷内(口)郡家守?	甲斐の城		複郭式 朝日時代
6-11	道生堀		河原段丘	水田	消滅	なし	不明	なし		

北都留郡
小菅村

地名 (国郡名)	名称	所在地	占拠状況	現況	現存 状況	遺構・遺物・墓園等	系・在城者 (推定・伝承)	文 献 (参考文献)	地名	備考
④ 15-2-1	小菅砦	小菅村	山頂	山林 境内地	良	空堀 帯郭	小菅菅原	国志 北都留郡誌		

北都留郡
丹波山村

④ 15-3-1	石立崩歌	丹波山村	段丘?	河川敷		なし	なし	なし		
-------------	------	------	-----	-----	--	----	----	----	--	--

北都留郡
上野原町

⑤ 15-1-1	丹波屋敷	西原	山麓	畑	消滅	なし	武田氏	国志		
⑤ 15-1-2	内城跡 (古部館)	上野原	段丘	市街地 通路	消滅	なし	古部氏 加藤氏	国志 北都留郡誌 大系	内城 城 堀 外堀	
⑤ 15-1-3	四方津御座山 の烽火台	四方津	山頂	山林	良	主郭 帯郭 堀切り	不明	町誌 大系		
⑤ 15-1-4	大倉砦	大倉字要岩	山頂	山林	良	主郭 土段 帯郭	不明	町誌 大系	要岩	
④ 15-1-5	磐丸城山の烽火台	磐原字城山	山頂	山林 畑	不良	平相地	不明	町誌 大系		

㊦ 15-1-6	松留館	松留	丘陵	内庭	不良	土器	不明	大系 町誌		
㊦ 15-1-7	杉峠砦	大門	尾根上	道	不良	土器、磁器	不明			
㊦ 15-1-8	大平坂の古戦場	大目	台地							
㊦ 15-1-9	板穴御前山	板穴	山頂	山林	良	平坦地 石版	不明	国志 大系		
㊦ 15-1-10	牧野砦	西方津	山頂	山林	良	平坦地	不明	国志 大系		
㊦ 15-1-11	鶴島御前山	鶴島	山頂	山林	良	平坦地	不明	国志 大系		
㊦ 15-1-12	鷺川館		平地	畑	不良	土地区画	不明			
15-1-13	大門館		不詳	不詳	不詳		尾野館家守			
15-1-14	小伏の姥山	桐原?	不詳	不詳	不詳					
15-1-15	四方津館		不詳	不詳	不詳					
㊦ 15-1-16	丸屋館									

地区名 (阿部町)	名	称	所 在 地	占拠状況	現 状	現 状 概 況	遺 存 遺 跡・遺物・経路等	築・在城者 (推定・伝承)	文 献 (原典資料)	地 名	備 考
⑤	15-1-17	下城	西郷字下城	段丘	畑	消滅					
⑤	15-1-18	古城	大野字古城	尾根	山林	消滅					
⑤	15-1-19	助池	新田尻	段丘	畑	消滅					
⑤	15-1-20	御沖敷	川合	段丘	宅地	消滅					

富士吉田市

地区名	名	称	所 在 地	占拠状況	現 状	現 状 概 況	遺 存 遺 跡・遺物・経路等	築・在城者 (推定・伝承)	文 献 (原典資料)	地 名	備 考
④	12-1	下吉田	下吉田		平地 畑 (個人所有地)	不良	なし	ツツ塚の宮内左衛門	妙法寺記 森の穴隠	堀之内、竹の花友屋 他	
④	12-2	古御館	小明日見(古原)		平地 宅 個人所有地	不良	なし			小原	
④	12-3	新倉御前山	新倉	山	林 (個人所有地)	不良	平地	不明	国志	新倉御前山 一角山	支那根上の山神社あり
④	12-4	吉田城	上吉田御蔵	山	土取り工 跡 取付構	やや良	土堀、堀	遠江政道	国志 妙法寺記	城山 内蔵山	
④	12-5	上郷地御蔵山	上郷地	山	林 (個人所有地)	良	平地 帯堀	不明	なし	ゴテシ、ゴテツ山	

⑫-6	新屋敷	新屋	平地	畑宅 (個人所有地)	酒蔵	土屋	遠山伊豆守が居住		西海戸	松江、文明町
⑫-7	松山前	松山	平地	畑 社寺境内 宅地	不良	土屋	小林親原左衛門のち 和泉	南部留置所	松山、三原	天文5年 松尾神社となる
⑫-8	上野地蔵	上野地	平地	畑宅 (個人所有地)	酒蔵	なし	隠ノ入			景徳元定ほか多量の古銭出土

不 詳 一 覧 表

所在地	名 称	備 考	No.	
北 巨 摩 郡	今井氏屋敷		3 - 3 - 2	
	殿平屋敷		3 - 3 - 3	
	平井氏屋敷		3 - 3 - 5	
	馬場美濃守宅址		3 - 3 - 7	
	笹尾岩見守屋敷		3 - 3 - 8	
	御殿		3 - 6 - 10	
	星山古城		3 - 8 - 1	
	牧原氏		3 - 8 - 2	
	岩下八郎兵衛屋敷		3 - 9 - 15	
	小林茂理右衛門		3 - 9 - 16	
韭 崎 市	甘利氏屋敷	次第窪	9 - 5	
	伊藤氏館	伊藤窪	9 - 6	
	大学屋敷	次第窪	9 - 8	
	山果氏屋敷	伊藤窪	9 - 11	
	山寺氏屋敷	上条南条	9 - 1	
	青木氏屋敷	石水	9 - 3	
	小山田氏屋敷	北下条	9 - 18	
	中沢氏屋敷	穂坂町宮久保字権現沢	9 - 28	
	越石氏屋敷	下円井	9 - 30	
	伊藤新五兵衛屋敷	円野町上円井	9 - 32	
	若尾上手屋敷		9 - 41	
	山寺氏屋敷		9 - 33	
	甲 府	鐘撞堂山		5 - 26
		石田屋敷	上石田	5 - 24
中・南巨摩郡	桑原氏屋敷		7 - 2 - 4	
	原田氏屋敷		7 - 2 - 6	
	平岡氏屋敷	御子作(おてづくり)の字名有り	7 - 2 - 7	
	奈胡十郎義行館	東南詰	7 - 3 - 3	
	小新城	椿草里	13 - 5 - 1	
東・西八代郡	御前山砦		8 - 4 - 2	
	三沢氏屋敷		8 - 5 - 4	
	常葉氏屋敷		8 - 5 - 6	
	春日氏屋敷		10 - 1 - 4	
	武田信光館		10 - 1 - 5	
	くみ沢の墓址		10 - 5 - 2	
	飯田氏屋敷		10 - 5 - 11	
	二之宮氏屋敷		10 - 3 - 3	

所在地名	名称	備考	No.
東山梨郡 (塩山市) (山梨市)	萩原山の堡		1 - 3
	萩原氏屋敷		1 - 4
	雁坂峠烽火台		11 - 2 - 4
	袴腰の烽火台		11 - 2 - 3
	三ツ頭烽火台		11 - 1 - 6
	物見山烽火台		2 - 13
	岩下館		2 - 9
	水賦屋敷		11 - 5 - 1
南・北都留郡 (都留市) (富士吉田市) (大月市)	黒野田御藏屋敷		3 - 8
	玄香屋敷		3 - 9
	小沼の城山		14 - 5 - 2
	波辺氏屋敷		14 - 2 - 2
	平野氏屋敷		14 - 6 - 3
	新倉館		14 - 3 - 2
	大石屋敷		14 - 3 - 5
	大門館		15 - 1 - 13
	小伏の城山		15 - 1 - 14
	四方津館		15 - 1 - 15
	長峰屋敷	七保町瀬戸	3 - 16
	大幡館		6 - 2
	徳重屋敷	下谷字徳重	6 - 6

第3章 城郭解説

1 北巨摩郡

1 谷戸城

八ヶ岳の南麓、標高 856 m の城山とよばれる山に谷戸城がある。「甲斐国志」によれば「茶臼山」ともよばれたとあり、遠くから望めばその様子を知ることができる。城域は東西 400 m、南北 300 m の範囲で、山頂にある本丸を中心に同心円状に郭を配し、北に続く尾根は空堀と土塁で区切っている。

城主は平安時代末に甲斐国の国中地方に勢力を伸ばした甲斐源氏、逸見清光と伝えられている。

谷戸城の南に広がる水田地帯は古代から大八幡荘とよばれ、平安時代から開発が行われた地域であったことが遺跡の分布からわかる。八ヶ岳南麓では、標高 1,000 m 付近に多くの湧水点が分布しており、谷戸城の東西を流

れる東西衣川は「大湧水」からの水を流し、流域の耕地をうるおしている。この川の西は宮川、山田川が南流し、この大八田地域中央部で東西衣川と合流して鳩川となる。このように湧水を水源とする多くの河川が集まり流れるこの地域は、豊富な水と原野に恵まれており古くから水田耕作に適した所であった。八ヶ岳南麓のなかでも早い時期に大規模な開発が行われていたと考えられている。

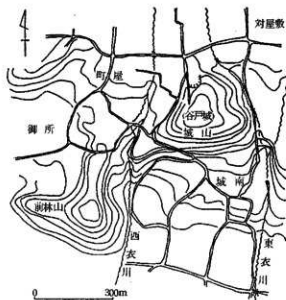
この城について「甲国聞書」は「南方（北条氏）十二方を分て四方は黒駒（御坂町）口、或はカリ坂口より押入と云々、残る八方に对陣、丸山の城は谷戸の城、同夜の中に朝日山へ引退と云々、丸山谷戸の城南方築く、朝日山も南方勢より築と云々」と記し、また「甲斐名勝志」は「谷戸村に城の腰と云所あり。逸見黒源太清光住給ひし館の跡なりと云。堀の形など残り。何れの此か焼し米麦など有。山頂に人権の祠あり」と記す。「甲斐国志」は逸見清光の要害城で、日常の政務等は不便のためこの地域の中心である若神子に居館を構えたのであろう、「吾妻鑑」にある「逸見山」は今日逸見山という地名はないが、居館のことを呼称していると思われるので若神子のことであろうと記しているが、「甲斐叢記」には「又逸見山とも云ふ」とあるので今後検討が必要であろう。

郭は、山頂にある土塁に囲まれた不整形三角形の主郭を中心に、東側に同レベルの二の郭、西側に 3 m ほど下って三の郭、この郭の北側の土塁の外に四の郭、この郭の東側の土塁の外に 3 m ほど下って五の郭を配する同心円状を示している。さらに西山麓には、北に空堀、西に土塁をもった六の郭もある。昭和 56 年に五の郭が発掘調査され、14～15 世紀の遺物が出土している。

2 笹尾砦

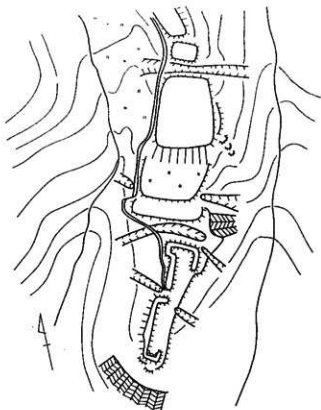
小沢町下笹尾字城山にあるこの砦は、八ヶ岳南西麓の急崖上に占地している。この地は、甲信国境に近く、また樺道にも近いため軍事的には極めて重要であった。

享祿 4 年（1531）に武田信虎に寄った諏訪下社勢によって築かれたことが「当社神幸記」にある。地元伝承では、平安時代末にこの地方に勢力を有した逸見清光の居城で、その後天文年間に笹尾岩見守の居城であったとされている。



第1図 谷戸城周辺図

砦は尾根を切断する4本の堀によって区画された区域にある大小6郭から構成される。尾根の先端に位置するⅠ及びⅡ郭は北から西南にかけて高さ1.5～2mの土塁が廻り、中央に虎口がある。Ⅱ郭北土塁の外側は三ヶ月状の空堀がある。この堀は東に延びて、Ⅱ郭の北東端でとまっている。この堀の北には土塁であったと考えられる帯状の堀がある。この堀の北にも空堀があったと考えられる。昭和54年に小沢沢町誌編纂事業に伴い発掘調査が実施され、土師質土器、雑器、内耳土器、漆塗物付土器、石臼等が出土した。これらの遺物からこの砦の構築年代及び使用年代を明らかにすることは困難であるが、少なくとも16世紀には使用されたということは言えよう。



第2図 笹尾砦要図

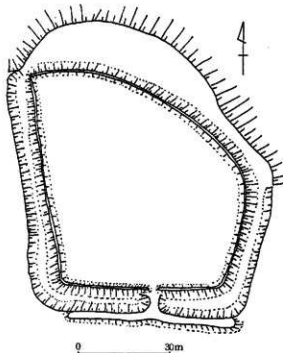
3 長坂氏屋敷

長坂町長坂上条の東にある通称長閑原と呼ばれる山林の中に、東西60m南北80m程で方形に土塁が廻っている場所がある。ここが『甲陽軍鑑』で有名な長坂長釣斎の屋敷と伝えられている。

『甲斐国志』によれば「村ノ東、広原中二、東西百間、南北70間、土塁、乾堀在ス。里人長坂長閑斎の宅跡ナリト云。此モ北条勢ノ修築」とある。

屋敷が立地する山林は、西に広がる水田面より5m余り高く、山林内はほぼ平坦で南に若干傾斜している。遺構は同志の記述よりは小規模で、東西30間南北40間の範囲に深さ1m程度の空堀と高さ1m程度の土塁が廻っているが、東北角は地形に沿っており、全体としては方形とは言い難い。この西には13塚と思われる土盛が3つある。

この屋敷が長坂長閑斎のものであるかは定かではないが、少なくとも戦国期を遡る遺構であると考えられる。



第3図 長坂氏屋敷要図

4 深草館

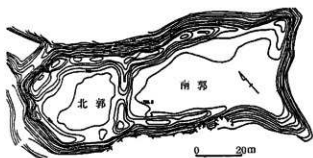
長坂町大八田字南新居の標高780m比高5～6mの尾根上にある深草館は、中世大八田庄のほぼ中心に位置し、谷戸城の居館とも、逸見清光の騎男光長居館とも言われた。「甲斐国志」によれば、堀内下総守の居館であったが、その男主計助のときに废弃したとある。

現在は、高さ1～1.5mの土塁に囲まれた南北35m・東西30mの北郭と一部土塁に囲まれた南北70m・東西30mの南郭とこれらの区を尾根から切り離している幅10m深さ5～6mの堀が残る。昭和初期に山梨県が行った史跡名勝天然記念物の調査では、南郭も土塁に囲まれており、2郭に分かれていた。また館の南に広がる集落の北と西に一部土塁があるが、この土塁は当初集落を囲んでいたものであろう。

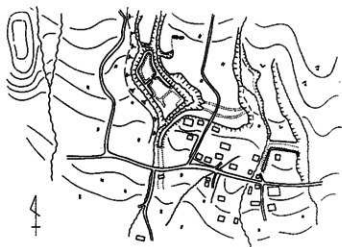
昭和55年に山梨県教育委員会が開場整備事業に先だって館の北東部を発掘調査した結果、15世紀から17世紀にかけての掘って建て遺構群を検出した。更に54基の地下式土壇が検出された。遺物は、瀬戸美濃系の陶器や中国製陶磁器、鉄磁玉、和鏡などとも多数の上師質土器も出土した。また館の堀の東南隅から尾根上を東に延びる2本の空堀を確認した。

このことから、館の規模は約5haに及ぶことが想像できる。

また館の東にも方形の上地区画と土塁がある。



第4図 深草館実測図



第5図 深草館周辺図

5 小和田館跡

長坂町大八田の北西部を南流する鳩川の兩岸標高730m付近に小和田館跡がある。この館跡は、昭和57年度の開場整備事業に伴う発掘調査によって発見され、その後3ヶ年間の調査が実施されている。これらの調査によって、鳩川東部で西衣川との中間に位置する水田下からは、室町時代を中心とした遺構群が検出された。この遺構群は、竪穴式住居址や石組遺構・水溜・石組井戸等であり、あきらかに中世集落址であろうと考えられるのである。また地下式土壇も多数検出されており、中世館を含む広大な中世集落が西河川の中央部に存在していたことが知られたのである。

昭和58年度に調査された鳩川右岸の遺構は、報告書でも図示しているように館跡の西北部分を調査したものであろう。調査区中央に巾3m、深さ1.5m余りの薬研堀が、南北に確認され、この堀の東部に、地下式土壇群と石組井戸、柱穴群が存在した。しかし、調査区が限られていたため、それ以上は確認できていない。

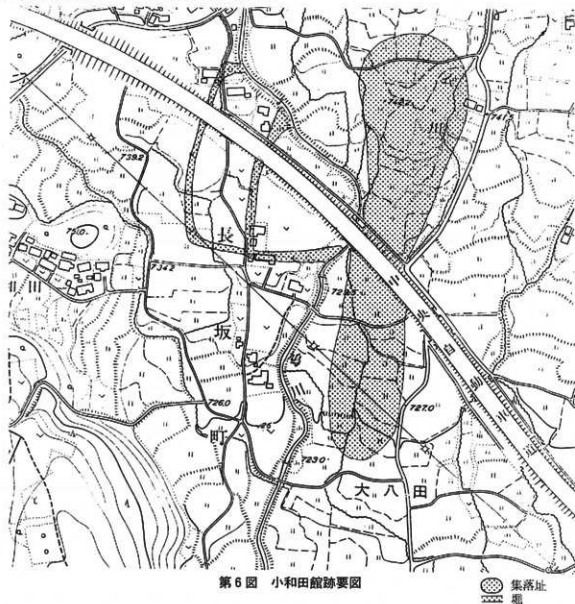
出土遺物は、瀬戸美濃系の鉄釉水滸、鉄釉天目茶碗と緑泥変岩製の碗、占銭等が出土した。なかでも碗の

表面には、「木原新七郎」の刻書があり、木原氏と本館跡の関係が注目された。しかし、その点については不明であるが、一蓮寺過去帳にその名(木原)がみえるのみで、木原氏の動向についてさえ明らかではない。

発掘調査で検出された薬研堀は、150 mほど南下すると、東に曲り、現在古屋敷と呼称されている地区の鳩川寄りにある堀跡に続くものと考えられる。また、調査区の東50 mには巾1.5 m余りの水路が水田の間に南北に流れているが、これは堀跡と考えられるため、さらに内部が堀や土塁によって区画された複郭形態であったと思われる。

以上のことから小和田館跡は、鳩川右岸に築かれた。東西200 m、南北250 m余りの範囲を堀と河川によって囲み、中央を堀で区画した複郭形式の館であったと考えられる。

鳩川左岸に広がる中世遺構は、当時の城下町的な集落址と考えられ、更に北西には深草館とその外部遺構が西衣川東部に広がっていたものと理解できる。



第6図 小和田館跡要図

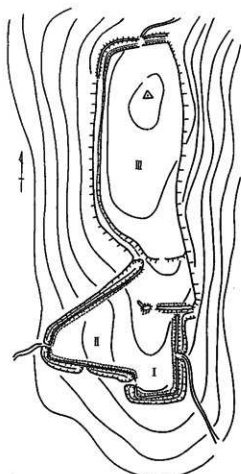
6 旭山砦

北巨摩郡高根町村山北胡と東井出との境にある標高912 m、比高60 mの旭山山頂にある。この砦は、天正10年(1582)に信州の大門峠を経て甲斐に侵入した小田原の北条氏が築いたもので、この時の様子を「武徳編年集成」は「和融ニ依リ氏直ハ野辺山ノ陣ヲ退カントシテ、平沢ノ朝日山ニ築砦」と記している。この記述で「野辺山ノ陣」とあるのは須玉町若神子北城のことで、「平沢ノ朝日山」とあるのはこの旭山の

ことである。

遺構は、周囲を土塁と空堀に囲まれた部分と帯郭に囲まれた地区からなり、東西100m、南北300mの規模である。Ⅰ郭は南側に位置し、内部は平坦で三方を高さ2m程の土塁と深さ1m余りの空堀で囲み、西と東には幅2m程の虎口を持つ。Ⅱ郭はⅠ郭の西に位置し、内部は西傾斜面を3段に造成し、三方に高さ1～2m程の土塁と深さ1～0.5mの空堀を巡らした郭で西中央に虎口がある。Ⅲ郭はⅠ郭の北にあり、中央は自然のままであるが、西側に3～4m下がって幅2m程の帯郭が巡っている。この帯郭は、Ⅲ郭の北で外側に土塁をともなって空堀状になっている。

この砦を縦断する道路は、南山麓からⅠ郭の東虎口に入り、Ⅲ郭の中央を経て北に抜けている。また、Ⅱ郭の西虎口から西麓に通ずる道もあるが、現在は通行できない。近年林道建設計画がたてられ、紫の西麓を通過することとなっている。



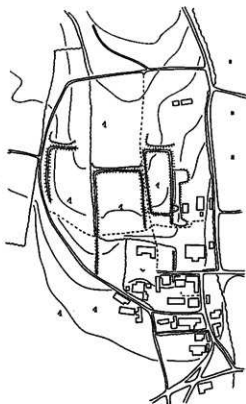
第7図 旭山砦要図

7 大坪壘址

ハケ岳の南麓、標高670mの尾根上に大坪集落がある。この集落の北に続く山林の中に、高さ1～1.5mの土塁が約5haの範囲に存在している。この土塁址の性格を説明する伝承は、今日地元には無い。しかし『北巨摩郡誌』に、この地域の氏神である建部神社が治承年間まで大坪組にあったが、その後現在の地に移ったとあることから、この壘址は平安時代の社の跡とも考えられる。また、天正年間に居た八巻上総介の屋敷跡という話もあるがはっきりしない。

現在は松林の中に、土塁によって大きく三つに区画されている。尾根の東部にある遺構は、東西40m南北120mの長方形を呈し、この区画の中央にはL字状の土塁がある。この遺構の東は2～3m下がって平坦地が、また南にも土塁が延びているが、人家と水田によって切られており性格は不明である。尾根の中央に位置する遺構は、東西80m南北280mの規模をもっている。尾根の西に位置する遺構は、東西40m南北100m程のL字状の土塁からなる。

なお、東部遺構の東にある竹林を地元では平太夫(へいだゆう)屋敷、その南を勘太夫(かんだゆう)屋敷と呼んでいる。

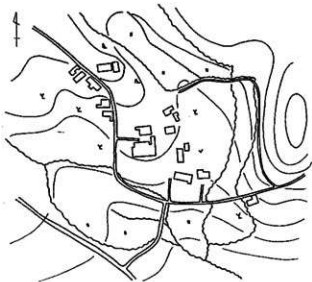


第8図 大坪壘址要図

8 米倉氏屋敷

八ヶ岳の南麓標高 640 m の高根町下黒沢の志合集落に米倉氏の屋敷跡（別名土城）と呼ばれる所がある。この遺構は、比高 7～8 m の尾根上にあり、人家の間に高さ 1～1.5 m 程の上塁が若干残っている程度で、全体を把握出来ない。米倉氏は16世紀にこの地域を領した土豪で、以前は笛吹川の左岸の八代町米倉に居たとされている。また、釜無川右岸の武川村にも米倉氏の屋敷跡がある。

屋敷の東西に沢があり、この沢を水田開発した土塁の跡に米倉氏が入ったものと考えられる。この地は、八ヶ岳南麓台地の入り口の一つである乙坂を押さえる上でも、また若神子城のすぐ北に位置しているためからも軍事的に重要な所であったと考えられる。

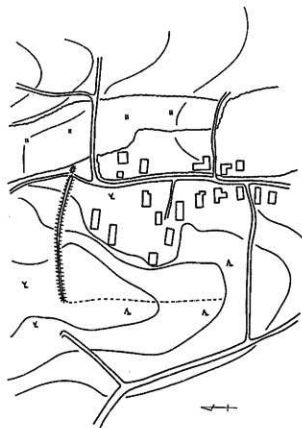


第9図 米倉氏屋敷要図

9 上蔵原の塁址

八ヶ岳の南麓標高 700 m の尾根の中央から東側にかけて東西 150 m 南北 250 m 程の範囲に土塁がI字状に存在している。現在の集落は、この遺構より東及び南に位置しており、また集落を形成していく段階で、上塁を一部破壊しているため、この土塁址は直接的にこの集落とのかかわりは無いものと考えられるが、現状では集落を囲んでいるようにも思える。

高野山の成慶院の『武田家過去帳』に天正4年甲斐国逸見庄蔵原村中村右近丞の名が見えるので、この人物との関係も考慮しなければならない。また、昭和33年集落の西の山林を開墾中に塚を崩したら、六六部納経の経筒が古銭とともに発見されている。この遺物は、中世末期の土豪層の宗教意識を物語るとともに、北巨摩郡下に多い巨大な土塁址の性格を知る上でも重要な事と考えられる。



第10図 上蔵原の塁址要図

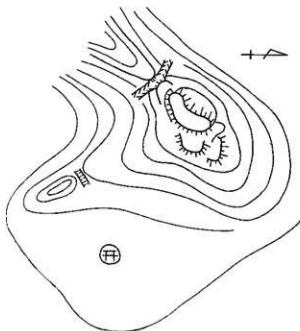
蔵原は現在、上・中・下の3集落からなり、神社及び寺は下蔵原に古いものがあるが、天正年間の古府中の八幡社の記録に、「二番蔵原のねぎ」が見えるが、これは中蔵原にある諏訪神社のことと考えられている。

10 鳥原の城山

北巨摩郡白州町鳥原の西、石尊神社のある裏山に所在するこの城は、『甲斐国志』に「烽火台ナリ、逸見筋世尾ノ塁ニ抗衡シテ、因境二備フト伝フ」とある。また同書の符尾塁跡の項に「此ニテ鳴鐘セバ鳥原ニテ太鼓ヲ打テ相応ズルト云伝フ……」ともある。

現在残る遺構は、10m²程の山頂を中心に、北東・東・南西とに延びる尾根上に2～3段の帯郭がある。南西及び東に延びる尾根の鞍部には堀切りがある。山頂部の西側半分は、崩落しており旧状を知ることはできないが、江戸中期のものと思われる石の祠がある。

この城へは、東麓の中腹にある石尊神社へ通ずる急峻な石段を登って境内に入り、そこから尾根伝いに登ったものと考えられる。

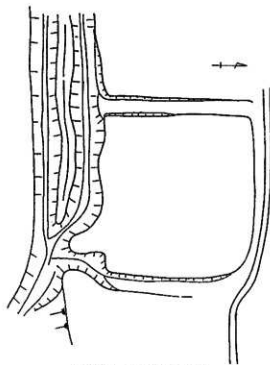


第11図 鳥原の城山要図

11 鳥原 塁址

釜無川の右岸、甲斐駒ヶ岳の麓に広がる河岸段丘の中央部にある鳥原集落の北東に、殿畑と呼ばれる方100m余りの台状の畑がある。この畑の西には幅10m程、深さ2～1m程の堀跡が50m程北に延びている。東には堀跡と思われる帯状の窪地が若干ある。この河岸段丘の南縁には幅5～6m、深さ2m余りの溝が東西に走り、この溝に堀跡が続いている。

周囲には中世遺跡が多くあり、200m西に位置する諏訪神社境内から刃目茶碗が出土している。昭和58年度に、白州町誌編纂事業に伴って実施した遺跡の分布調査から、河岸段丘上を中心に中世遺跡が多く分布していることが明らかにされた。このことは、中世の街道が河岸段丘上に走っていたことを示すものと考えられる。



第12図 鳥原塁址要図

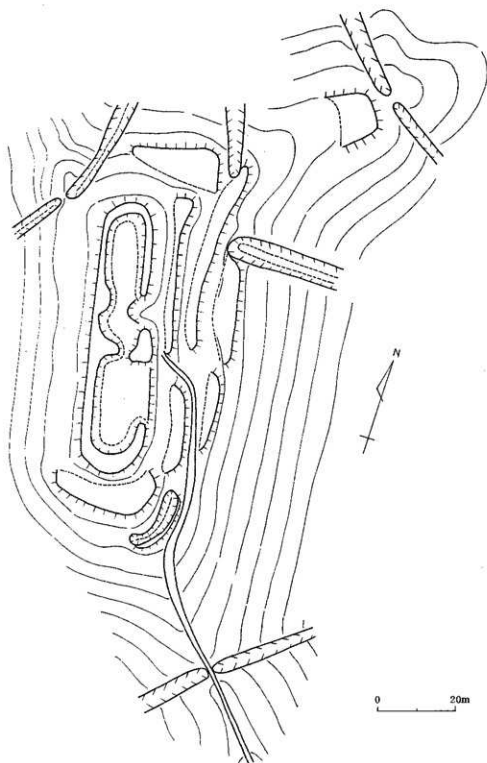
また、鳥原集落の西にある石尊神社裏山は城山と呼ばれ、烽火台であるが、これとのかかわりも考えられる。この烽火台は、釜無川対岸にある世尾塁址に対応していたことが『甲斐国志』にみえる。

12 中山 砦

釜無川と大武川に挟まれた標高887mの中山の山頂に築かれた中世の山城で、武川衆が拠ったと伝えられる。『甲斐国古城跡志』には遠見、ノロシ場所と記されている。

遺構は東西 20 m、南北 60 m の山頂にある周囲を上塁によって囲まれた二つの郭を中心に、北東に延びる尾根に竪堀 1 本、北西に延びる尾根に尾根切り 1 本、南東に延びる尾根に空堀が 1 本ある。山頂にある二つの郭は、北部及び南郭からなり、虎口は北部南東にある。北郭と南郭は土塁越しの虎口で結ばれている。

昭和56年に武川村誌編纂事業に伴い発掘調査が行なわれた。この調査によって、東側土塁が二度にわたって構築されていたことが明らかになった。また柱穴及び礎石状平石も検出された。少量であるが土師質土器片も出土している。注目すべきは炭化物を多量に含んだ小ビットの検出で、これは笹尾砦にもあり、中世城郭の中でも、烽火台の性格付けに重要な要素となりうるであろう。



第13図 中山砦要図

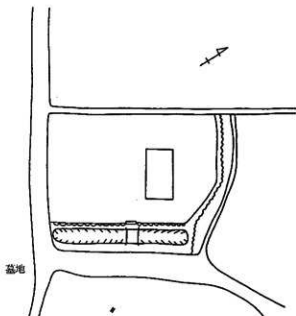
13 柳沢氏屋敷

釜無川の支流大武川の右岸に柳沢集落がある。徳川五代将軍綱吉の代に御用人として権力を集中させた柳沢古保は、その祖父也岐守信勝の代までこの地の土豪であった柳沢氏である。柳沢氏は、甲斐源氏の一流である青木氏より出て、後に武川衆と称された釜無流域の中土土豪層の一員として活躍したが、天正十年後北条氏と徳川氏の花水坂で戦って手柄をたて、徳川氏にかかえられた。

14 一条氏屋敷

部落東端の弥太郎屋敷(柳沢氏屋敷跡)から約1km、部落の西端に近く一条岳汎氏の屋敷がある。現在の屋敷は東西40m、南北60mで東側に長さ35m、巾3mほどの堀がほぼ原形をとどめ、隅切りも明瞭であり、小規模ながら館址の体裁をなし、一条氏屋敷跡と伝えられている。付近に竜ヶ馬場の小字名や鍛冶屋町と呼ばれる地がある。

この地の一条氏については不明の点が多く、現一条氏も3代前から一条姓を名乗ったとされ、同家の菩提所である実相寺の墓碑は駒井姓である。周知のように、この筋一帯を地盤としていた武川衆は、一条時信を祖としているが、柳沢氏などそれぞれ拠点とした地名を冠して一条姓は伝えられていない。この遺構が一条氏館址と伝えられる所以は明らかではないが、柳沢氏や現一条氏の系統と考えられる駒井姓ともかわり、今後の研究をまたねばならない。



第14図 一条氏屋敷要図

工人屋敷・北巨摩郡双葉町宇津谷字元屋敷

塩崎駅の西北、大反川の小沢麓原に散在していた。戦前まで刀剣類の破片が出土したというが、現在その遺構をしのぶことはできない。『塩崎村誌』によれば、古くから大工2人、鍛冶3人、石切15人が置かれ、一定の役料が給せられていた。この制は江戸幕府にも継承され、その役高は大工1人七石六斗、鍛冶と石切が七石二斗で、総役高百四拾四石八斗であったという。いまま古老のあいだには鍛冶屋敷や大工屋敷の呼称が伝えられている。

府中から西へ約10km、穂坂路や小尾街道に近接し、三方を穂坂台地末端の小丘陵に囲まれ、目立たないこの地が、戦時における裏方役の居所に適していたのであろう。付近に阿部加賀守の館址や野村宗貞が頼無堀開さくの功によって与えられたという屋敷跡、一橋陣屋跡と伝えられるところがある。また北方に法喜院、南には阿部加賀守が驛られたという妙善寺がある。

15 若神子城

塩川の支流須玉川右岸に延びる八ヶ岳泥流台地の東端に位置する若神子城は、正覚寺裏山遺構(北城)、古城、南城の三遺構から成る。これらの遺構は関係するものとは考えにくく、それぞれ異なった時代に構築されたものと考えられる。『甲斐国志』や『北巨摩郡誌』などでは源刑部丞義光の居城、あるいはその子刑部三郎義清の居館などと記している。また『吾妻鏡』治承四年の項にある「逸見山」を若神子とも考えてい

る。

(1) 北城

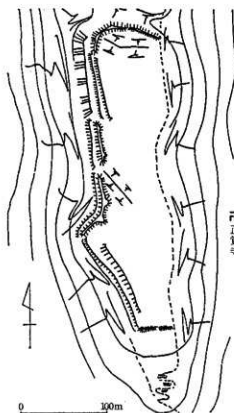
国道141号線の麓の一つである小手差坂の西南、正覚寺の裏山にある東西100m、南北400m程の広大な遺構である。台地から南に延びる尾根の先端を尾根切りの空堀と土塁によって切断し、主に西斜面に土塁を配しているが、内部はほぼ平坦地である。南端は、土塁によって区画している。尾根の先端には若神子より登ってくる道が通じている。小手差坂の旧道は、この城の北にあり、坂を登りきる西上には二段のテラスと石組井戸をもつもう一段のテラスがある。ここを地元では十騎屋敷と呼んでいる。『北巨摩郡誌』によれば、武田時代に台上の警護のために土分十騎を置いたという。この記述の真偽は定かではないが、交通の要所であったことを考えれば否定もできない。その時期は不明である。また北城の北の護の施設とも考えられる。昭和61年2月～3月にかけて、この付近が発掘調査されたが、特に城郭に関する遺構は検出されなかった。

この城は、「城郭大系」等で指摘されているように、天正10年に小田原の北条氏の本陣跡と考えられよう。

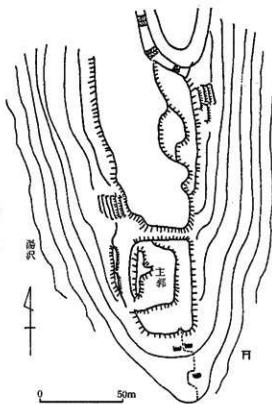
(2) 古城

西川と湯沢に挟まれた尾根の先端に古城がある。北城の西数百mである。この城は大半が後世の土取り、開墾、道路の拡巾によって消滅したが、昭和56年から須玉町の「ふるさと公園」建設に先立ち発掘調査が行われた。この調査によって掘りかけの空堀や建物址等の柱穴、さらには南端に物見台とも思われる四本柱の建物址が検出された。出土遺物は、布目瓦・平安時代の土師器・15世紀を中心とした陶磁器片がある。現在は検出遺構を保存した公園として整備されている。

尾根を切る空堀は3本あり、斜面には所々に数段の腰郭がある。主郭と考えられる郭は南端に位置し、深さ2m、巾5～6mの空堀と、西に高さ2m余りの土塁状の遺構をもっている。



第15図 若神子北城(正覚寺裏山)要図



若神子城(古城)要図

(3) 南城

湯沢の南西にある台地上に位置する。遺構は昭和57年に土取りが行われ、更に59年にも造成が行われたため、消滅しているが、100m四方の平坦地と、西南に空堀を配していた。この地からは、茶臼片・土師質土器等が採取されている。地元の伝承によると、現在若神子にある東漸寺があった地と言われるが、上記した二城よりも立地がよく、水利にも恵まれているため、城として考えることはできよう。

なお、この南城の南西には、9世紀前後の集落址である大小久保遺跡があった。この遺跡は土師器の生産地として、布目瓦が出土した遺跡として注目されている。

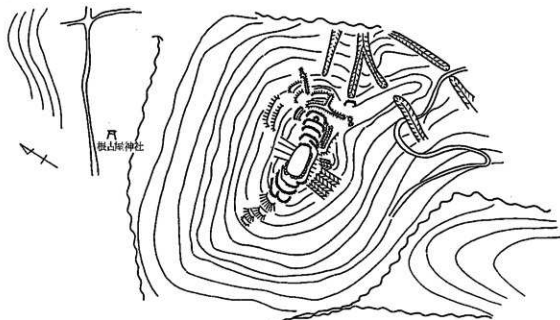
16 獅子吼城（江草城及び江草小屋）

須玉町江草の塩川左岸にそびえる標高788mの独立峰が城山と呼ばれ、ここに獅子吼城がある。この城は『甲斐国志』によれば武田信満の男江草兵庫助信泰の居城とされているが、『甲斐国社記・寺記』の見性寺の寺記によれば、志田小太郎の居城とも考えられる。『高白斎記』の永正6年(1509)の条に「十月廿三日、小尾弥十郎江草城ヲ乗取」とあり、戦国期に活躍した小尾衆に一味しない勢力がこの地にあったことを物語っている。

遺構は山頂にある主郭を中心に南と北の山腹に石積みを伴う腰郭が数段あり、西の山腹には帯郭が数段ある。北から東の山腹には空堀状の通路がある。この北の斜面には数段の腰郭がある。空堀状通路の南端には石積みをもった門址があり、ここから東に延びる尾根は2本の尾根切りと堅堀で切断されている。この城は随所に石積みがあり、郭はこの石積みによって構築されているとも言えるほどである。

烽火台として、また信州佐久方面への交通路のおさえとして、この城が築かれたと考えられる。

天正10年には北条氏がこの城に入り、徳川勢と戦っているのが、今日の状況は北条氏による修築の結果であろう。



第16図 獅子吼城要図

17 源太ヶ城

須玉川左岸、川俣川と大門川の合流点の南に、津金山から突き出した源太山あるいは海岸寺山と呼ばれる双峰がある。この両方の山頂部に平坦地を中心に数段の腰郭が配され、鞍部は巾2m、深さ1.5mほどの空堀で区切られている。山頂からは西に旭山砦・谷戸城、北に浅川砦、南に古宮屋敷・若神城等が一望でき、

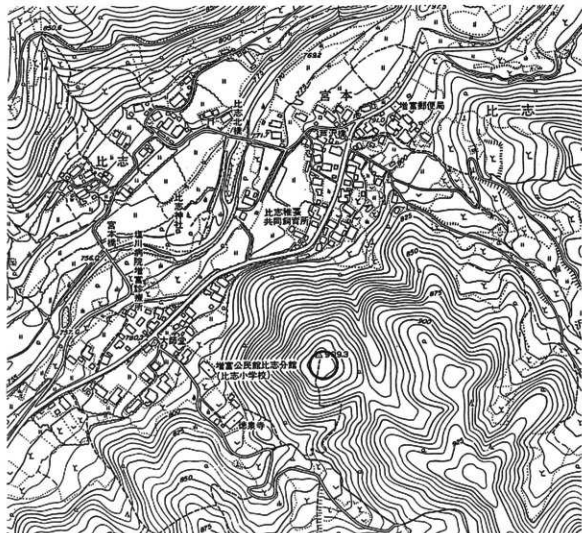
烽火台として、また津金衆の要害としての立地条件は十分である。城の北は大門ダム工事のため、また大和
林道のため一部道路として閉られている。

『甲斐国志』によれば、「双峯アリ、各々数十人ヲ置クベシ。中略、里人ハ清光ノ城ナリト云伝フ、按ル
ニ古宮ハ居館ニシテ、此処ハ要害ナリニシヤ、烽火台ニ用ユベシ」とある。この城の南東山麓にある、臨濟
宗京都妙心寺末の津金山海岸寺は、以前は現在の地より東北の山中にあったと伝えられる。

18 比志の烽火台

塩川の上流比志集落の東に、城山と呼ばれる山がある。この山の山頂が比志の烽火台と言われている。山
頂に立つと南に大渡の烽火台、その南に獅子吼城が見える。北には神戸峠が望める。このように眺望がいい
山頂であるため現在テレビの共同アンテナが立てられている。

集落からこの山の西麓を登ると、鞍部になる。この鞍部を西に登ると山頂に着く。山頂は平坦で中央に秋
葉神社が祭られており、北と西に土塁がある。『甲斐国志』には小尾ノ古跡の項に「烽火台 二所江草村界
ニ一所アリ、皆麓坂路ナリ」とある。また須玉北小学校の南にある前山も烽火台であるとも伝えられている。



第17図 比志の烽火台要図

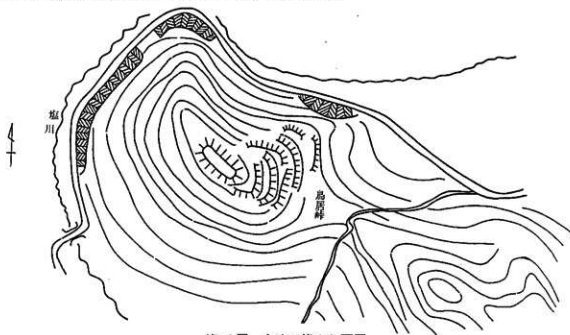
19 大渡の烽火台

須玉町岩下にある鳥居峠の西に大渡の烽火台がある。この烽火台の南で南流してきた塩川と西流してきた
小森川とが合流している。この峠は塩川沿いに信州へ通じる街道の要所の一つで、ここから小森川を遡って
東に進むと、観音峠をへて御岳昇仙峡から甲府に通じ、塩川に沿って南に下れば、若神子あるいは茅ヶ岳山

麓をへて甲府に至る。

遺構は、西に舌状に延びた東西300m、南北100mの尾根上にある。主郭は秋葉神社が祭られている最高所にあり、腰郭や帯郭が峠の方向である北東斜面を中心に数段配されている。

この烽火台の東にある岩下集落には、小森将監という人物の伝承がある。須玉町誌によると、「小森将監はこの地を領していたが、ある時東の山から峠越えに敵に攻められ、身重の妻と自刃した。村人がその霊を弔わなかったため、水害が起こった」とある。また一説には東の峠を越えて身重の妻と共に落ちのびて来たが、この地で産気づいた妻は亡くなったとも伝えられている。



第18図 大波の烽火台要図

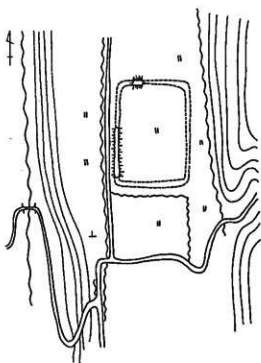
20 屋代氏屋敷

北戸摩郡明野村の上神取に屋代越中守の屋敷跡がある。この地は堀川の左岸に発達した河川からの比高50m、段丘幅2～300mの中位河岸段丘である。屋敷は、この河岸段丘の北限に近いところで、段丘の幅も200m程に狭くなっている部分に位置している。

現状が水田と集落となっているため、屋敷の正確な規模を把握できないが、周囲を上土と堀が取り囲むほぼ100m四方であったと推測できる。屋敷の南は、須玉町から堀川を渡って浅尾を経て江草、更には信州に至る道と堀川の下流から左岸を遡ってきた道と交わっている。また屋敷の南西には、屋代氏の墓がある。

現存する遺構は、南北に幅7m余り、高さ2m余りの土堀が長さ20m程ある以外は、水田の中に、周囲の水田より1m程高い畑が東西に幅7m程で長さ30m余りある程度である。

屋代氏は信濃村上流源氏で、天文～弘治年間に武田氏に属した。慶長六年に行なわれた検地による「甲斐



第19図 屋代氏屋敷要図

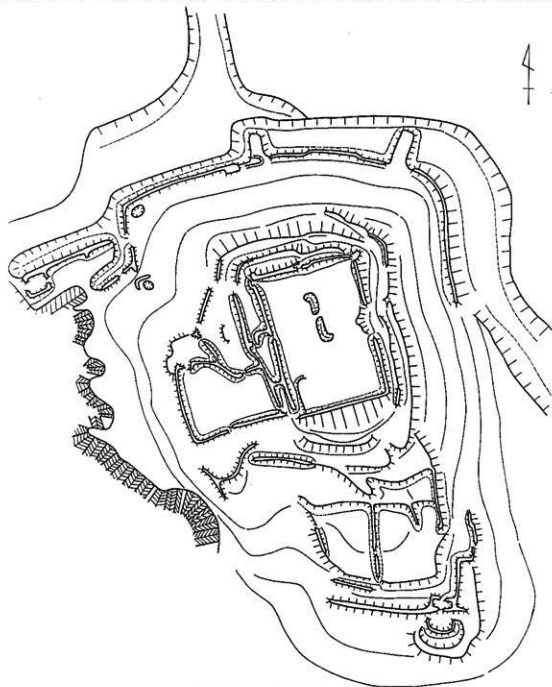
国四郡古高根」には「歴代越中守知行」として三之藏・神取・若神子・日野・小田川などの村々が記されていて、都合六千七十三石余りを巨摩郡内で領していたことがうかがえる。

2 葦崎市

1 史跡新府城跡

七里岩台地の先端に近い葦崎市巾町上野に城山と呼ばれる西の比高150m東の比高30mの独立丘がある。この山に武田勝頼が天正9(1581)年に武田氏最後の城を築き、甲府からこの地に府中を移そうとしたが、志し半ばにして翌年の天正10年3月に織田信長に滅ぼされた。

現在残る遺構は、山頂の周囲に高さ1～1.5m土塁を、その外側に幅5m前後の腰郭を配した南北100m東西80mの本丸、その西に5～6m下がって二ノ丸、これより北に続く遺構はからめ手に続く。からめ手から東に延びる幅10～20mの堀があり、この堀には出構と呼ばれる堀に突き出た土塁状の遺構がある。本丸



第20図 史跡新府城跡要図

の南側には数段の腰郭が配され更に中央を高さ1 m余りの土塁によって区画された郭がある。この郭の南は昭和30年代に観光目的で造られた道路によって破壊されたが、この工事の際、切り石によって造られた暗きょが発見された。この郭の南東には三日月堀と丸馬出しを伴う升形の大手がある。また東の稲荷郭の斜面には高さ1 m程の石積の暗きょが確認されたが現在それを確認することはできない。

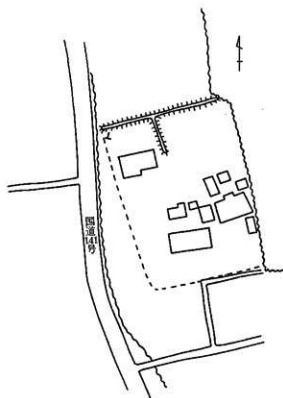
城域は現在確認出来るだけでも約20ha余りである。城の北西隅にあるからめ手口より始まる堀は東に進み、山すそを巡って南に続き、七里岩の東側の斜面を下っていたと考えられる。そのこん跡は、中央線の敷地として確認できる。また2 km北には、能見城があり、この城を中央にして台地を切断するための土塁があったことが古絵図によって知ることができるが、現在はそれを確認することは困難である。

武田勝頼は能見城と新府城との間に家臣屋敷を配置して、甲斐の新しい府中を建設しようとした。仮に大中世都市が完成していたとしたら、近世以後の山梨の歴史は大きく変わっていたといえる。

2 蔵の前壘址

韭崎市藤井町字蔵の前にある土塁を有する遺構であるが、性格は不明である。山交バス蔵の前バス停の東にある竹林の中に東西約60 m余り、高さ1 mほどの土塁と、この土塁の中央付近から南に延びる土塁がある。現在の集落形態から推測すると、この土塁を北限にして集落が営まれていたものと考えられる。ここには今福姓が多い。

相袋壘址の北500 mに位置している。塩川自然堤防上に占地している。



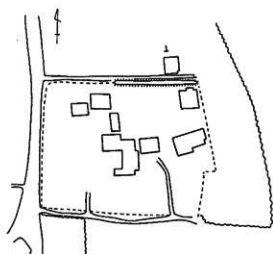
第21図 蔵の前壘址要図

3 相袋壘址

韭崎市藤井町相袋にある土塁址で、現在集落の北に長さ30～40 mほど残っている。国道141号線の東に位置するが、西側には巾6～7 mほどの帯状の土地が長さ20～30 mほど東西に延びている。上記した土塁とこの土地は直線上に位置していないが、関係がある。

相袋集落は、塩川右岸の自然堤防上に位置し、土塁を北限として東西100～150 m、南北100 mほどの範囲に入っているため、この土塁は、集落と何らかの関係を持っていたものであろう。

この地には以前寺があったが今は万壘塔が残るだけである。



第22図 相袋壘址要図

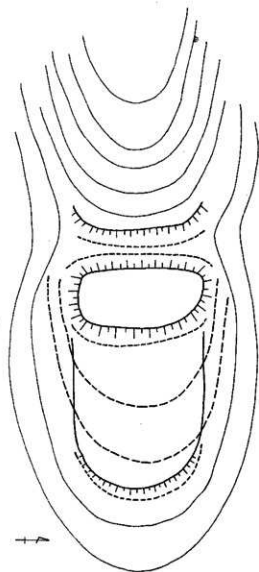
4 白山城

釜無川右岸の河岸段丘上にある韭崎市神山町の西にそびえる標高560mの城山にある。武田信義の要害として築かれ、後に武川衆の一族である青木・山寺氏によって利用されたとも言われる（『韭崎市誌』）。

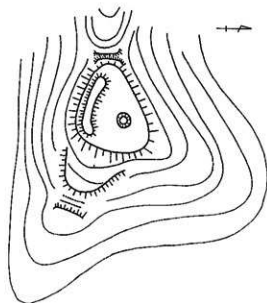
山頂の20m余りの周囲を土塁に囲まれた方形の郭を中心にして、南側に郭を配し、北と東は腰郭とそれらから下る竪堀が発達している。西は細尾根を空堀で切り、この城の背後を護っている。竪堀の発達には北巨摩郡下では最も著しく、戦国期に大きな修築を受けていると考えられる。

この城の南と北には烽火台がある。八幡神社西の白山城北烽火台は西の山から東に延びる尾根を空堀で切断し、尾根の先端を平坦にしたものである。南にあるムク台烽火台は、空堀と腰郭を東西に配し、中央部が最も高い典型的な烽火台で、主郭の周囲には低い土塁状の高まりが認められる。

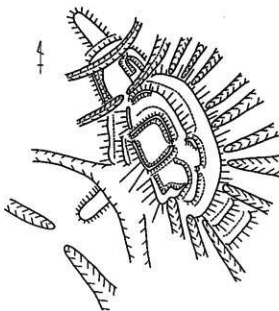
城の北には武田家の祈願所であった武田八幡社がある。この神社には重要文化財の本殿等文化財が多い。また東1kmには武田信義館及び願成寺がある。この願成寺にはやはり重要文化財の阿弥陀三尊がある。これは藤原期の優れた作品で武田信義が勧請したものとされている。



第23図 白山城北烽火台要図



第24図 ムク台烽火台要図

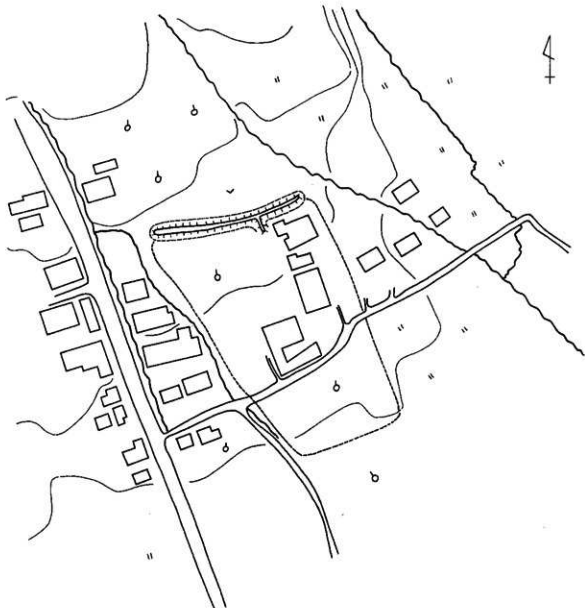


第25図 白山城要図

5 駒井氏屋敷（駒井右京大夫屋敷）

塩川右岸に広がる通称藤井平とよばれる氾濫原にある自然堤防上に位置するこの屋敷は、東西50mほどの土塁が北側に、その中央から南に延びる土塁が20mほど残っている。この土塁の内側と考えられる南側は、4軒の人家があり、北側には水路が東流している。この水路は、屋敷の北西端で二つに分水され、一つは屋敷の西を南流している。

屋敷に居住していたと伝えられる駒井氏については、高白斎記の著者である駒井高白斎との関係が伝えられている。その家は現在屋敷跡の中央に位置し、宮沢姓である。



第26図 駒井氏屋敷要図

6 秋山但馬守屋敷

『甲斐国志』に「秋山但馬守光重、同職部助、但馬守ノ居址ハ下条南側ニアリ」とある。今日その遺構を確認することはできないが、地内の曹洞宗宗源寺が秋山氏の開基と考えられていることや、古老の伝承などから、朝羽羽川を臨む竜岡台地の南面緩斜面で、宗源寺と旧竜岡小学校を結ぶ線の南側、国道52号に沿う一帯に位置していたと考えられる。

甲府盆地の北西に位置し、古代の余戸郷の南部を占める小高い竜岡台地周辺は、中世豪族の居住地として

も適当であったと考えられる。ちなみに、同地区南東端に位置する曹洞宗大型寺境内も、中世豪族の館跡としてのおまけをとどめている。「五箇市誌」は、大型寺境内は、この地の豪族、千野氏の館跡ではないかとしている。また北西約2kmには武田の將、甘利氏の館跡に建立されたという日蓮宗大輪寺がある。

7 松雲寺壘址

五箇市中田町の塩川右岸の自然堤防上に占地し、現在は松雲寺の寺域になっている。この壘址は東西約80m、南北100m余りと推測できるが、現在確認できる遺構は半分ほどである。付近の畑からは土師質土器片が採取できる。

土壘が現存するのは松雲寺の西側に南北30mほどであるが、上地区画や水路から、複郭であった可能性がある。中田町は中条村と小田川村が合併してできた名称で、近世以前は中条村であった。奥山家文書によると、元龜2年9月14日の武田晴信判物写で、甲州辺見之内駒居・中条兩郡で37貫文が奥山宮内に安堵されている。

3 中巨摩郡

1 田中氏屋敷

東花輪から乙黒に通ずる県道の中ほどを凡そ100mばかり北にはいった玉穂村一町畑守川久保にある。正面は東で約27m、奥行約65mほどの長方形の一郭で、北側に土壘と濠の痕跡が残り、他の三面は高さ1mばかりの石垣で囲われているが、東北の隅が大きく切れ、東南の正面寄りの隅は2mほどの高台となっている。

鬼門除けと思われる東北の隅の角缺けに隣接して諏訪神社が祀られ、東南の高台に隣接して、田中但馬守広泰が天文年中に開基したと「甲斐国志」が伝える広泰院（現無住）という寺が所在する。

この田中但馬守という人物については詳らかでないが、これが田中家（現甲府市住）の祖先であると伝えられているところから、この屋敷地が、かつては田中但馬守という豪族の館跡であったものと考えられる。

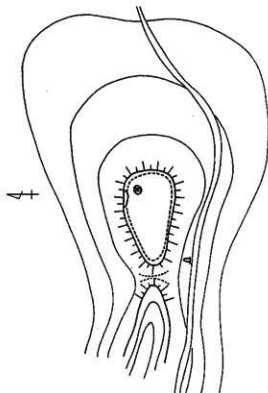
2 玄賀屋敷 中巨摩郡昭和町上河東字田之神田

「甲斐国志」に、「上河東ノ玄賀屋敷ト云所ニ外濠存セリ妙福寺ニ玄賀ノ墳トテ五輪ノ石塔一基アリ法名年月亡ス」とある。昭和町上河東の常住山妙福寺の南方100m程に、新設された農道を挟んで水田と畑地になっている約3,000㎡ばかりの土地がある。現在は僅かにその痕跡を残すのみであるが、かつてはその周囲に水濠の跡と思われる水路や小池が残り、蛇塚と呼ぶ古塚などもあって、地元では今もこの所を「げんか屋敷」と呼んでいる。加藤玄賀という人物については詳らかでないが、鎌倉時代の加藤次郎景廉以来の甲州の豪族加藤氏の一族で、室町末期の人であり、この場所は其の居館の跡と推測される。

水田耕作に適した箇所に、周囲に濠をめぐらしてつくった垣内式の中世豪族の居館の跡とみられ、妙福寺の境内には、玄賀の墓と伝える一石造りの五輪塔が今も残っている。

3 笹城

櫛形町平岡に西にある標高 666 m の尾根上に城の橋と呼ばれる橋がある。この東側に笹城がある。主郭と思われる数十㎡の平坦地とこれに続く尾根の鞍部に空堀が認められる程度で、主郭の周囲を取り巻くような帯郭や腰郭の存在ははっきりしない。「甲斐国志」には、平岡ノ古址として「本城ト云処村ノ西五六町ニ在リ、同西ノ山入リニ存ヲ、笹城ト呼ブ、里人ハ三ツ角判官ナル者ノ居址ナル由云ヒ伝フレドモ、其人末ダ審カナラズ」とある。この城の東にも本城と呼ばれる城があったと記されているが、現在は確認できない。



第27図 笹城要図

4 御朱印屋敷

『甲斐国志』土旅部田中兵部の項に、「兵部ノ男弥右衛門昌道其男弥右衛門昌重ヨリ浪人シテ屋敷地 364 坪免除セラル、打量額ニ御朱印屋敷と記セリ」とある。この屋敷は玉穂町一町畑字西之神にある。

乙黒から田宮町東花輪に通ずる県道沿い、笛吹川寄りの約 400㎡ばかりの土地で、北側と東側をかつての濠跡とみられる細流にかこまれ、北側民家の裏手の竹やぶの中には土塁の跡らしい土盛りを残している。いまこの所を地元では「お浪人屋敷」と呼んでおり、これが九一色衆の一人、田中豊前守虎範(1556年歿)以来明治末年まで田中家の屋敷であった所であるが、明治 40・43 年の笛吹川の大水害により家屋・耕地を流失したため、土地を譲って他に移住したという。

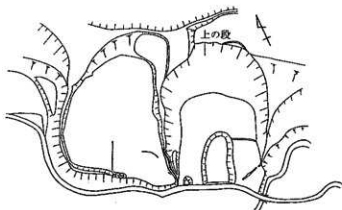
集落南部の水田地帯の水利をおさえた所に立地した豪族の居館であったと思われるが、今は僅かにその痕跡を残すのみである。

4 南巨摩郡

1 穴山氏館

粟倉山の東麓、富士川沿岸身延町下山は、甲府と駿河を結ぶ駿州路の要衝である。古くは甲斐源氏の流れをくむ下山氏の本拠地であり、下山氏館とほぼ同じ位置に規模を拡大して築かれたのが穴山氏館であると伝えられている。

粟倉山からのなだらかな傾斜が続く本國寺身延北小学校付近が館がおかれた場所とされており、遺構の可能性があるものとしては、



第28図 煙硝蔵跡要図

下山保育園東側の竹藪内の溝状のもののみであるが、明治の初年には小学校建設の際、加工された石がいくつか掘り出されている。

穴山氏が確実に下山に居住していたと考えられるのは穴山信君の父・信友の代からであり、天正三年には信君は駿河の江尻城主となったため、下山の地からは離れることとなったであろう。

周囲に目を転じると、栗倉山は烽火台として知られ、頂上付近には平坦地が見られる。また、下山の集落の北側を流れる北沢川が山間に入る付近に「煙硝蔵跡」と呼ばれる所があり、穴山氏の時代のもので伝えられている。

2 波木井氏館

波木井川の右岸、河岸段丘上の身延町梅平の集落の南側の山裾に、波木井（南部）実長の居館があった所として伝えられている。

甲斐源氏の一流加々美遠光の子光行は、南部郷を分与され、南部光行と称し富士川沿いの岩壁上（南部町南部）に館をかまえたといわれる。この地において光行は、牧を中心とした所領の経営に力をそそいでいたが、源頼朝の奥州遠征に従軍したことをきっかけとして本拠を奥州へと移していく。しかし光行の四男、実長は一人甲斐の地に残り、波木井、飯野の一带を領有し、波木井実長と称することとなる。この実長は、日蓮宗の開祖日蓮を甲斐国に招聘した人物として知られ、身延山久遠寺は、この波木井氏館跡の北側、波木井川対岸の山中に位置している。

現地は、波木井川に向かって突き出した尾根の先端部の平坦地（約30×40m）であり、顕著な遺構は特に見られないが、この一画は古くより「おかまど跡」と呼ばれ、祠が置かれている。

昭和58年9月、遺構の確認などを目的としてこの「おかまど跡」を中心とした平坦地の発掘調査が実施された。その結果、この一帯はかつて大規模に削平されており、山ぎわには小さな溝が設けられていたことが判明した。また「おかまど跡」付近からは、土壘、焼土集中国所、掘立建物址（3間×4間以上）などが検出され、これらの遺構に伴ない、土師質の鉢や甕の破片が出土している。

3 波木井城

富士川の西岸、古屋敷の集落を俯瞰する台地上に位置し、南部光行の四男、波木井六郎実長の城がおかれていたと伝えられる。この台地は、西側の山々とは細い尾根で連結しているのみであり、また富士川対岸まで一望に見おろすことができ、城として選ばれた地であることがうなずける。

現地は畑や墓地などであり、明確な遺構としては台地の南西端の「土門」のみである。しかし城に関する地名は「調練場」「城口」「東門畑」「西門畑」など比較的多く、かつての状況を復元する手掛かりとなる。

大永元年（1521）武田信虎の時代、駿河の今川氏の武将、福島正成の侵入を受けるが、その後波木井三河守義実は今川氏と通じていた廉で信虎に殺害される。その舞台となったのが峯の城といわれ、この波木井城であったとも考えられている。

4 南部氏館

現在の南部の町並みの北側に位置し、富士川へ突き出した岩壁上であり、南部光行の館跡とされている。

南部氏は、甲斐源氏の一流である加々美遠光の三男、光行が南部郷に入り、その地名を姓としたことにより始まる。この地において光行は牧の経営に力を注ぎ、その後奥州征伐に従軍したことをきっかけに奥州に本拠地を移し、奥州南部氏として発展を遂げることとなる。

現地は宅地化が進んでおり、顕著な遺構は見られないが、「南巨摩郡誌」(昭和11年発刊)によると、現在の法務局や公民館付近が中心部分(一の丸)として表わされており、また周辺には、「木戸」「堀」「御藏」などといった館に関する地名も残っている。

南部城山 南巨摩郡南部町南部

南部城山は南部の町並みの西に横たわる比高差100mほどの小山であり、歴史的な経過については明確ではないが、南部氏館とは指呼の間であり関係が考えられている。

現地には、尾根上に連続する平坦地とその周辺の斜面に段状に続く細長い平坦地が見られ、郭や帯郭とも考えられるが、その後の開墾による削平を考慮する必要がある部分もあるであろう。遺構範囲の北東部であり、神社の裏山を登りつめた所には、狭い台状の平坦地があり烽火台跡と伝えられている。その南側にはこの尾根の最高地点が削平されている所があり、主郭と考えられている。また、2箇所土橋が見られ、その内の1つは比較的保存状況がよく、尾根の腰部に平行に2本の土橋を渡している特殊なものであり、煙硝倉跡とも伝えられている。



第29図 南部城山要図(城郭大系より)

5 小新城

『甲斐国志』には「椿草里、大崩ニ村ノ東御林ノ中ニモ小新城ト云フ山アリ是レモ烽火場の址ナランカ」と記されており、小新城を特定の山としてとらえているが、地元では小新城という地名は残っているものの椿草里の山腹の地域をさす地名となっており、山城・烽火台といった話も伝わっていない。

現地は製紙会社の植林域であり、遺構は確認されていない。

6 小谷城

大城の村中より静岡県梅ヶ島へと脱ける峠道を4kmほど入った道添に小谷城(こやしろ)と呼ばれる所がある。大城川を見下ろすこの一画は、この峠道の中では最も開けた場所といえる。

『甲斐国志』によると、「遠藤伊勢守ノ城跡」とされ、「駿州阿部郡へ出づル間道ヲ守衛セシ墟ナルベシ」と記されている。

現地は、山林と畑であり、緩傾斜地を石積みを用いて区切った平地が随所に見られるが、耕作地の跡と考えられ、かつての遺構については特に見当たらない。立地的にも守りに徹した城があったとは考えにくく、峠道に関係した簡単な施設であったと思われる。

大城の村中にも的場などの小字は残っているものの、城郭らしき根拠をもつ箇所は特に見られない。

7 北山城

平川より流れる利根川が平地へと注ぐ直前の両側の山を南山、北山と呼んでいる。北山は春米の城山とも

呼ばれ、春米の集落の西に位置し、その頂きには富士浅間神社の神宮を勤めていた神田伊豆守重光の、神田大学という豪族が住んでいたと伝えられている。

現地は東西に伸びる尾根上であり、石祠が置かれ、それを囲むかのように一部土塁状の遺構が見られる。

雨鳴城を本拠とする秋山太郎光朝が、その前衛の支城としてこの北山城を置き、神田大学を配したとする伝承も残っている。

周辺には「陣平」（じんでー）、「大手城」といった地名も残っており、またこの北山の尾根の東端には富士塚と伝えられる土盛りがある。

5 甲府市

1 史跡武田氏館跡

武田信虎・晴信・勝頼の三代にわたり、武田氏領国経営の中核的役割を果たした居館。「高白斎記」永正16年（1519）の条には「同月（8月）十五日新府中御殿立テ初ム。同十六日信虎公御見分。十二月廿日庚辰信虎公府中江御屋移り」とあり、永正16年8月に工事を開始し、4か月余りを経て移り住んだことが知られている。それまでの館は甲府市東部の川田町にあった。水害が多かったことから館を移転したとする説もあるが、その背景には、家臣集住化の徹底と軍事的主導権確立の意図があったものと考えられる。

館の築かれた所は、三方を深い山々に囲まれた相川扇状地の開析部にあたり、この山並みが天然の防壁をなしている。館の東方には鵜飼ヶ崎と呼ばれる丘陵が西方に延びてせまり、館と一体となって館前方の城下町と裏手の一帯を両している。扇状地に占地するため、水に乏しく、相川上流より堰を設けて水を引き、堀に用いている。

現在に残る館は、東曲輪・中曲輪・西曲輪の主要三郭を中心に、味曾曲輪・梅翁曲輪等で構成されているが、「高白斎記」の記述からは、わずか4か月余りの工事で館がある程度完成したことが推察され、当初は小規模に築かれたものが、次第に補強・増築を進めて複郭型式の広大な館を形成するようになったと考えられる。東曲輪北側通路や西曲輪南・北通路の外側に痕跡を止める馬出も、他の曲輪の内部に位置している点不自然であり、味曾曲輪等が中心的な三郭を築いた後に、付属的に増設されていった状況を示している。また、西曲輪の東縁や味曾曲輪の南縁、梅翁曲輪の北縁に土塁が設けられていないことも、館の変遷を知る重要な手がかりといえよう。

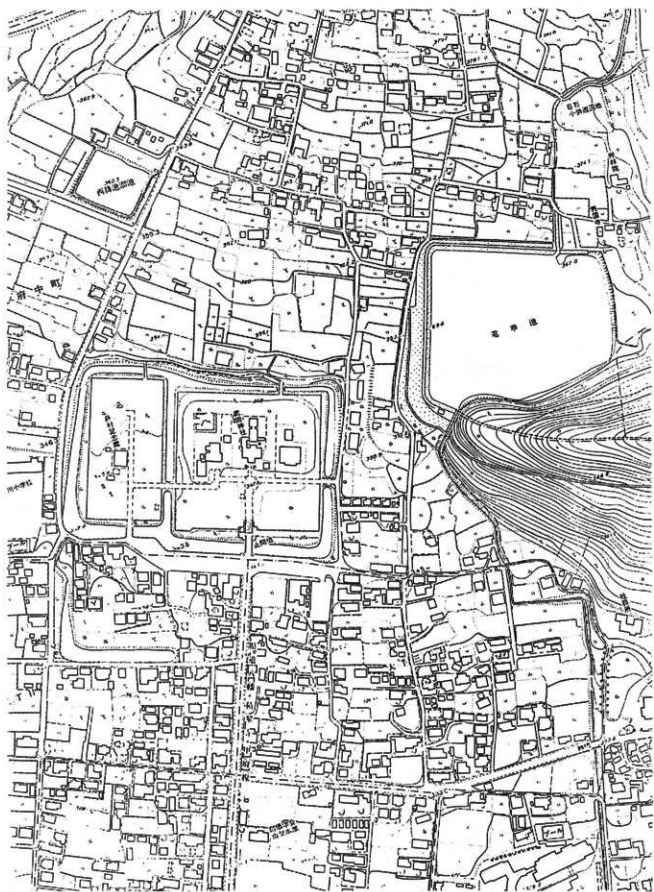
館の大手口は、東曲輪の東側にあり、外側に馬出を設け、さらにその外側に総堀を廻らせて防禦を固めている。この総堀に沿った南北に連なる一帯の字名を「高鼻」といい、大手口防備に関連した施設の存在を予想させる。

館は、勝頼の新府城移転に伴い、一時期廃棄されるが、武田氏滅亡後、徳川氏の甲斐領治の中で修築され、再使用されている。中曲輪北西部に設けられた犬守台や梅翁曲輪は、恵林寺蔵の古絵図等の所見から、この時期の修築に際して付設されたものと推定されている。

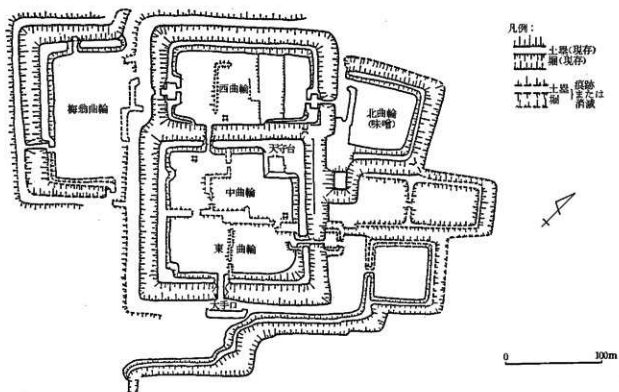
館の周辺は、南側の一帯を中心に条坊を配して城下町が形成され、家臣や商・職人の集住が図られた。この城下町と館の防禦のため、館の北東2.5kmに誹城の要害城が築かれたほか、湯村山や一条小山にも砦が設けられて、相川扇状地一帯を要塞化している。

鵜飼ヶ崎館は、甲斐国内ではそれまでにない大規模な館であり、平城的性格が強く、甲斐国内の有力土豪層に比べ、武田氏の卓越した経済力・軍事力を物語っている。

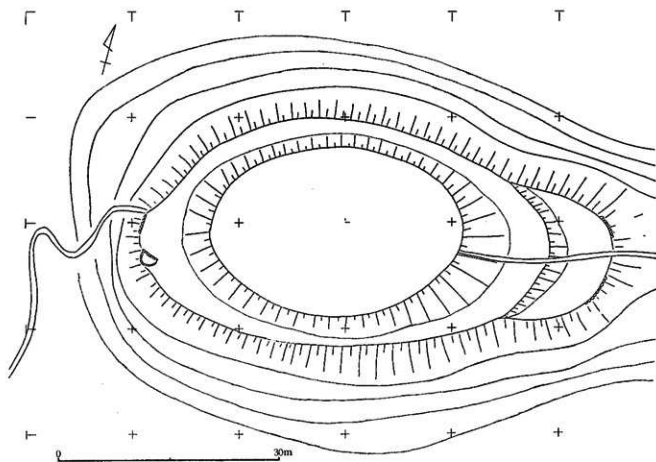
現在、館跡は武田神社の境内となっているが、神社建設に伴い、東曲輪・中曲輪を削っていた石塁は削平されている。また、味曾曲輪等の北側一帯の遺構は農耕による破壊を受け、梅翁曲輪については急速に住宅建設が進んでいる。



史跡武田氏館周辺図



第30圖 史跡武田氏館跡要図



第31圖 平瀬の烽火台要図

2 平瀬の烽火台

天神平の東、通称「城山」の山頂に築かれた烽火台。頂上は標高 586 m と周囲の山々に比べて低く、敷島方面にのみ展望が開ける。城山の西には荒川の急流が、北には塔岩川が流れている。

遺構は、東西 30 m、南北 18 m ほどの楕円形状の郭と、それを取り巻く幅 1~5 m の帯郭が残存する。両者の比高差は 1~2 m で、切岸の一部には人為的な石積と思われる部分もある。郭はあまり平坦ではなく、東端ではなだらかに傾斜して帯郭に移行する。帯郭の東端には、一段低い所にテラスが設けられ、進入路の両側には石積が存在する。一種の門址であろう。

帯郭の西端は、天神平方面からの進入路に対して石積が設けられ、何らかの施設の存在が推定される。その南隣には、石積をめくらせた水溜状の遺構もある（『日本城郭大系』では虎口としている）。

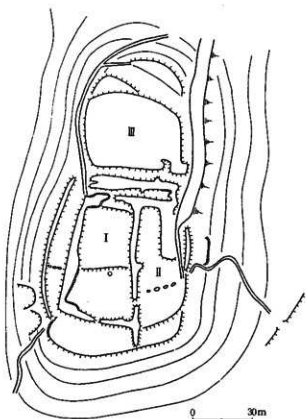
『甲斐国志』では、「御岳・猪狩・柳平ヨリ烽火達スベシ」としているが、いずれの烽火台も直接望むことはできない。また、猪狩の烽火台と塚原の鐘推堂山を結ぶ烽煙ルートの中継地とする説もあるが、前記の問題に加えて、鐘推堂山の機能・性格・立地を考えた場合、検討の余地が残る。平瀬・御岳・猪狩の各烽火台を一望できる河産城への情報伝達、そして、この城から帯那山を越えて太良峠へと結ぶルートをも想定するのも一考であろう。

3 湯村山城

武田信虎が府中警固の一翼として、相川扇状地の先端にある甲府市湯村山山頂に築いた山城。『高白斎記』大永三年四月の条には「廿四日湯ノ島ノ山城御普請初」とあり、川田より藤岡ヶ崎に館を移した信虎が、詰城の要害城に続いてこの城の築城を開始したことが知られる。

遺構が残存しているのは標高 446 m の山頂周囲で、土塁等で区画された三つの郭の他、南と西の一段低いところに腰郭が設けられている。全体の規模は東西約 65 m、南北約 130 m を計る。中心となる郭は I 郭と II 郭で、巨石の多い山頂を巧みに整形して、土塁で画した長方形の平坦地をつくり出している。III 郭は巨石が密集しており、一部に整形の痕が見受けられるものの、一標的な郭の機能を有していたか疑問の余地が残る。I・II 郭と III 郭の間は二重の堀切となっているが、I 郭北側虎口の防備と密接に結びついて、他に類例をみない複雑な様相を呈している。

I 郭は、北側虎口の形態や井戸の存在、南西部に設けられた櫓台等から、この城の中核部分と考えられる。II 郭や南側帯郭とは、土塁の一部を分断した出入口で連絡しており、内部は南北二つのテラスに分かれるが、巨石を取り除いて、比較的広い整然とした平坦地を造出している。一方、II 郭は巨石の処理が不十分で、郭の東縁に沿って巨石が残り、やや雑然としている。この郭には、湯村山の南東斜面を通る登り道が直接連



第32図 湯村山城要図

絡しており、連絡部とI郭との出入口を結んで等身大の巨石が直線的に並んでいる。

常郭は、南側が幅15～20m、東側が幅約10mを計り、共に土塁や石列で二つのブロックに区画されている。

城の南には、府中と信州を結ぶ往還が走っており、湯川とこの道が交差する付近には、番所の存在を推測させる「関屋」の地名も残る。こうしたことから、湯村山城は単なる烽火台ではなく、府中入口の防備とともに、信州方面への監視的機能・情報収集機能を担っていたものと考えられる。

4 要害城

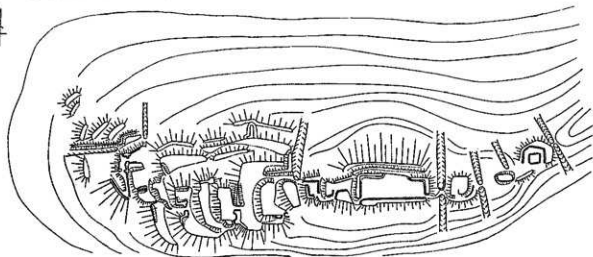
武田信虎が、躰躰ヶ崎館の結城として、相川扇状地扇頂部に位置する標高780mの要害山に築いた山城。躰躰ヶ崎館造営の翌年、永正17年(1520)に築城された。城主(城番)は、「高白斎記」が大永元(1521)年8月10日の条に「昌頼」、「甲陽軍鑑」「甲斐国志」が「駒井次郎左衛門」の名を書き記している。

城の三方は急峻な山々が連なり、南側にも下積翠寺の集落までは狭小な平坦地が続くのに加え、山の東・西を相川と東沢川が南流して自然の堀を形成するなど、防禦の上では絶好の占地となっている。

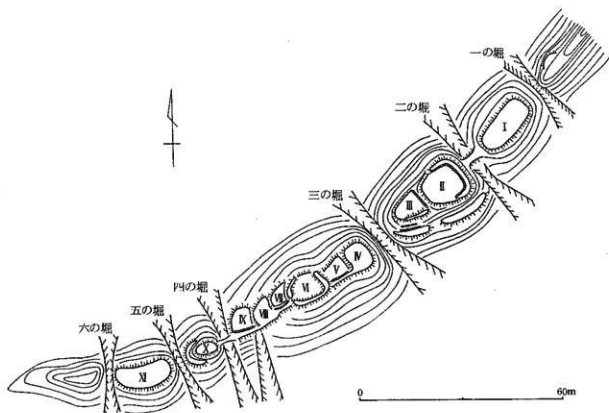
遺構が明確に残るのは山腹から山頂にかけてで、要害城とは沢を一つ隔てた細い尾根上にも地元で「熊城」(くまじょう)と呼んでいる支城が設けられている。要害城の主郭は、北麓・南麓の傾斜が急なため、山頂以西の緩傾斜地を利用して連続的に配されており、主要な郭には門址も認められる。山頂に設けられた主郭は、東西72m、南北22mの長方形形状を呈し、北側の一部を除いて上塁で囲まれている。主郭の東方は狭小な尾根となり、極く小規模な平坦地が数か所に存在する程度であるが、堅堀を4か所に設けて防禦を固めている。

要害城の東方に設けられた熊城は、標高730mに位置する二の郭を中核部として、狭小な尾根上に11の郭を配している。土塁を用いた郭は少なく、用いた場合も部分的である。郭そのものの規模が比較的に小さいためであろう。この城の特色をなすものとしては、深い堀切がある。もっとも大規模なものは二の堀切で、11の郭の土塁より堀底まで約5mを計る。この尾根を北東に進むと要害城の裏手に連絡することから、要害城の弱点を補う支城としての役割を果たしていたものと思われる。

要害城と熊城は、郭の形態や配置など、いくつかの点で差異が認められる。郭の形態・配置については、立地形の差もあって俄かには断じたいが、たとえば、要害城の主郭東方の堅堀が尾根を切断していないのに対し、熊城では深く尾根を掘り切って両側を堅堀としている。また、土塁基底部等に用いている石積についても、要害城が小さな山石を使うのに対し、熊城ではやや大きめの河原石を用いるほか、V・Ⅷ・Ⅸの各



第33図 要害城要図



第34図 要害山東遺構要図

郭では東側の通路に大きな山石を積んでいる。築城や修築の時期差を示すものであろう。

文献史料では「三枝家文書」が天正4年の要害城修築を『甲斐国志』は永禄3年と武田氏滅亡後の文禄年間間の修築を記している。廃城は慶長5年と伝えられ、武田氏滅亡後も一定の間、城番を置いて存続使用されていたことが記録に残されている。

城郭に関連の深い字や小名としては、水ノ手・根小屋・中堀・鍛冶といった地名が残っている。

5 板垣の烽火台

甲府市酒折にある映東方面と府中を結ぶ烽火台の一つ。

『甲斐国志』古跡部、板垣ノ里の条に「本村ノ東小物成十七朝ト伝フ山ノ頂ニ烽火台ノ跡アリ及ニ燧ヲ拳レバ夢山ノ北茶道ニ達スト伝フ彼処ニモ亦烽火台アリ」と記されているところから、普光寺の東、標高485mの山頂に築かれたとする説が有力であり、呼称も板垣の地名に由来しているが、『同』山川部、板垣御林山の条には「伴部山ノ巔ニ其ノ続キニ在リ東ノ出奔ヲ此ニテモ山崎ト伝フ山頭ニ烽火台ノ跡アリ」という記述があり、酒折地内の現在採石の行われている山頭あたりが新たな候補地として注目される。『西山梨郡志』所収の板折村方明細書上帳にも「狼煙場 是ハ東山十七割之いただき占へのろし堀之由申傳へ候大なる穴あり機山の時此處に而狼煙ヲ擧ケ夢山ニ告ト伝」とあり、狼煙台のあった十七朝山が板折村内に位置することを裏付けている。こうしたことから、呼称については「十七朝山の烽火台」とするべきかもしれない。

6 東山梨郡

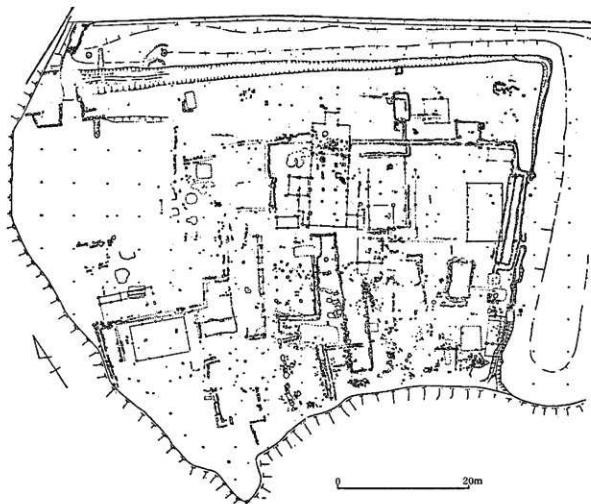
1 史跡勝沼氏館跡

勝沼町勝沼に所在する勝沼次郎五郎信友・丹波守信元父子二代の居館。勝沼氏は信友が武田信虎の次弟にあたることから父子ともども重用されたが、『甲陽軍鑑』によると、信元に逆心の企てがあり、永祿3年(1560)に武田氏により滅ぼされたと伝えられている。

館は、昭和48年の県立ワインセンター建設を契機に発掘が開始され、同52年までに7次にわたる調査が行われた。その結果、館の概要が把握され、建物址や水溜址・溝址など多くの遺構が検出されたことなどから、昭和56年に国の史跡に指定されている。

館の占地は、緩やかに蛇行する日川右岸の河岸段丘上で、南と西は比高差20mを超える断崖となっている。中世には、日川左岸を府中から郡内地方を経て武蔵・相模に至る往還が走り、館の付近では、これに鎌倉脇往還が交差するなど、交通の要衝であった。そのため、この地に館が造営されたのは、郡内の小山田氏を監視する目的が強かったとする説がある。

館の中核は、東西90m、南北60mを計る長方形の郭で、南と西は日川の断崖、北と東は土塁と堀で囲われている。北西隅には門址が発見されており、その内側北西部は無遺構の広場の空間となっている。その他の空間では、礎石を用いた建物址や水溜状遺構・溝址などが随所で確認されている。これらの遺構群はおおまかに三層に別れて検出されていることから、館造営の後、少なくとも二度にわたって大規模な館の修築が行なわれたことが推察される。



第35図 史跡勝沼氏館跡実測図

この内郭部は、東と北を再度、第二の堀でL字形に囲むといった二重堀の構造を示しており、さらにその外縁の一部には第三の堀の存在も確認されるなど、非常に堅固な構えをみせている。

外郭部については、その範囲が必ずしも明確ではないが、少なくとも現在のワインセンター敷地周辺及び内郭部の北西部には独立的な郭の存在が予測されている。発掘調査では、両地区ともに建物址の検出には至らなかったが、石積遺構等が確認されており、内郭部とは異なった機能を果たしていたものと思われる。

館跡から出土した遺物には、土師質土器（かわらけ）・陶磁器・雑器などのほか、金属器類や古銭などがある。量的に多いのは土師質土器や日常雑器類で、青磁や白磁などの輸入陶磁器類は極めて少ない。このことは武田氏の本拠である躰園ヶ崎館では、比較的多くのこうした陶磁器類が採集されているのに対象的であり、両者の経済力の差異を示すものとも考えられる。

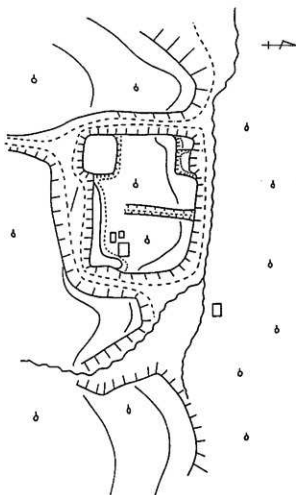
館の周辺には、水上屋敷・奥屋敷・加賀屋敷といった地名が残るが、館との関連については十分検証されてはいない。館の北には小佐手小路・筋違といった名称の道が延びており、この一帯を中心に町割が形成されたものと考えられる。また、鬼門除けとしては尾崎明神が祀られ、勝沼氏の菩提寺の泉勝院も今日まで続いている。

2 岩崎氏館跡

勝沼町下岩崎にある武田氏の一族、岩崎氏六代の居館と伝えられる館跡であるが、立地・形態等から疑問視する向きもある。

岩崎氏は武田信光の子信隆に始まり、一時は守護職の武田氏と並ぶほどの勢力をもった時期もあったが、長祿元年（1457）から翌年にかけて行なわれた守護武田氏と守護代跡部氏との戦いの際滅亡した。勝沼バイパス建設に伴い、昭和50年に実施された調査で検出された古瀬戸の作製年代は15世紀初頭であり、館の営業年代と一致している。

館は京戸川扇状地の扇端部に占地しており、館北縁に沿って坂下川が南流して急崖を形成している。他の三方は幅8～15mの堀がめぐり、東西120m、南北100mほどの長方形区画を造出している。この中央付近には南北に延びる窪地が存在し、かつては堀によって郭が二分されていたことを示唆している。郭の南西隅には一辺20m程度の正方形を呈した高台があるが、地元では太鼓櫓と呼ばれている。



第36図 岩崎氏館跡要図

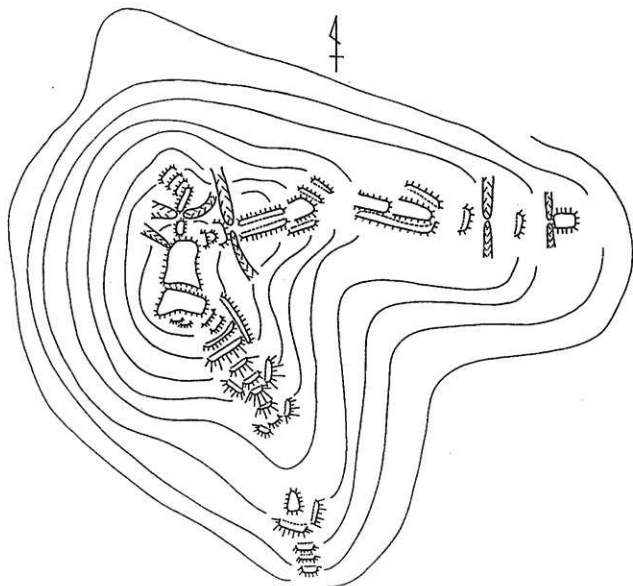
3 小田野城

牧丘町西保下にある平安末期から鎌倉初期にかけて、安田義定が用いたと伝えられる山城。『王代記』には「跡部上野守西保小田城ニテ腹切」とあり、寛正年間（1460～66）に至っても存続使用されていた。

城のある小田野山は標高883m、鼓川が東流する狭い溪谷に突き出るように位置している。山麓周辺には、御所・城下・馬場・支申屋敷・新沢屋敷・金屋敷・大木戸・的場など、多くの城館関連地名が残っている。

遺構は、山頂に残る二つの平坦地を中心とし、西と南に延びる尾根上に計4つの郭を配するほか、帯郭を幾重にも設けて防備を固めている。土塁は、南の尾根の先端に位置する三の丸と呼ばれる郭にのみみられるが、後世のものとは推定される。

城の占地・構造等から、本県でも最古の部類に属する城郭として位置づけられよう。



第37図 小田野城要図

4 浄古寺城（中牧城）

武田氏滅亡後、徳川家康が天正17年（1589）に内藤三左衛門に命じて築いた平山城。中牧城・東郡城ともいう。城の名は、この地にあった寺院・城古寺に由来するが、築城に伴い、同寺は窪平の地に移転された。

城は、鼓川と笛吹川との合流点に近い高台に占地し、周囲の展望にすぐれる。史料の裏付けはないが、同所は中世初頭より安田義定の居館が営まれ、また、弘安年間の二階堂氏の修築や天文年間の大村氏の修築を受けたと伝えられている。

部分的に残存する遺構から推定される城の規模は、東西320m、南北436mに及び、県内では数少ない天守台をもつなど、近世城郭としての特色を備えている。城は堀や土塁で画された本丸・二の丸・三の丸からなるが、外縁には急崖をなす自然地形を巧みに利用している。

周辺に残る堀ノ内・大庭・堀端等の地名も本城に関連したものと思われる。

7 塩山市

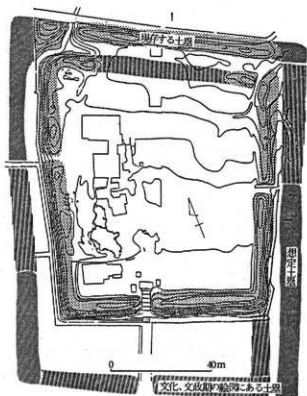
1 於曾屋敷

塩山市下於曾に元旗板と呼ばれる地域がある。この地域の中央に山梨県指定史跡である於曾屋敷がある。於曾郷は、「和名抄」に山梨郡の郷名として見えることから、古代からの集落であったことがわかる。甲斐の古代豪族である三枝氏の支配下に属していたが、その勢力の弱体化とともに甲斐源氏の勢力下に組み込まれたものと考えられる。中世の於曾氏は、甲斐源氏の祖とも言われる逸見冠者黒源太清光の男、加賀美遠光の男である四男が於曾四郎を号した五男が於曾五郎を称したことに始まる。於曾氏は室町から戦国期には「一蓮寺過去帳」・「妙法寺記」・「高白斎記」などにその名を散見することができる。

この屋敷は、県内では最も形態を伝える土豪屋敷の一つである。東西90m、南北110mの規模を有し、江戸時代の絵図によれば、二重の堀と土塁によって囲まれていたことがわかる。今日でも、北側と東側にその痕跡を認めることができる。虎口は南と東にあるが、ともに間口は2間程である。

昭和60年9月に県教育委員会で実施した発掘調査によって、南虎口の外側に幅3m以上の堀と土橋、堀の外側に柵列、その外側には掘建による奥行き二間、間口三間以上の門と思われる建物が検出された。この建物の南10mには土塁の基底部と思われる幅5m余り版築状の面が東西に延びているのも確認された。このことから、於曾屋敷は、絵図の通りの構造をもっていたことが確かめられた。

この屋敷の性格については、金山衆との関係が指摘されているが、今回の分布調査によっても、周辺に多くの金山衆関係の屋敷が確認された。



第38図 於曾屋敷要図

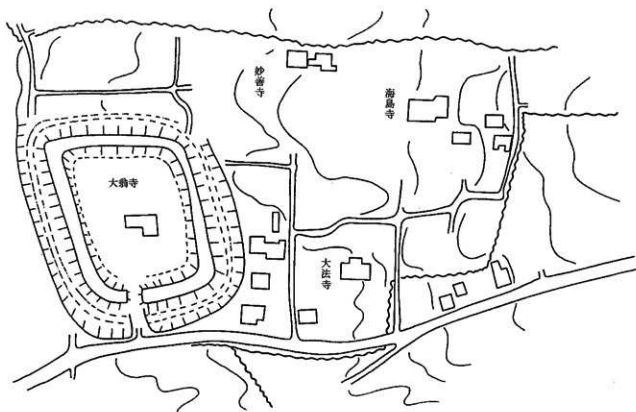
8 山梨市

1 栗原氏館跡

山梨市栗原周辺に勢力をもった、武田氏の一族、栗原氏歴代の居館である。

同氏は、武田信成の子武統に始まり、16世紀初頭頃には守護武田氏に並ぶほどの力をもったとされるが、『妙法寺記』永正17年の条には「此年五月当国栗原殿大将トシテ、皆々尾形ヲサシシ奉テ、一家國人引退玉フ。同六月八日ニ東郡ノ内ミヤケ塚ニテ軍アリ。上登ノ足衆切勝テ、其日ニ栗原殿ノ城ヲマク。此年六月ノ事也」とあり、武田信虎による有力土豪層の甲府集住策に抗して敗れ、以後、武田氏に臣従していったことが知られる。

『甲斐国志』はこの館を大翁寺の境内としており、墓地や竹林の中には土塁の一部が残っている。地籍図では、大翁寺周辺を土塁や堀の痕跡と考えられる細長い区画が取り巻いており、その地割は、ほぼ100m四方の正方形形状をなしている。隣接する妙善寺・海島寺・大法寺境内にも同規模の方形地割が認められ、これを館の一部とする説もあるが、条里遺構とも考えられる。



第39図 栗原氏館跡要図

2 御前山の烽火台

山梨市西部にある甲斐東部方面と府中を結ぶ烽火台の一つ。標高776mの御前山山頂に占地する。

山頂は岩場で、その南西部に幅2～3mの帯郭が4段認められる。最下段の帯郭の一角には巨石が立っており、そのあたりを「うまかくし」と呼んでいるようである。急峻な山であるが山頂の北側山腹には水が湧

く所もある。

この烽火台の北東には丸山の烽火台を、西には兜山の烽火台を望むことができるが、巨視的にみれば、武相口方面や雁坂口方面からの情報を府中に伝える役割を担っていたものと考えられる。

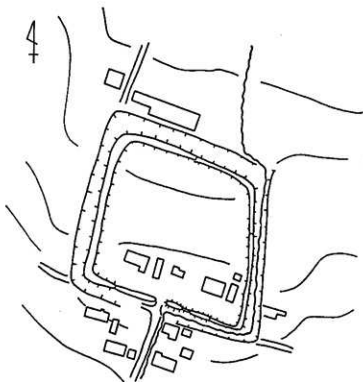
御前山の西方は夕狩沢と呼ばれ、寛正6年に守護武田信昌と守護代の跡部景家が戦った場所として名高い。

3 連方屋敷

山梨市三ヶ所にある屋敷で、『甲斐国志』が、武田家の藏前衆頭を務めた古屋氏の居址と推定する屋敷。屋敷構造等の検討から御藏の方所とする考えも提示されている。

屋敷は一辺約100mの不整形を呈し、東北隅を除いて土塁がまいている。土塁の規模は屋敷東で基底幅約15m、高さ約3m、北と南では底辺約8m、高さ約2mを計る。北側の土塁外縁には明確な堀跡が認められるほか、他の三方にも水路がめぐっており、かつては四囲を堀で画していたものと考えられる。

東北隅の土塁については、農耕等で削平されたものと思われるが、この部分で角を欠いていることから、意図的に造出された「折竪」とみる説もある。



第40図 連方屋敷要図

4 安田義定館

平安末期の甲斐源氏の有力武將安田義定の館。

甲府盆地の東北部、笛吹川の左岸の山梨市小原西にある保田山妙音寺、安田山西願寺の境内に館跡と伝えられている。土塁や堀等の遺構は現存せず、規模や形態は不明である。安田義定は、治承4(1180)年の平家追討のための挙兵に際しては甲斐源氏のなかでいち早く行動を起こし、駿河日氏橋遠茂を敗走させている。彼は逸見清光の四男とも源義清の四男とも言われているが「吾妻鏡」のいう義清の四男説が有力視されている。彼は治承4年10月21日に遠江守護に任ぜられたとされ、その後寿永2(1183)年には入京して遠江守に任ぜられている。治承4年から寿永2年までの間は遠江国を領していたと考えられるが、鎌倉の源頼朝とは一線を画した甲斐源氏独自の行動と理解される。しかし、鎌倉政権の体制確立とともに他の甲斐源氏同様その体制に組み込まれていったのである。建久2(1191)年に塩山市放光寺に彼が奉納した銅鐘には「甲斐国牧庄放光寺、奉跡施鐘一口、建久二年辛亥十二月八日、従五位下遠江守源朝臣義定」とある。このような背景から安田義定は駿河遠江国の住人であったが、平家追討に功があったために甲斐国牧庄、加納庄を領す

ようになったとも言われている。その後建久4年に男義資が永福寺事件で頼朝に梟首され、翌年に義定も殺されることになった。安田義定を甲斐源氏とする説には若干の疑問もある。他の甲斐源氏が姓とする地名が甲斐にあるのに対し、安田の地名は遠江にあること、また武田信義を統領とする甲斐源氏の動きと義定の動きが別と思われる等の点からの疑問である。

5 武田氏落合館

『甲斐国志』古跡部の武田氏館跡の項に、信虎以前の「武田氏館」は川田にあったと伝えられていると記されている。しかし信虎にいたる信昌、信繩の菩提所は何れも山梨市落合の周辺にある。信昌の廟所は永昌院（現矢坪）で、ここは信昌の開基である。又信繩の牌子はこの永昌院と、落合に隣接する正徳寺の聖徳寺にある。更に信虎の誕生屋敷と伝えられている下岩下は、落合の南地続きである。加えて落合には小字として「屋敷」「堀の内」「屋敷添」「堂城」「前田」等の地名がある。しかし館跡であることを実証する遺構、遺物等は現在確認されていない。したがってこれらのことから、館跡の存在は推測の域を出ないが、ただ「妙法寺記」「向嶽寺文書」から信昌と納男信繩との間に、家督をめぐる争いがある、この記述の中に、「落合御前」という名称が使われていることを付記したい。

（資料提供 萩原定徳）

6 切差の城山

帯那山の麓、切差地区の東に屹立する眺望のよい小山を城山という。『東山梨郡志』には「切差の據跡」として、昔小田野の城主安田遠江守を攻めるため鎌倉の将斉藤加賀守が此処に營所を構えた所と伝えられていると記されている。地元の古老によると、藤尾弾正が守ったところで、現在麓に藤尾組という地名が残っているともいう。（『甲斐国志』の仏沢の城跡に出てくる藤森弾正か？ 仏沢は城山と指呼の間にある）山頂は平坦で中央部に土の盛り上がったところがある。西側は石が数個並んでいて、その下は断崖になっている。南側斜面に石祠があるが里人は「お山の神さん」とよんでいる。頂上からの眺めはよく、西は太良峠、東は丸山の烽火台跡から大菩薩、南は仏沢から富士山へと見通しは大変よい。麓の切差地区からは登り30分、下り10分位で往復出来る。

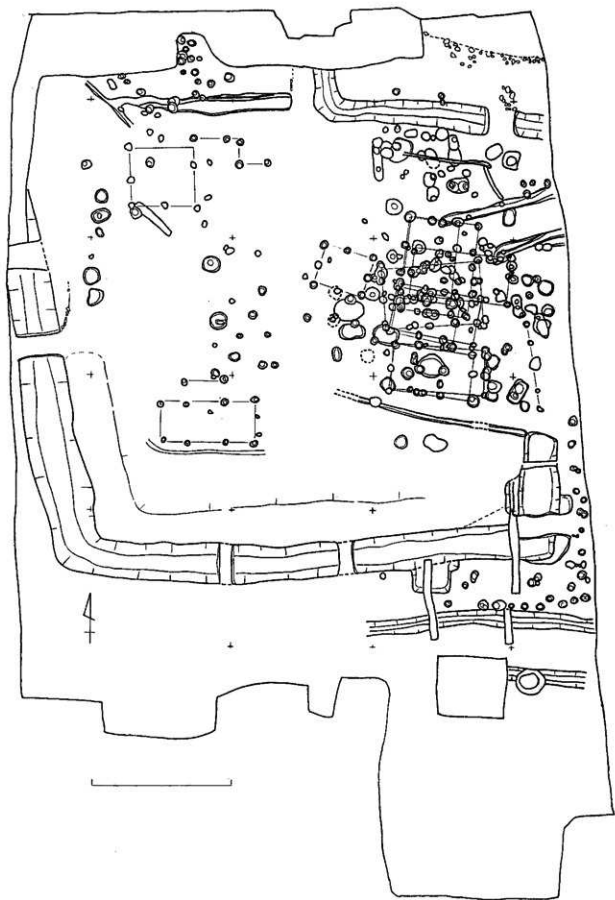
7 城伊庵屋敷

戦国時代に武田家の鉄砲衆であった城氏の屋敷。甲府盆地北東部、笛吹川左岸の山梨市山神納川地内にあったとされ『甲斐国志』は「東西百二十歩余南北九十二歩余、北へ上堤塚ヨリ二重ニシシハ一重ニス。東南ハ今平地トナレリ」と記している。しかし、この遺構を見ることはできない。武田信玄時代に活躍した人物の屋敷としては大きすぎるとも言えよう。

9 東八代郡

1 筑前原屋址

金川の右岸に広がる東八代郡一宮町東原にある筑前原屋址は、以前より古代官衙あるいは、中世館と言われて注目されてきた。この屋址の隣接地には橋立神社があるが、この神社を以前より式内社である「甲斐奈神社」に比定する説があり、その意味でも注目されていたところである。『甲斐国志』は堀田筑前宅址として「東原村林部ニ、筑前原トテ方五町許リノ塚アリ。……按ニ林部神社ノ広大ナリシ時神官・宮司等ノ居址ナリシニヤ」と記している。また史跡名勝天然記念物調査報告第八輯は、屯倉の遺址などと考えている。更に『一宮町誌』は「軍団址の一部かと思われ、現状の複雑な土器は官衙の跡にも結びつかないので、特殊遺



第41図 筑前原遺跡遺構配置図（竪穴住居跡を除く）

構として今後の研究が俟たれる内容である」としている。

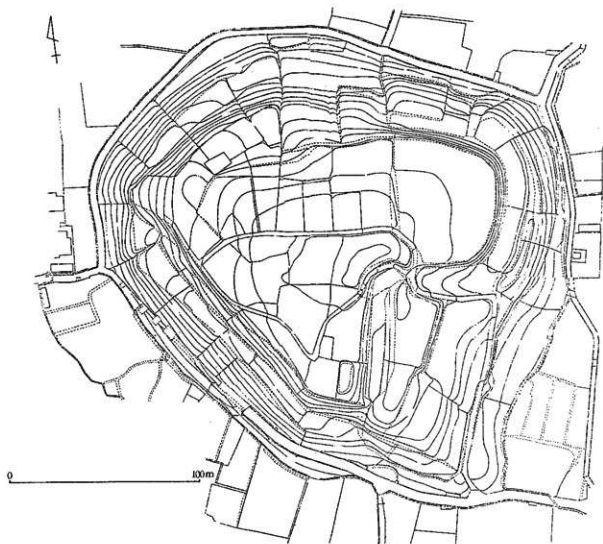
幅2～3m、高さ1～2m程の土塁が、複雑に存在するこの遺構は、上述したようにその性格について論議をよんでいたが、昭和159年から宅地造成計画に先立つ発掘調査が一宮町教育委員会によって実施され、弥生時代・古墳時代・平安時代の住居址6軒、古代末から中世にかけての礎石建物址1・掘立柱建物址8、これを取り囲むように幅3m深さ2m程の堀とその内側に幅3mほどの土塁址が検出された。

この発掘調査によって、古代官衙遺構である可能性がなくなった訳ではなく、更に周辺の調査を待たねば性格ははっきりしない。

2 勝山城

中道町上曾根、境川村の境で笛吹川左岸の氾濫原に比高15mの胸を伏せたような丘がある。この丘を地元では「かつやま」と呼んでいる。現在は桑畑や果樹園となり、これらの畑の中に空堀跡や土塁跡がある。また、周洲の斜面には腰郭が巡っている。虎口は南側にあったと考えられる。

この城は、中道往還が甲府盆地の平野部に入る所に位置しているため、軍事的に中世を通じて重要であった。16世紀初頭に起った武田家の内紛の舞台となり、その直後には、駿河の今川勢が甲府盆地に乱入したときの拠点ともなった。天正10年に徳川勢もこの城に入って、御坂峠に布陣していた北条勢に対した。



第42図 勝山城要図

城の周囲には現在水田が広がっているが、以前は深田であり、自然の堀として機能していたものと考えられる。

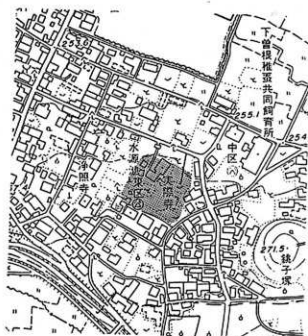
昭和57年度に農道の拡幅工事に先立ち、城の南西斜面の一部が発掘調査され、腰郭の一部や土塁跡と石敷状の遺構、柵列の柱穴群が検出された。また、菊皿の破片や土師質土器の破片が表採されている。

3 下曾根氏屋敷

東八代郡中道町下曾根字店屋敷に所在する實際寺の境内が、下曾根氏の屋敷と伝えられている。『甲斐国志』は曾根郷の項に「下曾根氏ノ宅跡ハ實際寺ノ境内是レナリ。四方七八十間ニ土塁存セリ。亦村民宅地ニモ処々ニ残塁アリ」と、また實際寺の項に「後ニ下曾根氏ノ館跡ニ寺ヲ移シ」とも記している。

曾根郷は、中道往還の要所として重要な所であった。天正10年徳川家康は中道往還を通過してこの地にある右左口に木陣を構え、更に龍華院に入って、甲斐の土豪層の掌握に勤めた。下曾根氏は武田氏の分派で、武田氏滅亡後は徳川氏に仕えた。

屋敷の規模は、幅10m程の土塁跡と考えられる土地区画が東西100m南北70m程コ字状に認められることから、方100m程の大きさであったことが推測できる。

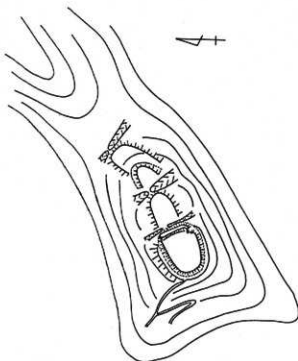


第43図 下曾根氏屋敷要図

4 金刀比羅山砦

中道町の南にそびえる御坂山系を越えて富士山麓をへて東海地方に通ずる中道往還は、古代より山梨と都を結ぶ重要な交通路であった。この中道往還の難所である標高870m程の右左口峠の北で、日陰山から延びる標高655mの尾根に右左口集落の金刀比羅神社が鎮座する。この尾根に金刀比羅神社烽火台がある。

遺構は幅15m～20m程の尾根上に3木の空堀によって区画された三つの郭が、約60mの長さで存在している。主郭と思われる金刀比羅神社の社がある尾根先端の郭は、背後に高さ1.5m程の土塁をもち、周囲には幅1～2mの腰郭がある。この土塁の東には、幅2m、深さ1m程の中央に土橋をもつ空堀があ



第44図 金刀比羅山砦要図

り、その東には、一段下がって80m程の平地がある。この東には、やはり土橋をもつ空堀がある。この東には一段下がって平地が、更に下がって平地がある。これらの東には、この烽火台の外郭を区切る空堀がある。

『家忠日記』天正10年11月4日の条に「うは口筋ニ取出普請候」とある。この徳川氏が築いた右左口砦は、従来よりこの烽火台の北にある城山と呼ばれる山にある右左口砦がそれとして考えられているが、今後の検討を要する。

5 小山城

八代町高家にあるこの城は、古代からの主要官道であった御坂路と若彦路にはさまれた浅川扇状地の先端に位置し、また城跡からの眺望は素晴らしく、甲府盆地が一望できるため、軍事的に極めて重要な城であった。

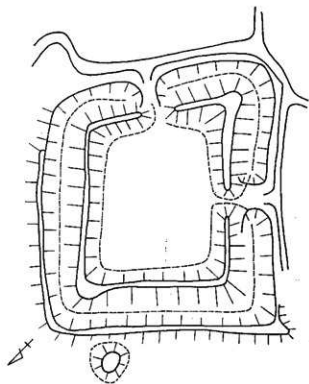
この城は、北から比高20mを測り、周囲に高さ2～3m余りの土塁と、深さ2～3m程の空堀が巡る東西120m、南北130mの規模である。虎口は南と東にあったが、昭和40年代のスポーツ公園建設にともなって、南側の土塁の一部が崩され、この土砂で堀の一部が埋められたため、虎口の形態を残しているのは東側だけである。内部は以前2～3段の平坦地からなっていたが、この時に削平されて、現在では知ることはできない。東の虎口の左右には、門の礎石と思われる平石と土塁の断面を覆う石積みが残っている。また北東と南東の土塁上には、望楼の礎石と考えられる方形の石列が残っている。空堀の外側の畑には、土師質土器の散布が見られるため、更に外側にも遺構が存在していた可能性がある。昭和50年には菊皿の破片が採取されている。

城主については、穴山伊予守が伝えられているが、定かではない。『甲斐国志』の武田信重節跡の項に「古説ニ信重ハ黒坂太郎ト云者ヲ討タントテ兵ヲ率ヒ、彼地ニ向ヒテ既ニ結戦シケルニ、小山城主穴山伊豆守其隙ヲ伺ヒ、小石和ニ襲ヒ来リ、焼キ立テシカバ、信重前後ノ敵ニ途ヲ失ヒ遂ニ自殺セリ、宝徳二庚午十一月廿四日ナリ……」とある。更に小山城墟の項に「穴山伊予守信水、之ニ居ル。或ル時、南部某ト云フ人、鳥取越エヨリ攻メ寄ケルニ、信水モ花鳥山ニ出張リ、相戦ヒシガ、利アラスシテ小山ニ引キ入り、守禦ノ謀ヲ廻ラシケルニ、敵ハ勢ニ乗ジ競ヒ撃ツ事急ナレバ、中略、信水ノ位牌アリ、東關院前子州玉山鉄公大居士……」とある。伊豆守は伊予守の誤りであろう。

天正10年には徳川家康の命令により、中道町の右左口砦とともに修築し、鳥居彦右衛門が御坂峠の北条勢に対した。有名な黒駒台戦はこの城の北東で行なわれている。

また、この城は八代町にある武田信成館の要害であったという説もあるがはっきりしない。

なお、この城の東、小物成山にも城跡があり、土師質土器の散布も見られる。



第45図 小山城要図

10 西八代郡

1 一条氏館

一条氏館は上野城とも呼ばれ三珠町上野の東、曾根丘陵の張り出し部分の台地上に位置するが、盆地側からは独立した小丘のように見える。現在は破裂神社がおかれており、地元では一城林と呼ばれ、武田信玄の呉母岩、一条右衛門大夫信龍とその子、上野介信就の城地であったとされている。

現地は神社を囲んで畑となっており、当時を忍ばせる土塁、堀などは見られないが、神社の北側から東側にかけて畑中に2例の段があり館と関係があるものとも考えられる。神社の南東の谷付近には「照越」という地名が残っており、上野本村には「門口」といった家号をもつ家がある。また『甲斐国志』には「馬場」「門前」といった地名が付近にあったことが記されている。表門神社の付近には、「矢作」（やはぎ）という地名が残っており、戦国時代矢を専門に作る矢作衆が居住していたと伝えられている。

前記のように盆地側からは小丘のようであり、東側は深い谷がはしっているが、曾根丘陵の先端のため南側からは平坦であり侵入が比較的容易であろう。立地から見ると、守りに徹した要害の城と平地に築かれた居館の中間的な性格をもつものと考えられる。

天正十年(1582)3月、武田勝頼追討のため徳川軍が市川口より侵入するが、その御先手衆によってこの城は落ちることとなる。その際、城主である一条右衛門大夫信龍も討死したと伝えられるが、『甲斐国志』によると討死したのは上野介信就であり、信龍はすでに病死しているとも記されている。

2 古城山の砦

四尾連湖の東の大島山北西側の山腹に位置し、市川の町中から四尾連湖へと向う山道に臨接して標高720 mほどの所に砦が築かれ、その上方標高約870 mの所に烽火台が見られる。

『甲斐国志』によると、武田氏の時代には、跡部藏人なる人物が警衛していたこと、天正十年の徳川軍侵甲の際、大須賀五郎左衛門の陣より守兵が派遣されたことが記されている。さらに同書には、砦の所は、平塩岡に居館があったと伝えられる源義清の要害本城の跡といわれていること、平塩寺(白雲寺)がこの地にあったことなどがしるされているが、出月洋文氏は、『日本城郭大系』において「立地や構造的な面から戦国的な色彩が濃く、主郭の土塁が北側になく、南側で高さを増していることや、堀切などのあり方は、山道の通る南側に対しての防備に重きが置かれていたことを示しているようである」とし、「砦と烽火台の一体化した経営がなされていたものと思われる」と結んでいる。

砦の遺構については、東・南・西の三方を土塁で囲めた主郭とそれを取り巻く腰郭、尾根切りなどが見られ、『日本城郭大系』に詳しい。

砦の南方約500 mの烽火台の所には、戦前までは烽火台の石組みや石垣があったと伝えられるが、現在は見られない。

3 鴨狩の城山

富士川東岸の六郷町鴨狩津向の南に位置し、頂上の標高は458mを測る。寺所の烽火台と同様、歴史的な経過は不明であるが、周囲に展望がきき、富士川沿いの烽火台の1つと考えられている。

山頂から約20mほど北側に下った所に東西約40m、南北約10mの平坦地があり、その上下の山腹にも段状に平坦地が見られる。また、付近には古井戸の跡といわれる凹地がある。

4 寺所の烽火台

六郷町寺所の西の東西に延びる尾根上(標高520m)に立地している。

歴史的な経過については、まったく不明であるが、『甲斐国志』には「里人馬賣場ト名ヅク烽火台ナリ」と見え、特に北側と西側に眺望がきき、富士川の兩岸に点在する烽火台としても役目もおっていたものと考えられている。地元では「しろやま」あるいは「じょうやま」と呼ばれるが、一般に忘れられかけている。

遺構としては、周囲より一段高くなった平坦地(東西約20m、南北約14m)が主郭と考えられ、その北側に1mほど下って2つの郭が東西に並んでいる。主郭の東側には2箇所尾根切りが設けられているが、幅約20m、あるいは12~13mと一般のものより広く、しかも底面が比較的平坦であるため出月洋文氏は「これを、郭とみることもできる」としている。

5 大内蔵屋敷

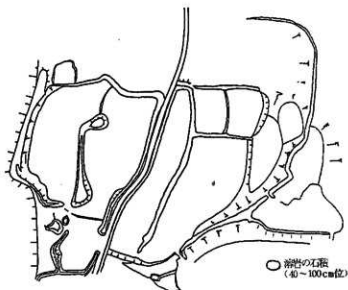
上九一色村古関は、中道往還の関所がおかれた所として知られ、その関所跡の近くに九一色衆十七騎の一人、土橋大内蔵の屋敷跡と伝えられる所がある。

釈迦ヶ岳山頂から北東側に延びる尾根が、寺川付近で勾配がなだらかになった所に位置し、現地は本郷の村中で、水田や民家となっている。伝承地の南端(現在民家となっている)には門があったといわれ、また水田の一角には石祠が祀られているが、現在屋敷跡を連視させる遺構、地割などは特に見られない。

6 渡辺氏屋敷

上九一色村本柄本栖湖の東岸に、渡辺の屋敷があったと伝えられる。因幡佑の祖父・知の代には本柄に居住し、武田氏に仕えていたと考えられ、駿河へと続いている中道往還の警固の役目をおっていたとされている。

現地は、幅50cm、高さ40~100cmほどの溶岩の石積によって区切られた畑や植林地であり、石積の区画が当時の遺構を伝えるもの



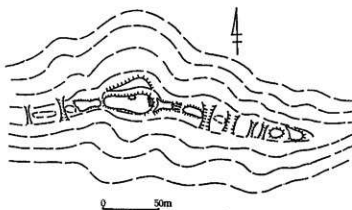
第46図 渡辺氏屋敷要図

か、また単に畑を作るために積まれたものかについては不明である。この一画には、小型の五輪塔が五基ほどあり、因幡佑の墓所とされている。屋敷跡と伝えられる所の南西端には虎口とも考えられる部分があり、その脇には煙硝屋敷と呼ばれ、唯一溶岩が敷き詰められている一画がある。

7 本栖の城山

本栖湖の東岸、烏帽子岳山頂から東に延びた尾根上とその南側の青樹ヶ原樹海内に遺構が見られる。

『甲斐国志』によると、天文・永禄年間の武田氏関係の文書に「本栖在城」と見えており、甲斐国境警固のために施けられたことが記されている。樹海内に突き出した尾根をとりまくように山裾には中道往還がめぐり、尾根上からは富士山西麓が一望でき、国境警固の目的でこの地が選ばれたことがうなづける。



第47図 本栖の城山要図

人工的と考えられる遺構としては、最高地点にある最大面積(40×10m)をもつ主郭と思われる郭を中心に見てみると、東側(尾根の先端側)には2つの郭を配しその先を4個所の尾根切りを施しており、西側(烏帽子岳山頂側)には1つの郭とその先に2個所の尾根切りを設けている。また主郭の北側斜面にも1つ郭が施され、南側斜面は岩壁となっている。

郭間の通路及び郭の周囲の斜面などには、人が抱えるのに都合のよいほどの大きさの偏平な溶岩が積まれており、この溶岩は尾根上からは産しないため、眼下の樹海内より運び込んだものと考えられている。

主郭の一画には楕円形に少々盛り上った箇所(6.5×4.0m)があり、何らかの施設に関係するものと考えられる。また主郭とその1つ東側の郭の東端部は、防衛のためか、舟の舳先状に少しせり上がっている。

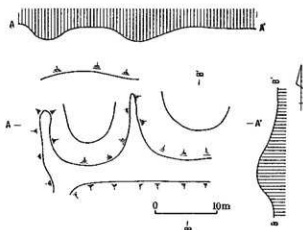
これら尾根上の遺構と関連すると考えられる石塁が樹海内にも見られる。城山の南側山裾に位置し、斜面から樹海内に鋭形に突き出した形態をもつものである。石塁の一辺の長さ20m、高さ3m、底辺の幅6mほどで、溶岩を積み上げた頑強な造りである。石塁の内側斜面は偏平な溶岩を階段状に積み上げており、この積み方は尾根上の遺構にも見られるため、同遺構に付随しているものと考えられる。山裾に接続している付近は、東海自然歩道によって切断され明確ではないが、虎口が作られていた形跡がある。

この城山周辺の樹海内には、自然の樹木に守られ、これ以外にも付随する遺構が存在するであろう。

8 関原峠

豊富村関原と上九一色村下戸川を結ぶ関原峠は、中道往還の右左口峠からは1つ西側の峠である。現在この峠は活用されてはならず、茂った草や倒木のため進むのが困難な箇所もあるほどであるが、特に関所から峠までの山道は大規模に斜面を削っている所が多く、かつての交通量の多さを感じさせるものがある。

『甲斐国志』には「……下戸川村ニテ野坂ト称ス此道ニ木戸ロト云地名アリ占関門ヲ建テシ所ト云伝フ」と見えるのみであり、砦の有無については触れていないが、存在した場合の候補地を1つあげておきたい。関原峠から右左口峠へ向う尾根上を少し東へ入った所にこの付近の尾根の最高地点がある。そこには狭い平地が数箇所あり、その南側を上塁(?)がめぐっている部分も見られる。



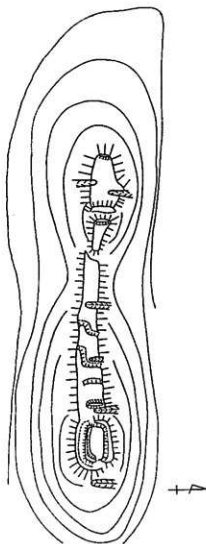
第48図 関原峠要図

11 北都留郡

1 大倉砦

上野原町大倉にある大倉砦は要害(城山)と呼ばれる標高535mの、東から円錐状に見える山の山頂にある。この山頂には秋葉社が祀られている。

遺構は山頂から西に延びる尾根に築かれ、東西200mほどの規模である。主郭は東端に位置し、南面に上塁を巡らし、さらに南には腰郭がある。この腰郭の西は空堀によって切られ、鞍部にある二の郭へつづく。二の郭は二の郭と上塁と空堀をへだてて、西の高所にある。四の郭は上塁と空堀をへだてて更に西にある。『甲斐国志』に「山ノ中腹ニアリ、平担ニシテ四方石垣ノ跡アリ、土人城山ト称ス。何人ノ居跡タル事ヲ不知、或ハ云陣鐘ヲ置キシ地ナリト」とある。文中にある石積みは今日認められない。

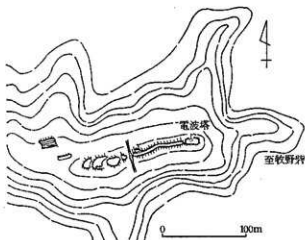


第49図 大倉砦要図

2 四方津御前山の烽火台

この烽火台は、上野原町の四方津小学校の北方にある標高460mの御前山上に、東西に延びる尾根上に2～3の郭によって構成されていたものと考えられる。尾根の東端には電波塔があるため、全体を把握できない。

『甲斐国志』に「御前山ト云フ、是レ又人工ヲ用イテ切り平ゲシ山ナリ。烽火台ノ跡ニヤ」とある。山頂からは東に鶴島・上野原を望むことができるため、烽火台として築かれたものであろう。

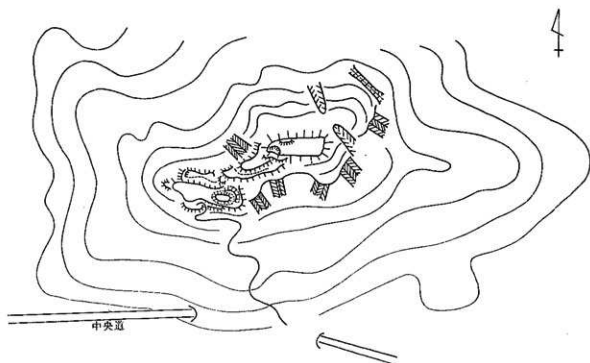


第50図 四方津御前山の烽火台要図

12 大月市

1 岩殿城

戦国時代の山城で、大月市賑岡町にある標高634m、比高250mの桂川左岸にそびえる岩殿山にある。『甲斐国志』は、小山田氏の要害で、一ノ堀・二ノ堀・本城・馬場・大門口・蔵屋敷等の地名が残ると記している。本城と言われる最も高い場所には、現在テレビ塔があり、旧状をとどめない。これより東に空堀が2本あり、これが「一ノ堀・二ノ堀」とよばれていたものであろう。本城（主郭）より西に下ると数段の平担地があり、その下の広い部分を「蔵屋敷」とよぶ。さらに西に続く尾根に細長い平坦地がある。これが馬場とよばれ南側に虎口がある。郭の規模等から推測すると、『甲陽軍鑑』や『甲斐国志』の言う「小山田氏の要害」には、郭の規模等から、必ずしも十分ではない。この城は桂川流域の山頂部に多くある烽火台の中継点であったと考えられる。



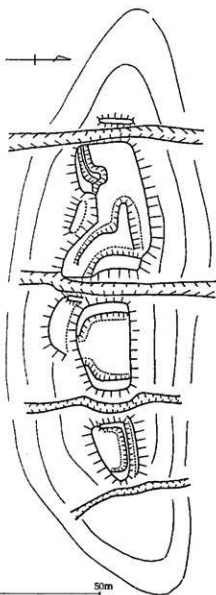
第51図 岩殿城要図

2 駒宮砦

大月市七保町駒宮にある標高 496 m の天神山山頂に築かれた城郭である。その規模は東西 130 m、南北 150 m で、3 郭と 4 つの空堀からなる。『甲斐国志』に「郡内凡ソ御前ト云山所々ニアリ。多クハ烽火台ノ跡ナルベシ。御前平モ其類ナルベシ」とある。中央にある、北を除く三方に高さ 1 m ほどの土塁を有する郭が主郭と考えられ、これより西の郭は二段の平掘部からなる広い郭で、また東の郭には北側に高さ 1 m ほどの土塁がある。この砦は岩殿城、長峯砦、大倉砦等の桂川流域に東西に連なる砦群の一つとして築かれたものであろう。

3 鎌田氏館

大月市富浜町烏沢の、桂川左岸の急崖上にある館跡である。『保元物語』に、相模国住人鎌田次郎正清がみえ、『平治物語』に、正清が兵衛尉となったとあり、この兵衛尉が福地郷（現在の大月市東部）を授かったと言われている。館跡の比定地は堀ノ内とよばれる舌状台の先端付近にあるが、現在は畑と宅地となり、遺構や規模等は不明である。昭和 54 年に県営住宅の建設に伴い発掘調査が行われたが、平安時代の竪穴住居址が一軒検出されたが、中世遺構は検出されなかった。

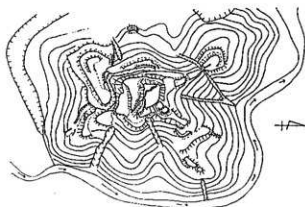


第 52 図 駒宮砦要図

13 都留市

1 勝山城

この城は都留市川棚字城山、標高 571 m、比高 110 m の桂川右岸にある城山とよばれる独立峰にある。戦国時代の後半に小山田氏によって築かれたが、天正 10 年以降島居元忠、三輪近家、加藤光吉、浅野氏重、島居成次、成行、木堂茂親と変わり、秋元氏二代が居城としたが、その後廃城となった。この城は幾度となく修築を繰り返しながら今日の姿となったが、甲府城の築かれた時期である浅野氏重時代にほぼ今日の形状になったものと考え



第 53 図 都留市勝山城要図

られる。遺構は東西 650 m、南北 500 m の広範囲にわたり、周囲は堀跡が水田となって、その姿をとどめている。郭は山頂部の主郭を中心に同心円状に配され、途中から四方に延びる尾根上に空堀を伴っている。特に南側から西側斜面を登る空堀は県下の城郭には存在しないほど巨大なもので、この城の特徴である。主郭は方形をなし、周囲に帯郭を配している。西南の二の丸と考えられる郭は、幅 20 m ほどある大きなもので、この郭の東には花崗岩の石垣が斜面に一部露出している。土塁が本丸などの郭にないことから、あきらかに廃棄されたものであろう。

2 中津森館

郡留市金井、大幡川の左岸の河岸段丘土縁辺に位置する小山田氏の館跡である。遺構は水田になった堀跡と考えられる帯状の窪地と、土橋の一部が確認できる以外、土塁等は存在しない。いつから小山田氏が館を構えたかは不明だが、『妙法寺記』の大永七(1527)年の頃に「中津森ノ殿様百ッポニ御家造り玉フ」また享祿三(1530)年の頃には「中津森ノ御所炎上」とある。小山田氏は秩父平氏から分かれて、鎌倉時代以前に甲斐に入って勢力を拡大してきたと考えられているが、その系譜の詳細は不明である。武田信重の母は、小山田弥次郎の女といわれているため、室町時代には郡内で守護武田家に深くかかわるほどの勢力を保持していたのであろう。その後、永正十二(1515)年には中巨摩郡の雄、大井信達(居城であった上野城を攻めて深田に足をとられて死んだ小山田大和守)がある。これより前の永正五年には、武田信虎と油川信忠との戦いにも小山田の名が見える。同年信虎は都留郡に侵入して小山田弥太郎を倒している。小山田氏はこの中津森館に享祿五(1532)年まで居て、同年各村に新居敷(谷村館)を構えて、天正十年に滅亡するまでの間の 50 年間の館とした。

3 谷村城

郡留市谷村第一付近で、桂川左岸の河岸段丘縁辺に築かれた中世末からの館で、小山田氏が中津森館から天文四年にこの地に館を移したことはじまり、その後江戸中期まで秋元氏等が入った。小山田氏滅亡後、天正壬午の乱で、徳川方の烏居元忠が入り、天正十八年まで居城した。その後は浅野氏、秋元氏が入る。浅野氏によって、勝山城とともに修築されたと考えられる。秋元氏の時代の絵図は伝えられているが、この図から推測すれば、城下町は城の東側に集中しており、社寺はその外側に、また南北からの道路は大きく曲がっていたことがわかる。現在はこの曲がった道路が当時の姿をしをばせている。秋元氏の川越移封後は廃城となったが、一部が谷村陣屋となり明治をむかえた。

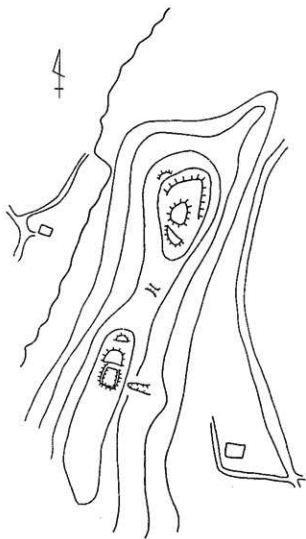
14 富士吉田市

1 吉田城山

富士吉田市新屋字城山にある小倉山の北東に伸びた尾根上に占地した戦国時代の砦である。この山は標高 874 m、比高 34 m の丘陵で小倉山に続いていたが、国道の拡幅工事等によって切断されて今日の姿となった。『妙法寺記』文亀元(1501)年の項に「九月十八日從伊豆國早雲入道甲州へ打入。吉田城山、小倉山兩所二代ヲ致テ云々」とあるが、これが吉田城山である。このことから文亀元以前に城郭としての施設が存在していたと考えられる。また永正 13(1516)年には駿河勢が進入してきた。この事象を『妙法寺記』は「此年榎月十六日已訖西海右近ト平八造兄弟三人、大石与五郎殿モ打ルル也。去問宮内丞殿同廿九日ニ出陣アル也。中略、サレトモ日ヲノ合戦ニ吉田ノ城ヲ賣ルニ城方メテヲ取ル。新 hands モ替ル」と記し、また「此年正月、小林尾張入道殿荒嶽出陣シ玉フ。然問正月二日ヨリ城ヲ賣ル事強盛ニテ、終ニ正月十二日夜引申候。云々」ともある。この戦いは、永正十二年十二月に駿河勢が甲州に乱入したため、これを戦った郡内勢は西海右近、

平八彦の兄弟3人、大石与五郎などが打たれた。そのため、宮内丞が廿九日に出陣し、古山城山に籠城している駿州勢を責めて、城の裏手を取った。更に正月二日に小林尾張入道も出陣し、正月十二日に古田城山は落城したのであった。この古田城山は中道町の勝山城や中戸麻の大井氏の城とともに戦国期の甲州統一の舞台として文献に見える城である。

遺構は南北に延びる尾根上に土塁を持つ方形の主郭と、周囲に腰郭を伴う郭が残り、その間に堀切りがある。『甲斐国志』は「此山人居ノ跡トモ見エズ。又烽火台ノ址ニテモナシ」と記している。この城の南東1kmには忍野鐘山烽火台がある。



第54図 古田城山要図

15 南都留郡

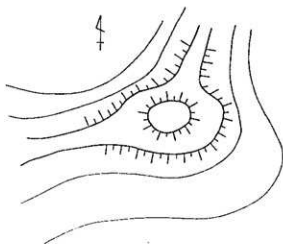
1 山中氏屋敷

山中湖村山中宇御所とよばれる湖畔にある。『甲斐国志』によれば「湖水ノ西ニアリ。広サ四段余。四方石垣ニシテ、其外ハ堀ヲ深クシ、南面ヲ表門ト云。中略。築地ハ其ママ存セリ」とある。現在は国道138号線西側で市街化し、往時の姿をとどめない。山中氏は『妙法寺記』に「大永七（1527）年立正寺ノ日方山中太良左衛門」とみえ、更に同記の明応三（1494）年の条に「三月廿六日ノ合戦ニハ武田彦八郎殿負ケモフ。中略。山中打死ナリ」と記されている。山中氏は甲斐国境の富士北麓を基盤とした土豪であった。天正十年以後は一族が山梨市下神内川に四百三十七石を領している。

2 城古山

河口湖の北岸に突きでた標高1,050mの山頂が城古山と呼ばれているが、この名称にかかわる伝承はない。

現在山林となっている山頂が長さ18m、巾10mほどの平坦となっており、この周囲に腰郭的なテラスがめぐっている。中腹には石積みを伴う段が数段あるが、畑として利用されたもので、それ以前の性格は不明である。



第55図 城古山要図

第4章 甲斐の中世城郭

黒川金山と土豪屋敷

清雲俊元

1 はじめに

塩山市、大菩薩峠を主峰とする萩原山の北角に黒川山（鶏冠山）がある。黒川山の東側黒川の渓谷に沿って黒川金山が存在した。現在東京都の水源涵養林がうっそうとしている。ここは国道360号線旧青梅街道柳沢峠の北北東約3.5キロメートルに位置し、標高1,710メートルにある。花こう閃緑岩から成るが、山ろくの東側は古期岩類の地層で粘板岩、砂岩、輝緑凝灰岩などからなる。金山にまつわる伝承は奈良時代からあるが、採鉱については武田信虎の頃に始まり、信玄の時代が全盛期といわれ、信玄時代の軍用金の多くはこの黒川金山によるものとも伝えられている。ところが天正四年には金の採鉱が減少して廃鉱にされたことが伝えられているが、『甲斐国志』（以下『国志』）古跡部には「金山ノ盛ナリシハ慶長年間久保長安の奉行タリシ頃ノ事ナルベシ」と記されている。

また一般に黒川金山と称せられているが、この範囲は広大な地域を指している。鶏冠山を中心とする黒川谷一帯、一ノ瀬の東方のリュバミ谷一帯から将監峠を越えて秩父に至るこの地域一帯を黒川金山と呼んでいたようである。

戦国末期から江戸時代初頭にかけて、甲斐などの金山で、それぞれ掘り場（鉱坑）を持ち、主となって採金をしていた山主（山師）が在地武士団を形成していた。この黒川金山衆には『国志』によると中村、大野、風間、田辺、古屋、依田らの郷士があり、萩原、於曾、熊野などに居を構えていたことが記されている。今日なおこの金山衆といわれる土豪屋敷跡が残っており、またこれらの土豪屋敷の中心的役割を果たしたと考えられる、言い換えれば宅地的存在であったところが「於曾屋敷」である。於曾屋敷の領主は誰であったのか、今日謎とされているが、今回は於曾屋敷の経営者と、その於曾屋敷をとりまく金山衆ならびに土豪とのかわりあいを究明することによって戦国期から江戸時代初期にかけてのこの地の武士集団の動きと、これまでの山梨史の空白となっていた黒川金山の経営について考えてみた。

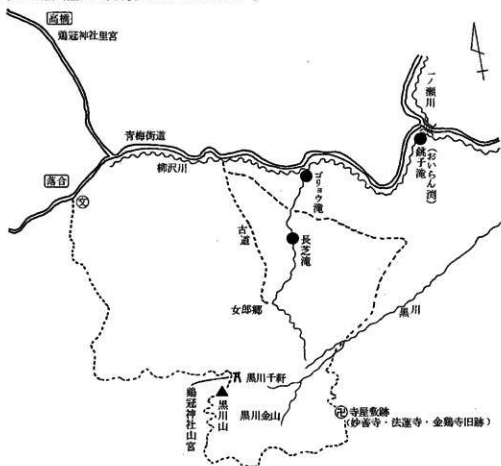
2 黒川金山

黒川金山の歴史は古いが資料的裏付けはないので、不明点が多い。黒川山（鶏冠山）には鶏冠神社の山宮があり、一ノ瀬、高橋部落の高橋地区にその里宮がある。祭神は大山抵命、金山彦命、八幡大菩薩で神体は黄金鶏と黄金鏡であったと古者は伝える。神社には別に大同三年と刻する鰐口があったと伝えている。このことから藤尾の田辺家の史料にみられる、大同元年の黒川金山の開掘伝説がみられるのかも知れない。『国志』から黒川金山の項をみると、

黒川山 萩原ノ北ニ在リ山川ノ部ニ記セリ 日蓮年譜ニ文永六年己巳日蓮造化勝沼ノ北原・田波・黒川トアリ
攻夷伝黒川此地畚出金、家可_レ一千 大士往而化 後_レ迹跡、造立_レ精舎号_レ永久山法蓮寺、今不出金、居民稍
減、乃移寺於郡赤尾村、トアリ按ズルニ黒川山出金ヨシ古ク云伝ヘタレドモ上世ノ事ハ得テ可_レ記ナシ昔時黒
川坑戶盛ナリシ頃奉納セント云伝ヘテ鶏冠山神社ニ黄金鏡ニ面アリ表ニ天正五丁丑年八月念四日ト刻セリ又
天正ノ頃於曾・熊野等ニ金山衆トテ掛ノ者アリ各々所藏ノ文書ニ見エタリ凡_レ国朝創業ノ時ニ及ビテ諸国金山
ノ盛ナリシコトハ先儒ノ説既ニ明ナリ、法蓮寺ハ本古府中ニ在リ慶長八年四年奉行黒印ノ地今清蓮寺有_レ之後ニ
黒川ニ移シ又赤尾ニ移ス以_レ之校スレバ金山ノ盛ナリシハ慶長年間久保長安ノ奉行タリシ頃ノ事ナルベシ

とある。『国志』には黒川金山の砂金採集についても金山の開掘についても具体的に関係者を取りあげて記述していない。

この点について於曾屋敷の項で詳細な究明をするが、奈良時代から平安時代にあつては三枝氏であり、平安時代の末から鎌倉時代初頭にあつては安田・加賀美氏など甲斐源氏が支配しており、それ以降においては武田氏、中でも武田信虎・信玄の時代が金山開掘の全盛期であり、それが徳川時代の初期まで続いているので、簡単な判断をもって黒川金山を究明することはできない。



第1図 黒川金山周辺

3 三枝氏と於曾

黒川金山ならびに金山衆について追究すると奈良平安時代までさかのぼる。

於曾の初見は、平安中期に成立した『和名抄』である。その中の郷名として山梨郡の中に於曾(塩山付近)、能呂(岩崎から能呂付近)、林戸(一宮町内)、井上(御坂町)、玉井(井上の西方一帯)があつて以上の五郷を山梨東部となすとある。この於曾郷の範囲は諸説あるが、広瀬広一氏は郷土史講座の中で、旧塩山町、松里、日下部、玉宮、神金、大藤、奥野田の諸村で、笛吹川以东重川以北の地に当り、旧塩山町の於曾はその遺名であるとしている。

この於曾郷を開拓した人は史料からみると三枝守国といわれている。『国志』に「古人ノ伝ヘニ当筋ニ於曾、萩原ハ三枝姓ノ分流ナリ」とあり三枝の系図をみると三枝守国には五人の男子があり、石原、能呂、林戸、立河、隠曾氏に分かれ、辻、萩原、窪田、石坂、山下、香間、内田などの諸氏も、三枝氏の分れである。『国志』では最初の於曾氏は守国の子供隠曾ノ介守継であるという。ところで甲斐における三枝氏の初見は守国より古く『続日本後記』承和11(844)年の条に承和四年に死亡した山梨郡の人三枝直平麻呂の名がみえるところから、

守国以前に三枝氏がいたことは明瞭で、また三枝氏は守国伝説のいうように他国から移住してきたものでなく、六世紀の初めごろ諸国に設置された名代、三枝部の甲斐における管掌者であり、国造の一族でもあり、在庁官人として権力をもった甲斐の古代氏族であった。こうしてみるとこの於曾の地に最初に入ったのは守国伝説は別にして、古代氏族である三枝氏である。爾来約300年この地域の支配者として勢力を振るった。

勝沼町の大善寺は三枝氏氏寺と呼ばれ、一宮町の橋立明神はその氏神と云われ御坂町、一宮町、勝沼町が三枝氏の本拠地であったが、それに一門の活動の中心は於曾郷にあった。一つに考えられることは鉱山開掘の技術と鍛冶技術の活用と牧の経営とが考えられる。

昭和46年5月下小田原字原之京から、奈良時代末期から平安時代初頭の堅穴住居跡をともなった鍛冶遺構が発見され、貴重な遺構として保存されている。この「原之京鍛冶遺構報告」の中に金山と三枝氏、安田氏との関係についても触れている。

下小田原地帯を見ると鍛冶職ゆかりと思われる地名が多い。

くじ畑、さいかち畑、ぞうじば、風呂西、鍛冶屋沢、鍛冶屋向などはその代表的な地名である。

ぞうじばは、雑使場、作事場、造事場にあてられる、くじ畑は工事間と関連があり人工工師、工事など工み職のことである。さいかち畑は雑鍛冶畑のようである。風呂西の風呂は金精練の一工程で佐渡金山の古い絵巻物「金銀採生伝図」にもみられる。新潟県の味方重国氏が所蔵する佐渡金銀山の習明歩坑内占図によれば幾本かの木桶通しの図が描かれていて、その中に「小風呂敷二本立三拾六艘、水下ニ御峠候」と見える。

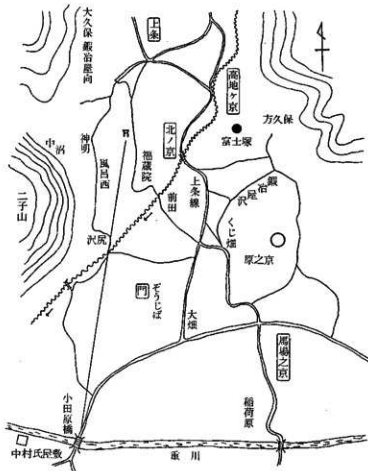
この場合の小風呂敷は、木槽を意味しており、なお小風呂は普通は熱湯を溜めておく風呂に付属する装置であるが、この場合は本桶に付属する槽と考えられ、佐渡では「舟」と云っているようである。

またこの地には金井加里神社が氏神として祭祀されており、由緒によると山王、白山、金矢大神、日本武尊を祀ると見えるが、その中の金欠大神は金山彦命で鉱山、金山関係者の氏神である。

金井加里神社の東南に福蔵院があるこの寺境内は往古にあっては安田義定の館跡と伝えている。寺の東に不動堂（現在福蔵院に合祀）がありその不動明王は鎌倉時代の作で像高241センチナあり県下最大の不動明王立像がある。

この地区の南側、小田原橋を渡って左に折れたところが、「門（かど）」という地名である。これは後述する下於曾の「大木戸」と同じように、そうした施設を警護するための櫓門であったと考えられる。

この地には、黒川川、鈴鹿山など鉱山、金山にまつわる伝説と、三枝氏時代、安田時代、武田時代の内容が混然としている。現在保存されている原之京鍛冶遺構が奈良時代末から平安初頭の遺構であるので三枝氏の鍛冶施設であったと考えても納得できる。



第2図 原之京鍛冶遺構とその周辺

また塩山市下萩原と下栗生野に接する地に平城と呼ばれる遺構がある。伝説によると三枝守国の居城であるという。平城を中心に重川沿岸の塩山市内の三枝一族に結びつく遺構を拾ってみると上萩原、中萩原、下萩原にその伝えが散在しており、とくに下萩原の柏原塚、柏原天皇、柏原大明神などがあり、関係の史跡としては前述した平城、御殿、そして於曾屋敷を中心に於曾の地が考えられる。とくに三枝勢力の北限が上萩原、下小田原一帯であったとみられる。平城への用水は、小田原地区の伝説によると小田原橋の上より重川の水を引いたもので柏原塚といって現在でも灌溉用水として用いている。

三枝一族は一宮、勝沼などの伝説からみるに、出身は丹波であり、丹波地方に伝わる金や鉄に対して精錬技術を身につけた人達がこの地域の黒川金山、鈴牟山等に目を向けこの一帯に定住していったものと考えられる。従って大同年間黒川金山開掘の伝説も全くの誤りとは考えられない。交通についても『甲斐地名辞書』には山梨市の小原が東山梨郡の中心にあたり、大菩薩往来の一駅なりとあり小原駅から三里の地点が小田原であり、これから大菩薩を越え、丹波山に至る重要な地点にあたる。とくに黒川金山の盛んなるときには、黒川から神部神社、大滝不動を経て平城に至る即ち上萩原、中萩原、下萩原を結ぶ黒川街道は、金山道とも云って専用道路として発達したが黒川金山廃坑になるや衰えた。また黒川から小田原に入る道には黒川から柳沢峠、高芝山、平沢を経て下小田原の上条に入るコースと、高芝山から下小田原に入るコースとがある。

4. 安田義定と金山

東郡を三百年余り支配してきた三枝一族も平安末期に滅亡した。その主たる原因は長寛元年(1163)八代庄で起きた長寛勅文事件である。甲斐守藤原重忠、目代中原清弘、それに在庁官人であった三枝守政が絞刑に処せられたため三枝の宗家は断絶し三枝一族に大きな影響を与えた。従って三枝氏の伝統技術として継承してきた金山、鍛冶に対して大きな変化が生じたことは当然のことであった。

この旧豪族三枝氏にかわって登場したのが新興勢力である甲斐源氏安田義定一門である。

安田義定は義清の子(清光の四男ともいう)として長承三年(1134)に若神子に生まれ、峡東地方に入り牧庄、加納庄、大八幡庄を中心に峡東一帯に勢力を広げていった。義定はとくに三枝氏が没落していった長寛元年から平家追討に出陣する治承四年(1180)まで17年間のあいだに旧勢力である三枝氏を押しえ峡東一帯、とくに於曾郷に勢力を伸ばしていった。

安田義定の館は山梨市小原西、保田山妙首寺、安田山西願寺の境内にあったとされる。土塁や堀などの遺構はわずかに見られ規模や形態は不明である。また牧丘町西保小田野山に小田野城を構えた、標高883メートルの小田野山頂にあり、山頂部分が主郭で、東に続く尾根には二の郭と三の郭、南にのびる尾根には四の郭がある。帯状の郭を尾根全体に用いている。城の付近には西御所、亥申屋敷、新次屋敷、大木戸、市路、金屋敷、大門前、射場御幸などの地名を残している。また氏神には山梨市の大井伊屋八幡神社、西保方面に多い宗覚明神、寺院には塩山市法光寺(現在の放光寺)、山梨市雲光寺、牧丘町普門寺など関係寺院がある。

安田氏がこの地に入って来た目的が二つある。一つは牧である。恐らく奈良時代以降全国に知られた駒の生産地として継承されてきた牧庄の経営と三枝氏が有していた金山と鍛冶職の支配権であったと思う。

それは小田原、萩原、一・二瀬高橋一帯に安田義定伝説が多いことでもうなづける。

一つには義定が高橋地区にあった法光山高橋寺を元暦元年(1184)に現在の藤木地区に移したと伝えていることも、義定が山岳宗教を平地に移すだけの信仰的なものだけでなくむしろ三枝氏がもっていた鉱山、金山また鍛冶業を掌握するためのものであった。

この黒川金山の伝説は前述したように大同三年であるが、資料として記載されているのは文永六年(1269)の日蓮年譜にみえるのが初見である。『国志』から黒川金山の項をみると、

昔黒川ト云フ山ヨリ黄金多ク出ツ黒川下軒トテ人居盛ナリシ由云ヒ伝フ日蓮年譜ニ文永六年黒川ニ遊化スト

アレドモ其領民戸ノ在リシヤラン覚味ナシ今秋原、於曾、赤尾等ニ所藏スル天正中ノ文書ニハ金山ノ事聞々見エタリとあり、日蓮上人が遊化したというのは伝説としても、その時代に黒川金山が知られたとすれば、それより85年前にこの地方を治めていた安田氏はもちろんのことそれ以前の支配者三枝氏についても金山の採掘については断言できないまでも、砂金採集は十分考えられる。

鍛冶遺構が保存されている下小田原の福藏院は前述のとおり安田義定の館跡であると伝えており、近くの下子山には土塁の跡があり、当時のろし台跡ではないかと伝えている。下小田原の横道武郎氏所蔵の文書中に「三京都五名所扣」と云う近世になってからの文書がある。これには寛治元年(1087)、国司義光公より給わった地名とある。文書の真偽は別にして原ノ京、北ノ京、高地京、上条などの地名からしても伝説としてかたづけるわけにはいかない。

源平合戦に奥州平泉の藤原氏が源義経に砂金を軍用金として送っていることが伝えられている。この地であっても義定が源氏の挙兵以来、遠江を攻略し、遠江川の守護、国守を兼ねた権力者に、また禁裏の守護を務め、公家社会に出入をし、更に京都祇園の八坂神社、伏見稻荷社の復興を進めていくには莫大な軍用金が必要であった。それを任国での調達だけではとうてい賄うことはできなかった。考えるに自国の領国内の黒川金山をとりまく周辺からの砂金であったろうと推察される。

このことは建久五年義定が頼朝のために滅亡したあと、加賀美遠光の三男光経、四男光俊がこの地に入り、於曾屋敷を構えてこの地方を治めたことをみてもうなずける内容である。

5 於曾屋敷

塩山市下於曾字元旗板に「於曾屋敷」がある。昭和38年9月9日付で県指定史跡に指定されている。

於曾屋敷をとり巻く地域の小字である「ハタイタ」は邸の外郭や周囲をかこんだ膳板のことで於曾屋敷調査報告書によると、中世豪族屋敷の周囲および土塁の上などに設置する板の遮蔽施設のことである。一方上於曾にも「ハタイタ」という小字がある。文化年間の村絵図によると、現在の塩山駅付近からやや西にかけての地域である。

於曾の地に安田氏滅亡後入映したのは、甲斐源氏加賀美遠光の四男光経と五男光俊である。「国志」から光経の項をみると、

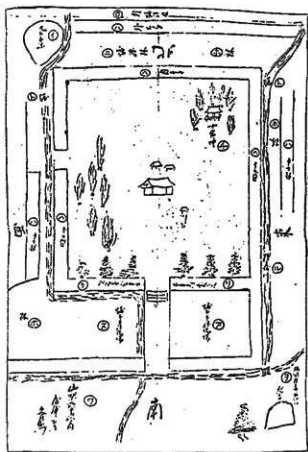
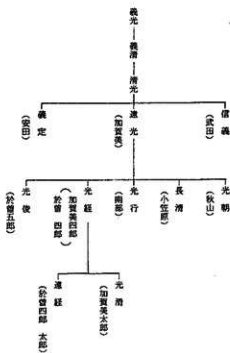
加賀美四郎光経、遠光ノ四男ナリ諸系図ニ於曾四郎ニ作ル(一ニ経光ヲ信経ニモ作ル誤写アルベシ或ハ於曾五郎光俊・加賀美二郎光清ナル者ヲ載スル系アリ未考其人)山梨郡於曾村コレモ加賀美氏伝領ノ地ニテ氏族ニ呼ト見エタリ府中一進寺ノ寺領日記ニ文和二年八月廿三日於曾郷ノ内四段ハ下モ方加賀美彦九郎信泰ノ子女阿寄進ト是レナリ又秋山ノ旧址ノ土中ヨリ所獲ル銅器ノ銘ニ建久八年十月十一日源朝臣光経云々ト講メルアリ加賀美村法善寺ノ日記に源遠経(大系図ニ於曾四郎也)十四歳ニシテ父光経逝ス(建仁元辛酉)為善提修造当寺(中略)安貞二戊子年十一月廿七日遠経除髮法名ハ阿念年四十一文暦元年八月廿八日源神尼六十六死去(阿念母)トアリ遠経ノ母ナラベシ牌子ニ観音院殿阿念法橋大居士辛酉二月十四日(弘長元年ニ当ル時ニ七十四歳観音院ハ法善寺塔頭ノ院也)秋山ノ光昌寺ニテハ遠光寺殿法教阿念ト云フ錯乱セント見エタリ右ニ因リテ按ルニ光経父子ハ秋山、加賀美ノ辺ニ居シ於曾ヲ兼領セシナルベシ。

加賀美光経、光俊の父遠光は甲斐源氏中最も栄達した一人である。武田系図では一般に清光の三男で、安田義定の兄に当たると云われているが、出生からして安田義定の弟に当たるといのが正しい。元暦元年に平家追討の功績によって信濃守に任ぜられ、平家追討の源氏の大将受領六人に数えられた人である。また侍所の別当和田義盛の娘を後妻に迎えた。遠光の長男の秋山光朝は平氏の全盛時代に平重盛の娘婿として一時厚遇されたが、頼朝からのちに排斥されて不遇のうちに死んだ。次男の小笠原長清は頼朝のすすめで幕府の重臣上総介平広常の娘を娶り、頼朝が甲斐源氏の中で石和五郎信光とこの小笠原長清を最も信頼しており、のちに信濃守に任じ

ている。また、遠光の娘も頼朝のはからいで、宮中に入り大式局となるほど、秋山光朝を除いて遠光父子は頼朝から格別の厚遇を受け、信頼があった。こうした内容から加賀美一族をみるときに、四男光経が加賀美の地を相続する一方、光経は五男の光俊と共に於曾郷を兼領したことが伝えられている。加賀美一族の相続人となった光経は、建久八年に兄の光朝の13回忌の供養のため如法経供養を行っている。経筒の銘に「信心大施主源朝臣、光経、藤芳縁源氏、所生愛子等、現在悲母、禪定比丘尼 建久八年十月十一日」とある。

この埋経の銘からみると、光経は加賀美一族の代表者である。この中巨摩一帯を領すべき光経が東部の於曾郷を兼領する目的は資料の上ではまったく皆無であるが、一点考えられることは、この於曾郷に対し300年近くもこの地を支配してきた三枝氏、また巨摩郡からこの地を選んで進出した安田義定にしても、生涯最も重視した地域である。それは金山、鍛冶技術者の掌揮、また牧の経営などが考えられるが、どれをとってもその時代の地方豪族にあっては感心が高い内容であった。安田義定滅亡後、加賀美遠光親子は頼朝に懇請して受け継いだものと考えられる。その様子を『国志』からみると於曾には於曾三郎館と、於曾四郎屋敷が存在したことを記している。

於曾三郎の館は、上於曾に属し、五男の光俊より子孫代々の居館であり、一蓮寺領記に於曾郷の内七段屋敷一宇三段は上方惣領分、四段屋敷一宇は下方加賀美彦九郎信泰の女子香阿寄進、文安二年八月廿三日とある。数代にわたって居館としていたが、左京亮信安に至って、偶々板垣家の断絶に際し信支の命により板垣家を継ぎ、板垣を称した。この居館はのち慶長の頃廃止となった。於曾四郎屋敷は、今日残されている下於曾旗板にある。いわゆる「於曾屋敷」である。一方、上於曾にあった「ハタイタ」という小字名、文化年間の村絵図によると現在の塩山駅付近からやや西にかけての地域である。これまで屋敷跡が定かでないといわれる於曾三郎の屋敷をこの辺に比定し、下於曾の「ハタイタ」と同じ意味から生じた地名と推定し得るのではなからうか。ちなみに、正徳検地帳にみる上於曾と下於曾の「ハタイタ」が、ほぼ同等の面積であることから納得できる。(塩山市於曾屋敷報告書)



- ① 山廻下於曾村
- ② 本館
- ③ 本館
- ④ 本館
- ⑤ 本館
- ⑥ 本館
- ⑦ 本館
- ⑧ 本館
- ⑨ 本館
- ⑩ 本館
- ⑪ 本館

於曾屋敷は昭和38年9月9日山梨県指定の史跡である。四囲に土手を二重にめぐらし、東西115.2メートル（64間）、南北153メートル（85間）山梨県内の中世豪族屋敷としては唯一の完備したものである。土塁基底幅は10.6メートル、高さ3メートル、頂点の幅2.7メートルの豪壮な土塁を囲繞している。昭和60年9月に於曾屋敷の南側旧塩山警察署の官舎改築に伴ない試掘調査をおこなったところ、従来より二重の堀と土塁によって囲まれていたと伝えていたが、今回の調査によって外側土塁が確認された。また現在の南門より12メートル東に土橋が発見されたことから、それが当初の入口と考えられ、この史跡の性格を理解するうえで、きわめて重要な発見であった。

6 於曾と武田氏

武田氏が塩山地域に直接かかわりをもつようになったのは武田の始祖信義より数えて八代あとの信成、九代の信春親子の代である。信成は足利尊氏の忠臣であった武田信武の嫡男であり信春は信成の子である。この時代は南北朝争乱期にあって甲斐国も政情は大変に不安定な時代であって信武・信成・信春の三代は武田の惣領、甲斐守護として国を守った。信成は向嶽寺の開基である。向嶽寺開山杖院禪師の語録に「当国主武田刑部法光塩山を寄進す」とある。法光は信成の法名で、継統院雪窓光公大禪定門と号し、継統院はもと千野集落にあったが廃退して恵林寺の塔頭に移された。のちに信玄は快川国師を招き恵林寺のほかには武田信綱の牌寺長興院、信成の牌寺兼統院も持たせさせた。

信成の長男信春は甲斐の守護で室町幕府の七頭として弓馬の儀式をつかさどったと伝える。また修理亮、陸奥守、伊豆守などといった文書が見える。文和四年（1355）吉野朝側の軍が勝沼付近に乱入したとき、信春は柏尾山に迎え討って合戦した。千野の柳沢山慈徳院の由緒によれば、当寺は陸奥守信春の開基で、寺域は信春の城跡である。はじめ信春は千野館に居って構えていたが、応永20年2月逸見氏との争いに城が陥り、信春は難を逃れて柳沢に館を築いて入ったが、同年逝去した信春の遺言によってもとの館跡に寺を建立して慈徳庵としたのである。信春の子信満は女婿の上杉彬秀の乱に加担して敗死したため武田氏は一転してどん底に落ちてしまった。そのため国中は武田氏と日ごろ争ってきた逸見有直が好機到来とばかり勢力を伸し、信満の子信重は甲斐を逃がれて高野山など諸国を流浪して永享10年（1438）に21年ぶりに甲斐に帰った。文安年間になると武田信成の男信春の庶子吉田三郎成春の嫡子に武田宮内太輔信益が千野に住んでおり、文安2年6月には向嶽寺へ寺領拾貳貫文を寄進し、更に文安2年12月2日には信成（継統院）の菩提のため二貫文寄進している。また文安5年には向嶽寺に宇津屋満吉が治铸した梵鐘を寄進している。『東山梨郡史蹟』によると信益は於曾氏の系統を受けたものと解釈している。

武田信重は宝徳3年（1451）黒坂太郎を討とうとして穴山伊豆守に背後を襲われ石和の館を焼かれ自害した。父信満と同じように悲劇的な死を遂げた人であった。しかし子供運に恵まれた。中でも四男基経は八代の奴刀氏を継いだ人であるが、赤尾の涌泉寺について『国志』を見ると、武田伊予守の石浮図があると記されていることから、基経がかつて、この地に居を構えたところと思われる。現在でも涌泉寺境内には当時の土塁の遺構が残されている。

7 於曾氏と板垣氏

於曾郷の於曾氏について調べてみても、その資料がきわめてとぼしく動静を知ることはできない。『於曾屋敷報告書』でも、史料、文献から断片的なものを紹介している。

尊卑分脈、寛政重修諸家譜では「隠曾」、勝山記では「尾曾」、信陽雑志、甲陽軍鑑では「小曾」と明記している。於曾氏と記しているのは甲斐国志、一蓮寺過去帳、王代記、高白斎記、大塔物語の中で記している。

貞治3年（1364）2月15日の一蓮寺々々目録に「於曾郷内七段屋敷一宇三段上方惣領分四段屋敷一宇下方加

賀美彦九郎信泰女子番阿奇進、文和二(1353)年八月廿三日」とあることから、加賀美を名乗り、於曾の地を治めていた証左である。その後にあつては、『一蓮寺過去帳』永享6年(1434)と康正年間(1455～56)及び文明年間(1469～86)に於曾氏の名が見られる。このことは於曾氏が何らかの形でこの地に一門が存在したことを意味する。

文安2年(1445)11月15日『甲州塩山向嶽庵領所々目録』に「山梨郡於曾郷年貢錢五貫文當庵門前有之故板垣松溪法真禪定門奇進」とあり、また「山梨郡萩原郷の内小山年貢錢二貫文板垣殿御奇進」とあることから、於曾郷から萩原郷(黒川金山一帯)にかけて文安年間にはすでに板垣氏によって於曾郷から萩原郷にかけて支配態勢ができていたことを意味するものである。

時代は下り武田信虎、信玄時代についてみると板垣左兵衛佐をはじめ信方、信憲、信安が関係してくる。

大永5年(1525)2月25日に板垣左兵衛佐が塩山向嶽庵へ湯薬種田心反寄進している。左兵衛佐は板垣信方の父ではないかという説もあるが詳細は明かでない。天文9年、天文16年に板垣信方が向嶽寺に対して文書発給している、とくに後者は次に列記するように向嶽寺に対しての寺額寄進のものである。

「於曾郷之内手作分、老貫式百文所、永代新令寄進者也、恐々敬白

天文拾六年丁未七月吉日

板垣駿河守信方(花押)

向嶽寺方丈

御者 御中

とみえる。信方は信虎、信玄の二代に仕え、武田の重鎮として活躍した譜代の名臣であった。国志に「武田家ニ職ト云フハ治國ノ主史ナリ、此ノ時代ハ板垣、甘利ヲ兩職トス」とあり、信方は武田家の政治機構の最高官職である「職」に任じられた。『東山梨郡史蹟』黒川金山の項に、「信玄公時代には板垣駿河守信方支配下にありて最も栄え黒川千軒と言はれしはこの頃と思はれる。常に兵三千を備へ黒川の援助と北方への警備に当らしむと言われる」とある。信方は天文17年上田原の合戦で戦死した。信方の後継者は『国志』によると「信方死シ其ノ男弥次郎代リテ諏訪ノ郡代トナリテ云々」とあり、更に二ノ宮美和神社に天文20年に発給された板垣信憲・甘利昌忠の花押のある両職の許状が伝わっている。また向嶽寺には弘治2年9月の信憲からの文書が伝わっている。内容は千野村慈徳院の叢林の中にある矢筈竹を召し出す内容のものである。

信憲は『国志』によると信方が死亡したあと諏訪の郡代になるが、天文21年に失脚して家名断絶となった。そのため於曾氏を名乗っていた信安が永禄年間に武田家の同族板垣家の名跡を継いで於曾、板垣を兼領したとある。永禄10年(1567)の下ノ郷起請文では板垣左京亮信安と署名している。

信安の社領寄進状にある於曾の菅田ノ社、現在の菅田神社に納められた文書に信安発給文書が四通ある。『東山梨郡史蹟』に記載されているものを次に記述する。

勝寿為祈念之於曾之内合老貫文之所御神前江新ニ奉納候恐々謹言

永禄七年甲子五月吉日

信安花押

菅田御宝前

於于板垣之郷之内菅田宮江五拾疋之所永代致奉納候、弥々武運長久上意安全之祈念不可有油断候者也

恐々謹言

元龜三年壬申三月九日

信安花押

菅田之神主殿

於駿州號在域領被下置候知行之内五拾疋之所令寄附候、弥々武運長久君臣和合子孫繁昌之祈念不可有油断候者也仍如件

元龜三年壬申之月晦日
菅田之神宜

信安花押

定灯定香免並七八月兩月之祭礼田合六貫五百文之所同諸役共江自今以後者、當宮へ令寄附候者也、仍而如件
壬申七月吉日
菅田神主殿

信安は勝寿祈念のため、於曾の内にて宅貫文、武運長久祈念のため板垣の郡内にて五拾疋、其の他祭礼田六貫文を菅田神社に寄進している。また小屋敷の松尾神社にも「国志」をみると、

元龜三年壬申七月於曾左京亮信安定番免並二七、八兩月之祭礼田合六貫五百文之所諸役共ニ寄附ノ証状其他古物古器等アリとあり社領を寄進している。

以上のように於曾郡の於曾氏、板垣氏について資料を散見することができる。この資料を分析してみると、『一連寺々領目録』からみると下於曾の於曾屋敷に文安年間加賀美彦九郎信泰が居を構え、その一門が数代に渡って居宅としていたが、左京亮信安に至って、偶々板垣家の断絶に際し武田信玄の命により板垣家を継ぎ、板垣を称した。それでは板垣氏は上於曾の於曾屋敷に居を構えていたかと云うと、それを実証する資料はなく、むしろ、下於曾の於曾屋敷に「板垣権兵衛の腹切石」の伝承があり、また『国志』古跡部には板垣兵部墓が下於曾の村長治兵衛の小物成林の中にあることが記されていることからみると、板垣氏の居跡を下於曾の於曾屋敷に想定することも可能であるが、実証するだけの資料がない。

8 於曾の金山衆

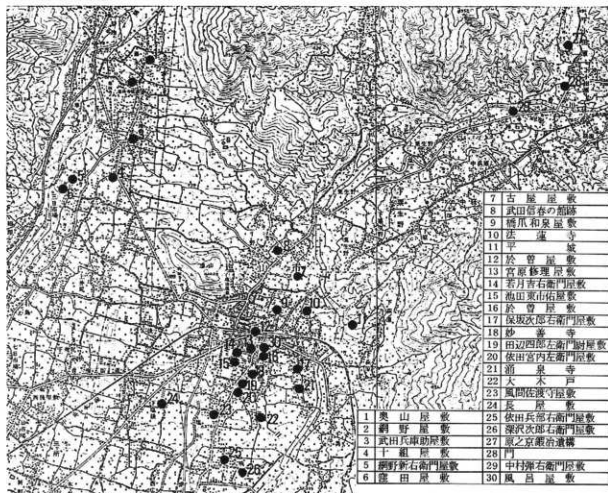
於曾地内には於曾屋敷を中心に中世豪族屋敷が多い。享保9年(1724)の同村明細帳によると於曾三郎、宮原修理、橋爪和泉の屋敷跡であったが、慶長検地の際すでに畑として記載されたと記録されている。これらの三屋敷について現在の位置をみると、

於曾三郎の屋敷は文化年間の村絵図によると現在の塩山駅付近からやや西にかけての地域であるので上於曾地内である。正徳検地帳によると上於曾と下於曾の「ハタイタ」がほぼ同等の面積をなしていたことを付記する。

宮原修理の屋敷は現在の恩賜林会館を中心にした一角で古老に聞くと昔は土手があったと語ってくれる。橋爪和泉屋敷は上於曾の塩山商業高校の東側にあった。

次に金山衆の屋敷は於曾屋敷を中心に多くみられ、『国志』が上萩原、於曾、熊野地方に屋敷を構えたことがみえる。また金山衆には田辺佐苗家所蔵文書からみられる中村、依田、大野、風間、古屋等の家があげられるが、実際にはもっと多くの金山衆の家があった。例えば保坂、池田、若月、深沢、宮原、橋爪等の家も関係していたと考えられる。今回はその中で調査された家につき次に記載した。上萩原の中村弾右衛門屋敷、下於曾の田辺四郎左衛門尉屋敷、依田宮内左衛門尉屋敷、風間佐渡守屋敷、池田東市佑屋敷、若月吉右衛門屋敷、熊野の依田兵部左衛門屋敷、深沢次郎右衛門屋敷、赤尾の保坂次郎右衛門屋敷が調査対象となった。この金山衆以外にも、金山衆の屋敷はあると思う。発給されている文書を見ても各々共通点があり、屋敷の構造については、一・二の屋敷を除いて於曾屋敷周辺に集中していることである。また屋敷の規模も類似点が多い。なお屋敷名は田辺佐苗家に伝わる天文11年の徳川家印判状、また『国志』土庶部に記載されている名前をとって屋敷名とした。

(1) 風間佐渡守屋敷



第3図 屋敷分布図

黒川金山衆の關係文書の中で現存または伝承されているものの中で最も古い文書は天文13年の「金山之佐渡守」の文書である。

『甲斐武田氏文書集』(1)(高島録雄編)『新編甲州古文書』第1巻(榮辻俊六編)に転載されている『諸州古文書』甲州(5)の中に塩山市藤木放光寺旧蔵の金山之佐渡守に宛てた武田晴信印判状である。

武田晴信印判状

(竜印)



合参十貫文預置者也可為(以下欠)

天文十三甲辰六月吉日

金山之佐渡守

この武田晴信印判状について『諸州古文書』では持主が放光寺になっているが、現在は当寺には伝わっておらず、佐渡守の内容が不明であったが近年放光寺文書の中に1通の關係文書が発見された。甲斐路51号に掲載されているが、その内容を記すと、

差出申一札之事

一貴寺檀家山梨郡下於曾風間佐渡守跡式暫致退職罷在候処此度同村長百姓七兵衛半三郎再相統仕貴寺檀家ニ相成候付先年佐渡守ヨリ納置候、武田信玄公御朱印四通私方江御預被下置候様御願申上候処願之通被仰付被下候従前奉存候然上者 御朱印大切ニ守護可仕候者又貴寺御入用之節者何時成共致持参可申候

為後日一札仍如件

文政六年四月 日

風間半三郎◎

法光寺様

右者風間佐渡守殿跡式半三郎相続仕候ニ付前書通 御朱印御本書御預ケ被下置候処相違無御座候依之名
主票印仕差出中候以上

下於曾邨 名主平右衛門◎

この文書によれば風間佐渡守の家督を継承するものがなかったが、田辺七兵衛（現在は田辺国男氏）の半三郎が継ぐことになった。そこで以前佐渡守が放光寺に預けておいた、武田晴信印判状4通を返却してほしいことが記されている。ここに初めて、風間佐渡守の名前を知ることができた。下於曾邨風間佐渡守の家は現在の塩山市下於曾風間敬夫氏宅である。風間家の風間佐渡守の位牌に「天正丑年二月初五日没」とあり法名は「覚良院寛山祐泉居士」と記されている。この風間家の一隅に昔放光寺の末寺祐泉寺があった。明治初年に廃寺になっているが、文化4年(1807)の放光寺末寺帳をみると、

- 当寺御代官裳笠之助殿支配所山梨郡下於曾村之内、
- 一新義真言宗千松山祐泉寺境内除地七拾坪
 - 一本堂四間半八間南向本尊虚空藏安置木仏座像
 - 一鎮守子神天満宮 同村之内兼帯所
 - 一稲荷大明神 社地 式敵拾歩除地
 - 一開基 風間佐渡守 法名祐泉居士
 - 一御朱印(天文年中武田家より風間佐渡守宛名)四通
 - 一開山天正年中 俊榮法師と申伝候
 - 一本寺同郡藤木村放光寺
 - 一当鑑守白随迄拾巻代
- 右之道御座候 以上

この放光寺末寺帳祐泉寺由緒書をみると、風間佐渡守は祐泉寺を天正年間に開基しているが、風間家の位牌をみると風間佐渡守が天正5年に没しているので寺の開創はそれ以前ということになる。またそのときの開山が俊榮法師と伝えているが、この開山俊榮については伝承がないが祐泉寺の本寺放光寺由緒をみると、放光寺世代の中興第七世に珍榮法師という仕職がいた。この珍榮法師について放光寺の世代略歴をみると、「当国七里村風間氏、慶長四年三月六日寂、在任中天正十年信長の兵火を受けまた慶長年中火災を罹り堂宇悉皆焼失、その直後に護摩堂、薬師堂、仁王門を再興す。世寿九十五歳」と記載されている。この珍榮法師は風間家の出身者であり、慶長4年に95歳で没していることから永正元年ごろの生れで、佐渡守とは兄弟か叔父甥の関係と考えられ、また祐泉寺開山俊榮とも法名からみて師弟の関係にあったと考えられる。こうしたことから放光寺と風間佐渡守の関係が生じたと考えられる。

以上のことから風間佐渡守宛の天文年中武田家よりの朱印状4通は放光寺住職珍榮が佐渡守から直接放光寺が預かったとみてよい。

それを文政6年4月返却したのである。『諸州古文書』に入っている「金山之佐渡守」文書はその中の1通で、金山之佐渡守が風間佐渡守であり金山衆の一人であることが証明された。

この佐渡守の実名は不明であり、その後継者も不詳であるが風間家の位牌に「真性道運居士」俗名風間清五郎、慶長6丑9月17日没とあるので佐渡守の後継者と考えられ金山衆であったと推測できる。ところでこの清五郎と同時代の黒川金山の金山衆をみると田辺佐苗家文書にみえる天正11年の徳川家印判状の中に風間庄左衛門の名が見えるが、風間清五郎とのつながりは不詳である。田辺家も田辺清九郎と田辺四郎左衛門尉

の2家があったので、同族が数家あったとも考えられる。その証左とも言える資料に近年長野県南佐久郡川上村梓山の風間春雄氏所蔵の数通の黒川金山文書がある。

武田家印判状

於金山黄金無出来之条、一日馬宅正分諸役御免除之旨所任仰出也仍如件

天正五丁丑年(亀朱印)

桜井右近助 奉之
以清斎

○

武田家印判状②

以先御印判於金山黄金無出来間一月二馬宅正分往還之諸役御免許之上者向後亦不可有候相違旨被仰出候者也仍如件

天正八庚辰年

武藤三河守
小山田備中守

風間一角

徳川家印判状③

除田地役其外公事以下武棟別外懸銭新在家棟別銭老人ニ老免宛 印判衆役新宛四壁之竹木監普取等事
但先證令免許畢但如前々黄金ニテ掘出者此朱印可令返進者也仍如件

天正十一年

成瀬右衛門 奉之
日下部兵右衛門尉

田辺吉之丞

以上の3点が川上村風間家に伝わる文書である。信玄時代全盛をきわめた黒川金山も勝頼の時代になると金山の採掘が減少し、産金量が少なくなった。そのため金山衆も他の金山に移された。ここにみられる風間・田辺の金山衆も於曾郷から川上村梓山に移動したのである。風間・田辺の金山衆は天正11年以降、徳川の時代になってから川上村に移住している。またここに見られる田辺吉之丞、風間一角も塩山市下於曾周辺の文書からは見られなかった人達であり、かつては於曾周辺に居宅を構えていた金山衆であったと考えられる。

風間家の屋敷図は文政6年頃に描かれたものが現存されている。東西37間、南北40間で土手を囲繞しており、屋敷内を水路を通していている。屋敷の南側の一角に千松山祐泉寺があり境内70坪は除地になっていたが、明治初年に廃寺となり当初の豪族屋敷としての様相はないが、屋敷の図面からみると、わずかながら痕跡を知ることができる。

② 田辺四郎左衛門屋敷と蔵前衆

塩山市下於曾竹林際^ノ田辺佐苗氏屋敷は、安永4年(1775)の屋敷図をみると東西55間、南北60間の屋敷で周囲を土手で囲繞し、南面には二重の土手になっており南側に木戸口がある。屋敷内を水路を通し、2カ所池がある。屋敷の北東の角に屋敷神を祀っている。現状土手はよく保存されており、とくに南半分は長く残されている。屋敷全体からみると、戦国期の金山衆であり、豪族の屋敷の様子をうかがうことができる。『国志』の田辺家の記事をみると、

浪人田辺佐左衛門ノ家譜ニ云フ本國紀州熊野、永祿中本州ニ来レリ元亀二末年二月廿三日桑々免許ノ印書ニ於^テ今度深沢城^ニ而致^シ奉^ル公云々又天正二戌年十二月廿三日龜目朱印賜フ其子佐左衛門壬午後幕府ニ謁ス同年十一月十三日四奉行ノ書ニ小曾ノ内合拾貫五拾文新恩而田辺佐左衛門方^ニ被^テ下置云々百姓中トアリ翌十一年六月二日御朱印ヲ賜フ同年卯月廿一日阿職奉^ル之御朱印ニ章ニ黒川金山衆トアリ一章ニハ中村彈右衛門、依

田平左衛門、大野將監、風間庄左衛門、田辺清九郎、古屋次右衛門、田辺四郎左衛門、依田宮内左衛門棟別等条々免許ノ趣ヲ載ス今モ黒川山ハ此ノ辺十村ニテ進退セリ佐左衛門死シ子豊前幼シ於是本村ニ浪人ス其ノ子市郎左衛門伊丹氏ノ時假リニ税吏トナレリ今相承シテ屋布四段一畝廿八歩餘地也とある。

この田辺庄右衛門の先祖は田辺家由緒によると本国は紀州熊野より永禄年間に、熊野別当落増の後裔田辺四郎左衛門直基とその子四郎兵衛忠直と共に当国に来て武田信玄に仕える。忠直の子を佐左衛門忠村と云う。田辺家由緒から佐左衛門と黒川金山についてみると、

大権現様当国御料ニ相成甲州黒川金山金堀被仰付候節佐左衛門其外伴共ニ金山惣堀之御用被仰付諸之人馬通行諸役御免許御朱印両通頂戴仕候云々
佐左衛門のあと田辺豊前、田辺染之介、庄右衛門となる。

田辺家が金山衆として資料の上で取り上げているのは元亀2年に発給された武田家印判状である。

武田家印判状

定

一御分国諸商一月ニ馬老疋之分役等御免許之事

一木棟別屯間之分、御赦免之事

一向後拘来候田地、如軍役衆可被停檢之事

一郷次之人足普請、被禁之事

以上

於今度深沢城、別而致奉公候間、加御褒美者也、仍如件

元亀二辛未

山縣三郎兵衛尉奉之

二月十三日（御朱印）

田辺四郎左衛門尉

また田辺家が天正11年に発給された徳川家印判状の内容からして田辺家のほかに中村、依田、大野、風間、古屋家等も金山衆として名を連らねている。その文書は次の通りである。

徳川家印判状（写）

除田地役其外公事以下、木棟別之外懸銭新屋棟別銭屯人ニ屯百宛、并印判衆役新宛、四壁之竹木刃剪採等之事

右如先證令免許畢、但如前々黄金令増長者此朱印可令返進者也、仍如件

天正十一年

日下部兵右衛門（定吉）

奉之

卯月廿一日

成瀬吉右衛門尉

中村弾左衛門

依田平左衛門

大野將監

風間庄左衛門尉

田辺清九郎

古屋次郎右衛門尉

田辺四郎左衛門尉

依田宮内左衛門尉

徳川家印判状(写)

於金山黄金出来候間、一月ニ馬屯疋分諸役令免許之旨、所任先許不可有相違之状如件

天正十一年

成瀬吉右衛門尉 奉之

卯月廿一日

日下部兵右衛門尉

黒川金山衆

黒川金山衆に対して金山から産出する黄金の代償として一月当り馬一疋分の諸役が免除されている。この2通の文書は共に武田氏滅亡後の徳川氏から発給されたものである。

武田時代の田辺家について資料をみると金山衆であると同時に蔵前衆でもあった。蔵前衆は蔵奉行とも云い武田家臣団構成の一つの代官衆である。武田直隸家臣団には武田親族衆、信玄近習衆、信玄直參衆、小人頭、同子供衆、寄合衆、蔵前衆、或拾人衆より組織されている。このうち蔵前衆については「浜松御在城記」にみえる御蔵前衆、恵林寺に所蔵文書にみえる蔵奉行衆、また『国志』にも武田の蔵奉行として多少の違いはあるが代官であった人達の名がみえる。『国志』にみえる「蔵前衆」について記すと、

即チ御代官衆ナリ、天正壬午ノ起請文に所載ハ武田ノ蔵奉行衆雨宮次郎右衛門、小宮山民部、同源之丞、大野主水、中川雅楽、山下内記介、諸屋勘十郎、鷹野喜兵衛、石原新左衛門、丸山簡十郎、窪田源五郎、原田織部、平岡岡右衛門アリ、古屋・八田村ハ万力筋ニ在リ大野主水ハ火主ト記セリ栗原筋ニ在リ小民・平岡右・雨次・石新・秋甚・岩七郎右・田庄・栄富斎・板喜ノ輩三名四名ヲ列シ或ハ四奉行ノ闕ニ備ヘタル文書モアリ、亦三名ニシテ六十兵ニ連署シ一字提頭ナシタルハ天正中ノ記ナリ(以下略)

この中で田庄は田辺庄右衛門、板喜は板見(伊丹)喜之介のことである。村上直氏はこれらの蔵前衆(蔵奉行)は壬午起請文による限り武田滅亡後の天正10年8月現在の構成を示すものである。田辺家に現存されている「大久保長安覚書」をみると、慶長10年(1605)正月7日及3月22日長安は自己の直系の代官である田辺庄右衛門・大野主水・岩波七郎右衛門に次の書状を与えている。

覚

一駿州より申来候、上様今七日に駿府被成御立候由、追々申来候条、我等も今七日ニ此地を出候而甲州參候事

一其元より參候もの共へも其方可被申聞候事

一江戸町中火事參之由ニ候、其元も火の用已下かたく、被申付置候事

巳 正月七日

石見(花押)

田辺庄右衛門 殿

大野 主水 殿

岩波七郎右衛門殿

田辺庄右衛門、大野主水、岩波七郎右衛門の直接の大代官であったのが大久保石見守長安である。大久保長安は天文14年(1545)猿楽師大藏大夫の次男として生れ、幼名藤十郎ついで十兵衛とあらためる。武田信玄に仕え、重臣土屋右衛門尉直村より土屋姓をさすけられ、蔵前衆として活躍するが、天正10年武田氏滅亡後、徳川家康につかえ、家康の譜代重臣大久保忠隣の下護をうけて大久保姓を名乗り大久保十兵衛長安と称する。天正18年(1590)、家康関東入国とともに八王子に陣屋をかまえ、代官となる。家康の甲斐国再領後、甲斐奉行となり、石見銀山・佐渡奉行を兼任する。長安の館は駿府・八王子・江戸にもあったが、甲府には上一条町にあり、役所は代官町、佐渡町にあったと伝える。

田辺庄右衛門が武田時代蔵前衆であったように大久保長安も蔵前衆であった。これは、村上直氏が『甲斐史学』第22号「武田蔵前衆について」の中で指摘している。家康は武田氏滅亡後、甲斐経略の促進において武田旧制を踏襲し、現地の情勢に即応した支配形態を原則としたのであるが、そのため、蔵入地の拡充のた

め4奉行と共に武田藏前衆を引きつぎ在地支配に任用したのである。天正16年において、藏前衆の連署による年貢割付状が残っている。

面付五拾分一積二三百六文、為地頭役早々可有進納候、来月廿すきハ切せんあるべき者也

子

十月十六日

大十兵〇

小 民〇

雨 次〇

板 喜〇

保科宮右衛門尉殿

右分二親子納相済者也

戊子十一月廿八日〇

面付夫丸迄正老入分、ひた銭老貫文可有進納、過来月11日者切銭候、仕切地頭役立夫百姓役候者也

子

十月十七日

大 十兵〇

小 民〇

大 主〇

板 喜〇

保科宮右衛門尉殿

以上のように大十兵(大久保十兵衛)・大主(大野主水)・小民(小宮民部)・雨次(雨宮次郎右衛門)・板喜(板見(伊丹)喜之介)らの藏前衆が署名している。

③ 佐渡金山奉行伊丹康勝

藏前衆で大久保十兵衛と名を連ねている板見は村上直虎のいわれるように伊丹喜之介をさすと思われる。伊丹康勝はここにみえるように初めは喜之介と称し、父は大隅守康直といい、永禄元年駿河岡興津に至り、今川義元に仕え、のちに氏真に仕え、選俗して海賊奉行となった。氏真没落ののち、武田信玄に勤仕、船大将をつとめたが武田氏滅亡の後、代官に任ぜられている。嫡子播磨守康勝は天正3年に駿河国清水に生まれていることを『国志』は伝える。ところが天正10年に板喜とあり、伊丹喜之介のことであるので生年月日の記載に誤りがあるのではないかと思う。

さてこの播磨守康勝であるが、『国志』にみえるように天正10年には藏前衆の一人であり、武田家が滅亡してからはそのまま徳川幕府に仕え寛永9年には甲府在番となって10カ村を領した。更に寛永13年5月4日在番交代となり寛永19年3月御勘定頭に擢ばれている。

この勘定頭は勘定奉行のことであり、寛永年間ごろまでは勘定頭といった。江戸幕府の勘定奉行は老中、若年寄などにつく三奉行の一つとして幕府の財政を管轄する重要な職であるので、いかに伊丹康勝が権力があつたか推察することができる。

ここでとくに伊丹をとりあげるのは十組屋敷との関係である。

三日市場にあった十組屋敷は徳美屋敷とも書き、現在の三日市場小宮山清一氏の屋敷を中心に南側に広大な地域を有していた。武田時代には陣屋と蔵所が置かれ、寛永10年(1633)に勘定奉行の伊丹康勝の所領となる。その後も治所となった場所である。伊丹氏の領地が上・下井尻、塩後、三日市場、小屋敷、藤木、上・下杣木、川浦、上・下於曾、千野、上・下粟生野、上萩原、上・下小田原、竹森、福生里の十組あつたことから十組という。

康勝のあと勝長、勝政、勝守と継いだが元禄 11 年 (1698) 勝守の変死によって没収されたことが一般に知られている。

この屋敷について資料の上から拾ってみると、『国志』は武田家時代より陣屋並びに蔵所のあったところとしており、上神内川村の三科家の文書にも慶長 16 年のころ三日市場御蔵と云っている。その後伊丹氏の所領になるが最初は喜之助康勝が下井尻村に居たことが井尻印右衛門の日記にみえる。のちに三日市場に移り、屋敷東側に大手前（今では追手先と云う）すなわち大手口があったことがうかがえる。

また元禄 6 年 (1663) 年 11 月恵林寺領御検地日記には「三日市場屋敷」と見える。また当地にはすでに武田氏の時代から陣屋と蔵所が設置されていたというが、天正 15 年 10 月大久保長安等連署手形写によれば地頭役 60 文を「三日市場御蔵」に進納するよう萩原源右衛門に命じたことが記されている。このように十組屋敷は武田時代に蔵前衆の支配するところの御蔵所としていたことが実証される。十組屋敷から東方に向けて千野、小田原方面への道を陣屋街道とも呼んでいたようである。

また御蔵所と三日市場が直結しており、各地から集積された主穀その他のものが市場で売りさばかれていたようである。三日市場は十組屋敷から恵林寺門前に分けて市が開かれた。

この地方が粟の産地として知られており、とくに武田時代は米穀の不作の場合にこの粟をもって兵糧にあてたと云う。粟はすべて搗粟に製造したようである。納米一俵に対して生粟 1 俵 (6 斗) をもって代納させた。その後において粟 1 俵を 6 斗として売買したというのはこの三日市場から起ったと伝えている。

「江戸幕府諸表」の勘定奉行の項に旧武田の家臣、のちの佐渡金山奉行の大久保石見守長安が慶長初年勘定頭をつとめ、次に甲斐九筋の検地をおこなった伊奈備前守忠次も慶長初年に勤めている。引きつづいて伊丹喜之介康勝が慶長 5 年 (1600) から勘定奉行を勤め、その子の伊丹藏人勝長が慶安 3 年 (1650) から勤めている。

田中圭一著の「佐渡金山」によると佐渡金山最初の金山奉行が大久保長安であることは一般に知られているが、実際に佐渡で政務を行っていた中に甲州で長安と一緒に蔵前衆であった小宮山民部がいた。また同書によると一般に云うところの佐渡金山奉行の設置は長安よりあとになり、元和 4 年 (1616) のことである。その時の奉行が甲州鎮目村出身の鎮目市左衛門である。その次に寛永 12 年 (1635) 勘定奉行の伊丹播磨守康勝が佐渡金山奉行を併任したのである。彼は大幅な機構改革を行い、留守居役の制度を置くなどして積極的に政務を遂行したのである。ところが伊丹康勝の甲斐国での行動ははっきりしない。当時の甲州にあってみるとくに国志は大久保長安の権力の入きさをとり上げている。その様子を村上直氏は『甲斐史学』第 10 号の中で次のように云っている。

この頃、長安は、すでに甲斐のみならず関八州、佐渡、伊豆と、その活動範囲を広めていったのである。とくにその鉱山開発の技術は、鉱山史上画期的なものであった。この時期の甲州について国志は「金山ノ盛ナリシハ慶長年間大久保長安ノ奉行タリシ頃ノ事ナルベシ」とあるが、以上の様子からみて黒川金山と佐渡金山は共に同じ時期採掘をしていたことになる。また甲州において長安の同僚ならびに長安の部下の者たちが多く佐渡に招かれている。田中圭一氏は大久保長安時代に佐渡に招かれた役人たちの出国をみると甲州が圧倒的に多いと記されている。中でも武田時代の蔵前衆以来の中であった大久保長安と伊丹康勝は、お互いに勘定奉行、佐渡金山奉行へと栄進していったのである。

(4) 宇賀屋敷

於曾屋敷の西側に広大な面積を有する地名に「宇賀屋敷」がある。地名は宇賀屋敷、通称「ウガヤ」と云い、高土手を囲繞しているので「高土手」とも云った。屋敷は塩山南小学校東側から始まる窪地を境にして、その東側に広がる台地である。南端は塩山中学校校庭南側の高土手まで、東は田辺有親氏の西側を谷となつて、八幡神社の裏手を西に流れる川がその境である。塩山中学校の南端にかつて桑畑があったが、その畑を

「オカヤシキ」と云った。これはウガヤシキが訛ったものである。地名の由来については諸説あるが、一つ考えられるのは「宇賀神」からではないか。白蛇を梵語で宇賀耶(うがや)と云い、訳して財施と云って福神のことである。従って宇賀神を祭祀した屋敷のことではないかと考える。

屋敷そのものの性格も不明であるが、近くに於曾屋敷があり、その北側現在の秋東信用組合のところから「風呂屋敷」で金の製錬をおこなっていたと考えられるので、この宇賀屋敷についても、それに類似した作業場であったと推察できる。今後の発掘調査の結果をみて断定したい。それは於曾屋敷等にみられるような屋敷構造をもっておらず、高土手がかかなり複雑に圍繞していることである。もう1点は重川からの千赤於堰(ちこおせぎ)は赤尾橋付近から取水して甘草屋敷の東を通り二つの堰に分かれて一方は於曾屋敷へ流れ込み権兵川となり下方に流れる。もう一方は宮原修理の屋敷添いに宇賀屋敷で二つの堰に分かれて下方に流れる。宇賀屋敷への水量はかなり豊富である。

宇賀屋敷について、中世の形体は明かでないが、時代によってかなり変革している。宇賀屋敷として一つの機能を有したときもあるが戦国期から、江戸初期にあっては金山衆が分轄して屋敷を構えたのではないかと推察する。

若月古右衛門屋敷(現在は若月勇氏)は宇賀屋敷の中で最も土手ならびに水路など遺構を残している。屋敷は東西46間、南北33間であるので於曾屋敷よりやや面積が少いだけで良く似ている。その前にある池田東市佑屋敷(現在池田多美氏)は土手は失なわれているが、甲斐国志に池田東市佑、「宅地三段七畝十歩餘地ナリ」とある。所蔵されている文書は金山衆共通の内容で次の通りである。

武田家印判状

定

- 一御分国諸商一月馬老正之分役等、御免許之事
- 一本棟別老間之分、御赦免之事
- 一向後拘米俣田地、如軍役衆可被停御檢使之事
- 一郷次人足普請、被禁之事

已上

日今以後、於敵国御城賣之時、御一左右次第馳參、別而可致奉公旨言上候之間、右如此被加御褒美之由、被仰出者也、仍如件

天正二年甲戌

十二月廿三日(竜朱印)

池田東市佑

釣閑斎

市川備後守 奉之

5) 保坂次郎右衛門屋敷

現在の塩山市赤尾667保坂敬一氏宅、甲斐国志に宅地四段十六歩免除とあるが現存されている。当家には天正2年の武田家印判状のほか宝永5年から大正8年に至る文書記録208点を保存しており中でも延享2年より大正8年までの日記がある。

武田家印判状

- 一御分国諸商一月二馬老正之分役等御免許之事
- 一本棟別老間分御赦免之事
- 一向後拘米俣田地、如軍役衆可被停御檢使之事
- 一郷次人足普請被禁之事

已上

自今以後於敵国御城賣之時、御一左右次第馳參、別而可致奉公旨言上候之間、右如此被加御褒美之由、被

仰出者也、仍如件

天正二年甲戌

十二月廿三日

鈞照斎 奉之
市川備後守

保坂次郎右衛門

この文書は池田東市佑宛のものと同じ形式の内容である。『国志』には赤尾には保坂家のほかに古屋兵部丞屋敷がある。また宅地三段一畝十歩ともある。武田時代の御蔵衆であり金山衆でもあった天正11年の両義からの武田家印判状を所蔵しているが現在確認調査がなされていない。古屋家については千野に古屋清左衛門屋敷があり宅地3段18歩である。

甲州古文書第一巻に古屋清左衛門宛の武田家印判状、古屋小兵衛宛の徳川家印判状2通記載されている。

武田家印判状

定

一御分国諸商一月ニ馬巻疋之分役等御免許之事

一本棟別屯間之分御赦免之事

一向後拘来候田地如軍役衆可被停檢使之事

一郷次之人足普請被禁之事

以上

於今度深沢之城、別而致奉公候間、被加御褒美者也、仍如件

山縣三郎兵(ママ)

元龜二年

二月十三日(龜朱印)

古屋清左衛門

(6) 中村彈右衛門屋敷

塩山市上萩原下切499-1 中村常福氏宅である。小田原橋を南に下り重川添を旧青梅街道が通っており、その街道添いである。現在は宅地270坪であるが、北側に同家と関係のある将軍地蔵堂があり往古においてはその周辺が森になっていたので中村家を「おもり」と呼んでいたようである。重川の水を屋敷添いに引き入れ下方に流している。『国志』をみると金山の管理者(金山衆)は萩原や於曾や熊野など当地方の豪族であったが、鉾山で働いていた人の多くは寺社とともにふもとの村落に下って定住したとあるが、中村家もその萩原の豪族であった。中村家にも各金山衆に与えた武田家印判状が所蔵されている。

武田家印判状

定

一御分国諸商一月ニ馬巻疋之分役等御免許之事

一本棟別屯間之分、御赦免之事

一向後拘来候田地、如軍役衆可被停檢使之事

一郷次之人足普請、被禁之事

以上

於今度深沢之城、別而致奉公候間、被加御褒美者也、仍如件

元龜二年辛未(龍朱印)

山縣三郎兵衛尉(昌景)
奉之

二月十三日

中村彈右衛門

定 (写)

一御分国中金川金芝間可驅之事
 一譜代之下人何方ニ罷令居住一往当主人ニ相届可召返之事
 一百姓屋敷四壁林之外無異儀草木可令取之事
 右領掌 不可有 相違者也仍如件

文禄式年十一月九日

黒川衆
 安部衆

御朱印は田辺佐苗家に伝わった内容とまったく同じ印判状である。もう1通は黒川衆、安部衆に与えたもので金山探掘にかかわる工夫達に対するの定書である。安部衆については不詳である。中村氏の屋敷がこの地に構えられる目的に二つ考えられる。一つに前述した原之京鍛冶遺構を中心に奈良平安時代から続いたと考えられる金の製錬集団、とくに中村氏はこの地域の武田時代の支配層と推察できる。小田原橋を渡って西側が門(かど)と云う集団の入口であるが、それから北側が製錬集団で現在の福蔵院が館跡と云っているが物見の場所であったのではないか。その西に鍛冶屋の守護神金井加里神社がある。もう一つ考えられることは小田原橋の上に白山神社があるが、ここから下萩原平城に水を引く柏原堰がある。このことも併せて考える必要がある。

(7) 熊野の金山衆

金山の管理者即ち金山衆は萩原や於曾や熊野など当地方の豪族であった。熊野の金山衆には依田兵部左衛門(現在は依田正次氏)と深沢次郎右衛門(現在依田節子氏)が居を構えていたと『国志』にみえる。現在でも屋敷の規模は縮小されているが両家とも現存している。依田家には北条氏の文書1通と武田勝頼文書の写しが伝わっている。この金山文書は南佐久郡川上村梓山の風間家に伝わる武田家印判状と同じ内容である。

武田家印判状(写)

定

以先御印判於金山黄金無出来間一月ニ馬老定分往還之諸役御免許之上者向後務不可有候相違旨被仰出候者也仍如件

天正八年庚辰

武藤三河守 奉之
 小山田備中守

依田兵部左衛門尉

深沢次郎右衛門屋敷も現存しているが度重なる火災にて古文書は失っているが、『国志』附録に金山各衆中へ贈った調略の書1通が伝わっている。

(天正十午年北条ノ臣黒沢上野介繁信ノ文書ナリ金山衆ハ在栗原筋熊野村百姓ノ所蔵)

一昨日者各為御代官河三人被指越候御忠節之至則御陣下え申上候間定 而安房守殿 校者曰クココニ安房守トハ北条氏邦ヲ云フ、
 氏政ノ弟ニテ武州鉢形、上州以御直書可被仰越候間可御心安 候ニ自分ニオイテモ満足奉存候仍而知行
 箕輪沼田ノ城主ヲ兼ネタリ
 方御朱印相調進之候於此上者一箇ニ御忠信可然候亦方々御進退御取成可申候然者大手者十二日うんのへ被
 進御陣候くに衆真田高城潮田其ノ外信州衆十三頭者十三日出仕候間信州一返ニ被明御便候五三日之内甲州へ
 可為御着馬候其以後之御陣陸承届ケ次第可申入候間御仕宅候て我々萩原へ罷出候者早々御出可然安房守御
 内儀之段又我々存分之儀御使衆直段進中候猶以茲書申候恐々謹目尚以御知行之かここの御印判昨日大途へ

申上候 校者曰ク大途ハ大許ニテ至貴ノ人ニ云フ 參著次第可進之候御旗前にては大きくの事有之候かこいも
ヨコニハ大藏北条氏政ヲ指シテ云ヘリ

こやも何にも罷成間敷候間まへひろに申上候七月十八日黒沢繁信書判

金山各衆中

依田家は下於曾にもある。田辺四郎左衛門家の南側、現在の依田今朝雄氏のところである。当時の依田宮内左衛門の屋敷である。明治17年の図面があり、土塁は近年になって石積みになっているが、屋敷は旧来のままである。また屋敷の面積は一町一反十七歩ある。水路は田辺家から排出されたものがそのまま依田家に入り屋敷内を東北から西南に通りぬけている。古文書は享保年間の下於曾明細帳ほか地方文書があるのでこのころの名主と思われる。武田家印判状は永禄12年に依田七左衛門宛のものである。この依田家には天文23年銘のある板碑が善提寺下於曾妙善寺に伝わっている。恐らく当時の金山衆と考えられるが銘文をみると「天文二十三年二月時正 南無妙法蓮華經 甲州云々」と見える。

穴山氏の金山経営と土豪屋敷

野 沢 昌 康

1 はしがき

甲州の金山は既に15世紀末には開かれていたと思われる記事が『王代記』に見えるが、実際には16世紀に入って武田信虎の時代からで、信虎は金鉱を求めて国内をあちこちと積極的に探し廻り、松木氏らを使って甲州金も鋳造している。

しかし甲州金の全盛期は武田晴信（信玄）の時代にあり、武田勝頼の時代には産金額は急減している。全盛期の金山の主なものとしては、

黒川（塩山市）保、黒桂（早川町）湯之奥、川尻（下部町）御座石（韭崎市）
があげられるが、この中では黒川金山の規模がずば抜けていた。

金山の監督をする行政官は金山奉行であり、金山を経営するいわば資本家は金山衆であったが、まれには両者を兼ねる場合もあった。金山衆は山主（山師）または元締などとも呼ばれ、間歩・掘場の所有者となって採掘・精錬まで掌った。その下には技術的な働きをする金子（カナゴ）があり、金子の多くは専門の坑夫（金掘り）を子分として抱え、各地を渡り歩くことが多かった。金山衆は領主と被官関係にある名主的武士で、大きい金山には何名も居た。

今日、その館跡を遺構や文献の上から追求できるのは、こうした金山衆のもので、甲州の場合は黒川金山に最も多くみられる。黒川金山以外は河内領の保、黒桂金山と湯之奥金山などで、その他は地理的環境、規模や資料の問題などによって今なおその遺構は明確にされていない。

2 早川町黒桂 望月晴史家屋敷

1 穴山氏時代の金山奉行望月善左衛門

早川町の金山で最も早くから採掘されたのは黒桂村と保村の金山である。当時、河内領を支配していた穴山信友（1504～1560）からこの両村の金山奉行を命ぜられていたのは、黒桂村の望月善左衛門であった。望月晴史家（当主は誠一）の由緒書によると、善左衛門はもと信州佐久の村上義清の家臣であったが、武田信虎の時、これに従って現在地に定住したとある。信州佐久郡望月邑から起った望月一族は、武田氏の信州制圧により、これに従って甲州へ転住し、その多くは当時、人煙稀薄な河内領へ配置され穴山氏の支配を受けた。

黒桂（つづら）の望月氏がここに居を定めた年月は定かでないが、天文3年（1534）の次の文書によると、既にこの時には穴山信友の支配下に入っていたことが知られる。穴山氏はいうまでもなく武田信虎・信玄の親族衆である。

（信友花押）

つづら山 同はう山の事 代官之儀申付候 かせき山さかい候はん事 かんようたるへし 仍如件
天文三年六月四日

（新倉村瀬兵衛家文書・写）

これは宛名を失っているが、諸般の状況から望月善左衛門に宛てたものと想像される。「かせき山」というのは木材（木材切りだしは雨畑川流域が主）ではなくて金であること明白で、黒桂・保の両金山の採掘の

ための代官を任命し、かつ啓励したものである。

続いて同12年に穴山信友が黒桂村の6人衆に次の文書を発給している。

(信友花押)

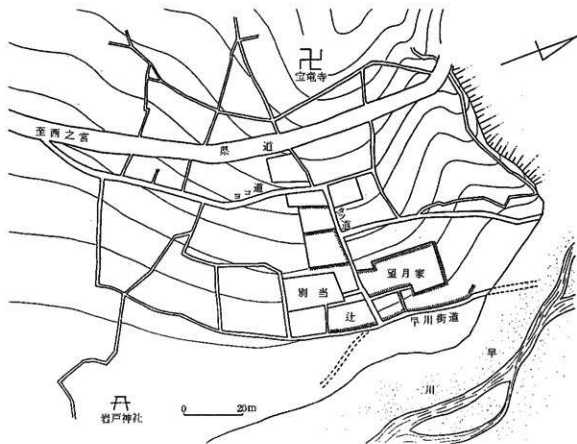
芳山小沢之すち かせき候て きり出し 奉公申へきなり 何事なり共 此六人衆中にまかせへき者也
如件

天文十二年五月一日

村田善九郎
望月善左衛門尉
同 伴左衛門尉
同 神左衛門尉
同 新右衛門尉
同 三郎兵衛尉

(望月晴史家文書)

すち(筋)は間歩(金坑)の別称で、文意は村田善九郎以下の六人に対し、芳山(保山)金山の小沢(コザワ)間歩から精出して金の鉱石をきり出すように要求し、金山のことについてはすべて六人衆に一任すると申し渡したものである。望月晴史家の文書によると、この中心人物は望月善左衛門である。すなわち黒桂山、保山の代官(金山奉行)であり金山衆の一人でもあったといえよう。



第1図 黒桂集落(部分)

2 望月善左衛門の屋敷構え

望月時史家はおーや（大家）あるいはおきのいえ（大奥の家の意、集落の最奥に位置する意か）と呼ばれ、いわば草分けの家として知られている。現在の建物は勿論その当時のものではないが、養蚕をやった（春蚕だけでも120貫）関係もあって太い材木を使った大きい家である。屋敷地は延宝6年(1678)に兄弟で建物も屋敷もすべて2分したため、穴山氏時代より小さくなっているが、これを復元して考えてみると金山奉行としての規模・位置等がまざまざと浮び上がってくるのである。

黒柱は、ほぼ南北に流れる早川の西岸にあり、西は金鉢のある黒柱山で東に傾斜する狭い土地に現在28戸（空家を含む）が並んでいる。延享3年(1746)の諸色明細帳では、村高18石8斗余、反別6町余、家数29（本百姓25）、人口103とあるが、土地も狭く水も山からの引き水が主であるから、分家して戸数を増すことはしなかったという。

早川入りの村々は、今は最奥の集落までバスが通じているが、太平洋戦争前は狭い峡谷の兩岸に点在する集落を吊橋などでつなく、いわゆる早川街道が主たる交通路であった。黒柱においても現在では家並みより高い山寄りの場所を県道（バス通）が走っているが、もとは保・西之宮から来た人たちは第1図の横道・堅（たつ）道を通り、望月家の前へ出て早川へ下り、対岸の早川集落へ渡り、大原野・新倉と進んだのである。



第2図 望月善左衛門屋敷構

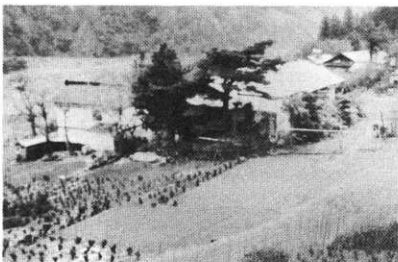
さて望月家の屋敷構えを現在の道路・屋敷割等によってみると第2図のようになる。望月家の話によると、家老屋敷は望月家の執事のような仕事をやっていた人の屋敷、たつ道を隔てて南側の別当屋敷は望月家の馬丁のような仕事をしていた人、「辻」という屋号の家は望月家の分家であるが、川から上ってくる人たちに対する川番所であったという。家老屋敷をふくめたこの一角が当初の屋敷とみられるが、間口25間、奥行14間ではぼ1反歩ある広さは、狭いこの土地としては大きい構えといえよう。建物の配置は現状から推察すると、主屋は西寄りに東面して建てられ、土蔵・納屋その他の付属施設は東寄りに建てられていたものと思える。

タツ道に面したところ以外の三方は、いずれも石垣をめぐらせ、道路からの入口（ジョウ口）は真正面からと南からとの二本ある。正面の早川街道からの入口には「くつ石」が片側だけ残っている。恐らくここに門を構えたものであろう。早川街道は横道・竪道を経て望月家の前へ出ているが「辻」の前を通って南から来る道の方が古いような感じがする。いずれにせよ早川街道を上下する人々は凡て望月家の門前を通るようになっていた。

天文12年の穴山信友文書にある6人衆のうち望月姓の5人は、兄弟など深い関係の親族であるが、このうち善左衛門は本家であり穴山信君（梅雪）から土佐守に叙せられている。天文19年に新左衛門が御本家善左衛門から横道わき東西20間の土地を分与されたことに対する御札の証文が現存しているが、善左衛門の頃には広くこの一帯を領有していたのであろう。現在、黒桂には望月姓が数戸あるが、どの家が6人衆の子孫であるか分りかねる。

現存の古文書によると善左衛門は鎮守を造ったり真言宗宝龍寺の開基となるなど強い権勢をふるったようである。この村の飲用水は西方約330m登った甚平沢の水口（今は竹やぶ）から埋樋で引いてきた。この水と善左衛門との関係は不明だが、このほか早川岸に近いやぶの中にも湧水があり、雑用水には早川の水も使ってきた。

なお、屋敷と早川街道との間および早川街道と早川の河岸の間では砂金の探掘が行なわれ、その坑跡が見られたという。



北西から見おろした望月家 主屋と土蔵と早川の河原が見える



望月家の正面（早川街道から見あげる）

3 下部町湯之奥 門西正勝家屋敷

1 はしがき

門西家のある西八代郡下部町は東河内の中心地で、戦国時代末には武田親族衆の穴山氏が一円領有していたいわゆる河内領であった。門西家は少なくとも16世紀の初頃には東河内有数の地侍として栄えた家で、その経済的背景には広大な山林と湯之奥金山とがあり政治的には穴山氏の支配があった。

門西家のある下部町湯之奥の集落は、下部温泉郷から下部川の峡谷ぞいに約3kmさかのぼった所にある。南面した斜面にはほぼ東西に走る約130mの一本道の左右に、屋敷割した15戸が並ぶひろびろとした山村である。ここにも過疎化現象がうかがわれるが、かつては湯之奥村は「代官」門西家を中心に構成され、金山と林産

物で活気に溢れていた村であった。

2 穴山氏の東河内領支配と門西氏（佐野氏）

門西氏は慶長2年(1597)以前は佐野姓を名乗り、天文7年(1538)7月入寂した佐野常之進の位牌をはじめ、同家の古い沿革を示す多数の古文書が保存されている。河内地区に現存する穴山信友発給文書で最古のものは、西河内領にある享祿5年(1532)のものであるが、東河内領では少し遅れて天文8年(1539)下部町瀬戸・方外院の住職任命書が最も古い。その頃庶民の信仰厚かった「瀬戸の観音」さんに対して、信友が逸早く勢力を及ぼしたものとみられる。

東河内領でそれにつづくものは天文12年(1543)に門西家の先祖・佐野縫殿右衛門尉に宛てた次の文書である。

① (穴山信友花押)

右竹藪之事 はやすへし 何時も用之時ハ何本所望と判をつかはず候 何へも其分申付候用之時
印 はんこし候共 無此判者きるへからず 以此儀能々竹をはやし奉公可申者也 仍如件
天文十二^癸前七月五日

佐野縫殿右衛門尉

これは用材としての竹の確保を申渡したものであるが、信友から縫殿右衛門あての文書はこのほか3本あり、穴山信君からのものも2本ある。(江戸時代のものは略す)

② 天文十三年 穴山信友置文

大塚山のことで使った代物、茶代などの支払いについて

③ 弘治二年(一五五六) 穴山信友判物

山作普請を免除する また山用所の仕事を精勵せよ

④ 年未詳 穴山信友印判状

一万枚の屋根葺板を調達せよ

⑤ 年未詳 穴山信君判物

大三四に対する保護命令(誰にても違乱すべからず)

⑥ 天正八年(一五八一) 穴山信君判物

於河内谷中 私宅空閑棟別諸役令免許之者也 仍如件

湯之奥之文右衛門

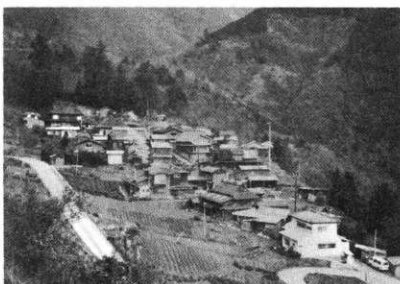
これらによってうかがえることは、

- 佐野氏は東河内領の代表的豪族であったこと
- 建築資材(柱・板・葺板・竹材)および日用雑貨の調達係であったこと
- 警備用の佐野家の犬に対して何人も危害を加えることを禁止したことは、西河内領・早川町黒桂の金山奉行望月善左衛門の場合と全く同じで、山林(林産物・金山)の見廻りに犬が重要視されていたことを示すものといえよう。

3 湯之奥金山

穴山氏は武田氏の親族衆でこれに服属していたが、河内領の金山支配に関しては決して他に譲らなかった。小京都といわれた下山の繁栄、武田氏滅亡後の家康および信長に対する莫大な献金など、その富強の最大の供給源は東西河内領の金山にあった。東河内領の金は甲駿にまたがる天子山系中に埋藏されていたが、古くは砂金として採集されているに過ぎなかった。

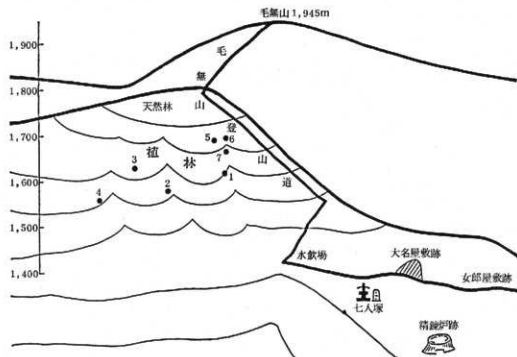
湯之奥金山というのは具体的には、中山沢の奥の海拔1,600~1,700 m辺りの中山金山と、入り沢の奥の内山金山・茅小屋金山を総称していた。このうち最も栄えた中山金山は、湯之奥から東、静岡県境に近い地蔵峠の南西にあり、東側は富士宮市の富士金山となっている。中山金山の採掘がいつ頃から始まったかは明らかでない。甲州金座の役人であった松木家の「甲州金座記録」によると、武田信虎は積極的に甲斐国内に金山を探して木格的な経営を開始している。このことから考えると中山金山の開始を16世紀の初頭に近い頃としても無茶ではあるまい。



湯之奥全景 最高所の萱葺屋根の家の右隣りが門西家、手前は林道

同じ地続きの駿河国富士金山には、竹川・石川・太田などの金山衆が今川氏の時代から活躍していた。本栖湖南岸の竜ヶ岳の川尻金山も竹川一族が掘っていたという伝承があるくらいであるから、湯之奥金山の場合もこの頃始められたものと思われる。

下って武田信玄は元亀2年(1571)駿河の深沢城に北条氏を攻めた時、田辺・芦沢らの黒川金山衆と共に中山金山衆をも使って城郭を掘さくし、結局、降伏させているが、その功により中山の金山衆10人はほうびとして糶子150俵を賜わっている。このことから中山金山の金堀り集団が武田信玄(穴山信君)のころ10組あったことが判るが、それ以上のことはうかがえない。

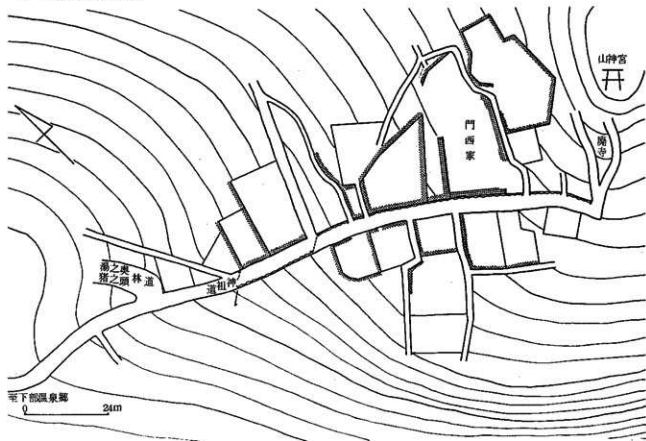


第3図 湯之奥中山金山坑道跡・印 坑口 (下部町誌より)

しかし昭和40年ごろからの加藤為夫氏（市川高校教諭）や地元町の町誌編集関係者などの数回の実地調査によって、中山金山の開歩、屋敷跡、精錬所跡などが漸次判明してきた。殊に発掘された陶磁器類の破片（天目軸丸碗なども出土）などから、天文から天正年間にかけてという時代判定ができてきた。中山千軒といい、金山七社というような全盛期は、正に穴山氏全盛期の中山金山と一致するもので、高価な天目茶碗等を使用し、女郎屋敷が設けられ墓地がつくられる（当然、寺も）程の繁昌が標高千数百mの毛無山中に見られたのである。

武田氏滅亡と同年に穴山氏も亡び、甲斐国の支配者は転々と変ったが慶長6年(1601)から再び徳川氏の支配下に入った。湯之奥金山の産金額は延宝のころ(1673～1680)までがピークで、その後は減少の一途をたどり、元禄9年には中山村はわずかに6戸、内山・茅小屋の両村は廃墟となっていた。やがて安永年間、中山村も多数の墓碑群を残して廃村となり人々は麓の村に下っていった。その後も江戸時代を通じて様々な人物が採掘を行なっているが、いずれも成功しなかった。湯之奥村はこれらの金山と二百数十年間にわたって密接な関係を持ってきた文字通り金山の村であったが、廃鉱後は木炭などの林産物で生計をたてて今日に至ったのである。

4 湯之奥村の家並み



第4図 湯之奥集落屋敷割

湯之奥村は富士川の支流常葉川のまた支流下部川の最奥に位置する山村で、下部温泉から約3km。集落は下部川とその支流入沢川によって三方を断崖で囲まれた半島状の土地の上にある。小字久保平と呼ばれるが平坦地はほとんどない。北側は山地でその南斜面に家並みと畑が広がっている。この過疎の村も昭和57年、全長約20kmの「湯之奥・猪之頭林道」が開通し、かつての間道的なものが本栖湖廻りの国道52号線より近距離の静岡連絡路として利用されるようになった。

湯之奥村は『国志』（文化3年・1806）によると高35石377、戸18、口73、馬3「東南ノ方駿州富士郡へ問道アリ、金山嶺ト云、猪之頭村へ三里余、麓ト云処へ下ル…」とある。天保9年（1838）の村明細書によると戸数18、田6畝8歩、畑5町4畝5歩、刈生畑（焼畑）16町5畝23歩。農間嫁ぎは薪・茅・炭とある。戸数は13戸の時もあり（区有林の権利者数）、太平洋戦争後は一時林業関係者などで四十数戸の時もあったが、18戸の時代が長かったらしい。（現在は15戸、うち空家1）。このことは屋敷地割の上からもうかがわれる。

家並みはこの土地の南寄りに、ほぼ東西に走る幅6尺たらずの一本道を中心に左右に屋敷地割をして整然と並んでいる。門西家を中心に金山集落という特殊な性格をもって計画的につくられた村であることは明らかである。一本道の全長は約130m（71間余）、石畳で東上りの傾斜は約15度。もとは1間おきくらいに低い石段があったが今は全面コンクリート舗装である。しかして屋敷割は当然、間口より奥行の長い長方形となる。



湯之奥集落中央の一本道 突当りは山神宮の森

県内でこれに類似した屋敷割は中道町右左口宿、上九一色村精進などに見られるが、湯之奥では土地が狭いので規模がやや小さく、かつ傾斜が強いので下から見ると隣家との境界の石垣が階段状になってみえる。道路の北側に9軒、南側に6軒ある。南は下部川の崖との間が狭いので、間口は大体5・6間で奥行も短い家が多い。北側は間口は6・7間が多いが、昔の門西家だけは約17間と広い。門西家は位置的にも集落の最奥で、山への登り口（つまり金山や駿州道の入口）にあり、宅地も広い。広いといっても土地柄二百数十坪であろう。

門西家の現在の建物は元禄時代前後に建てられたもので桁行7間半、梁間6間。河内地方に多い虹梁造りの典型的上層農民の家で、大家（オーヤ）と呼ばれるにふさわしく、国の重要文化財に指定されている。もとは道路に面して長屋門などもあったという。門西家よりさらに上手、山にかかる所に山神宮と西方院という廃寺の跡がある。

西方院は、『国志』によると下山にある曹洞宗龍雲寺末で堂舎は桁間3間、梁間3間。開山は堂己外尊で天和2年入寂、開基は能繁浄長庵主（門西家の先祖）で慶長11年（1606）起立。慶応4年に既に無住となっているが盛時には下部の人々も参詣したという。

「水」の問題であるが、地形的に水には不便をしたらしい。古い時代はもっぱら井戸で、道路の北側の家に数か所掘られていた。今判っているのは門西家（当主・正勝）、門西公、住田武一、望月政則の4軒で、門西公家では近年まで使用していた。そのほかは下部川の水を汲んでいたが、現在、道路の傍を流れる水路は羽治の中頃に入りの沢から引いてきたもので、今は堰堤からパイプで引いてきて流している。

湯之奥村の屋敷割については何の記録もないが、この村の性格から考えて金山の全盛時代、つまり16世紀の中頃築造されたのではなかろうか。

参考資料 『下部町誌』 『早川町誌』

加藤為夫「中山金山跡出土陶器・磁器」『身延高校研究集録（6号）』

『山梨県の民家』県教育委員会

平地部の城・館跡の自然的位置

吉 村 稔

1 はじめに

甲府盆地内外の城館跡の分布を見て行くと、大河川の分水界に相当する山陵上から、洪水の危険が多分にある低地にまで分布している。

また、地形からみた地域によっても、その立地に特色がありそうである。そこで、自然地理学的な立場から城館跡の立地を、地形単位あるいは地区単位に、細分した地形上の特色との関係で調査した。

調査法は、筆者等が従来行っている国土庁の地形分類調査結果、空中写真の判読、明治時代の2万分の1などの地形図、あるいは国土基本図などを利用し、調査結果として示された2万5千分の1地形図上の城館の位置を小地形上の位置、地表傾斜、水路との関係などから解析した。全調査結果を対象とすることは、時間的に、また利用資料の上からも困難であったので、甲府盆地とその周辺の比較的平坦地を対象とした。具体的には、火山山麓として八ヶ岳山麓を、段丘・隆起扇状地として、塩川沿岸、釜無川右岸、および笛吹川と重川に挟まれた地域を取った。また扇状地および氾濫原状の低地として、荒川、相川、釜無川の各扇状地上を対象とした。

2 八ヶ岳山麓

八ヶ岳山麓の火山山麓扇状地は、釜無川や須玉川の河谷を基準とすれば、台地という分類が可能であるが、いわゆる河岸段丘とは性格が異なる点がある。また、この地形面は、さらに分類が可能であるので、城館跡の位置として、第1表のような位置の区分を行った。以下に各々の代表例等について記す。

第1表 八ヶ岳山麓の火山山麓扇状地における城館跡等の地形的位置に関する分類

火山 山麓 扇 状 地	小山 地 頂	11)	
	火 碎 流 地 形	小 円 丘 上	12)
		台 地 上	13)
		侵 食 谷	14)
	山 麓 扇 状 地	上 面 先 端	15)
		侵 食 谷 側 面	16)
		侵 食 谷	17)

- 小山 地 頂 旭山磐 火山山麓扇状地上に比高約100m、東西500m、南北2kmの半島状のロームより成る小山があり、この山頂に立地する。例外的ではあるが15)の一部には類似した立地が見られる。
- 火 碎 流 小 円 丘 上 長坂氏屋敷 火砕流が作った起伏のある台地上に、ドーム状に盛り上った小円丘があり、一般に「流れ山」と呼んでいる。この小円丘上に位置する。比高は20～100m程度まで差がある。類似する地形に立地するものに、谷戸城、若神子城(南城)、十騎屋敷、新府城、丸山、長坂氏屋敷などがある。一般には「城」と呼ばれるものが多い。
- (火 碎 流) 台 地 上 若神子城(北城) 火砕流をロームが被い台地となっている。しかし、西川など、一般には侵食谷により、表面は平坦であるが急崖上にある場合、笹尾砦、深沢砦、中丸砦、天白砦、若神子人城などの砦となる。またその侵食谷が浅く、比高10m前後の小尾根となり、その先端部に位置する場合もある。米倉氏屋敷(3-4-8)、三科氏屋敷、御所屋敷がその例である。また前述の小尾根の

側面、つまり、小侵食谷の谷斜面が緩斜面の場合には、この位置にも立地が見られる。塚川の壘、西屋敷、菅沼氏、田中氏屋敷が相当する。

- 14) (火砕流) 侵食谷 烏氏屋敷 台地を侵食する侵食谷の支流の谷頭の斜面に位置する。後面と左右をやや高い小尾根状の地形に囲まれ、前面のみが開けた地形である。火砕流をロームが被う場合は、谷頭部は十分な幅がある。芳野氏屋敷、笹尾氏屋敷、御所などが、その例である。ロームがうすく、火砕流地形がより明瞭な地域では侵食谷が網状に走る傾向があるが、又十郎屋敷、岩下八郎兵衛屋敷、堂ヶ坂砦などが見られる。

八ヶ岳火山麓の火山山麓扇状地は、高根町や大泉村では1,100m以上にも広がるが、今回の調査結果を見る限り城館跡は、この地形に関しては標高900m以上では見られない。以下の火山山麓扇状地はこの範囲に限っている。標高900m以下の火山山麓の扇状地は大きく2段に区分される。即ち、小淵沢と長沢を結ぶ県道付近を境に、その下方でやや起伏の大きい部分があり、標高750～800mでやや平坦化する。また扇状地といっても、いわゆる盆地周辺の扇状地よりは地形が組み入っている。

- 15) 上面先端 谷戸氏屋敷 先述のやや起伏が大きく侵食が深い部分では、扇状地の原面に相当する面が、前方から見ると小さな半島状に見える部分がある。この部分に立地するもので、城南墓址、寺所屋敷はこの例で、比高は5～10m程度である。また下方の扇状地面でも類似した地形に深草館、南新井屋敷、東原屋敷、日向氏屋敷、新井館、西横森屋敷、村山東御原屋敷、大林屋敷がある。やや侵食谷が深くなる部分には大坪砦、土坪墓址があり、小和田館跡は地形が変化する部分と考えられる。
- 16) 侵食谷側面 上蔵原の壘 火山山麓扇状地を侵食する河川の支流により扇状地面が幅の広い浅い凹斜面が作られている。この凹斜面の上方から中程に位置するものである。
- 17) 侵食谷底 小宮山氏屋敷 火山山麓扇状地を侵食している小谷の谷底から斜面下方に位置するもので、類似例に清水氏屋敷がある。この地形に立地するのは谷底が平底谷に近く、幅のある場合と考えられる。水との関係を見ると川は水の便の悪いと考えられるものが多く、15)の一部も必ずしも良いとはいえないが、一般には、小河川に近い位置である。なお、この火山山麓扇状地で水の便が良いのは、八ヶ岳の南東麓の特色である。

3 甲府盆地部

ここでは、釜無川と現在の笛吹川に挟まれた部分の沖積地について考える。地形区分は第2表のようになる。ただし、空間的連続性をも考慮している。

第2表

甲 府 盆 地	扇状地	解析扇状地	21)	
		扇状地	急斜 (0.5°～3°)	22)
			緩斜 (0.25°～0.5°)	23)
	氾濫原	24)		

- 21) 相川扇状地の扇頂とやや下方の二城館、鸛鷲ヶ崎館、神宮寺氏屋敷のみで、現在の相川の河床とは15～20mの比高がある。ただし板垣山からの沢が侵食谷として扇状地の東縁を流下していたことが、明治22年の地形図では示されている。また前者は相川沿の崖の上であるから、水に引かれた立地ともいえる。21)と同様の地形については3で詳述する。
- 22) 相川扇状地、荒川扇状地等では中央線の南で、一般に23)に変わる。この境より北の土屋氏の館跡(7-4-1)、荒川屋敷(5-36)、東光寺屋敷(5-3)は、小河川の近くであるが、現地を細く

調べると微高地気味である。また金竹氏屋敷(5-10)は、明治24年測量の2万分の1の地形図によれば、西方に水路があり、そこよりやや高い部分を占めている。また上飯田陣屋は天井川の堤外の低地の外側の相対的に小高い部分を占めている。これら城館跡の地形図上の勾配は $0.5^{\circ} \sim 3^{\circ}$ であり、 0.5° に近い所では水をさける傾向が認められる。また甲府城、一条氏館は甲府城を中心とする特殊な地形のところである。

- 23) 緩斜扇状地 義清屋敷(7-5-3)が典型的な立地である。空中写真では、北西から南東に走る二本の流路にはさまれた微高地があり、そこに立地している。ほぼ同様な条件に立地するものに堀の内(7-10-2)、上河東屋敷(7-5-1)、玄賀屋敷(7-5-2)、殿屋敷(7-5-6)、横田氏屋敷(5-15)、下河東屋敷(7-8-2)、田中屋敷(7-7-1)がある。田中屋敷(7-8-1)、御朱印屋敷(7-8-3)に関しては、傾斜の取り方により $\frac{1}{125} \sim \frac{1}{300}$ とも取れるが、一町畑の集落が等高線の走り方から、微高地であることは確かである。また小宮山土佐守館は荒川左岸の自然堤防上にあり、勾配も等高線で $\frac{1}{200}$ 、実際にはより大きい。同様な緩斜扇状地上の館跡はお下屋敷(11-1-7)、川田館(5-28)、信虎誕生原敷(11-1-8)、武田落合館(2-2)があり、ともに旧河道沿の微高地である。この他、八田氏御朱印屋敷(10-1-1)は典型的な旧河川の自然堤防ないし中州の城であり、 $\frac{1}{240}$ 程度の平均勾配を有している。ここで重要なのは、旧水路などの低地と微高地の組み合わせであり、防壁としての水と、水に対する防災とが考えられているように統める点である。
- 24) 氾濫原 小曲氏屋敷(5-20)や酒依氏屋敷(5-16)が典型であり、甲府盆地中で最も低平な部分である。両地点は地形図上の等高線からは勾配計測不能な程に平坦である。この他堀の内(5-34)、小瀬氏屋敷(5-12)、御所(増坪町)(5-32)、落合氏屋敷(5-8)、武田信重館、逸見氏屋敷(10-1-2, 3)があるが $\frac{1}{440} \sim \frac{1}{600}$ 程度の勾配であり、旧流路近くでかつ、後2者を除く4者は等高線の走り方から微高地と判断した。

つまり扇状地上では、勾配 0.5° までは水に引かれて立地する傾向が強く、勾配 0.5° 以下では水をさけて立地する傾向が明瞭である。ただし全くの低平地については、図上からは特色は把握できなかった。

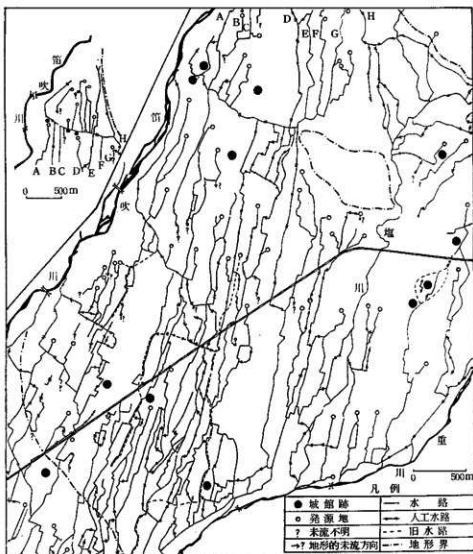
4 段丘、隆起扇状地

狹霧の河成段丘として須玉川左岸、隆起扇状地として、笛吹川と重川にはさまれた塩山、山梨地区、特殊な例として釜無川右岸の小隆起扇状地状の地形の部分について調査した。

段丘上の城館の位置を次のように区分する。ここで平坦面と称したのは明瞭な段丘崖上の平面で下流方向に極く緩斜している面である。また、ここで緩斜面としたのは、段丘崖からは遠く、その斜面が本流の流向とは直接は一致しない斜面を意味する。また細い面と称したのは、段丘面であるが支流などの侵食により幅100m以下にせばめられ、半島又は稜線に近い地形となっている場合を意味する。各地形での比高、城館の種類は第3表の通りである。

第3表 段丘面上の位置と城館の種類

地形面	比高	城館の種類と数
平担面	10 ~ 55 m	屋敷… 4 不明 1
緩斜面	25 ~ 50 m	屋敷… 2 城 1
細い面	35 ~ 80 m	砦 2 城 1



第1図 塩山・山梨市地区の城館跡と水路網

第1図に塩山、山梨地区の城館跡と水路網の分布を示す。水路は1/5000の国土基本図から転写したものに、明治21年の1/20000の地形図に示された水路を旧水路として加えたものである。また、人工水路とは、1/5000の国土基本図の等高線の走り方から自然流としては疑問のある流向の水路を意味する。また発源地とは最上流がその位置まで示されていることを意味する。ただし暗渠等が図示されていないので誤認もあると考える。

扇頂に当る藤木は約1km上流の河床とほぼ同一高度である為か水源地が多いらしく、ここの二階堂氏屋敷、網野氏屋敷、恵林寺裏にある土屋などは、東西に走る用水路が作られる以前は自然流があったと思われる。武田兵庫助屋敷は水との関連がうまくつかないが、十組屋敷は表流水は記載されていないが、西側に3本のガリーがあり、発源地もある。また、武士原屋敷は、その機能上、また笛吹川が近いこともあり、水の問題はないと考える。他はほとんどが水流の近くであり、それぞれの城館跡の位置の地表の傾斜は、 $\frac{1}{30} \sim \frac{1}{70}$ 程度であり $\frac{1}{2}$ に相当する約 $\frac{1}{11}$ よりは急斜しているため、扇状地で述べた立地の特色と一致する。なお於曾屋敷は明治時代の地形図から判断する限り、低地の中の高地的な位置にあると判断される。

釜無川右岸には、現在の釜無川に対して崖をもった、小扇状地群が発達している。そして、山地から戸沢、桐沢、堅沢、甘利沢など比較的大きな沢が、釜無川に流下する部分ではこの小扇状地は解析されている。ここでは米倉氏屋敷、折井氏屋敷、青木氏屋敷、水上氏屋敷などは、先述の沢の近くをさき、山麓付近の1km未満の小沢の溪口に立地している点に特色がある。一方、武田信義館、永明院、甘利氏屋敷などは、先述の沢の扇

頂部をさけて扇状以下の位置に、それらの沢の流路からはなれて立地している。これらは急斜する山地の山麓の城館跡の位置として、おそらく水害ないし土石流などの自然災害を考慮したものであろう。

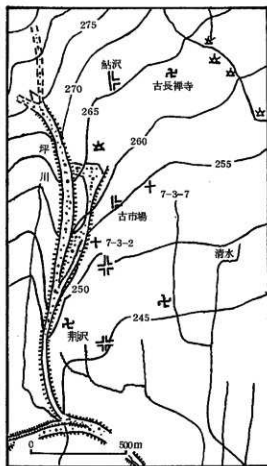
5 特殊な地形位地の城館

調査地点の中で、双葉町、六反川の谷底平野の中村条の工人屋敷跡は、洪水という点からは危険な位置にある特殊な例に相当するかのように見える。しかし、一見平底谷の形状はしているが、約 $\frac{1}{20} \sim \frac{1}{30}$ 程度の勾配があるので、河床とこの平低面に比高があれば危険は無いのかも知れない。しかし図上では不明である。

徳形町の小笠原氏館、甲西町の武藤三河守居館、大井氏館は天井川近くの館として特色がある。滝沢川や市野瀬川が当時どのような流路を取っていたか不明であるが、明治21年の1/20000地形図によれば、滝沢川は現在より北に河原が広がった酒れ川であり、小笠原氏館は、正に南側の自然堤防上に位置している。

第2図に明治期の1/20000地形図から必要事項を写した。古市場のT字路は現在より南であるので、現1/25000と位置関係が異なる。

坪川が酒れ川で部分的に流水の見られる天井川であつたらしい。右上の河市は東方の滝沢川との中間にある川で、この川沿には水車の記号が多く見られる。小河川の発達と勾配の変化傾向から扇端の湧水帯のやや上方であり、天井川の氾濫がなければ、最低部の水筋はさけているが、東方に小流があることから水との関係も否定は出来ない。ただし、堤外に砂礫地が部分的に図示されているので、市之瀬川が他所を流れていたとも考えられる。



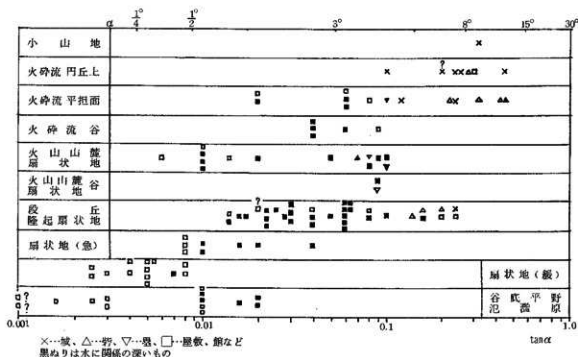
第2図 天井川と城館跡(甲西町の例)

6 まとめにかえて

城館と言っても、城・砦・壘などの軍事目的を主とするものから、陣屋などの支配、館・屋敷のような日常的な生活、生産等に関係するものまであり、目的は様々である。前述の地形区分を多少変更し、さらに先には取り上げなかった塩川の谷底平野等を加えて、地形別、地表勾配別(左に書いた8地形については半径250mの円の比高から算出、右の2地形は、その地点を挟む2つの等高線の距離から算出)に、与えられた城館の種類(中には小字名をそのまま取ったもの含む)と水との関係を示した。水との関係は主観的なものであり、多くは、半径250mの円内に水流が図示されていたれば便利と考えたが、起伏のある山頂、崖段崖上などは不便と考えた。また、第3図の下の2つの地形については、水路、旧河道などがあっても微高地に迫っているものは不便として示してある。

第3図から $\frac{1}{2}$ 以下程度の勾配から微高地に迫る傾向があり、8°くらいから再び水の便より他の要因に引かれて城館が立地していると言えるのではなかろうか。

第3図 地形別の城館の立地と水



ここでは単純に自然環境の面からの立地を見て来たが、本来城館の位置は、軍事、行政、生産、あるいはそれらを結ぶ交通と関係すると考えるべきで、本論は一つの見方の例と取っていただけると幸である。

また盆地内のうち、御坂山地山麓については調査用の1/5000の基図が入り出出来ないために省略した。しかし、甲府西部、特に竜王町、八田村、白根町などの扇状地上、甲西町、田富町南部などの低地には、報告事例がないのであり、開発史的な面から説明もつくが、有無についての確認も必要であろう。

資 料 編

甲斐國志士庶部一覽

市町村名	大 字	氏 名	市町村名	大 字	氏 名
甲 府 市	古府中	増山氏	牛奥村 中萩原村 上萩原村 千野村 ◇ ◇ 赤尾村 ◇ ◇ 下於曾村 ◇ 熊野村 ◇ 三日市場村 武七原 ◇ 小屋敷村 上井尻村	五味氏	
	穴山	亀山氏		萩原氏	
	酒折	酒依氏		羽中田	
	◇	信田氏		千野氏	
	桜井	桜井氏		◇	古屋氏
	◇	小倉氏		◇	村田氏
	川田	上畑氏		◇	保坂氏
	上今井	今井氏		◇	古屋氏
	下小河原	内藤氏		◇	飯津氏
	中小河原	山下氏		◇	田辺氏
	群村	加賀美氏		◇	池田氏
	西油川	油川氏		◇	深沢氏
	増坪村	増坪氏		◇	依田氏
	朝氣村	馬場氏		◇	乙河戸氏
	遠光寺村	土橋氏		◇	網野氏
	七沢村	七沢氏		◇	長田氏
	高畑村	秋山氏	◇	萩原氏	
	◇	◇	◇	網野氏	
	上小河原村	島田氏	◇	古屋氏	
	古上条村	窪田氏	葛 留 市	関戸氏	
	宮原村	桜林氏		兜村？	志村氏
	◇	松木氏		夏狩村	黒吉氏
	古市場	小林氏		谷村	中島氏
	関口村	関口氏		◇	程原氏
	堀内村	上野氏		熊井戸村	入野氏
	◇	神宮寺氏		金井村	
	高室村	高室氏		山 梨 市	古屋氏
大津村	石原氏	落合村			望月氏
上飯田村	飯田氏	八幡北村			市河氏
◇	尾沢氏	市河村			御道具氏
小松村	小松氏	江曾原氏	平岡氏		
山宮村	山宮氏	◇	丸山氏		
和田村	今福氏	大工村	◇		
千塚村	跡部氏	◇	岩手氏		
塚原村	塚原氏	岩手村	千塚氏		
上郷那村	水上氏	◇	上野氏		
川窪村	川窪氏	◇	大野氏		
富士吉田市	吉田	富沼氏	大野村	松本氏	
	上吉田村	佐藤氏	下栗原村	久保氏	
塩 山 市	牛奥村	牛奥氏	◇	中村氏	
	◇	田草川氏	中村	井尻氏	
	◇	萩原氏	下井尻村	依田氏	
			◇	野田氏	
			西後屋敷村		

市町村名	大 字	氏 名	市町村名	大 字	氏 名
	西後屋敷村 上神内川村 〃 〃 上原東 〃	古尾氏 三科氏 奥山氏 三沢氏 古屋氏 早川氏		倉科氏 窪平氏 〃 柚口村 〃 成沢村 室伏村 〃 〃 〃	倉科氏 武居氏 古川氏 若槻氏 水上氏 神津氏 竹居氏 望月氏 室伏氏 野中氏
大 月 市	黒野田村 下初狩村 白野	入野氏 武田冠者 島津氏			
蕪 崎 市	柳平村 三ノ蔵村 穴山村 駒井村上野 南下桑村 菅木村 上条南割村？ 折井村 入戸野村 門井村 下条南湖 上条東割 〃 門井村 水上村 上条南割 石尾村 上条南割 上条北割村蒔物御屋	平賀氏 横森氏 長坂氏 上野氏 鮎沢氏 菅木氏 山寺氏 折井氏 入戸野氏 伊藤氏 秋山但馬守光重 山木氏 丸山氏 門井氏、興石氏 水上氏 竹内氏 若尾氏 井上氏 藤巻氏	二 富 村	下柚木村	岡部氏 原氏 花輪氏 雨宮氏 岡氏
			勝 沼 町	綿塚村 山村 〃 勝沼村 下岩崎村 上岩崎村 〃 下岩崎村	綿塚氏 山村氏 河野氏 原氏 石原氏 志村大郎左衛門 雨宮宮内丞 中田氏
			大 和 村	鶴瀬村 日影村 駒飼村	佐藤氏 佐藤氏 渡辺氏
春 日 居 町	岡府村 加茂村 別田 下岩下 〃 鎖目 〃	辻次郎兵衛 甘利半次郎 芦沢氏 原氏 原田氏 鎖目市左衛門惟明 渡辺大郎左衛門	石 和 町	山崎村 〃 石和 〃 〃 中川村 〃 上平井村 井戸村 〃 東高橋村 四日市場村 広瀬村 八田村 〃	飯田七左衛門 辻連木氏 石和氏 春日氏 林部氏 赤尾氏 中村氏 平井氏 甘利氏 井戸氏 樽氏 内藤氏 上原氏 八田市之丞 八田村新左衛門
牧 丘 町	西保下村 〃 西保中村 集村 牧平村 倉科村 〃	武藤氏 岡氏 岡氏 岡氏 竹川氏 大村氏 大沢氏			

市町村名	大 字	氏 名	市町村名	大 字	氏 名
御 坂 町	上黒駒村	堀内村	豊 富 村	浅利村	飯室氏
	二宮村	二ノ宮氏		上九一色村	精進村
一 宮 町	栗合村	石原氏		〃	〃
	尾山村	小沢氏		梯村	〃
	成田村	堀原氏		本橋村	〃
	夏日原村	小沢氏	三 珠 町	八坂村	山口氏
	〃	夏日氏		高森村	内藤氏
	〃			上野村	…ノ瀬氏
	野呂村	野呂探次郎	市 川 大 門 町	市川大門村	落合氏
	〃	辻六郎兵衛		〃	〃
	〃	辻市助		〃	〃
	〃	辻勘兵衛		高田村	依田氏
	一宮村	金子氏		〃	渡辺氏
	中尾村	石原弥五衛門		下大島居村	小沢氏
	〃	早川半兵衛		〃	遠藤氏
	〃	脇又市郎		黒沢村	大木氏
	木小村	志村高内丞	〃	渡辺氏	
	中尾村	志村右近允	下大島居村	柴袋氏	
北野呂村	櫻下氏	六 郷 町	岩間村	巖間氏	
坪井村	吉原氏		〃	遠藤氏	
〃	杉田氏		〃	渡辺氏	
塩田村	槐原氏		〃	小林氏	
国分村	塩田氏		〃	竹川氏	
東新居村	田中氏		葛籠沢村	新倉氏	
上塚村	白井氏	〃	河崎氏		
〃	古屋氏	下 部 町	三沢村	三沢氏	
東原村	刑部氏		常葉村	常葉氏	
中尾村	岩間氏		湯ノ奥村	佐野氏	
〃	早川氏		常葉村	馬場氏	
八 代 町	竹居村	竹居氏	増 穂 町	春米村	河西氏
	〃	三沢氏		〃	高林氏
	岡村	岡氏		平林村	平林氏
境 川 村	南八代村	下氏	高下村	仙洲田氏	
	〃	野沢氏	歐 沢 町	歐沢村	河住氏
高家村	土橋氏	中 富 町		切石村	依田氏
中 道 町	白井河原村		小山氏	西島村	笠井氏
	下曾根村		長田氏	手打沢	深沢氏
中畑村	池谷氏		夜子沢村	川口氏	
心経寺村	五味氏				
右左口善藤	茅野氏				

市町村名	大 字	氏 名	市町村名	大 字	氏 名
	飯宮村 八日市場村	古尾氏 右尾氏		島上条村 中下条村	澁川氏 石原氏
早 川 町	塩野上村 塩野上村播磨 早川村 保村 〃 黒桂村 西ノ宮村 湯島村 余良田村 雨島村 小磯村 薬袋村 初嵐島村 薬袋村	大野氏 斎藤氏 早川氏 平岡氏 近藤氏 望月氏 辻氏 深沢氏 深沢氏 高岸氏 望月氏 薬袋氏 望月氏 佐野氏	玉 穂 町	柳楽寺村 中橋村 〃 柳楽寺村 中橋村 井ノ口村 一町畑村 下河東村	横屋氏 中橋氏 藤巻氏 柳楽寺氏 松野氏 井ノ口氏 田中氏 林氏
			昭 和 町	紙漕河原村 押越村 乙黒村 河西村 〃	丸山氏 在積氏 乙黒氏 石原氏 松木氏
身 延 町	人島村 粟倉村 下山村 〃 相又村 波木井村 大嶽村 〃 大島村 〃	大野氏 遠藤氏 下山氏 穂坂氏 武田氏 波木井氏 若林氏 佐野氏 大志万氏 青柳氏	田 宮 町	布施村 山ノ神村 白井阿原村 藤巻村 花輪？ 東花輪村	吉郡氏 三ツ井氏 豊場氏 藤巻氏 花輪氏 田中氏
			八 田 村	下高砂村	三枝氏
			白 根 町	須沢村 有野村 〃 飯野村 飯野新田 在家塚村 西野村 百々村 西野村一鶴組？ 今諏訪村 〃	名飲氏 矢嶋氏 有野氏 飯野氏 堀原氏 若尾氏 中込氏 清水氏 功刀氏 今諏訪氏 金丸氏
南 部 町	中野村 木郷村 井出村 内船村 十島村	佐野氏 木郷氏 佐野氏 四条氏 戸栗氏			
富 沢 町	福上村 万沢村	佐野氏 万沢氏			
竜 王 町	竜王村	西山氏			
敷 島 町	吉沢村 湊戸村 福沢村 神戸村 蘆沢村 中下条村	吉沢氏 湊戸氏 福沢氏 神戸氏 蘆沢氏 羽中田氏	若 草 町	浅原村 〃 野呂瀬莊？ 鏡中条村	五味氏 東氏 野呂瀬氏 松木氏
			櫛 形 町	平岡村 曲輪田村	中込氏 東条氏

市町村名	大 字	氏 名	市町村名	大 字	氏 名
	曲輪田村 宮地村 山寺村 下ノ瀬村 中野村 小笠原村 *	小林氏 宮路氏 野中氏 板田氏 入藏氏 磯泉氏 竹川氏		村山西側村 箕輪？ 下黒沢村 箕輪村 *	小宮山氏 清水氏 米倉氏 清水氏 八巻氏
甲 西 町	東南部村 大井ノ郷？ 落合村？ 戸田村 * 落合村 * * 鮎沢村 占市場村 * 宮沢村？ 古市場村 西南部村 和泉村	加賀美氏 大井氏 武藤氏 富田氏 蜂貝氏 河村氏 時田氏 新津氏 鮎沢氏 大久保氏 市川氏 宮沢氏 岡川氏 小尾市 大木氏	長 坂 町	八八田村 波沢村	稻内氏 波木井氏
			白 州 町	片瀧村 横手村 白須村 牧ノ原村	曲瀬氏 横手氏 白須氏 教米石氏
			武 川 村	柳沢村 宮ノ脇村 * 山高村 牧ノ原村 *	柳沢氏 宮ノ脇氏 米倉氏 山高氏 喜木氏 牧ノ原氏
			西 桂 町	上暮地村 小沼村 * 倉見村 * * 小沼村	上島氏 滝口氏 渡辺氏 小林氏 河村氏 長島氏 渡辺氏
			忍 野 村	忍野村	渡辺氏
須 玉 町	小尾村 大豆生田村 小倉村 * 大蔵郷？ 界ノ沢村	小尾氏 藤巻氏 丸茂氏 小倉氏 大倉氏 岩下氏	河 口 湖 町	大石村 河口村 * *	渡辺氏 川口氏 高橋氏 野沢氏
			足 和 田 村	長浜村 大嵐村	三浦氏 三浦氏
高 根 町	小池村？ 村山北部村 村山西側村	小池氏 坂木氏 山下氏	上 野 原 町	犬目村	上条氏

市町村名	大 字	小 字	小 字	市町村名	大 字	小 字	小 字
	松山	城山東 城山南 西廻ノ内 的場 廻ノ内 新屋敷前 新屋敷 古屋敷 竹ノ花 馬場	沢畑 田畑 田尻 新田		印沢 山家	西条林 下馬 御堂の下 的ノ 城の峯 馬込 岸下 向屋根 西屋根 的馬 家の下 丸屋根 市窪 西屋敷 家の上 居屋敷 若宮 門 大明地 近萩 後 間角 家の前 武奈 古屋敷 城の下 家後 前山 家ノ前 備前	東田 大畑 西畑 平畑
	新倉	古屋敷 新屋敷 馬場 堀内	大畑 出端				
	大明日見	新尾敷 古屋敷	田浦 田頭 柳畑				
	小明見	的場	田中 高畑山				
	上暮地	前田 姫居地 殿の入 新屋敷	河原畑				
市川大門町	市川大門町	西条 大門 御屋敷 羽場 西羽場 御弓削 前山 西条林 御前 別荘 前田	大畑 砂山畑		黒沢 下大鳥居	西田 前田 富田 高畑 釜田 宮ノ畑 前畑 辻 進場	
	高田						

市町村名	大 字	小 字	小 字	市町村名	大 字	小 字	小 字
	八之尻	御入道 別所 別所沢 堂	扇子畑 前畑	六 郷 町	岩間	屋敷山上 屋敷山	坪の内 沼田 三反田 池田 市ノ坪 狭間田 石畑 細田 細田前
上九一色村	梯 古岡 精産 木柄 上九一色村と三珠町の境	屋敷 城山 城下	野畑 飯田 人和田 東和田 下畑		楠甫 落居	馬道 大名	梅田 板田 長畑 市ノ坪通 山口 山田前
下 部 町	車田 樋田 峯 山家 上田原 古岡 中之倉 丸畑 常葉	家の前 真門 中屋敷 家の下 馬場 中屋敷 屋敷	柳田 西畑 田中 田之上 境畑		五八 岩下 寺所 宮原	城山 家の前 城山 古屋 家の上 城口 矢の下 鍛谷前 御讀ガ	東畑 高田 迎田 東下田 西下田 下田 下田林 中田 沢田 清田
三 珠 町	下芦川 三根 高萩 中山 畑熊 上野 大塚	駒場 屋敷平 欠中 一城林 郡込	時畑 丸畑 畑熊向 前畑 神田 後田 前田		葛籠沢 鴨狩津向	南原敷 原の前 屋敷前 家の前 家附 御鶴林	

市町村名	大 字	小 字	小 字	市町村名	大 字	小 字	小 字																													
石 和 町	川中島	南鍛冶屋敷町	松葉畑東町	一 宮 町	下矢作		西田																													
		鍛冶屋敷	松葉畑南町				平井田																													
	八田	大郭	松葉畑北町		小 城				石田																											
		上屋敷	兵部畑町						二ノ宮田																											
	市部	三條柿ノ木町	六反田						北郡塚			横田																								
			仲田町									丸音田																								
	四日市場	白山町	一丁田中									本郡塚			漆田																					
			籠田町												榎田																					
	広瀬		塚田町												一の宮		寺屋敷	霧田																		
			前田															久保田																		
	中川	竹之花	早稲田															末木		車居	八ノ坪															
			満中田																		伊勢田															
		中薬地	月ヶ田																		竹原田			込矢田町												
			一町田																					後田												
		六角	五反田																					糠掛			日出田									
			大坪																								左次田									
	上平井	御堂	後田																								園分		掘米	桜坪						
			小山田																											塚田						
			下前田																											金田		安屋敷	下高見田			
			上前田																														上高見田			
	下平井	南門	午新田																																築地	久保畑
			大豆生田																																	末木田
			真行田																																	
東田			一丁田町																																	
山崎	古屋敷	後田																																		
		向田			沖田町																															
松本	三門	神田																																		
		小石田							後田町																											
磨柏		池田																																		
		北畑										六反																								
東油川		鎌田																																		
		稲子田													北前田																					
小石和	柳向	高田																																		
		上堰																餅田町																		
	横田																																			

市町村名	大 字	小 字	小 字	市町村名	大 字	小 字	小 字
			下深田町 矢作田町 下畑ノ町 上畑ノ町 上町田町 下町田町 奥田町 広瀬房田町 柿木田町 東畑町 高畑町 南畑町 柿木畑町 是間田町 神出町 西田町 桜畑 向田 北畑 南畑 和田八 壁敷田 一丁田 芝原田 田中前 拾八丁 上後田 下後田 東前田 南前田 西前田 南西田 小山田 東田 西田				長寿畑 荏畑 柳坪 一町田 角田 横田 前田 後田 大新田 小新田 柿田 柳田 久保田 横田 東一丁田 西一丁田 絵馬田 島田 米田 前田 上向田町 前田町 中田町 下向田町 宮田町 西田 柳田 久保田 三敷田 東原田 西原田 深田 後田 松ノ木田 桑原田
	東原	菜前 後地 矢倉			市之蔵	武者塚 御曹子塚	
					塩田	西門	
					新巻		
	国分 坪井				塩田	徳門 北魁 西門	
					神沢		
					土塚	横市 の場	
	田中				東新居		

市町村名	大 字	小 字	小 字	市町村名	大 字	小 字	小 字
			下久保田			上屋敷西割	
			松山田		石		南田
			上窪田				狭間田
			中山田				前田
			穴田				後田
	狐新居		五反田				吉田
	狐新居	横大門	砂田		上矢作		西田
		塩田掘	横田				狐畑
		横市	六ツ切				下畑
	金沢		入木田				猿田
	金沢	鯉塚					桜坪
		堀込					横吹田
	地藏堂		日出田				平井畑
			松木田				五反田
			柳田				欠田
			山崎田				鍋田
			東田				柳田
			西田				おき田
			前田				馬乗田
	石		田村				甚七田
			田村南				荒田
			襖田				横田
			塚田				下八反田
			蝦夷田				上八反田
			彼岸田				東田
			間ノ田				西前田
			油田				角田
			西田				東畑
			覆田		中尾		御幸田
			保木田				前畑
			柳田		南野呂	大城	西田
			窪田				向田
			後田				北宮田
	千米寺	北屋敷西割	前田				宮田
		南屋敷西割					梅坪
		北屋敷東割					

市町村名	大 字	小 字	小 字	市町村名	大 字	小 字	小 字
	中尾	白山	塊田 御所田 西田 横田 流田 久保田 鍋田 柳田 沢田 前田 二反田 大熊田 五反田			佃	松ノ木田 奥向田 向田 北明水田 南明水田 五反田 四反田 神田 仲坪 七反田 上釜田 久保田 尺田 横田 榎田 煤坪 小塚田 白光田 國會田 敷田 下釜田 東畑 八溝田 彼岸田 三録田 五反田 仲畑 八反田 鶴田 小町田 横田 會利田 久保田 塚田
	北野呂	大城 竹ノ花 大門	梅坪 角田 塊田 西田 塚田 前田 卯ツ木田				
境川村	大黒坂	御堂 上屋敷	横田道東 横田道西 長畑 前田 山田 四石田 間ノ田 神田 會利田 仲坪 久保田 新畑 横田 一丁田		三們	掘向	
	小黒坂				大坪		
	小山				大窪	下破場 破場	
	前開田				藤笠	御所山 後子の神	
	石橋	先屋敷					

市町村名	大 字	小 字	小 字	市町村名	大 字	小 字	小 字
	寺尾	間門	向田 前田 松葉田 大石田 別当 日影田			平屋敷 八屋敷	町田 久保田 西田 前田 東畑 狐田 会下田 夕顔田 四反田 北田 五厘田 一丁田 北反保 深田 一丁田 塚田 横田 松木田 広田 長門田
豊 富 村	木原 高部 浅利 大鳥居 関原	前山 馬込 城原 前山	後田 後林 一の出野 早稲田 前田 久保田 鶴田 横畑 神田		白井 下會根	居屋敷	
中 道 町	右左口 中畑 心経寺 上向山 下向山 上會根	城越 門林 別所 馬栗窪 別所 番屋 屋鋪 前山 城越	前田保 窪田 下田保 前田 横畑 南田 西田 上ノ田 横田 又田 上ノ田 山田 深田 前田 三畑 三枚畑 石原田	御 坂 町	藤野木 上黒駒 下黒駒	下屋敷 古屋敷 元古屋敷 古屋敷 馬草場 御馬休所 新屋敷 大原敷 深堀 下屋敷 熊屋敷	松之木田 北五反田 南五反田 南田上割 南田下割 尾山田

市町村名	大 字	小 字	小 字	市町村名	大 字	小 字	小 字
			柴藪畑 南長田 大長田原 中長田原 北長田 二反田 向田 中田 ヒエ田 神田 ネギ田 カニ田 鎌柄田 午新田 国田 梅坪 山ノ田 塚田 柳田 石田 大ノ田 長田 後畑 方八丁 一丁田 烏田 保良田 扇田 横畑 新畑 前田 河内田 内田 田代 後田				原田 神田 反田 大豆田 豆田 前田東 前田西 西新田 東新田 四反田 麓田 東田 西田 松ノ木田 原田 原畑 久保田 前田 神田 青木田 阜角子田 大田 寺田 三丁田 二反田 水田 松之木田 後田 扇畑 横田 市六 向田 南畑 高畑 高田
	夏日原				下野原		
	二之宮				蕎麦塚	馬込	
	金川原 井之上	馬込			竹居	白山 八田村屋敷 内山	
	八千歳	居屋敷			大野寺	城山	
	尾山	大堀			成田	地耕免	

市町村名	大 字	小 字	小 字	市町村名	大 字	小 字	小 字
	増利	門ノ内 屋敷ノ内 土居 南土居	大山田 田畑 下籠田 中籠田 上籠田 四反田 鎌田 東鎌田 反田 上反田 五反田 一町五反 欠ノ畑 御堂畑 角田 日籠田 山塚田 蓬田 下蓬田 石原田 神田 小塚田 下石原田 下田		米倉	御所	福田 砂田 仲田 安事田 泉田 袋田 鵜田 西田島 田島 鍛冶島 前田 花田 梓田 向田 角田 米田 砂田 三反田 山田 蟹田 久保畑 前田 砂田 梅ノ木田 青木田 五反田 三反田 松木田 八反田 北畑 茶畑
	大間田 永井	仲屋 古屋	柳田 五反田 横田 宮田 池田 桜坪 穴田 丁田 角田		竹居 奈良原	殿屋敷 中屋敷	
				都 留 市	上谷 下谷	御所 南家跡	根田人 深田

市町村名	大 字	小 字	小 字	市町村名	大 字	小 字	小 字
		鍛冶原坂					和田
	小野	鍛冶原坂	十二期				
		御殿	下ノ田	鳴 沢 村	鳴沢	的場	藤和田
		雁丸				稲の内	
	法能		田代			家上川原	
			引野田			釜の口	
	玉川		前田			上釜の口	
	戸沢		西畑			西釜の口	
	十日市場	馬場久根	下の田			屋坪	
		馬場舟	馬場舟沢田			物見所	
		辺殿	祖里畑				
	夏狩	御所海戸	榎田	塩 山 市	千野	八桑田	身洗田
			祖里畑				青田
			里内		上於會	旗板	反田
	鷹留	馬場	反保(たんぼ)			油免	四反田
		門原	田屋		下於會	旗板	船田
		門原裏	高畑			元旗板	間ノ田
			おいし畑			字賀屋敷	源吾田
	境		下反保				八反田
	川棚	中屋敷					一の坪
		城山					扇田
	古川渡	屋敷	横田				杏田
	井倉	馬場					柳田
	川茂	渡場	大輪田				清水田
		魁ノ内	太場田		赤尾		栗原田
			西田				相之田
			馬場田				久保田
			細田				池田
	小形山	魁ノ内			上塩後	堀屋	横田
	田之倉	政所	田代			秀森前	
		馬場			下塩後	下塩後境	
	朝日馬場	馬場下下	和田		下萩原	御殿	和田
		中馬場				平城	東田
		馬場之上				深堀	大の田
	朝日會社		長畑				山内

市町村名	大 字	小 字	小 字	市町村名	大 字	小 字	小 字
	西広門	西廻	東田 東田 芦原田 起田 深田		藤木	竹之内 畑原敷 御所平 辻屋敷 南廻込 諺所 北願入	覆田 松栗田 清田 原田 仲田 一ノ割 二ノ割 三ノ割 四ノ割 五ノ割 前田 久保田 蟹田 北堀 奥蟹田 大石田 矢坪 奥矢坪 久名田 御嶽前田 中田前田 室屋平
	西野原	的場 小別所 大別所 城ノ坂	一の坪 西田 五反田 角田 須貝田 前田 上整田 下整田 后畑 前田 反田 釜田		下槌木		前田 久保田 蟹田 北堀 奥蟹田 大石田 矢坪 奥矢坪 久名田 御嶽前田 中田前田 室屋平
	熊野				下栗生野	洗在家	長田 柳田 前田 北田 中田 前田 向田 神田 北田 柳田 池田 東田 塚田
	牛奥	中丸 甲戸（かぶと） 十二所 大堀沢 馬水	塚田 泓田 爪田 加藤田 楠木田 仲田 新田 石打田 榎田 六反田 下六反田 仲田		上栗生野		
	上井尻				中萩原	下萩 的石 馬込	
	三日市場	下廻 上廻 屋敷添 中堀 平原敷			平沢	牛屋敷	
	小壁敷				福生里 竹森		

市町村名	大 字	小 字	小 字	市町村名	大 字	小 字	小 字
	上萩原 上小田原 下小田原 一之瀬高橋	殿林 藤尾敷 的場 門 鍛冶屋向 鍛冶屋沢 刑部平	時田 餅田 余里 変行田 松口 前田 寺島 上条 大の田		初狩町下初狩	F門原 御廻し下 下門原	西田 田ノ入 下ノ田 大ノ田 丸田 横畑 板取畑 丸畑 西田 田ノ入 下ノ田 大ノ田 丸田 横畑 板取畑 高畑 中丸 田辺
大 月 市	笹子町黒野田 笹子町白野 初狩町中初狩 初狩町下初狩 初狩町下初狩	大庭 庭岡 大垣外 東屋敷 鍛冶西 西屋敷上 西屋敷下 鍛冶東 長殿 上ノ原敷 地古城 御廻し 三敷丁 御廻し下	大畑 本畑ヶ 西畑 猿畑 向田 日影田 中田 奥丸田 黒畑 山田和 大畑 門和田 下丸田 黒畑 上田 丸畑		大月町大月 大月一丁目 大月二丁目 御太刀二丁目 大月町花咲 大月町真木 殿岡町奥山 殿岡町岩殿 殿岡町畑倉 七保町 七保町下和田	御立原 御立原 駒門 内尾敷 坂田 嶺鼻 中丸 佃 中丸 岩殿山 ホリ ヲヤマ 馬剣場	前田 向田 奥畑 前田 川原田 幸の田 小和田 大島田 下井尻田 下鼻

市町村名	大 字	小 字	小 字	市町村名	大 字	小 字	小 字
七保町駒宮 七保町葛野 七保町瀬戸 猿橋町猿橋 猿橋町藤崎 猿橋町朝日 小沢 猿橋町殿上 猿橋町小沢 猿橋町小篠 富浜町鳥沢		北海戸	和田原	富浜町宮谷 柴川町塩瀬 柴川町立野 柴川町綱ノ上 柴川町新倉 春日居町 別田 桑戸 小松 加茂 国府 銀目 徳条	西廻ノ内 東廻ノ内 袴着 西袴着 白山 堀向 馬場 本郷 門口 表門 竹の花 竹内 の場	金畑 強和田 彦田 彦田下 殿畑 桑田 仲田 仲丸 中川田 柳田 田草山 前田町 東田町 深田町 白井 梅木田 五反田 神田 長田 西田 梅木田 道田町 門田 小島田 上野田 前田町	
			和井尻田				
			桑田				
			和田原				
			小田良				
			大田				
			小穀田				
			八坪				
			中和田				
			和田向				
			和田				
			上和田				
			前畑				
			北鼻				
			大田畑				
			中畑				
			前田				
			高畑				
小田							
桑田							
茶畑							
下ノ田							
下田中							
山田							
上田中							
田川原							
向田							
田代							
鶴田							
前田							
原田							
北廻ノ内							
南廻ノ内							
竹ノ入							

市町村名	大 字	小 字	小 字	市町村名	大 字	小 字	小 字
大 和 村	木賊 田野 初鹿野	大門下	田野平				上駒井
			水野田道上				竹ノ原
三 富 村	上柚木	馬込					鞍掛
							下駒井
藤 沼 町	勝沼	加々屋敷 御所 水上屋敷 別所 竹ノ原 五味屋敷	北境出				彦右門久保
			南境田				駒井沢
	等々力		清水田				石原田
			横田				馬込
	深沢	御所向上 御所平 竹之後 大築地 御所畑 雁屋敷	沖田				馬込之丙
			西田				山
	下岩崎		辻田				竹内
			柳田				城ノ坂
	上岩崎	城正寺 大門先	柳木田				南門
			東畑				休息
			前田				大門後
			漆田				鶴塚
			久保田				の場
			岩田戸				
			石原田				馬畑
			仲田				
			深田				小山田
			番匠田				
			米田				
			山田				
			東畑				
			七反田				
			田中				
			横田				
			上新田				
			狭田				

市町村名	大 字	小 字	小 字	市町村名	大 字	小 字	小 字
		馬飼場					
人 泉 村	谷戸	城南 町屋			宇津谷	家ノ上 元屋敷 宇津橋 笠石裏	大坪 大之田 田畑 神田
白 州 町	鳥原 花水 横手		荒田	高 根 町	長沢	住居場 榎木前 家中 上手林 原家の前 尾敷付 石堂 家の前 御別当 城平 月の木 古城跡 西下木戸 東下木戸 御堂久保 東上木戸 西上木戸 城の腰 堤上 堤東 堤前 堤 原屋跡 矢捨 陣の下 熱那	広畑 西荒畑 平畑 深田 大川田 洪田 田上原 米田 田の尻 大坪 大坪東 大坪原 大坪尻 細田 用田 東田 民部田 稲荷田 栗の木田 大石畑
武 川 村	牧原 三次 山高 黒沢 新奥 宮脇 柳沢	門藤 新左衛門原 占屋敷 大小路 一丁田 竹の花 月敷田 竜ヶ馬場 壘場 殿田	向田 宮園田 仁田々 山田 大石田 深田 向田 下田 中田 籠畑 向畑 仲田 深田 后田		東井出 川俣 堤 村山北割 箕輪新町 箕輪 村山東割 村山西割		
双 葉 町	竜地 下今井 岩森 志田	空間 御座石 立間 上水 古打 治郎兵衛打 東廻 家ノ前	神田 上の段 間ヶ田 冷田				

市町村名	大 字	小 字	小 字	市町村名	大 字	小 字	小 字
	小池	前田 丸戸 後原	池田			西表	
	五町田	御所 竹後内	大坪 柳田 口ヶ坪		葦崎町祖母石	古敷坂下 古屋敷	
	上黒沢 下黒沢	前田 後田 馬場 向林 前田 土城 念場原 月の木 半の木 前田 下の場	沢田 仲田 以後田 日影田 大塚田 似田 日影田 海田 鞠田 久保田		葦崎町西岩下	古敷坂下 ハツ藏 前屋根	
	清里				葦崎町岩下	八重堂 前田	
	浅川				葦崎町上の山	馬口 内廻 北廻 外輪京 高堂	
					總坂町上今井	屋敷尻	
					◇ 長久保		平畑
					◇ ミツ沢	新前	西の田
					總坂町宮久保	高附 郷地	東の田 芝原畑
					◇ 三之藏	屋敷日影 牛ヶ馬場 堂平 屋敷 馬場 トリデ	五反田 向畑 アノ田
須 玉 町	下津金 若神子 大豆生田 藤田	御所 竹の内	和田 下和田 大豆生田 藤田上 藤田下 後藤田 下仲田上仲田		總坂町柳平	久保の前 久保の後 蛭山 中屋根 高見堂 屋敷平 亮地	ミドウ畑
	江草	中村下仁田平 根占屋 馬場				小屋場 三ツ頭 上の田 後田	ピワ畑
	小尾	御門南 御門北 方伝 戸屋	和田				
葦 崎 市	葦崎町	屋敷 東裏 屋敷前 北ノ内	向田 大坪 下反畝 下向田		葦崎町南ト条		冷田

市町村名	大 字	小 字	小 字	市町村名	大 字	小 字	小 字	
	藤井町駒井 ◇ 北下条	西御門			清哲町折居	古屋敷	上反保	
		後田	榎田			鳥屋	下反保	
		田中地				大根場	木戸田	
		上横屋					南田	
		下横屋					上南田	
	中田町小田川	殿田			清哲町青木	後田	下南田	
		堂坂上				東屋敷	竹原田	
		屋敷浜	蓬田			西屋敷	東畑	
		馬場	大地田			老別当	東田	
		後地	起田				南田	
	中田町中条	前田	田向		清哲町水上	家の前	山田	
		城山	榎田			前林	下の田	
		オキドノ					此の田	
		能見城	下本田			清哲町礎ノ口 神山町北宮地	矢口	東田
		跡屋	中本田				破場	向田
	前林	上本田		神山町鋤山	城山		柳田	
	西向	薫田			御堂西		阿原田	
		石の坪					番匠畑	
		山畑				西畑		
		高畑				東畑		
円野町下円井	柳の後 堀切	柳田	梨子木畑	神山町武田		東田		
		柳坪				山田		
		仁反田下				南反保		
		仁反田				東畑		
		湯田						
	円野町入野	皿の子田			旭町上条北朝 旭町上条中朝	久保屋	久保屋	
		宮畑				竹の花	穴田	
		池田				鍛冶屋	梅木田	
		瀬戸田					二反田	
		北の畑					洗田	
円野町入野	前田	南山田		旭町上条東朝 旭町上条南朝	二階原	山田		
	大門山田	半縄田			大御勅使	塚田		
	堀切	北山畑			外御勅使	羽中田		
		南山畑				横田		
						北山田		

市町村名	大 字	小 字	小 字	市町村名	大 字	小 字	小 字
	大草町岩尾	上手屋敷 竹の下	岡田 仲田 人坪 東田			別当 房屋敷 小屋敷 門田 古屋敷 後田	三反田 浪田 塚田 窪田 原田 餅田 西田 曲田 小和田 西和田
	大草町 上条東割 大草町 下条東割	築地 前田	河原田				
	大草町 下条西割	下馬城 蔵原敷 前田	下条 漆田 八幡田 つる 鶴巻田 大畑 久保田 砂田		長坂下条	新居 下屋敷 前田 紺屋 鍛屋森 五味屋敷 古屋敷	
	竜岡町 若尾新田 竜岡町 下条東割 竜岡町 下条南割	屋敷 門閉	御座田		塚川 塚川		大之田 細田 東前田
長 坂 町	中丸	城山上 古屋敷 信玄原 内城 屋敷付 十郎林 上の屋敷 寺屋敷 菅沼 西下屋敷 東下屋敷 総屋敷	阿原田 長畑 板畑 松の木田 人の田 中田 菅沼		浪沢 長坂上条	佃 西屋敷 前田 酒呑場	油田 神田 和田 反田 向田 鍋田 西田 東田 五良田 十二曲
	小荒間 白井沢						
	大井ノ森 夏秋	上之屋敷 夏秋	神田 神田 治郎田 柳田 向田 石原田 小畑田	南 部 町	中野	治家	辨田 淵田 中條 大裏 中田
	大八田	柳新居 南新居			本郷	杉尾 治家 大別当 馬場	五反田 荒田 向田

市町村名	大字	小字	小字	市町村名	大字	小字	小字
	成島	飯米場 馬込 府の内 竹の花 御所嶋	田中	鯉沢町 (鯉沢町)	深堀	薄田 北畑 東田 中田 草畑 八幡 薄田尻 西畑 萩田 棚田 柳田 田中 枝畑 西畑 金畑 丸畑	
	柳島	御所村	山田 内田 外田	長知沢	馬籠	西畑 萩田 棚田 柳田 田中 枝畑 西畑 金畑 丸畑	
	南部	古城山 城山	蟹田 南田 増田 渡田 南田 東田	箱原 鳥屋 柳川 十谷	屋敷沢	西畑 萩田 棚田 柳田 田中 枝畑 西畑 金畑 丸畑	
	塩沢	竹の花 入口 南の入 竹ノ後 万京	赤畑 吉田 日蔭田 上ノ田	鹿島 駅前通り 一丁目		西畑 萩田 棚田 柳田 田中 枝畑 西畑 金畑 丸畑	
	大和	西の入 出の入	赤畑 吉田 日蔭田 上ノ田	八幡	古屋敷	西畑 萩田 棚田 柳田 田中 枝畑 西畑 金畑 丸畑	西田 前田
	内船	馬場道上 馬場道下 古御所 外占御所	外中田 内中田 深田 山田 寄畑	中富町	西島	南馬門 的場 城山 仙畑	桑木畑 一里塚
	井出	矢来場 城山	東畑 内田		下田原		広反歩 早稲田
	井出	竹ノ上 大段 大領 相屋敷	東畑 内田		富木	雑仕場	井戸田 下和田 中畑
	十島	御判之木 的場 小別当	佐ノ田 幸之田		矢細工	家の前 屋敷平	
	上佐野	湯殿	前畑		古長谷	上屋敷	下畑
	下佐野		宇登田		江尻窪	家の前 遠見場 矢坪	細工田 前田 古屋戸
					遅沢	家ノ前 家ノ後	

市町村名	大 字	小 字	小 字	市町村名	大 字	小 字	小 字
中山	城山	前田	梨ノ木田		寺沢	後林	
				八口市場	竹ノ花 庭床	天神畑 桐木畑 田頭 前畑 長畑 前畑 水田 前田北割 前田南割 前田向割 沢田 田ノ頭 大畑 向田 大畑 盤田 桜畑 中田 中田 柿田 北畑 西条 大畑 田畑	富 沢 町
伊沼				早 川 町	小縄 赤沢	奴多 瓜込 奴多ノ尾 故城 出ユミ 巾ノ城止 宇城止 畑向 西御料 御料平 宮城 家の下	
飯富	前尾敷				葉袋 千須和		家の上
下田原					塩之上		前畑 梨木畑
平須	大門 木割場				新倉	別当代 堀越 栗城	
久成					湯島	行事山 仙城 湯殿 栗城山	櫻畑 日向畑 扇畑
久成					大島 雨畑	馬場 まこめ	尾畑 和田 長畑 行田 前畑
大塩	番場 的場 古屋				京ヶ島 草塩		前畑
手打沢	屋敷添 馬放場 南城房 北城房						
夜子沢	馬場 郷宅 家ノ上		弥宗畑 宮畑 塚畑 大石田 松葉田 榎田				
寺沢	城山						

市町村名	大 字	小 字	小 字	市町村名	大 字	小 字	小 字
	西之宮 黒桂 早川 大原野 傳坪 笹走 新倉	的原 丸岳 家之前 木切戸 家の前 暖所 ゴミ所	長岳 長畑 沢畑 長畑 日陰畑		高下区 平林区	上在家 小畑場 中屋 養焼場	萩畑 中田 久保田 仙洞田 北畑 東畑 向田 栲畑 北神田
増 穂 町	最勝寺区 天神中条区 大久保区 春米区 小林区 長沢区 大鶴区 青柳町 小室区	外堀田 甘藷 下殿原 上殿原 城山 大堀田 甘藷 前田 北門 前田 北山 竹重 竹重西 竹重東 甘藷 田島屋敷 熊野堂 甘藷 田島家敷 町原口	宮田 猿尾田 神田 北田 下田 遠田 南田 高尾田 中尾田 前田 河原堀田 蟹田 八反畑 北の田 西田 田ノ頭	身 延 町	栗倉 下山 身延 梅平 波木井 人野 小田船原 大城 相又 清子 光子沢	堀切 殿前 古屋敷 楡山 西裏（家の前） 東裏（家の上）	横和田 本田 西畑 北畑 南大畑 日影田 早稲田 山田 山田下 和田 下小田 上小田 南小田 長畑 重田 櫻畑 田頭 柿畑 栗田 長畑

市町村名	大 字	小 字	小 字	市町村名	大 字	小 字	小 字
	横根中 下八木沢 帯金 大笠 角打 大崩 和田 大島 樋之上 棒草里	家之前 大名 西門 の場 馬込 湯別当 稻切 家之前	大畑 内田 谷ッ田 嶋田 庚申畑 雪田 前田 谷田 大出 上畑 柿田 田之上 櫻田 細畑 前ノ田 荒田 荒田山 人田 向田 向田 田沢 作ノ田 鞍田		塚原 川上 江原 古市場 刑沢 清水 戸田 田島 田島 西南湖 和泉 東南湖	黒込 角塚敷 屋敷添 踏場 藁地 尾敷 東藁 古屋敷 の場 番屋 堀切 馬籠 屋敷前	田阿 後田 山ノ田 鼠田 中田 西畑 櫻田 起田 久保田 前田 櫻田 上鎌田 下鎌田 人田 川原田 清水田 沖田 行田 上戸田 中戸田 下戸田 南戸田 油田 小坪 中川田 沖田 時田 時田 横川南畑 小松田 沖田
甲 西 町	落合 秋山 湯沢	下原敷 角尾敷 兵衛 兵衛北 御前山	西畑 穴田 漆田 中之坪 久保田 前田 前田 西田	昭 和 町	西条一区 清水新居		

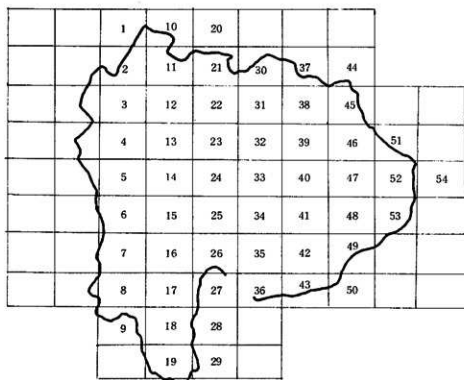
市町村名	大 字	小 字	小 字	市町村名	大 字	小 字	小 字
	西条新田 押越	殿屋敷	砂田 西五六 東五六 西道田 東道田 小代 道田 柳田 中田 十二枚 柘榴田 四ッ田 沖田 一町田 前田 束田		高尾	大門	八反畑 中ノ畑 南畑 北畑 前田 久保田 柳田 新居田 中畑 長田 美和田 西畑 留坪 南条 前田 田頭 仲田 中ノ田 西田 西畑 大畑 芝奈田 上ノ田 八反田 北山田 東田 南山ノ田 石原田 久保田 大畑 小僧田 北田 中田 五反田 塚田 畑田 西田
	河東中島				平岡	御手作 後原敷 六科山駒劇場	
	紙漕阿原				上宮地		
	築地新居 飯喰	金屋敷 屋敷添	田之神田 横田 宝田		曲輪田 上野	境廻	
	上河東				上野 中野	西廻田 古原敷 城山	
	西条二区	前切			上市之瀬	宝殿	
鶴形町	小笠原 山寺 桃園	の場 御所庭 殿所庭西 下屋敷	西畑 八田畑 立畑 前畑 入田 日蔭田 南田 下南田 高尾畑 北畑 西条 中井畑 東畑 寺畑				

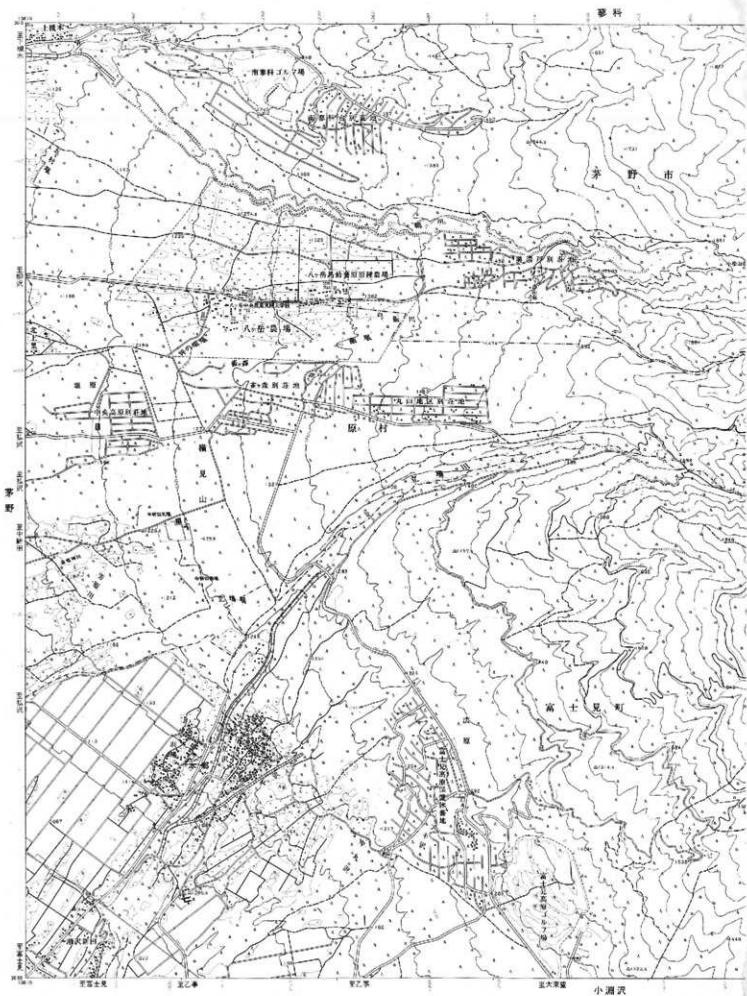
市町村名	大 字	小 字	小 字	市町村名	大 字	小 字	小 字
	上今井 吉田 十五所	古屋敷	天神畑 中畑		上三条 下三条	馬洗 竹の花	五反田 下島田
芦 安 村	芦倉 安通	古屋敷 古屋敷西 家ノ前	サガ畑 八丁平 上ノ田	田 富 町	山の神 布施 西花輪 東花輪 大田和	古屋敷 三味屋敷	袴田 神田 一丁田 五丁田 下条 久保田 仲道 西園田 中田畑
竜 王 町	竜王 竜王新町 糠原 西八幡 玉川	東裏 西裏 東裏 西裏 高札前 馬の口 畑の内	神田 神田 五反田 田中 田福 施敷鬼田 東中田	敷 島 町	大下条 中下条 島上条 境 亀沢 津戸 獅子平 上管口 下管口 安寺 神戸 下福沢	御証作 大庭 御領 家ノ前 家ノ裏 古尾敷 家之上 家之詰 門ノ坂 窪屋敷 下尾敷 屋堂	深田 餅田 御岳田 柳田 前田 冷田 石原田 塚田 大石田 神田 横田 上ノ田 芝ノ田 広畑 南畑 田代 窪田 切畑
玉 穂 町	中棚 成島 極楽寺 乙黒 卜河東 一町畑 町之田	堂ノ前	相之田 田通 一町田 中田 二反 一町田 前田 下田 横田 柳畑 砂田 五反田 二反田 八反田 十二反 青六 稻積 稻積				

市町村名	大 字	小 字	小 字	市町村名	大 字	小 字	小 字
	上福沢 下芦沢 上芦沢 吉沢 千田 大久保 打返	人屋 上ノ段 御領 屋敷門 上の段 家ノ間 家ノ後 家ノ裏	内田 上田保 日影畑 會利田 平見条 窪田 根田 中反 漆畑 反 笑畑 池ノ畑 前畑 突田 東畑	下今井 鏡中条 白根町 佐家塚 西野 上今諏訪 下今諏訪 百々 上八田 曲輪田新田 築山 有野 須沢	的場 堀金 古屋敷 殿田 竹ノ花 横畑 横畑 御柱 堀上 竹ノ内 大門東 大門西	大井田 久保田 反田 八丁 丁向 仲畑 西和田 東和田 後畑 後畑 前畑 後畑 東畑 中畑 五丁 柳畑 柳畑通 山田 田尻 南田 東田 狐畑 河原畑 河らし畑 下畑 はば田 大田和	
若草町	寺部 加賀美 十日市場	押堀 押堀 含中 屋敷前 穀治屋敷	八丁 餅田 一丁田 十二枚 東前田 石原田 西前田 鵜田 角畑 深田 西八反田 東八反田 大豆田 西前田 東前田 前田道下				

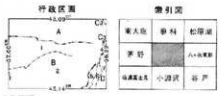
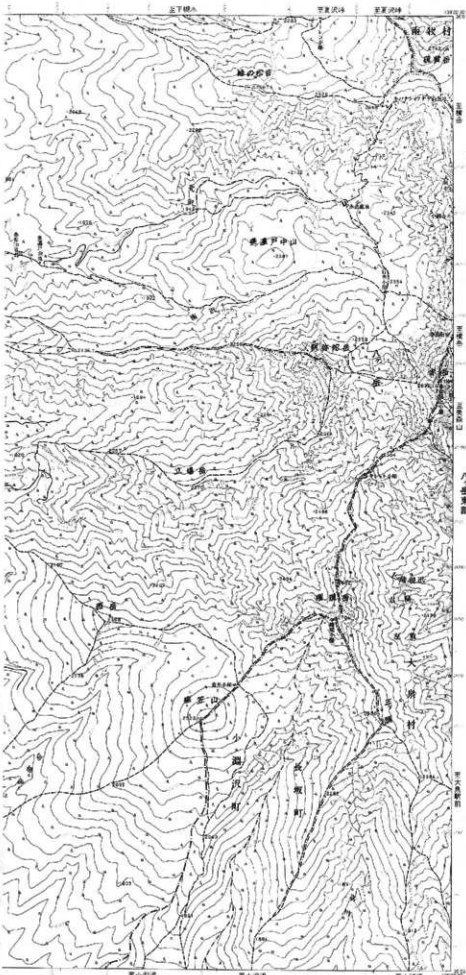
市町村名	大 字	小 字	小 字	市町村名	大 字	小 字	小 字
	小沼	郷土 四方内 殿田 姫居地 開途 大竹 城屋敷 後ノ神	大品道上 高島 入田		忍草	鞍越 高小屋 新名庄 宿原敷 下屋敷 向屋敷 上屋敷 高堀 堀端 十手下 土手土 平山 城ノ腰 鐘山 法印塚 占馬場	奥山尾田 前山尾田
道 志 村	竹之本 川原畑	竹の本 的場 的場向 馬場 櫓沢 川原畑	田代				
足和田村	大嵐 長浜 西湖	西開上 南開上 北開上 梅ノ木 中丸 的場 居口 東川戸 橋戸 欠羽戸	上桑 下桑 足和田 上足和田	秋 山 村	無生野 原 板崎 逸所 中野 小和田 金山 富岡 一古沢	大の入屋敷向 大の入屋敷 竹の沢 竹の花 玉屋敷 大門 海戸	藤ノ田 片島 壺田 河原畑 中畑 西畑 日影田 夏土和田 後田
忍 野 村	内村	古屋 家籠上堀 鞍掛	隠畑 大和田				

城 郭 分 布 図





分布图 1



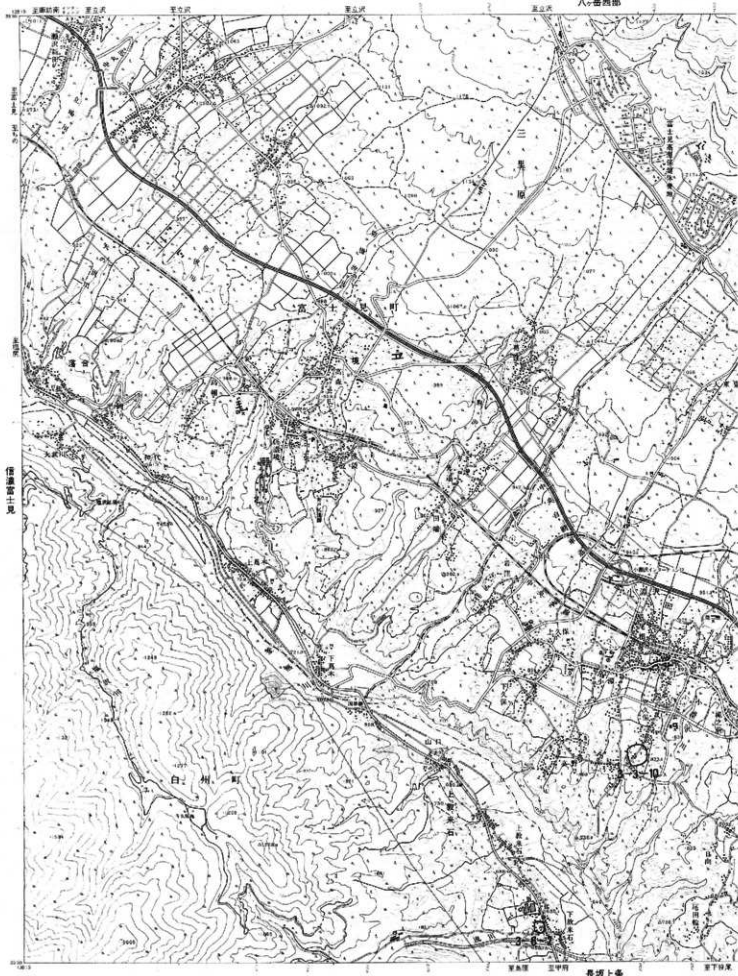
- 研究区画**
- 索引図**
- | | | |
|-------|-------|-----|
| 栗太岳 | 栗太 | 松原湖 |
| 茅野 | 八ヶ岳東麓 | |
| 八ヶ岳西麓 | 小淵沢 | 岩手 |
- 茅野集**
- A. 茅野市
B. 田代町 1. 原村 2. 富士見町
C. 南松久町 3. 南牧村
- 山梨集**
- D. 北原町 4. 高橋町 5. 小淵沢町 6. 桑野町
7. 大倉町

昭和30年調査

1. 茅野市 1:25,000 縮尺 2. 原村 1:10,000 縮尺
3. 南松久町 1:10,000 縮尺 4. 南牧村 1:10,000 縮尺
5. 茅野市と富士見町、原村の境界は一部未定
6. 大倉町と桑野町の境界は一部未定

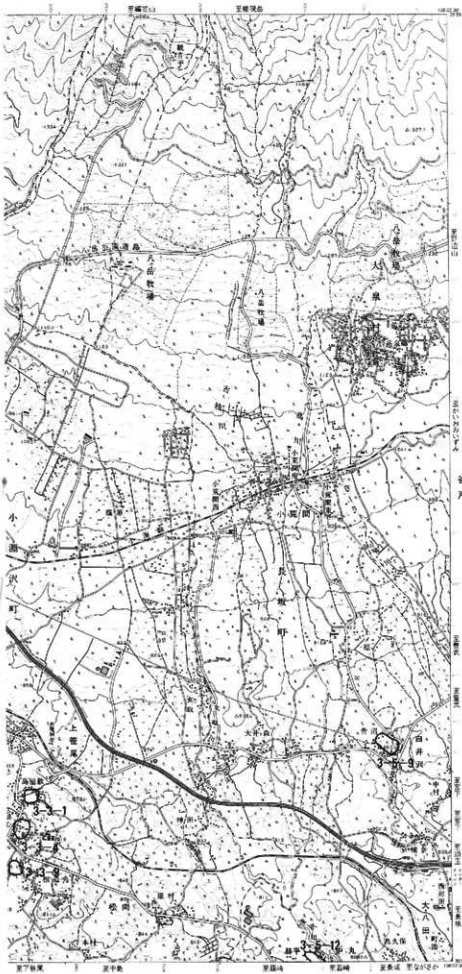
1:25,000 八ヶ岳西部

昭和30年10月30日発行 (3巻第) 発行所(株)国土院
製作編印者 国土院



分布図 2

- 3-3-1 島氏屋敷
- 3-3-4 茅野氏屋敷
- 3-3-9 御所屋敷
- 3-3-10 西屋敷
- 3-5-9 省沼氏屋敷
- 3-5-12 天白砦
- 3-6-2 教来石氏屋敷

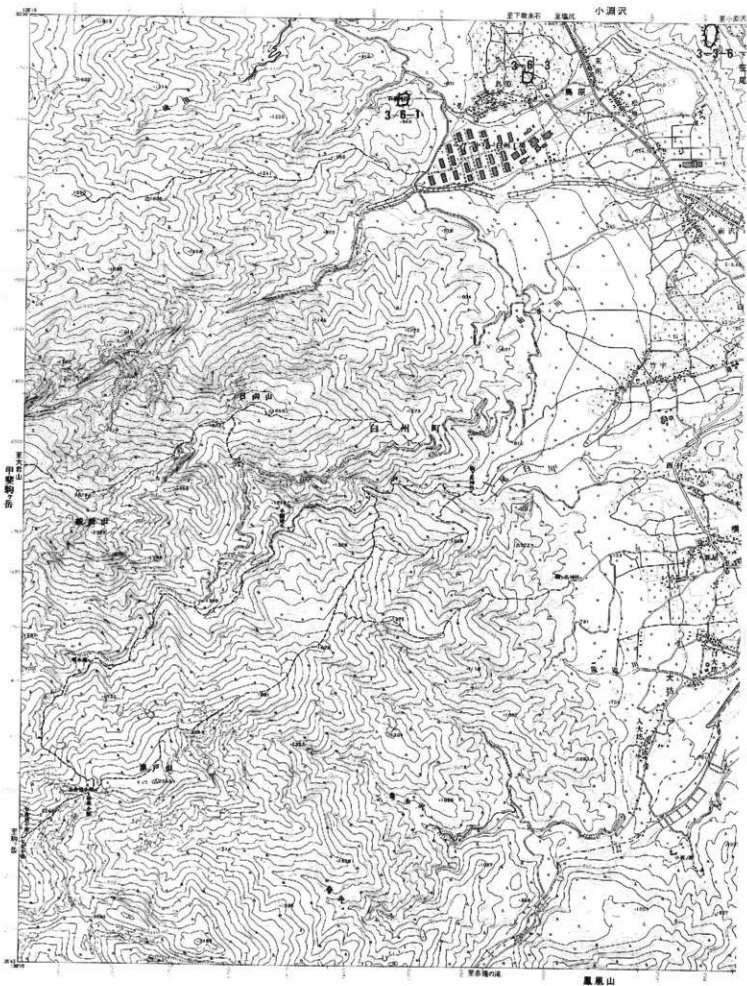


- 茅野市
A. 山梨路 富士見町
- 山梨県
B. 北野原町 1. 小淵沢町 2. 奥城町
4. 大倉村

昭和50年測量
昭和57年修正測量
1. 使用した空中写真は昭和55年10月撮影
2. 現地調査は昭和57年5月実施
3. 測量は昭和57年7月2日現在
大蔵省土地院の院章は一割減定

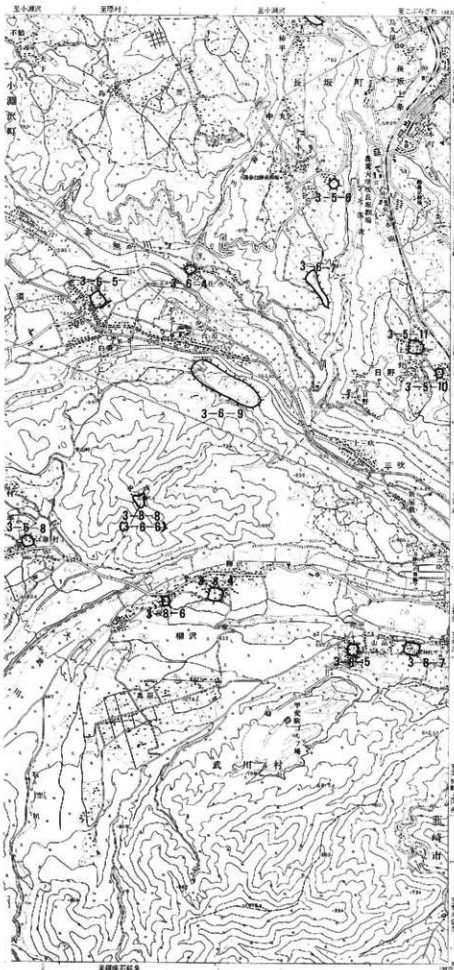
1:25,000 小淵沢

昭和58年11月20日発行 (3巻) 許可号: 陸測特第75号
発行所: 国土地理院



分布図 3

- 3-3-6 笹尾砦
- 3-6-1 島原城山
- 3-6-3 島原屋敷
- 3-6-4 曲淵氏屋敷
- 3-6-5 馬場氏屋敷
- 3-6-6 中山砦
- 3-6-7 深沢砦
- 3-6-8 横手氏屋敷
- 3-6-9 根古屋
- 3-5-6 中丸砦
- 3-5-10 田中氏屋敷
- 3-5-11 向井丹下屋敷
- 3-8-4 柳沢氏屋敷
- 3-8-5 山高氏屋敷
- 3-8-6 一条氏屋敷
- 3-8-7 実相寺遗址
- 3-8-8 中山砦(3-6-6に同じ)

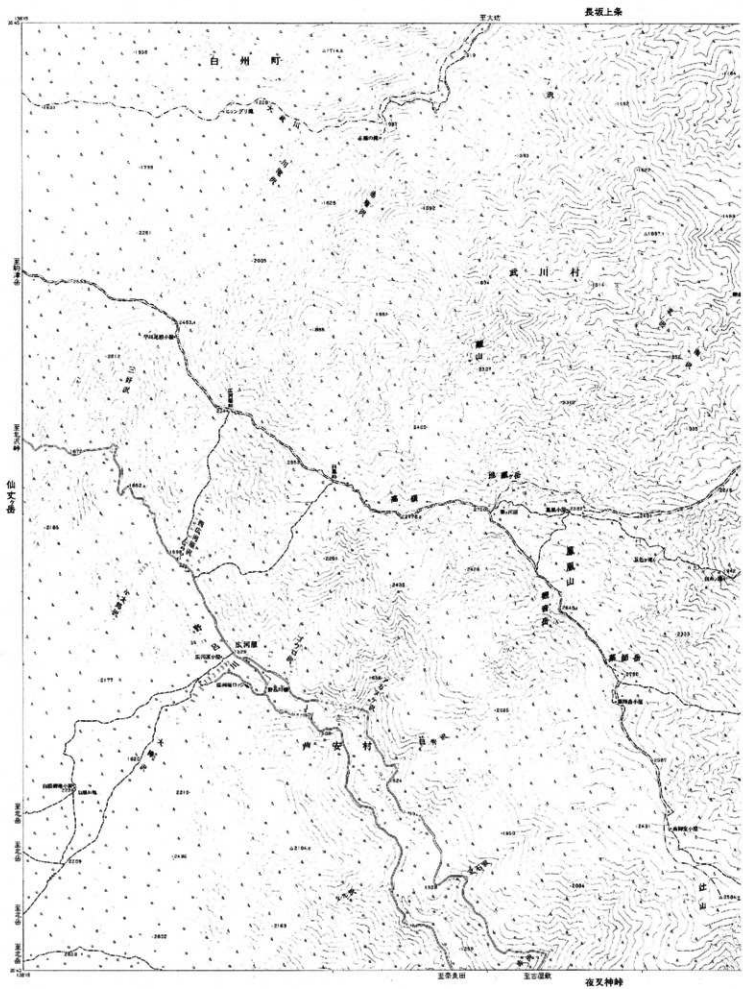


山梨県
A. 北野郡 1. 白河町 2. 小淵沢町 3. 奥野町
4. 奥村町
B. 南野市

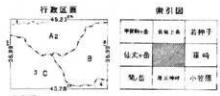
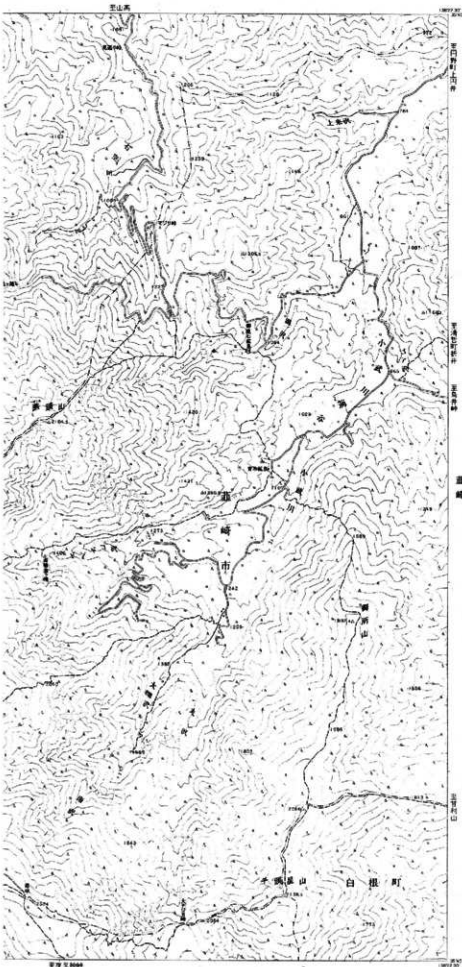
昭和50年測量
昭和50年停止測量
1. 使用した空中写真其は昭和50年5月撮影
2. 現地調査は昭和50年6月実施
3. 測量は昭和57年8月6日現在

1:25,000 長坂上条

昭和59年10月30日発行 (3色刷) 発行所(複製)長坂上条
製作地所有兼発行所 国土院理院



分布图 4

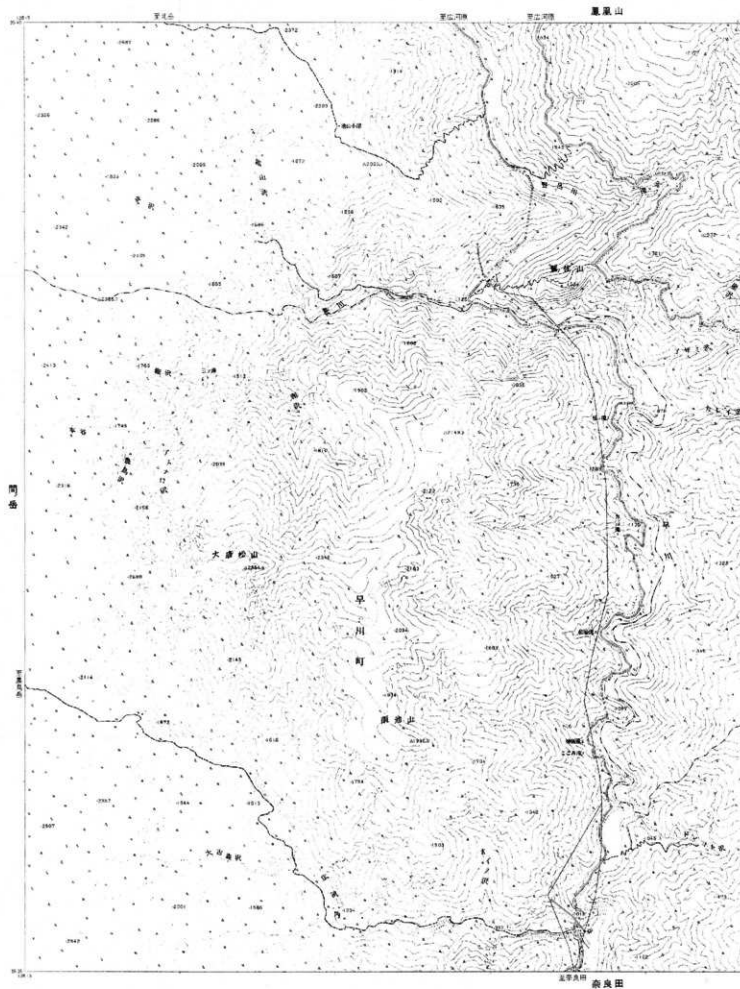


山脈系
 A、北巨摩郡 1. 白川町 2. 奥川町
 B、草刈市
 C、中巨摩郡 3. 戸安村 4. 白根町

昭和60年測量
 昭和58年地上測量
 1. 使用C-9空中写真(昭和58年10月撮影)
 2. 現地調査は昭和58年8月実施
 3. 縮尺は約97年8月0日現在

1:25,000 鳳凰山

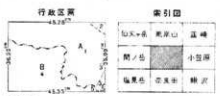
昭和60年1月30日発行 (3色刷) 計可公(複製)第1号
 著作権所有者兼発行者 国土地理院



分布图 5



小笠原



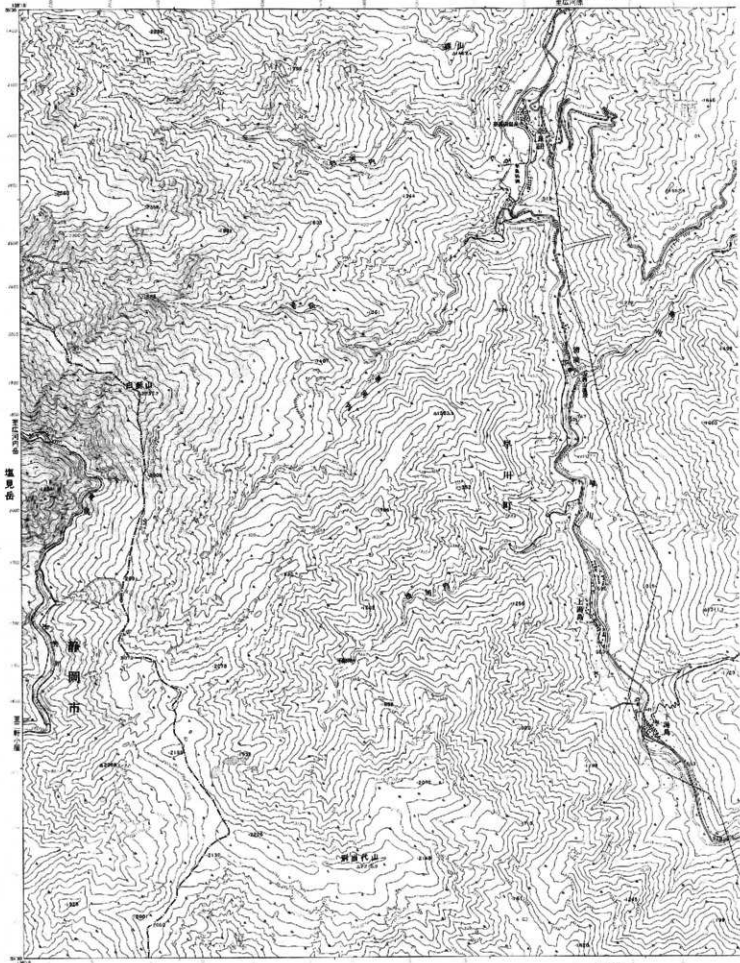
行政区域
 A. 中井原区 1. 岩安村 2. 白根町 3. 柳影町
 B. 奥原原区 4. 森山町 5. 柳野町

索引图
 白根山 奥原山 森山
 柳影山 小笠原
 奥原山 岩安山 柳野山

昭和46年測量
 昭和45年修正測量
 1. 使用L.S. 2. 使用L.S. 3. 使用L.S. 4. 使用L.S.
 2. 使用L.S. 3. 使用L.S. 4. 使用L.S.
 3. 使用L.S. 4. 使用L.S. 5. 使用L.S.

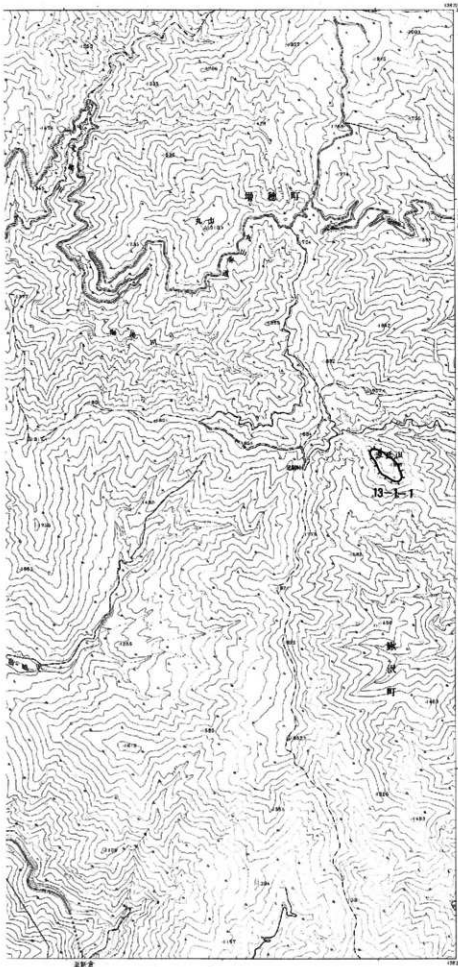
1:25,000 夜叉神峠

昭和55年4月30日発行 (3刷刷) 発行所 (昭和55年) 国土地理院



分布図 6

13-1-1 源氏ヶ岳城



源氏ヶ
城

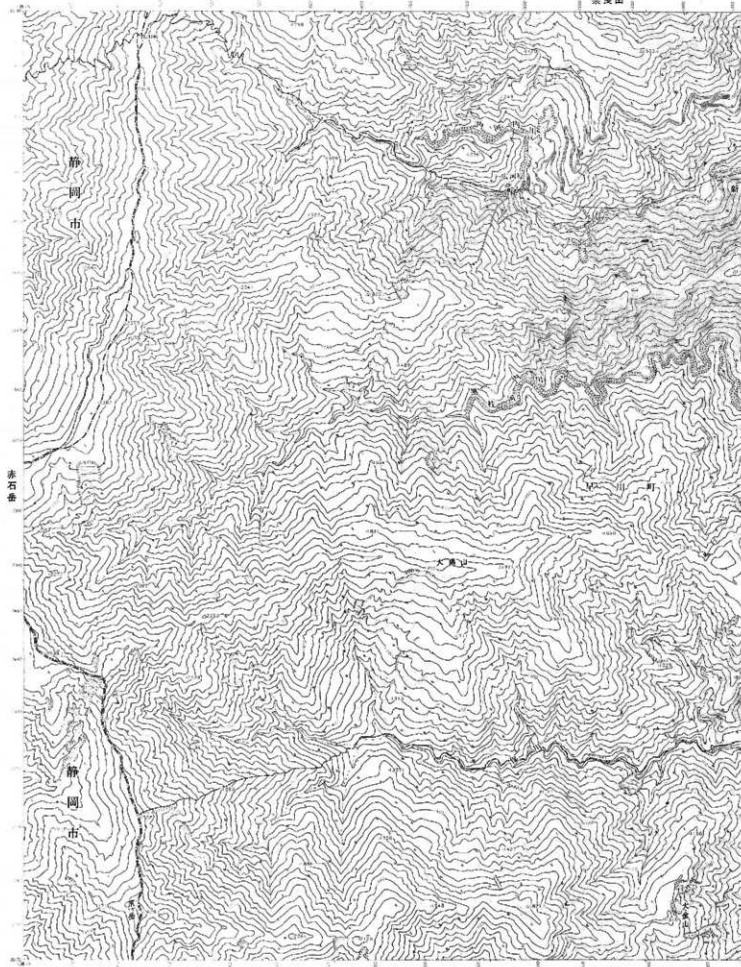


- 山梨県**
A. 荒谷厚志 1. 早川町 2. 埴原町 3. 瀬川町
B. 半田厚志 穂積町
- 静岡県**
C. 静岡市

- 昭和24年測量
昭和53年修正測量
1. 使用した空中写真は昭和51年11月撮影
2. 現地調査は昭和53年5月実施
3. 境界は昭和53年3月12日現在

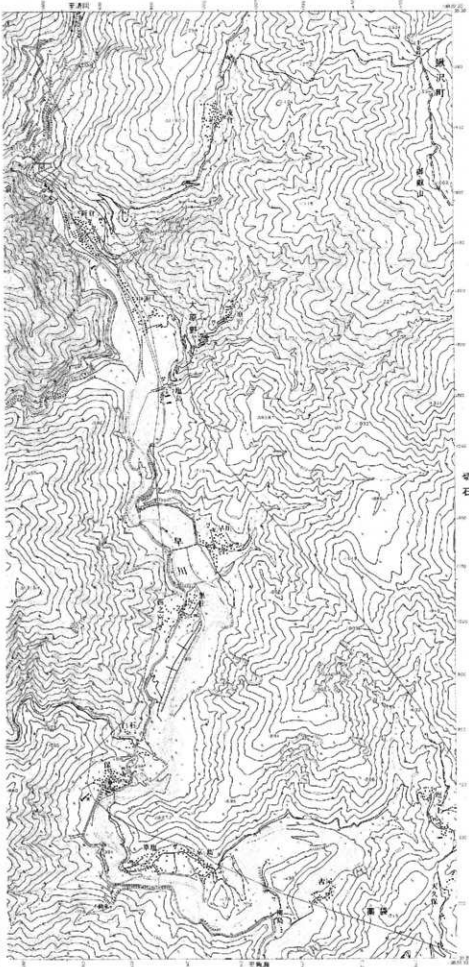
1:25,000 奈良田

昭和54年10月30日発行 (3巻別) 2055 (複製500円)
著作権所有者発行所 国土地理院



赤石巻

分布图 7



静岡県
A. 静岡市
山梨県
B. 青森郡 1. 平田町 2. 新沢町

昭和47年12月
1. 本図は昭和47年12月現在のものである。
2. 国土地理院昭和46年調査による。
3. 国土地理院昭和46年調査による。

1:25,000 新倉

昭和47年12月20日発行 (2色刷) 静岡県(国土地理院)委託
製作場所: 国土地理院





分布図 9



山梨県
A. 山梨市

山梨市
B. 南都地区 1. 早川町 2. 赤松町 3. 東沢町

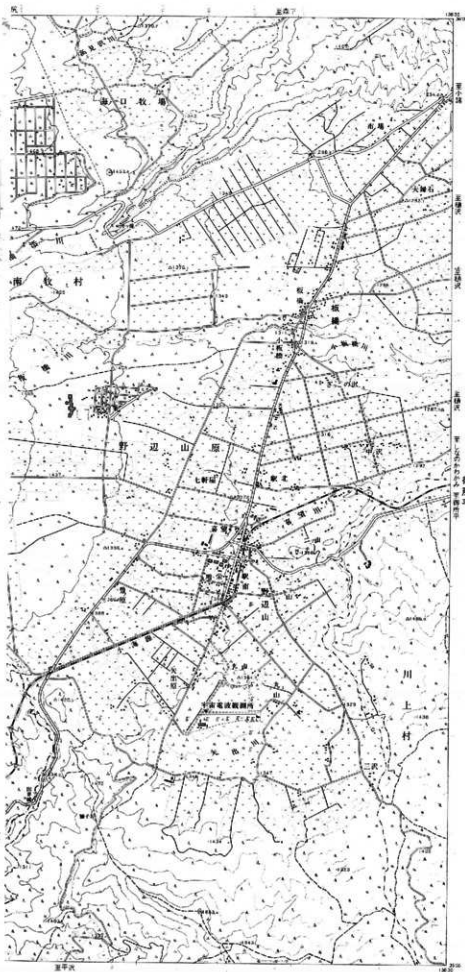
昭和45年測量
昭和55年修正測量

1. 使用した空中写真は昭和41年10月撮影
2. 完成調査は昭和55年5月まで
3. 修正は昭和55年6月2日現在

1:25,000 梅ヶ島

昭和50年10月30日発行 (3色刷) 許可証(機製)第46号
著作権所有発行会 国土院理院

分布图 10



- 長野県
- A. 茅野市
- B. 南佐久郡 1. 南佐久村 2. 川上村
- 山梨県
- C. 北都摩郡 3. 大石村 4. 高橋町

昭和50年測量
昭和57年修正測量

1. 使用した空中写真は昭和50年10月撮影
2. 現地調査は昭和57年8月実施
3. 境界は昭和57年6月14日現在

1:25,000 八ヶ岳東部

昭和58年10月30日発行 (3刷刷) 許可C(複製)第7号
著作物誌有業発行会 国土地理院



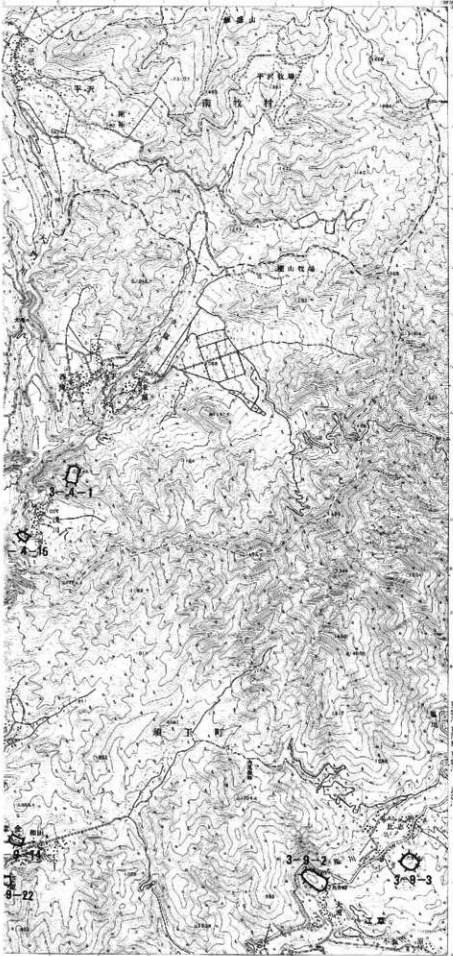
分布図 11

- 3-2-1 谷戸城
- 3-2-2 谷戸氏屋敷
- 3-2-3 寺所墨址
- 3-2-4 城下墨址
- 3-2-5 下井出墨址

- 3-4-1 浅川砦
- 3-4-7 西横森墨址
- 3-4-9 旭山砦
- 3-4-10 新井館
- 3-4-11 日向氏屋敷
- 3-4-15 浅川屋敷
- 3-4-16 白倉氏屋敷

- 3-5-1 深草館
- 3-5-5 小和田館
- 3-5-13 南新井屋敷
- 3-5-14 東原墨址

- 3-9-2 大渡の烽火台
- 3-9-3 比志の烽火台
- 3-9-5 源太ヶ城
- 3-9-9 古宮屋敷
- 3-9-14 清水氏屋敷
- 3-9-17 又十郎屋敷



行政区画

索引図

A. 浅川砦	B. 深草館	寺所墨
小田沢	城下	陣
源太ヶ城	新井館	又十郎

山崎山
 A. 北尾塚跡 1. 大沢村 2. 矢張町 3. 美根町
 4. 旗三町

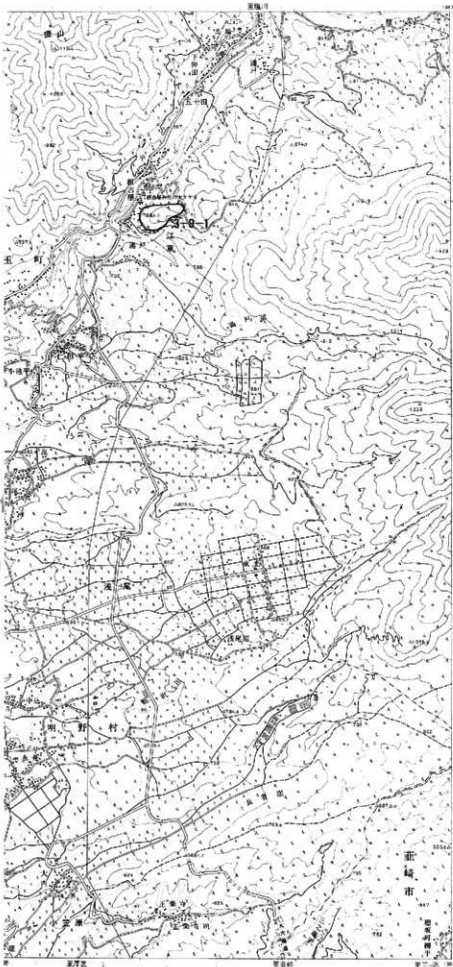
浅野原
 B. 南尾入跡 5. 南新井 6. 川上村

昭和50年測量
 昭和57年修正測量
 1. 使用した空中写真に昭和56年5月撮影
 2. 現地調査は昭和57年8月実施
 3. 境界は昭和57年6月14日現在
 大谷村と美根町の境界は一部未定

1:25,000 谷戸

昭和50年7月30日発行 (3巻) 許可(1) 複製6第7号
 製作権并印刷発行権 国土地理院

分布図 12



- 3-4-2 ○ 大坪砦(大坪城)
- 3-4-3 大 林 屋 敷
- 3-4-4 ○ 上藏原の砦址
- 3-4-5 小宮山氏屋敷
- 3-4-6 中尾根屋敷
- 3-4-8 米倉氏屋敷
- 3-4-12 十 騎 屋 敷
- 3-4-13 清水氏屋敷
- 3-4-14 ○ 大 坪 砦 址
- 3-4-17 五町田御所

- 3-5-2 ○ 塚川の砦址
- 3-5-3 三井氏屋敷
- 3-5-4 長坂氏屋敷
- 3-5-7 相吉氏屋敷
- 3-5-8 植松氏屋敷

- 3-9-1 獅子吼 城
- 3-9-4 藤巻氏屋敷
- 3-9-6 三枝氏屋敷
- 3-9-7 真田氏屋敷
- 3-9-8 ○ 中 尾 城
- 3-9-10 ○ 大豆生田砦
- 3-9-11 ○ 若神子城(南城)
- 3-9-12 ◇ (北城)
- 3-9-13 ◇ (大城)

- 3-1-1 屋代氏屋敷
- 3-1-2 三井氏屋敷(上手)

- 3-8-3 米倉左大夫宅

- 9-4 穴山氏館(次第権)
- 9-7 重久の烽火台
- 9-9 堂ヶ坂砦(能見城東部)
- 9-10 長坂氏屋敷(穴山氏館の東部)
- 9-29 米倉氏屋敷

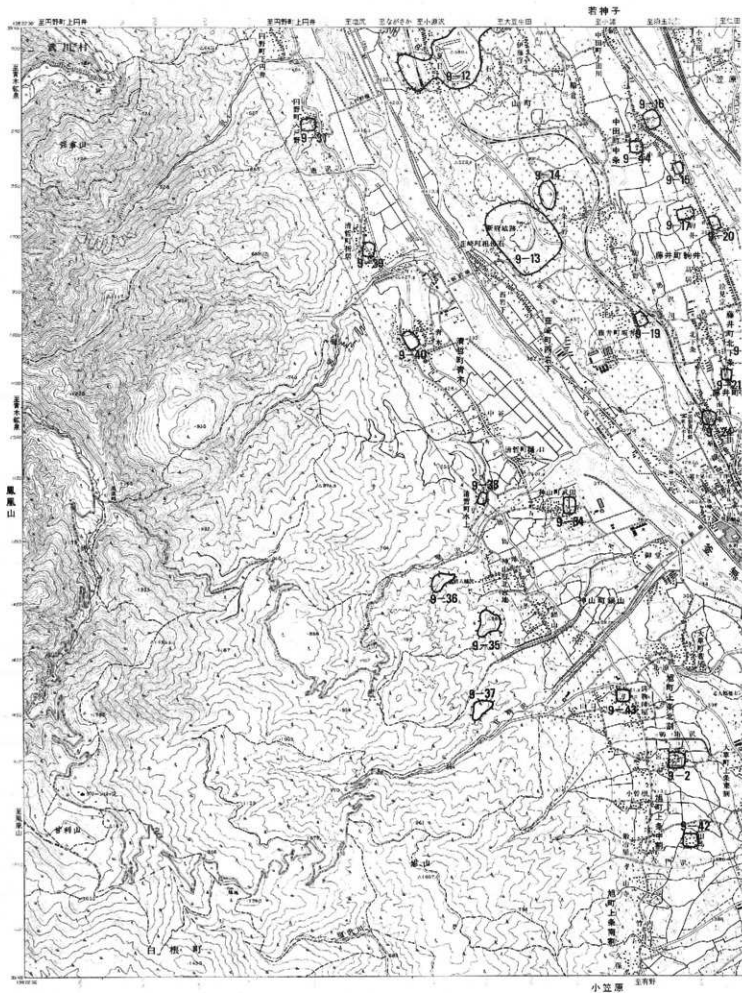


- 山梨県
1. 北巨摩郡 1. 武川村 2. 長坂町 3. 高橋町
4. 須永町 5. 鳴野村
6. 韮崎市

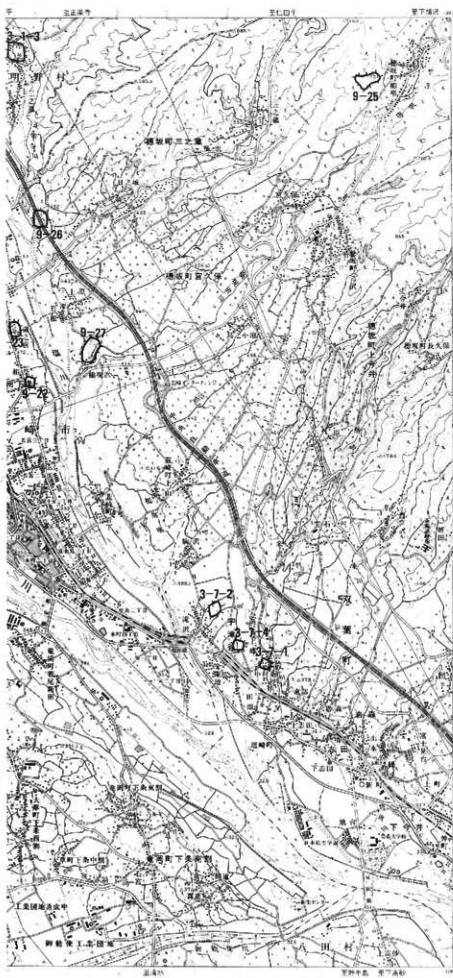
昭和50年測量
 昭和56年竣工測量
 1. 使用した空中写真は昭和50年5月撮影
 2. 現地調査は昭和56年8月実施
 3. 境界は昭和57年8月5日現在

1:25,000 若神子

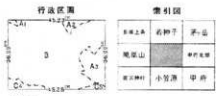
昭和59年9月30日発行 (3色刷) 発行所(複製)若神子
 若神子町有量発行所 国土院



分布図 13



- 3-1-3 小笠原氏屋敷
- 3-7-1 工人屋敷
- 3-7-2 長者屋敷
- 3-7-3 阿部氏屋敷
- 3-7-4 勝山城
- 9-2 甘利氏館
- 9-12 能見城
- 9-13 新府城
- 9-14 丸山の墓址
- 9-15 水上氏屋敷
- 9-16 松雲寺墓址
- 9-17 駒井氏屋敷
- 9-19 弾正屋敷
- 9-20 駒井氏屋敷
- 9-21 殿田屋敷
- 9-22 相岱墓址
- 9-23 蔵の前墓址
- 9-24 三光寺墓址
- 9-25 柳平烽火台
- 9-26 日ノ出砦
- 9-27 築江砦
- 9-31 入野氏屋敷
- 9-34 武田信義館
- 9-35 白山城
- 9-36 白山城北烽火台
- 9-37 ムク台烽火台
- 9-38 水上氏屋敷
- 9-39 折井氏屋敷
- 9-40 青木氏屋敷
- 9-42 秋山但馬守屋敷
- 9-43 水明院墓址
- 9-44 昌福寺墓址

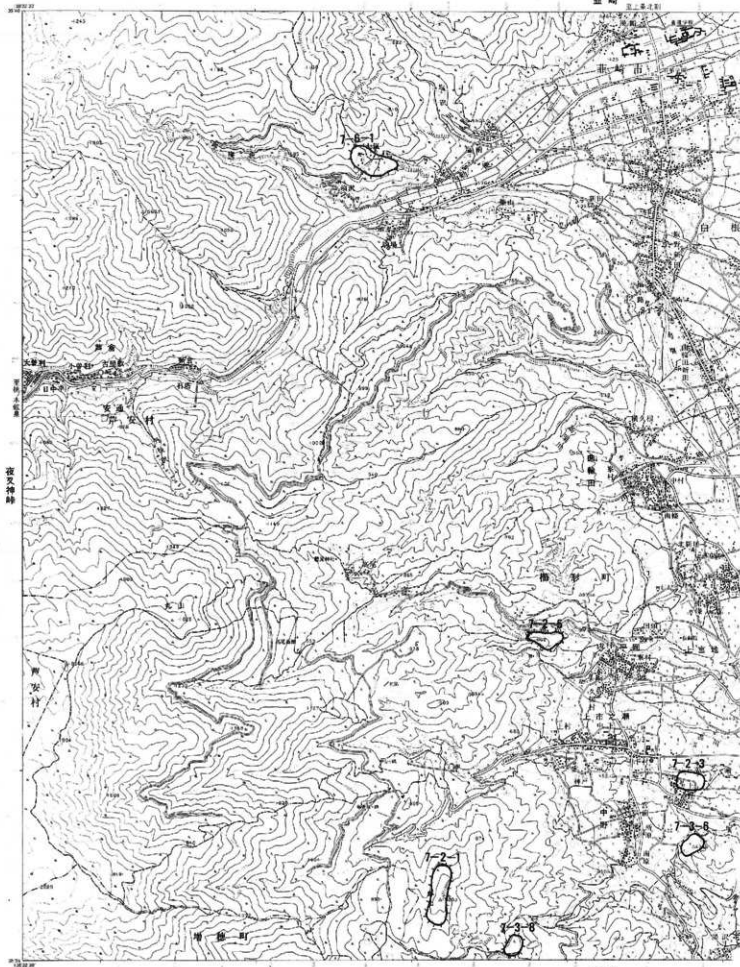


山崎標
 A. 北田寺町 1. 東町 2. 新野町 3. 双葉町
 B. 山崎市
 C. 中野寺町 4. 山崎町 5. 八幡町

昭和4年測量
 昭和5年改訂
 昭和6年修正測量
 1. 使用し、空中写真は昭和5年5月撮影
 2. 標地調査は昭和5年6月実施
 3. 測量は昭和57年5月6日現在

1:25,000 縮小

昭和60年6月30日発行 (3巻別) 29号(1) 縮小4万倍
 資料提供 国土院



夜叉神峠

巖沢

分布図 14

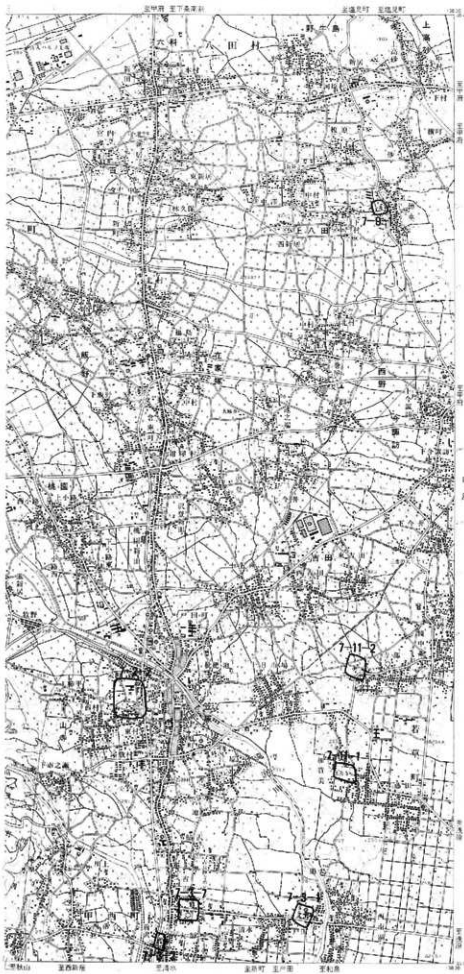
- 7-2-1 中野城
- 7-2-2 小笠原氏館
- 7-2-3 上野城
- 7-2-5 笹 砦

- 7-3-1 富田城
- 7-3-2 武藤三河守屋敷
- 7-3-6 御前山烽火台
- 7-3-7 大井氏館
- 7-3-8 雨 鳴 城

- 7-6-1 須 沢 城

- 7-11-1 加賀美氏館
- 7-11-2 寺部八幡社の墨址

- 7-9-1 金丸氏屋敷



- 山梨県
- A. 中野市 1. 白根町 2. 八田村 3. 芦野村
 - B. 高橋町 4. 御前町 5. 赤坂町 6. 甲斐町
 - C. 御前町 7. 塩田町

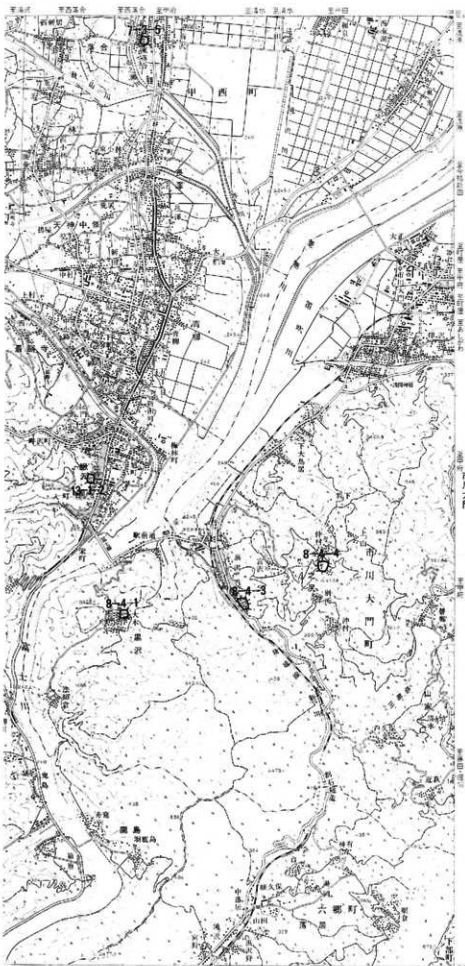
明治の年次書
 昭和の年次書
 昭和の年次書
 1. 昭和11年(1936年)発行(3巻別)
 2. 昭和12年(1937年)発行(3巻別)
 3. 昭和13年(1938年)発行(3巻別)

1:25,000 小笠原

昭和54年(1979年)発行(3巻別) 資料は(複製)を原典とする
 著作権所有権者 国土院

分布図 15

- 13-4-1 北山城(陣台)
- 13-4-2 仙洞田氏屋敷
- 13-4-3 最勝寺砦
- 7-3-4 熊野神社(秋山氏屋敷)
- 7-3-5 河村下野守屋敷
- 13-1-2 大井氏屋敷
- 8-4-1 大木氏屋敷
- 8-4-3 黒沢の口留番所
- 8-4-4 鐘撞堂山の烽火台



- 山梨県
- A. 東田原郡 1. 池田町 2. 船山町
 - B. 甲斐郡 3. 甲府市 4. 市川大門
 - C. 西八代郡 5. 市川大門町 6. 六連町 7. 下野守

明治21年測量
昭和46年改正
昭和53年修正測量

1. 採用した空中写真とは昭和51年11月撮影
2. 現地図面とは昭和52年9月測量
3. 境界は昭和53年9月13日現在

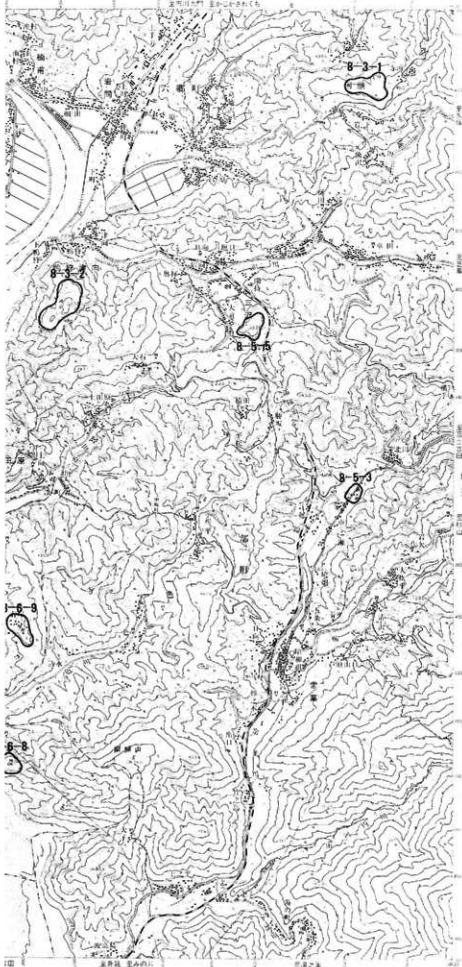
日本測土市川大門町の境界は一部未定

1:25,000 敷 沢

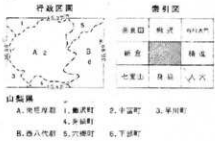
昭和55年6月10日発行(13巻刊) 国土地理院



分布図 16



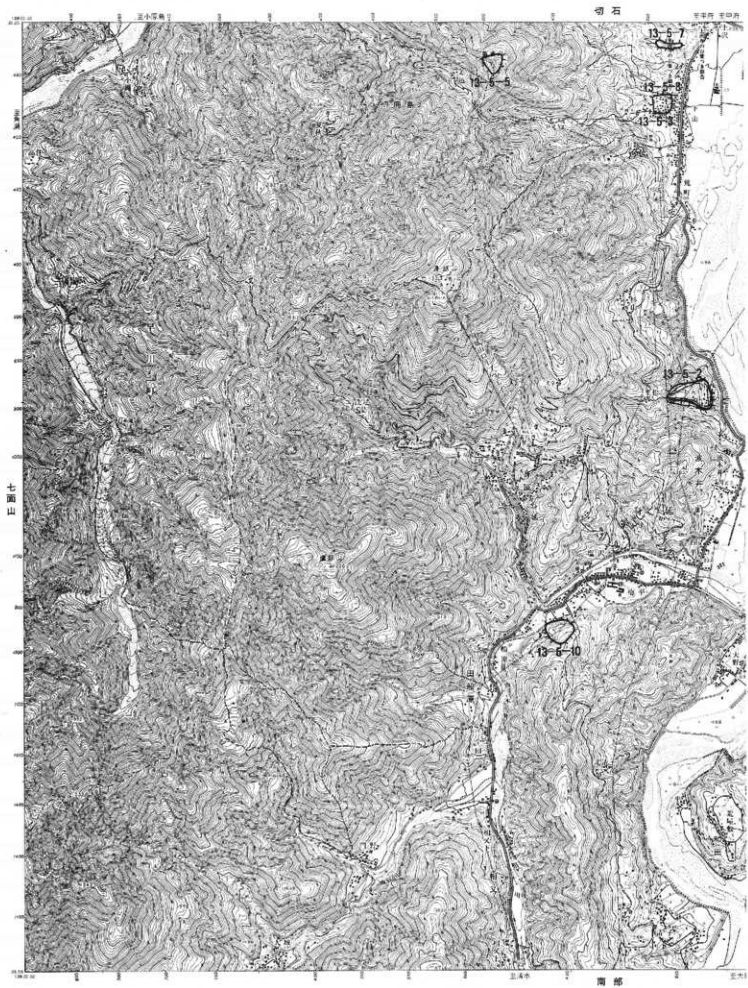
- 8-3-1 城 山
- 8-3-2 城 山
- 8-5-3 馬場氏屋敷
- 8-5-5 木道の烽火台
- 13-6-1 大塩屋敷
- 13-6-2 鳥森山の烽火台
- 13-6-3 西島の城山
- 13-6-4 西島の烽火台
- 13-6-5 兵部平屋敷
- 13-6-6 久成の城山
- 13-6-7 菅沼城
- 13-6-8 宮木の烽火台
- 13-6-9 依田氏屋敷



昭和3年測量
 W.1.46改正
 1. 昭和3年測量 2. 昭和45年11月補正
 3. 昭和45年12月補正 4. 昭和46年5月補正
 5. 昭和47年10月補正 6. 昭和48年8月20日補正

1:25,000 切石

昭和48年3月30日現在(2巻) 国土院 国土院
 国土院 国土院 国土院



分布図 17

- 13-5-2 波木井城
- 13-5-3 穴山氏館
- 13-5-5 栗倉山の烽火台
- 13-5-7 下山の煙硝倉
- 13-5-8 下山氏屋敷
- 13-5-9 帯金氏屋敷
- 13-5-10 波木井氏館(南部氏屋敷)



人
穴

行政区域

索引図

新倉	切石	烽火
七軍山		人穴
堀+島	南部	上野庄

白鳥居

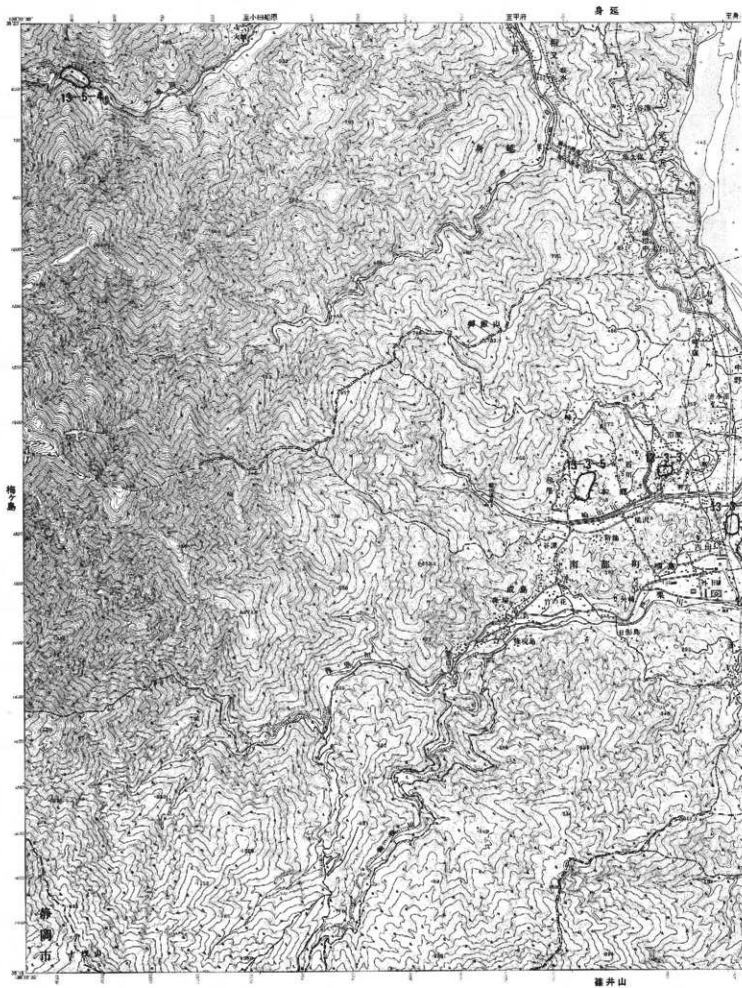
A. 内田津郡 1. 幸江町 2. 奥原町 3. 尚延町
 秋田八代郡 下郷町

資料と参考
 昭和46年現在

1. 国土地院 地形図 昭和46年10月版
2. 国土地院 地形図 昭和46年5月次版
3. 国土地院 地形図 昭和46年8月20日現在

1:25,000 身延

昭和48年3月30日発行 (2色刷) 国土地院
 著作権所有 国土地院



分布図 18

- 13-2-2 真篠砦
- 13-3-1 南部城山
- 13-3-2 地頭屋敷
- 13-3-3 建忠寺跡
- 13-3-5 峰の城
- 13-3-6 古城山
- 13-3-7 陣ヶ森
- 13-3-8 南部氏館
- 13-5-4 小谷城
- 13-5-6 本城山



上井出

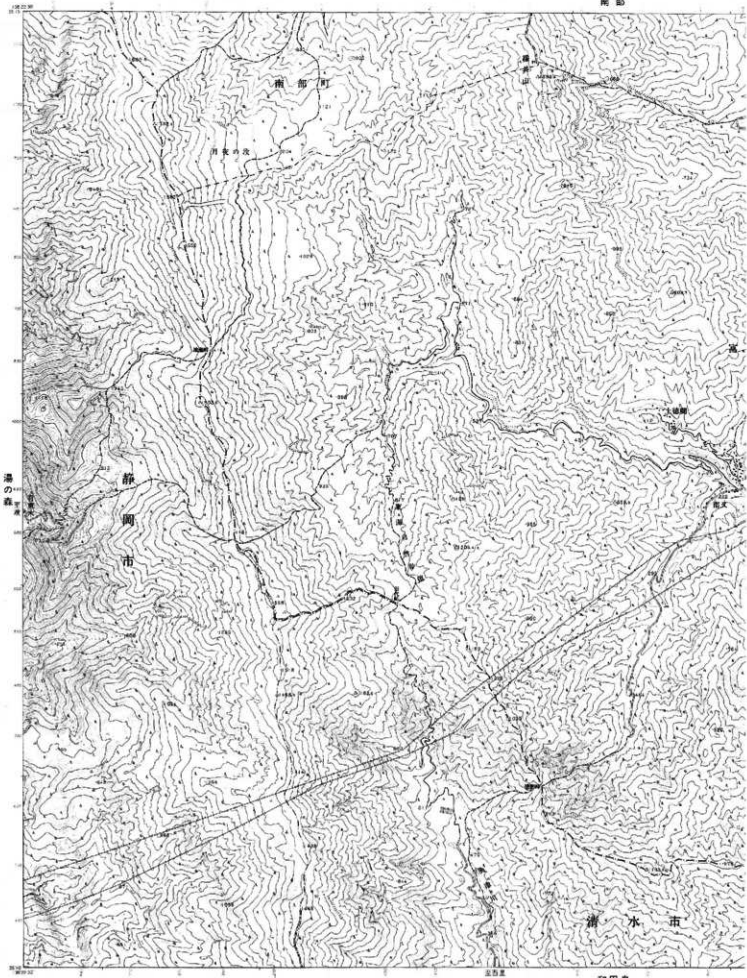


山梨県
A. 丹波郡 1. 倉田町 2. 南郷町 3. 重茂町
B. 野原市

昭和3年測量
昭和45年改測
昭和55年修正測量
1. 修正し、空中写真以経緯51年11月撮影
2. 換算調査は昭和55年5月完成
3. 換算は昭和55年5月多摩谷院

1:25,000 南部

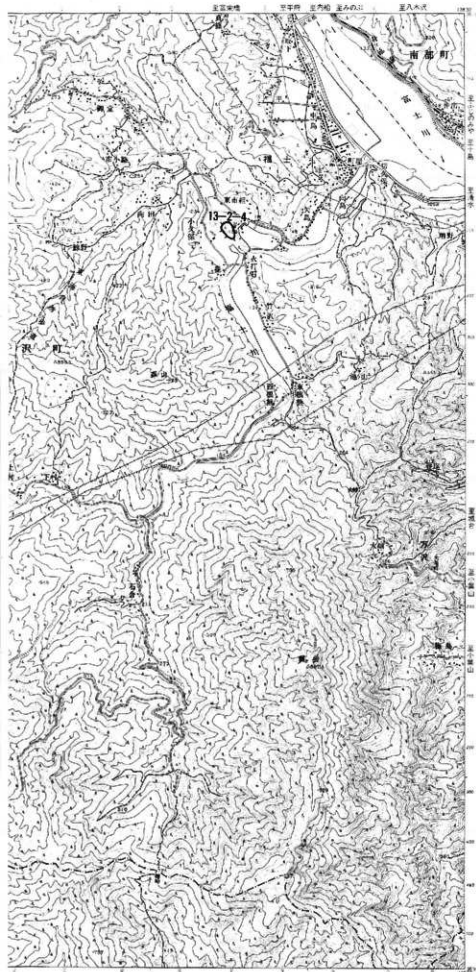
昭和56年12月28日発行 (3色刷) 25ヶ画(複製7割) 5
著作権所有者発行会 国土地理院



湯の森

分布図 19

13-2-4 富士の城山

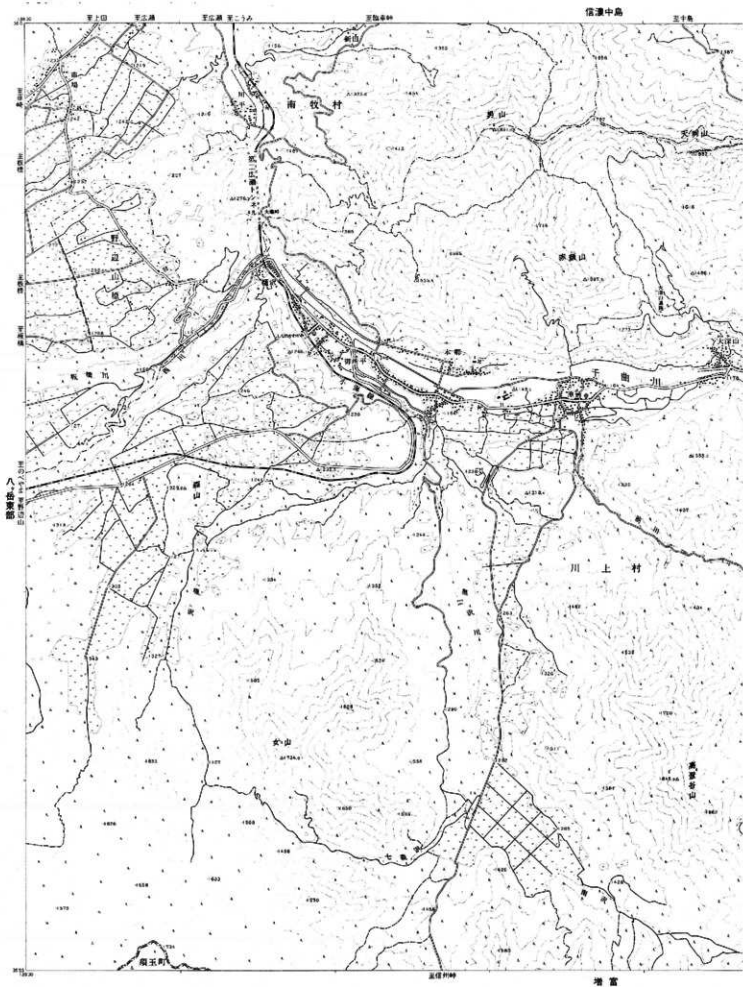


- 静岡県**
 A. 静岡市
 B. 清水市
- 山梨県**
 C. 両日野郡 1. 奥都町 2. 富士町

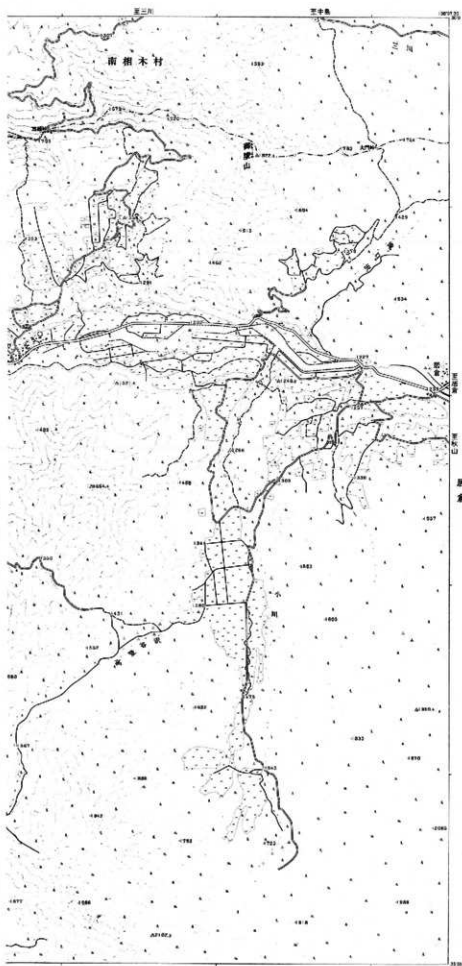
昭和3年測量
 昭和15年改訂
 昭和22年修正測量
 1. 使用した沿革等表は昭和51年11月現在
 2. 国土地理院注記は55年5月現在
 3. 境界は昭和55年8月8日現在

1:25,000 篠井山

昭和56年10月30日発行 (3世刷) 許可(1)複製を禁ずる
 著作権所有国地理院 国土地理院



分布图 20



索引图

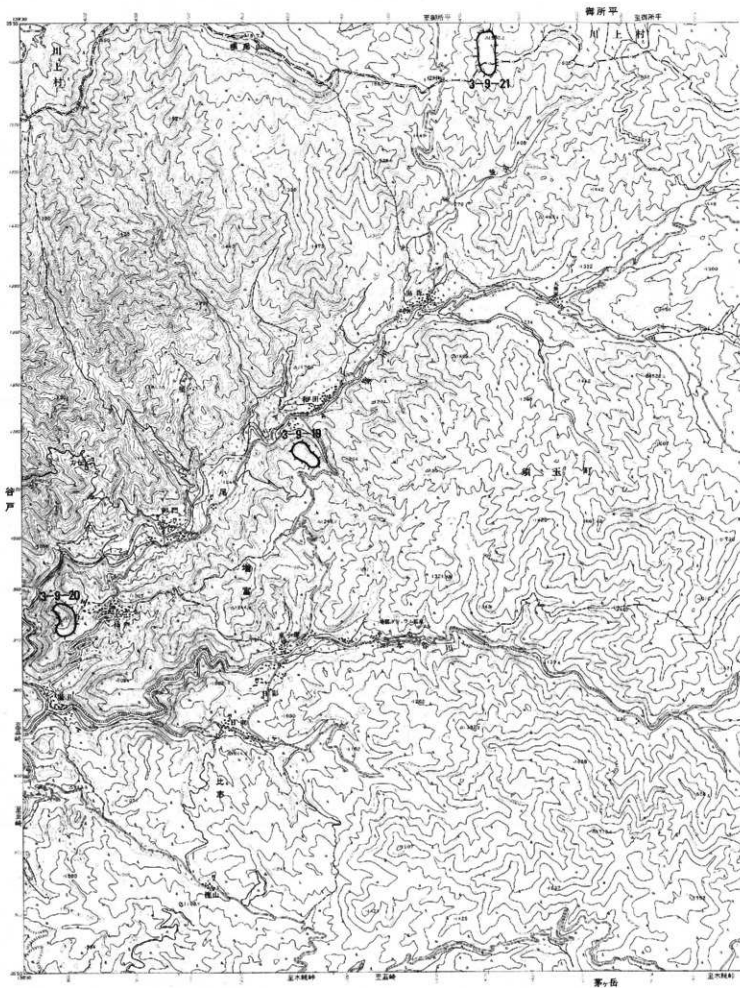
松原郷	田中	山平
八ヶ岳	相模	湯島
吾戸	海富	金峰山

長野県
 A, 南相模村 1, 菅原村 2, 南相模村 3, 川上村
山梨県
 ①, 北沢厚町 横玉町

昭和48年測量
 ① 使用4万空中写真及び昭和47年10月撮影
 ② 現地調査は昭和48年8月実施
 ③ 境界は昭和50年2月13日現在

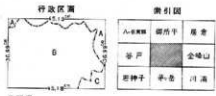
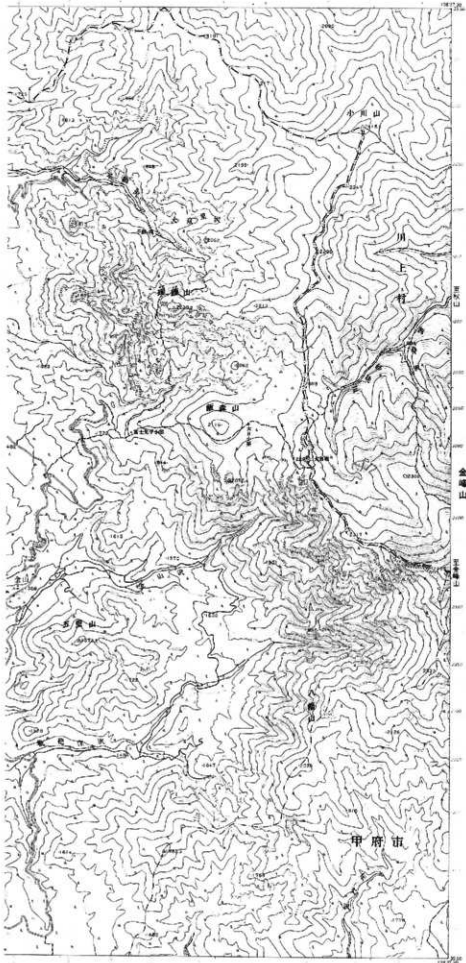
1:25,000 御所平

昭和51年2月28日発行 (3色刷) 計可乙(松島6第4号)
 著作権所有権発行権 国土地理院



分布図 21

- 3-9-19 和田の烽火台
- 3-9-20 神戸の烽火台
- 3-9-21 信州峠の烽火台

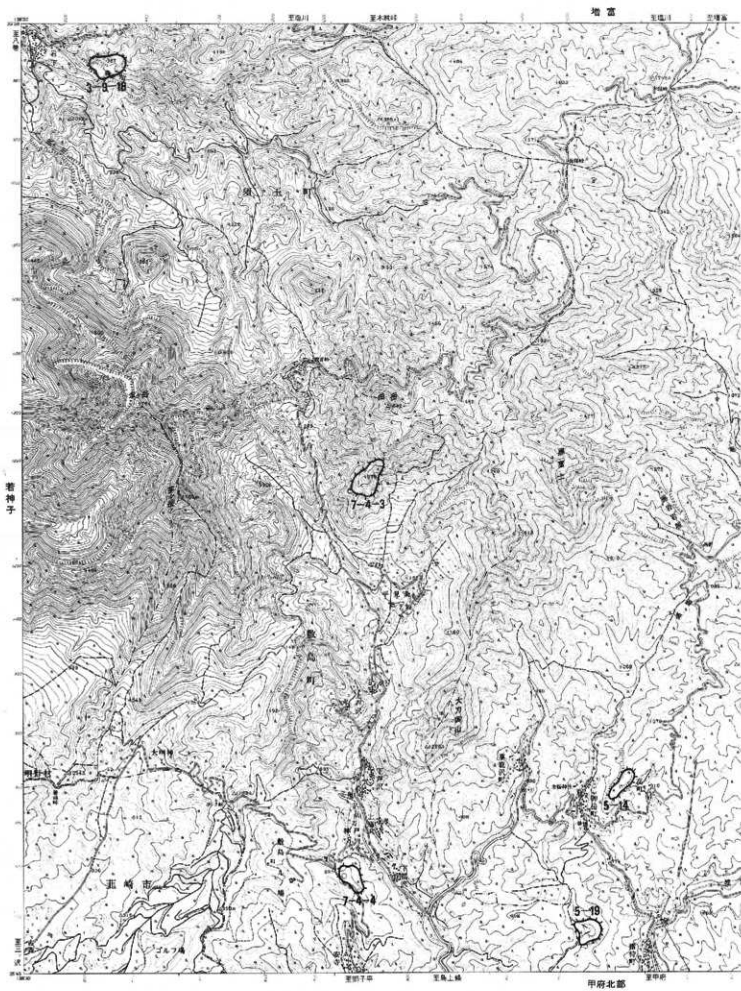


長野県
 A. 東佐久郡 川上村
山梨県
 B. 北野守郡 旗本町
 C. 早野町

縮尺 48年測量
 1. 資料は、国中等測量院(47年)の資料
 2. 現地調査は昭和48年春に実施
 3. 境界は昭和50年2月13日現在

1:25,000 増富

昭和51年2月20日発行 (1/25,000) 製図(1) 製版(1) 印刷(1) 発行所(1) 国土院
 国土院 国土院 国土院



分布図 22

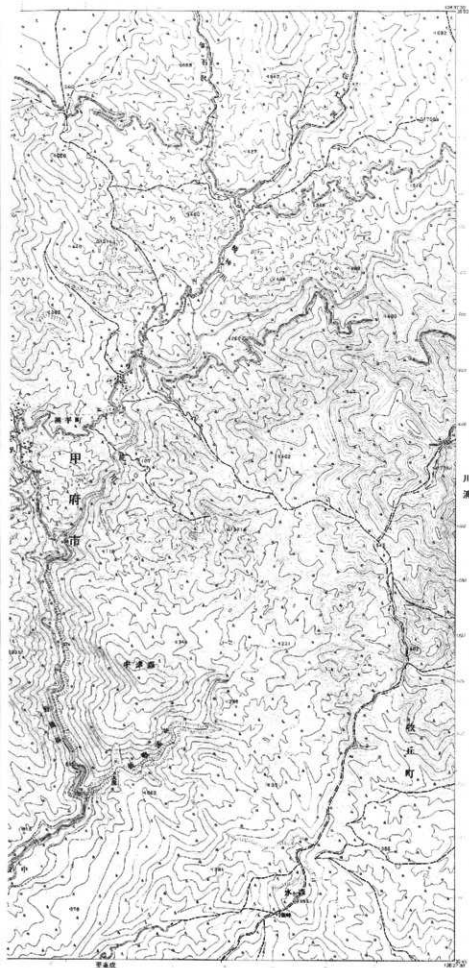
3-9-18 小森の烽火台

7-4-3 平見城の烽火台

7-4-4 福沢の烽火台

5-14 御岳の城山

5-19 猪狩の城山



山梨県

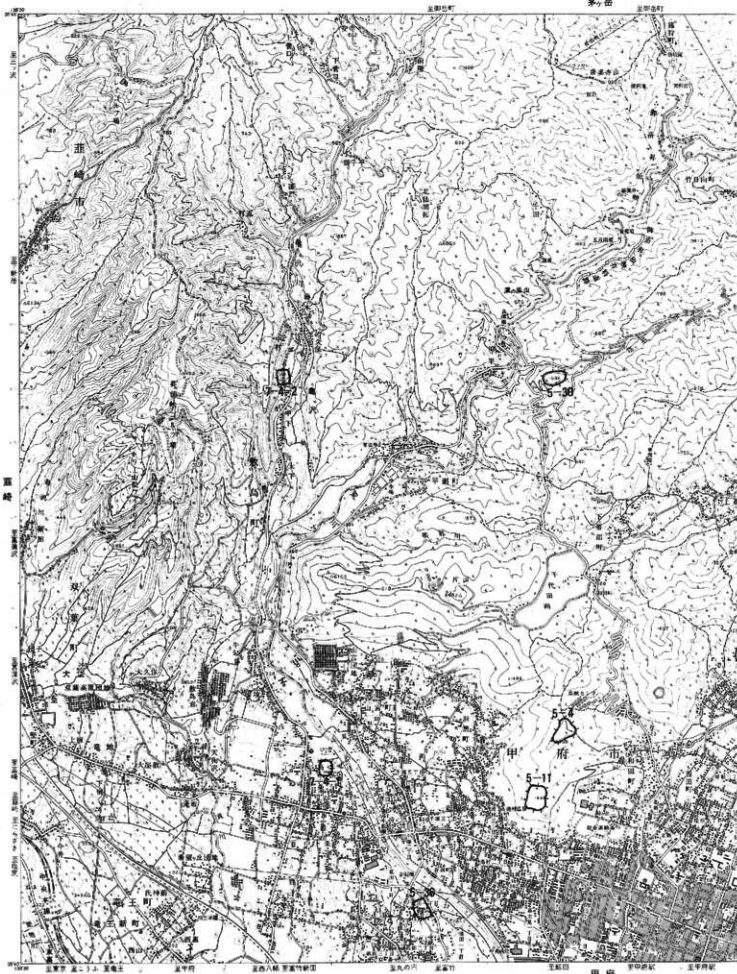
- A. 北山町 (清正町、芝野町)
 B. 富士市
 C. 中央町 (御岳町)
 D. 甲府市
 E. 奥山町 (福沢町)

昭和48年測量
 昭和54年修正測量

1. 使用した空中写真は昭和51年11月撮影
2. 現地調査は昭和54年5月実施
3. 修正は昭和53年3月10日現在

1:25,000 茅ヶ岳

昭和55年8月30日発行 (3巻第) 訂正なし(複製5冊) 6
 著作権者 国土地理院



分布図 23

- 5-4 和田の城山
- 5-5 法泉寺山の烽火台
- 5-6 茶道峠の烽火台
- 5-7 川窪の城山
- 5-11 湯村山城
- 5-21 太良峠烽火台
- 5-22 要害城
- 5-23 要害城東遺構(くま城)
- 5-29 つつじヶ崎館
- 5-30 平瀬の烽火台
- 5-31 神宮寺氏屋敷
- 5-33 つつじヶ崎亭迹
- 5-36 荒川屋敷

- 7-4-1 土屋氏屋敷
- 7-4-2 長田氏屋敷

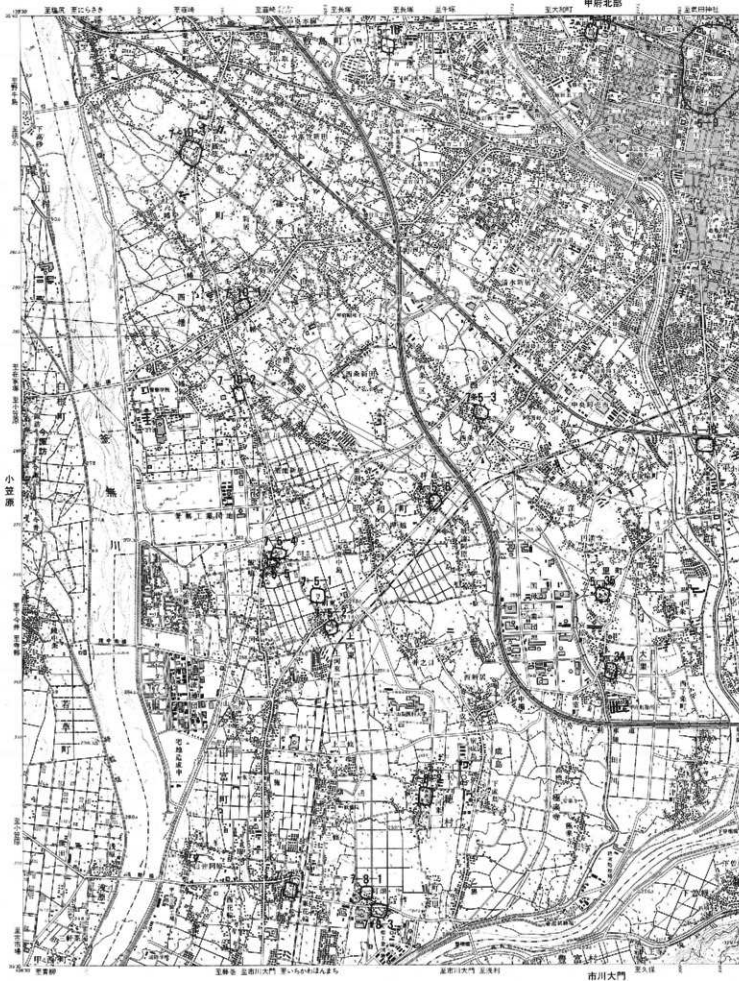


山梨県
 A 山梨県
 B 日本百名山 1. 牧野町 2. 東正町 3. 八雲町
 C 甲府市
 D 太良山町 北. 南. 西町 5. 平瀬町
 E 山梨市
 F 北. 西町 町界

明治21年測量
 昭和46年改測
 昭和54年修正測量
 1. 使用した空中写真は昭和51年11月撮影
 2. 現地調査は昭和54年5月実施
 3. 採集は昭和51年1月26日現在

1:25,000 甲府北部

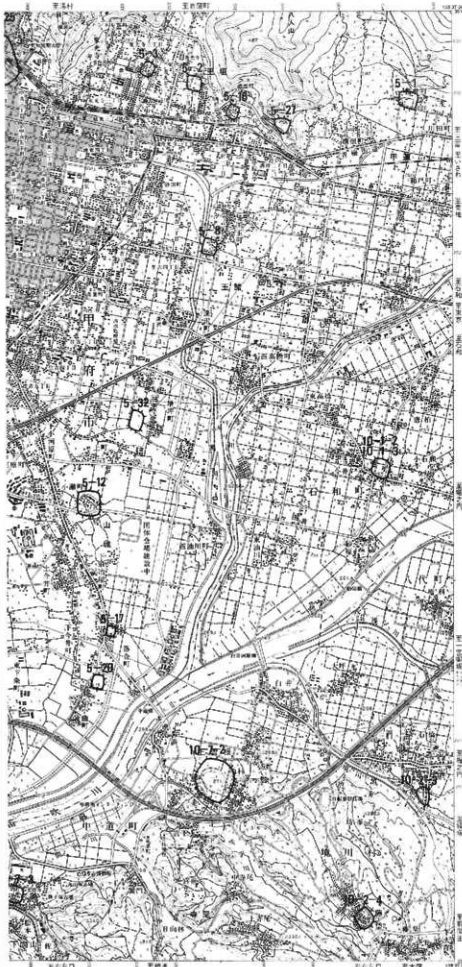
昭和55年8月30日発行 (3巻別) 許可号(独製)第876号
 著作権所有 国土院



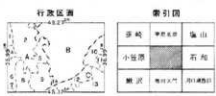
小笠原

南川大門

分布図 24



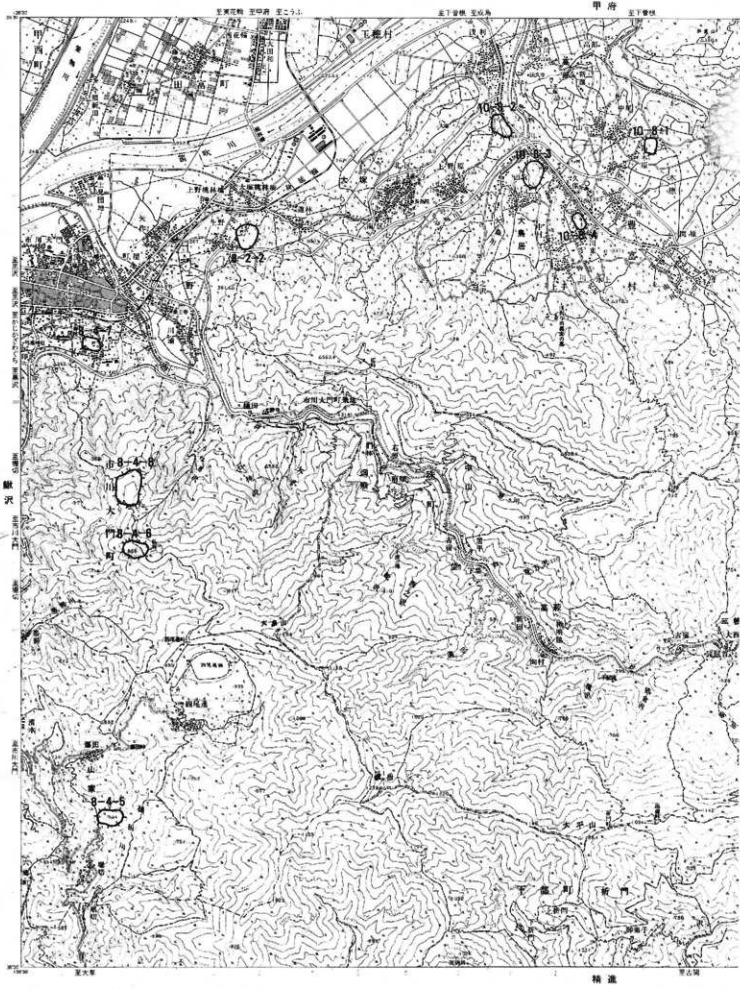
- 5-1 板井安芸守宅址
- 5-2 板垣氏屋敷
- 5-3 東光寺町小戸敷
- 5-8 落合氏屋敷(浪人屋敷)
- 5-9 一条氏館址(甲府城)
- 5-10 金竹氏屋敷
- 5-12 小瀬氏屋敷
- 5-15 横田氏屋敷
- 5-16 酒依氏屋敷
- 5-17 落合氏屋敷
- 5-18 小宮山土佐守館
- 5-20 小曲氏屋敷
- 5-25 甲府城
- 5-27 板垣山の烽火台
- 5-32 御所の内
- 5-34 稲の内
- 5-36 古市場
- 7-10-1 飯富氏屋敷
- 7-10-2 稲の内
- 7-10-3 篠原屋址
- 7-7-1 田中氏屋敷
- 7-5-1 上河東屋敷
- 7-5-2 支賀屋敷
- 7-5-3 義清屋敷
- 7-5-4 金屋敷
- 7-5-5 飯喰(飯喰字屋敷派)
- 7-5-6 殿屋敷
- 7-8-1 田中氏屋敷
- 7-8-2 下河東屋敷
- 7-8-3 御朱印屋敷
- 10-1-2 武田信重館
- 10-1-3 逸見氏屋敷
- 10-2-3 石橋氏屋敷
- 10-2-4 原氏屋敷
- 10-7-2 勝山城
- 10-7-3 下曾根氏屋敷



- 昭和4年測量
昭和40年改測
昭和55年第三次測量
1. 測量は昭和40年測量に昭和55年10月改測
 2. 現地調査は昭和55年5月実施
 3. 復原は昭和57年7月5日現在
- 昭和町と馬場町・白根町は境界線一線未定

1:25,000 甲府

昭和59年11月30日発行(3巻編) 発行所: 国土地理院
 発行所: 国土地理院



分布図 25



- 10-2-1 金比羅烽火台
- 10-7-1 右左口砦
- 10-7-4 向山氏屋敷
- 10-7-5 金刃比羅大神烽火台
- 10-8-1 三枝土佐守屋敷
- 10-8-2 浅利氏館
- 10-8-3 城平
- 10-8-4 阿部清兵衛屋敷
- 8-1-2 大内蔵屋敷
- 8-2-1 関原峠砦
- 8-2-2 一条氏館
- 8-4-5 城ノ嶺の烽火台
- 8-4-6 城山
- 8-4-7 義清館
- 8-4-8 古城山の砦

河口湖西側部

行政区域

索引図

小笠原	甲府	石巻
機式	機式	機式
機式	機式	機式

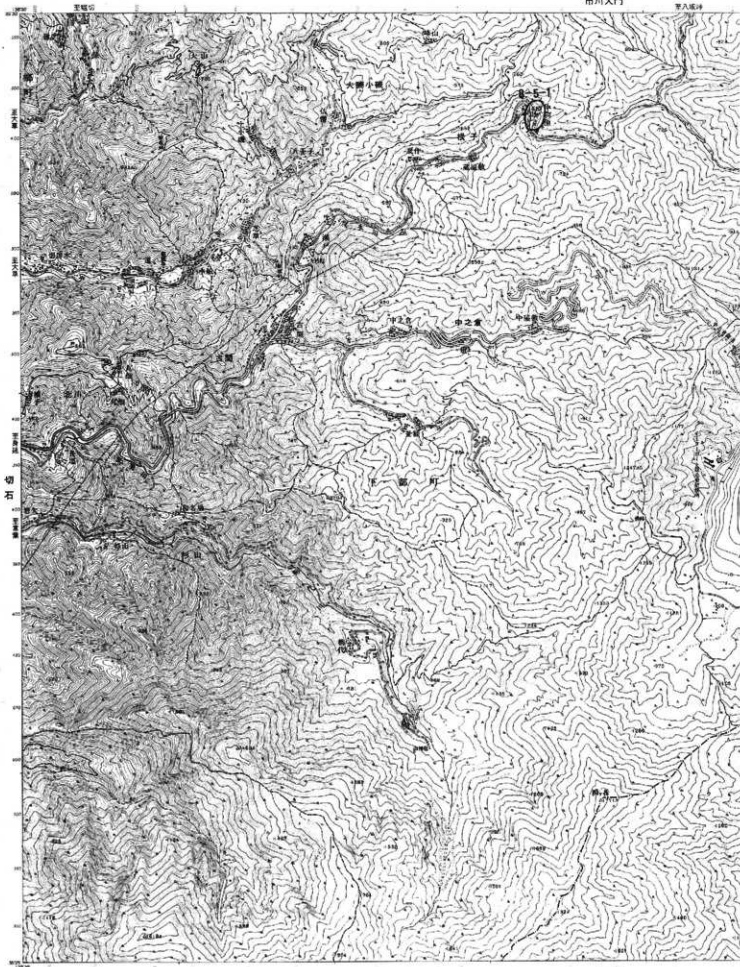
山梨県

- A. 甲府郡 1. 甲府市 2. 田代町 3. 石巻町
- 4. 工藤村
- B. 東八代郡 5. 奥宮村 6. 平湯町 7. 湯村
- 8. 戸田村
- C. 西八代郡 9. 海津大門町 10. 三枝町 11. 上九一色村
- 12. 下郷町 13. 六郷町

昭和4年測量
 昭和46年改訂
 昭和56年修正測量
 1. 測量は国土庁軍用測量所昭和55年10月迄
 2. 地形調査は昭和56年5月迄
 3. 地質は昭和27年5月3日現在
 4. 国定史蹟は海津大門町の境界は一新済

1:25,000 市川大門

昭和59年11月30日発行(3刷) 許可証(複製)第8号
 発行所 国土院 国土院 国土院

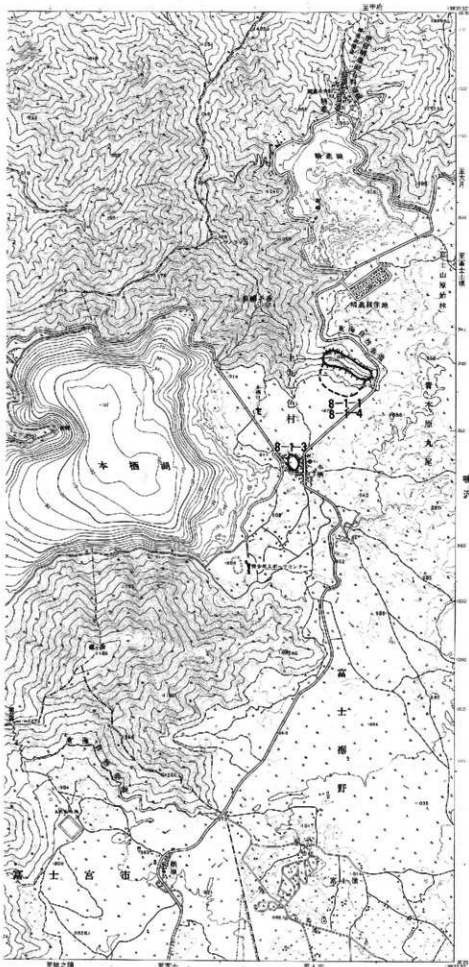


市川

人穴

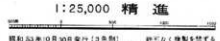
分布図 26

- 8-1-1 本栖の城山樹海内遺構
- 8-1-3 渡辺氏屋敷
- 8-1-4 本栖の城山
- 8-5-1 赤池氏屋敷



山梨県
A, 西八代郡 1, 六箇町 2, 下郷町 3, 上九一色村
静岡県
B, 富士宮市

昭和3年測量
昭和40年改測
昭和40年修正測量
1. 使用した空中写真は昭和50年10月撮影
2. 現地調査は昭和42年5月実施
3. 境界は昭和48年11月10日現在
4. 準測線は昭和30年測量の精度区に2.0



昭和52年10月30日発行(3色刷) 製図(複製)を禁ず
著作権所有等発行者 国土院

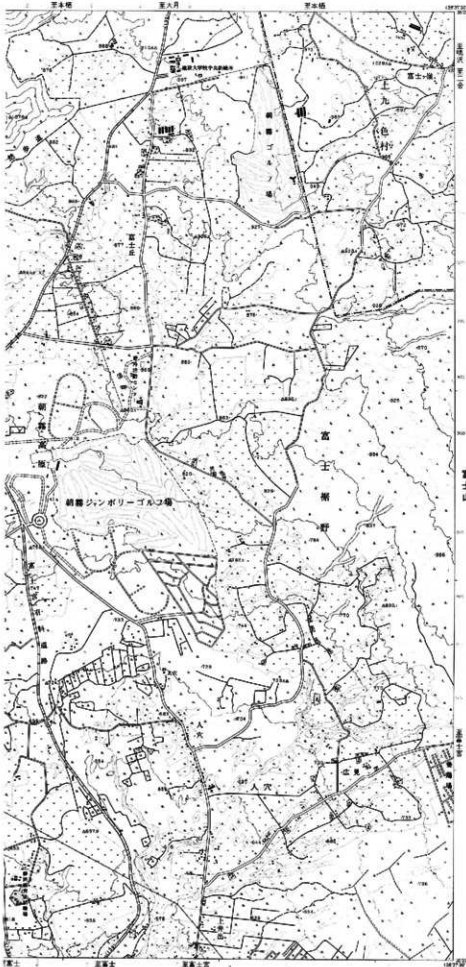


身延

上井出

分布図 27

8-5-2 金山嶺岩



行政区域

A	B	C
---	---	---

索引図

白石	静波	橋沢
赤城	富士山	
東部	上神谷	天石山

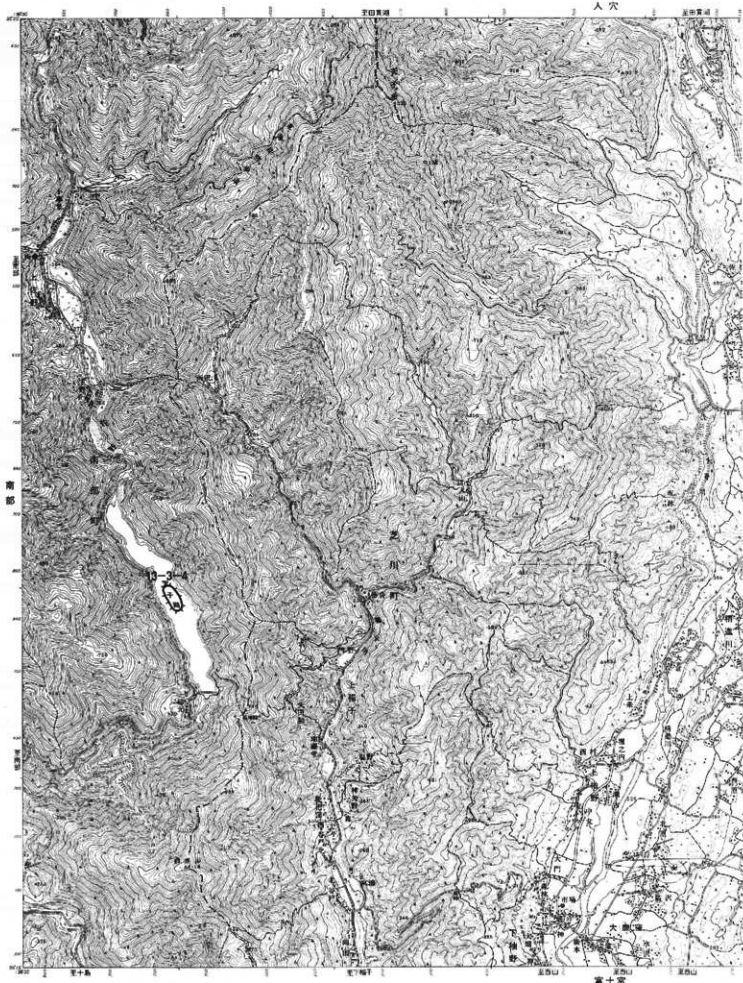
山梨県
A. 西八代郡 1. 下都町 2. 上九一色村
B. 東八代郡 3. 身延町 4. 西都町

静岡県
C. 富士宮市

昭和 3 年測量
昭和 48 年改測
昭和 52 年修正測量
1. 使用した空中写真は昭和 50 年 10 月撮影
2. 原測調査は昭和 32 年 6 月実施
3. 変更は昭和 48 年 12 月 5 日現在

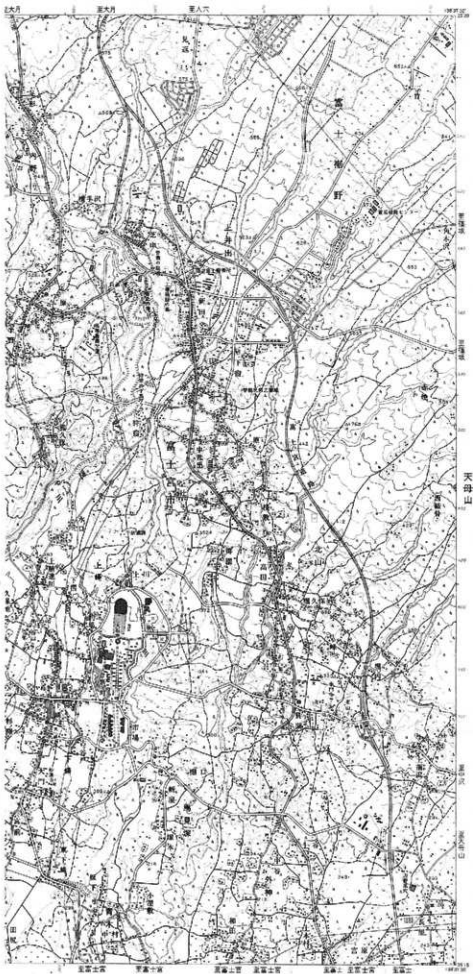
1:25,000 人 穴

昭和 54 年 2 月 28 日発行 (3 色刷) 許可証 (機測) 第 7 号
著作権所有兼発行権 国土地理院



分布図 28

13-3-4 佐野氏屋敷

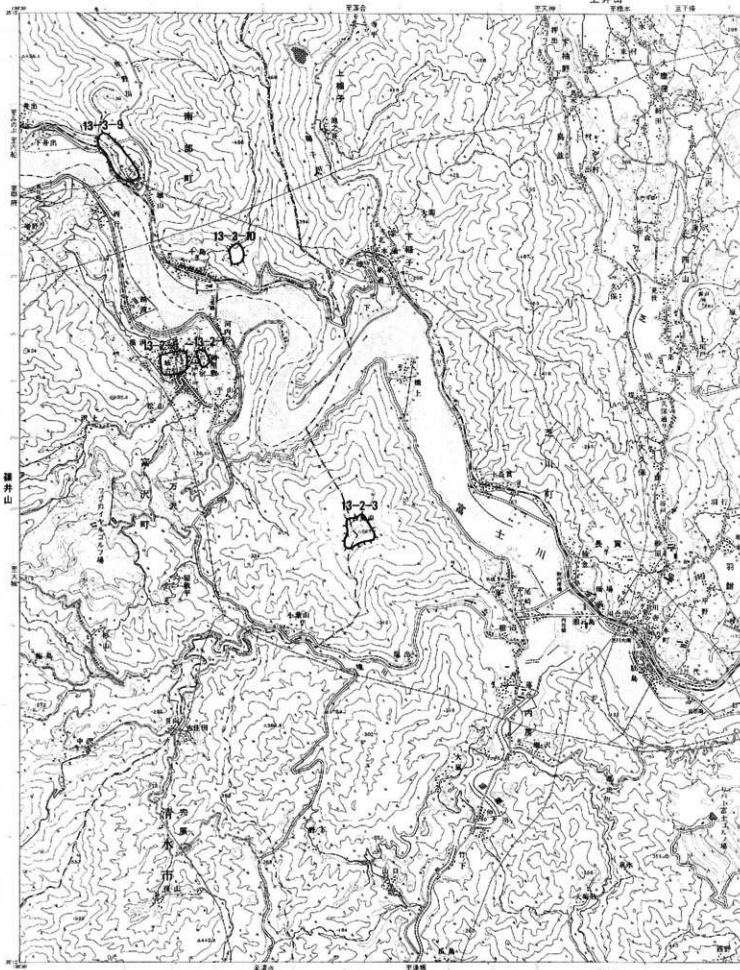


山梨県
A. 南群郡 南群町
静岡県
B. 富士郡 芝山町
C. 富士郡 芝山町

昭和3年測量
昭和45年改測
昭和56年停止測量
1. 使用した空中写真は昭和51年10月撮影
2. 現地調査は昭和56年7月実施
3. 縮尺は昭和56年5月16日現在

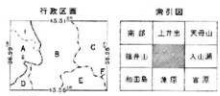
1:25,000 上井出

縮尺2000:1 (月30日発行) (3巻) 許可証(建設省)第4号
著作権所有事業行 国土院



分布図 29

- 13-2-1 万沢氏屋敷
- 13-2-3 白鳥山城
- 13-2-5 城台
- 13-3-9 井出城山
- 13-3-10 葛屋嶺砦(十島の烽火台)



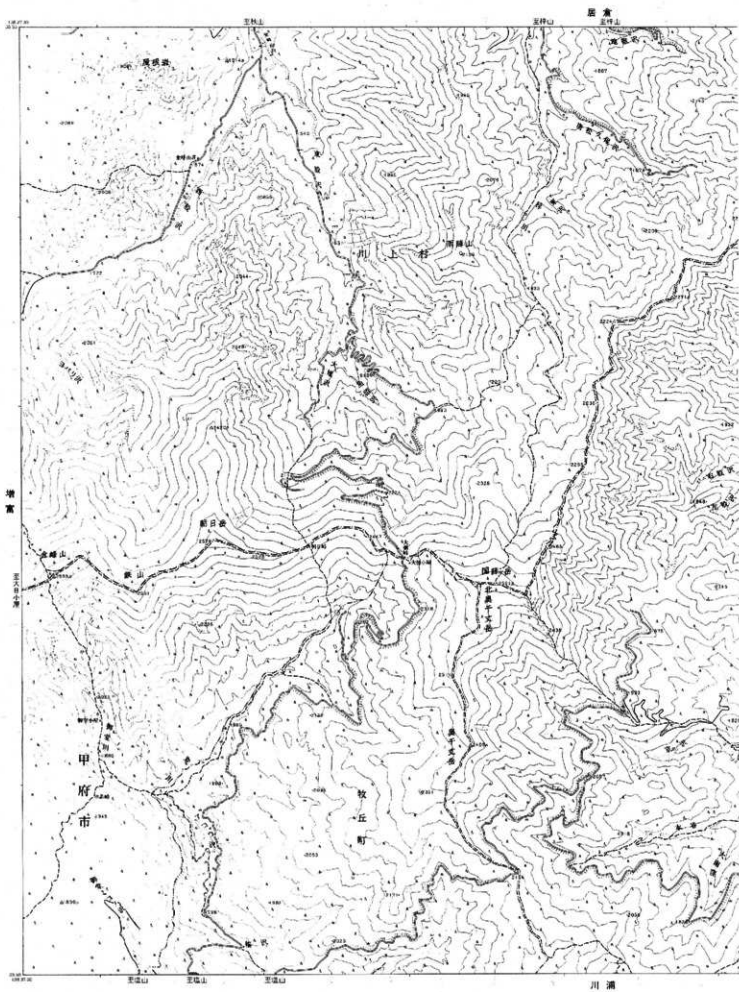
- 山梨県**
 A. 南沢町 1. 南沢町 2. 富士町
- 静岡県**
 B. 富士市 2. 月野
 C. 富士宮市
 D. 清水市
 E. 海原町 富士川町
 F. 富士市

大正5年測量
 昭和66年改定
 昭和56年修正測量

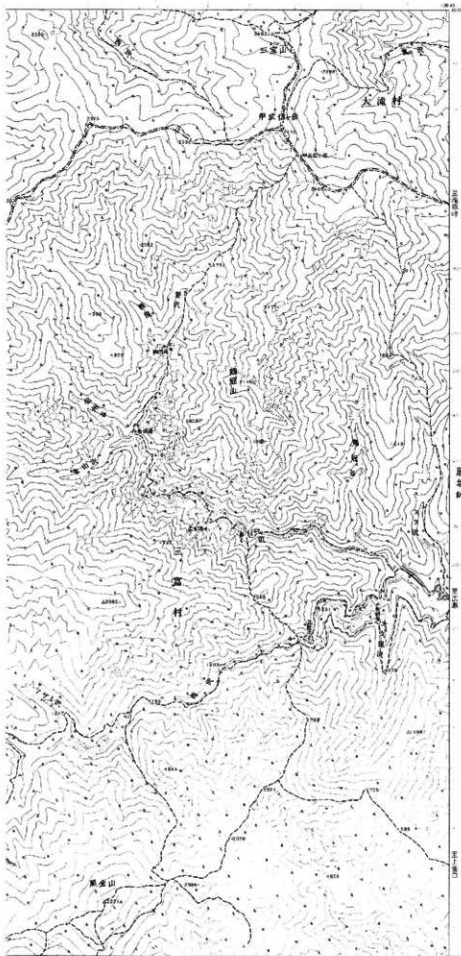
1. 使用した空中写真撮影期日10月10日撮影
2. 現地調査は昭和56年7月実施
3. 標準化期日2000年8月3日現在

1:25,000 富士宮

毎月20日発行 (3巻) 発行所: 国土院
 発行所: 国土院
 発行所: 国土院



分布图 30

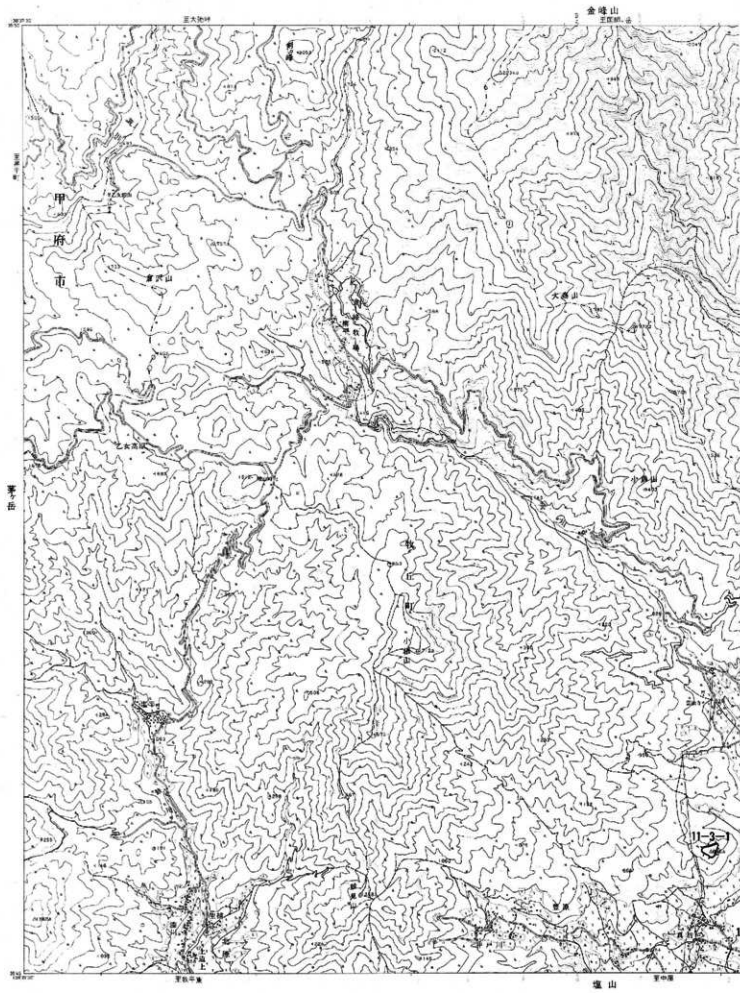


类别图
A 黑山乡 1. 五台乡 2. 三岔乡
B 大流村
C 甲家堡
D 黑山乡 1. 五台乡 2. 三岔乡

比例尺 1:25,000 金峰山

说明
1. 比例尺 1:25,000 系按 1:50,000 比例尺 1:25,000 缩制
2. 测图时间为 1980 年 8 月 26 日
3. 测图时间为 1980 年 8 月 26 日

1980 年 2 月 28 日发行 (3 卷册) 设计者: 地质部地质研究所
地质部地质研究所 国土地理院



分布図 31

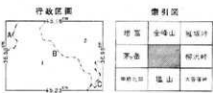
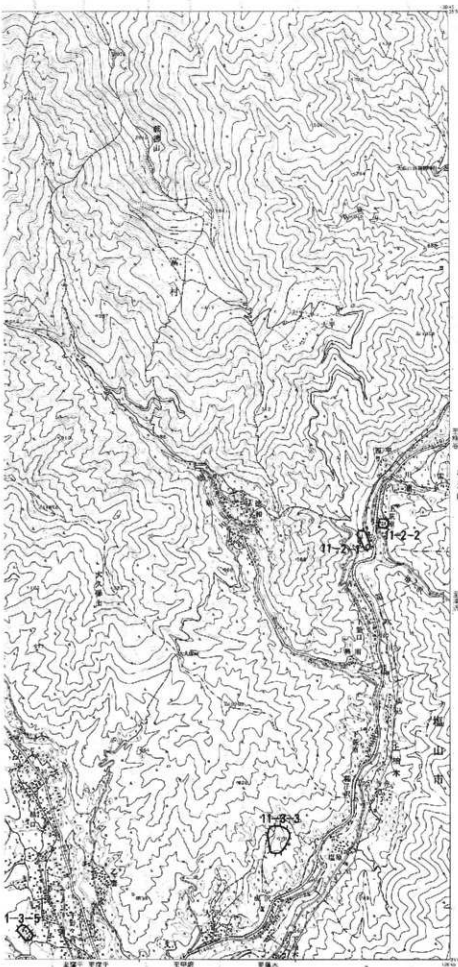
11-2-1 下釜口の烽火台

11-2-2 萩原氏屋敷

11-3-1 丸山烽火台

11-3-3 成沢の烽火台

11-3-5 大村氏屋敷

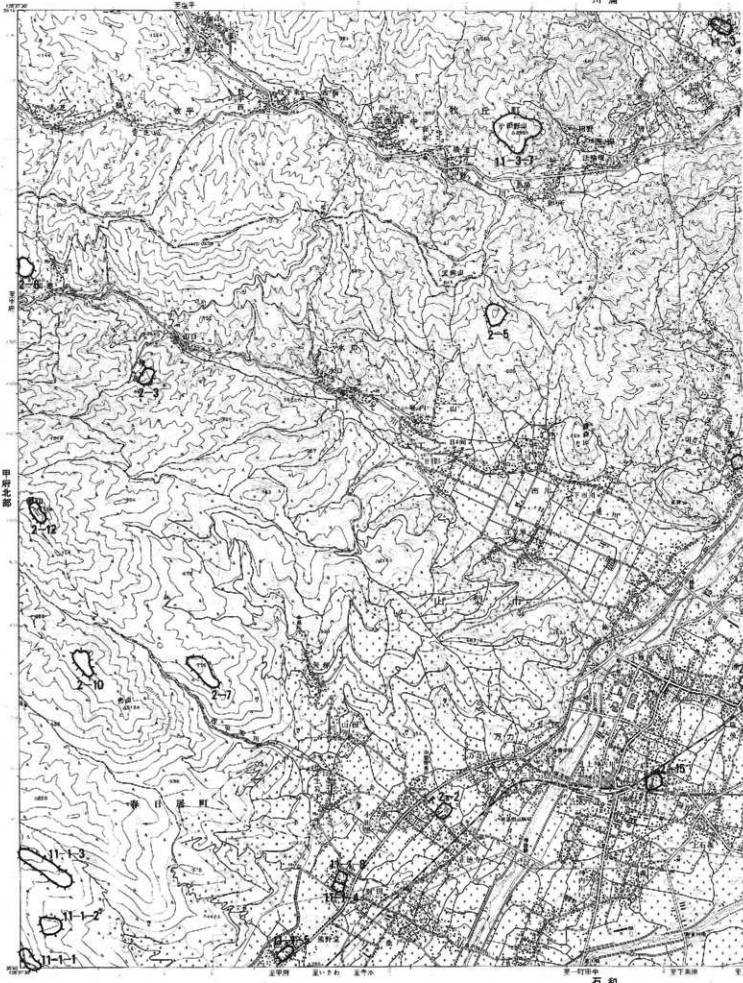


山脚
 A 宇治町
 B 山脚町 1. 五ヶ所 2. 三ヶ所
 C 山脚

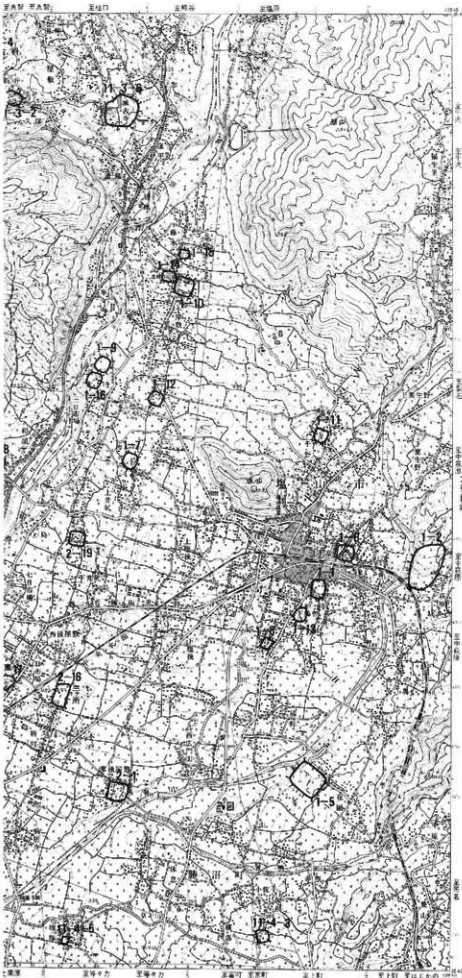
昭和4年測量
 昭和54年停止測量
 1. 使用した空中写真は昭和51年1月撮影
 2. 現況調査は昭和54年5月実施
 3. 境界は昭和50年11月1日現在

1:25,000 川浦

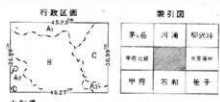
昭和56年4月30日発行 (3巻別) 許可なく複製を禁ずる
 著作権所有権発行者 国土地理院



分布図 32



- 1-1 於曾屋敷城
- 1-2 平西ノ原の城址
- 1-5 於曾館
- 1-6 武田兵庫助屋敷
- 1-7 風間氏屋敷
- 1-8 網野氏屋敷
- 1-9 二階堂氏館
- 1-10 武田信春館
- 1-11 十組屋敷
- 1-12 田辺氏屋敷
- 1-13 網野氏屋敷
- 1-14 奥山氏屋敷
- 1-15 武士原墓址
- 1-16
- 11-4-3 小佐手氏館
- 11-4-5 綿塚氏屋敷
- 2-1 武田金吾屋敷
- 2-2 武田氏落合館
- 2-3 仏沢城
- 2-5 丸山の烽火台
- 2-6 切差城山の烽火台
- 2-7 御前山の烽火台
- 2-8 上野氏屋敷
- 2-10 兜山烽火台
- 2-12 棚山烽火台
- 2-15 城伊庵屋敷
- 2-16 連方屋敷
- 2-17 安田氏屋敷
- 2-19 井尻氏屋敷
- 11-1-1 新古山城
- 11-1-2 小手城
- 11-1-3 小菩提城
- 11-1-4 小川奥右工門屋敷
- 11-1-5 信虎誕生屋敷
- 11-1-8
- 11-3-2 琵琶城
- 11-3-4 但馬屋敷
- 11-3-6 城古寺
- 11-3-7 小田野城



山梨県
 A. 山梨山 1. 山梨山 2. 山梨山 3. 山梨山
 B. 山梨山
 C. 山梨山
 D. 山梨山

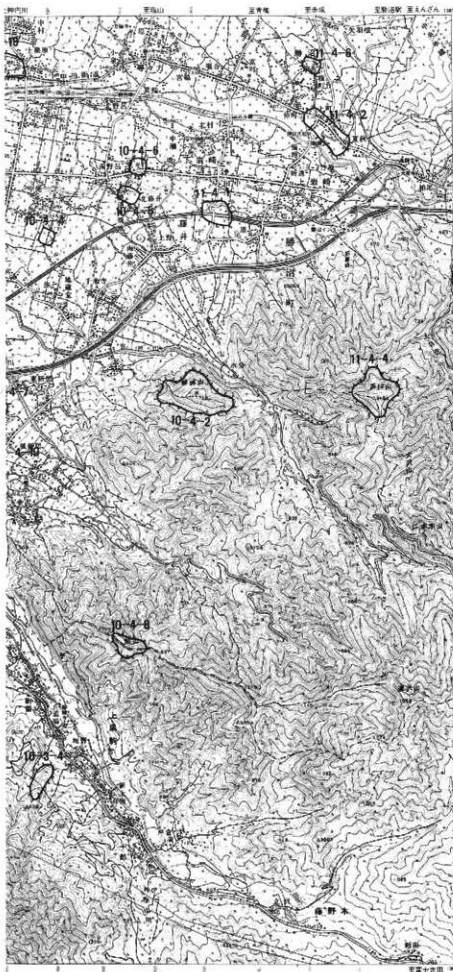
明治21年測量
 昭和18年改測
 昭和54年修正測量
 1. 発行：国土庁写真測量院昭和53年5月印刷
 2. 現地調査は昭和54年5月実施
 3. 発行は昭和54年6月25日現在

1:25,000 塩山

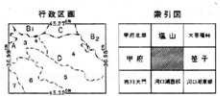
昭和55年7月20日発行 (3色刷) 11号に複製を禁ず
 国土庁国土地理院



分布図 33



- 10-1-1 八田氏御朱印屋敷
- 10-1-6 平井氏屋敷
- 11-4-1 岩崎氏館
- 11-4-2 史跡勝沼氏館跡
- 11-4-4 茶臼山烽火台
- 11-4-6 加賀屋敷
- 11-1-7 お下屋敷
- 10-2-2 黒坂氏屋敷
- 10-2-5 早川氏屋敷
- 2-4 関金平屋敷
- 2-14 中村氏屋敷
- 2-18 栗原氏屋敷
- 5-28 川田館
- 10-3-1 大野屋敷
- 10-3-2 野成山
- 10-3-4 小黒駒氏屋敷
- 10-4-1 筑前屋址
- 10-4-2 綾城敷
- 10-4-3 雨宮氏屋敷
- 10-4-4 早川氏屋敷
- 10-4-5 三枝氏屋敷
- 10-4-6 三辻氏屋敷
- 10-4-7 古屋氏屋敷
- 10-4-8 旭山烽火台
- 10-4-9 端運寺
- 10-4-10 新巻屋敷
- 10-4-11 塩田屋敷
- 10-4-12 浪人
- 10-5-1 高家三部屋敷
- 10-5-3 下新兵衛屋敷
- 10-5-4 米倉氏屋敷跡
- 10-5-5 小山氏城
- 10-5-6 武田氏館
- 10-5-7 奴白屋敷
- 10-5-8 浪人
- 10-5-9 夕日長者
- 10-5-10 朝日長者
- 10-5-12 屋敷の内
- 10-5-13 (米倉)殿屋敷



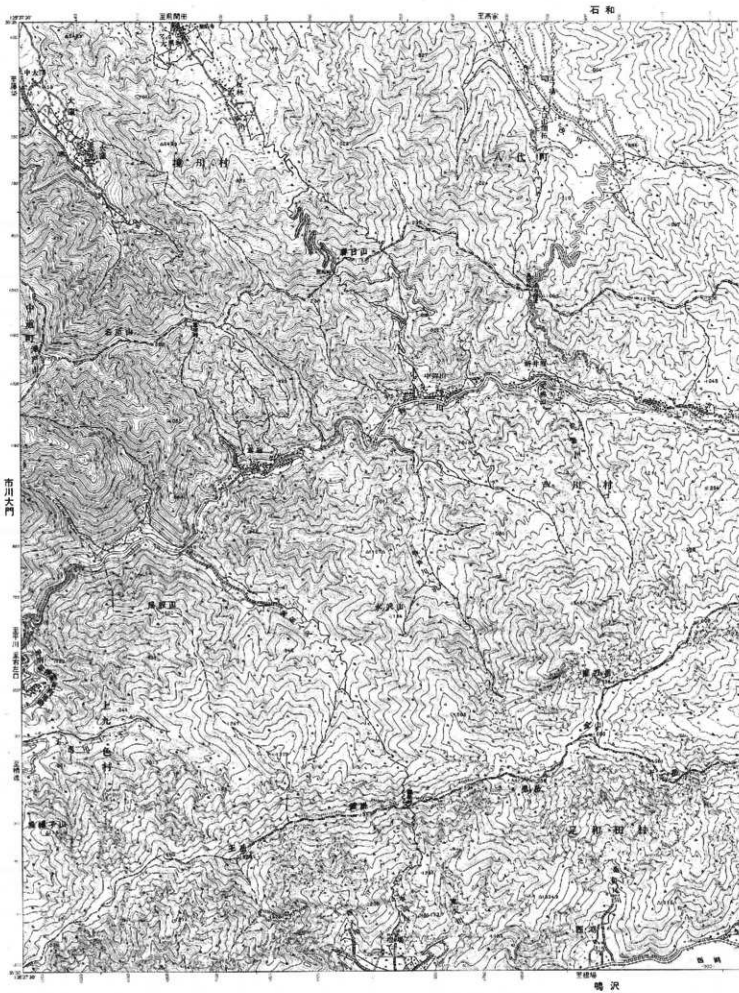
- 山麓集**
- A. 甲府市
 - B. 真山郡 1. 春日原町 2. 勝沼町
 - C. 山梨市
 - D. 東八代郡 3. 石和町 4. 一宮町 5. 御橋町
 - 6. 八代町 7. 保田村

昭和4年測量
 昭和45年改定
 昭和56年修正測量

1. 使用した空中写真は昭和56年10月撮影
2. 現地調査は昭和58年5月実施
3. 発表は昭和57年4月末日現在

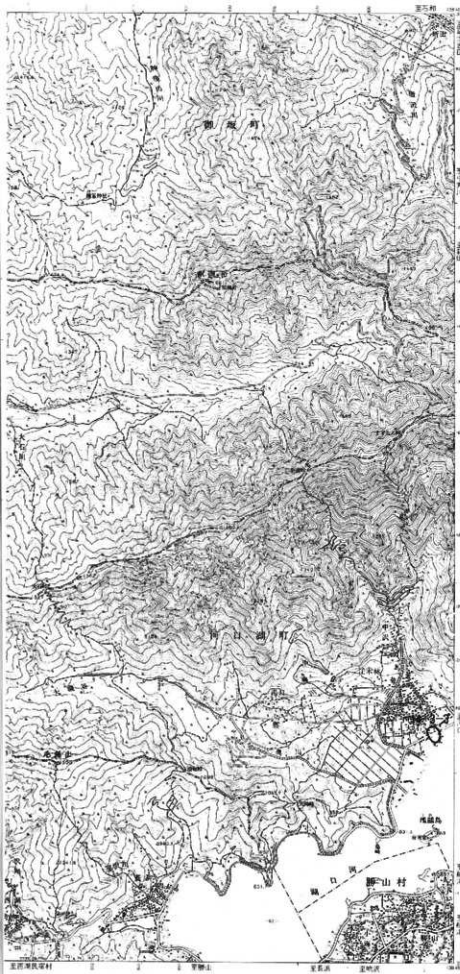
1:25,000 石和

昭和59年9月30日発行 (3色刷) 石和(株)印刷製本
 製作場所 東京発行所 国土地理院

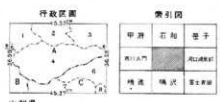


分布図 34

14-3-3 大石の鐘撞戸



河口湖西部

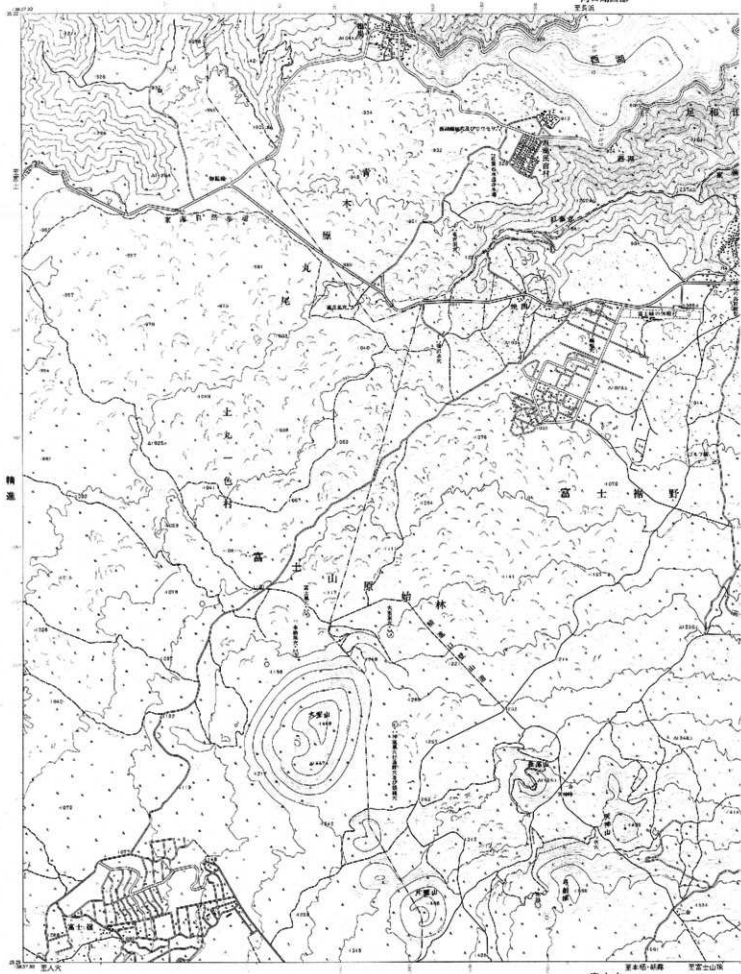


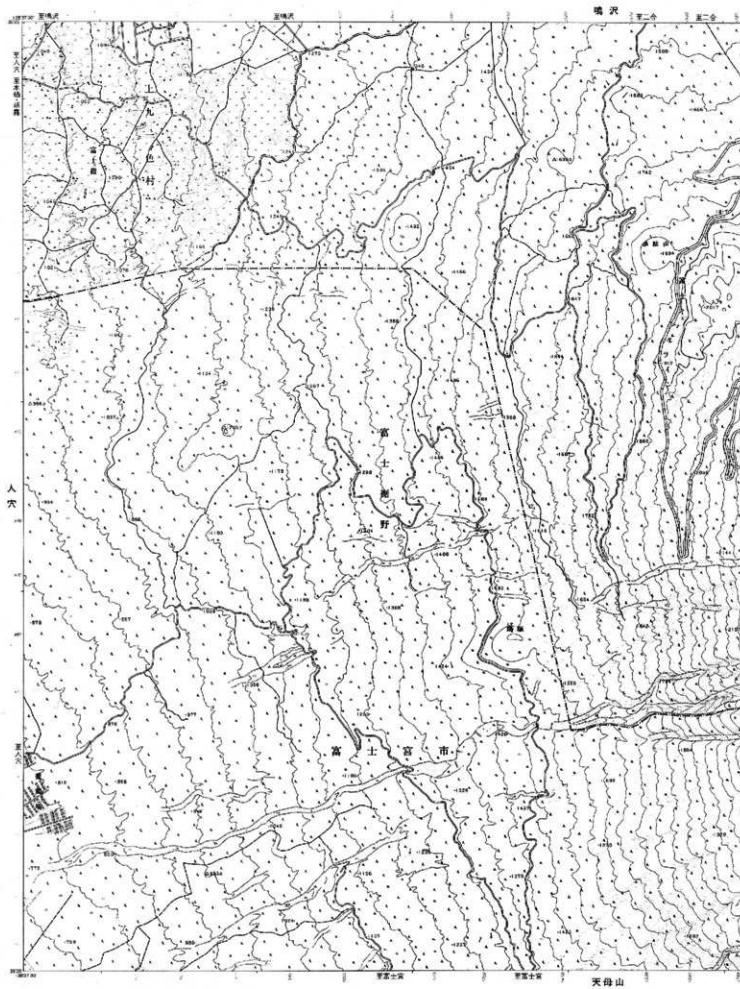
- 山梨県**
- A. 東八代郡 1. 境田村 2. 八代町 3. 朝成町
 - B. 西八代郡 4. 戸田村 5. 中道町
 - C. 清都郡 6. 河口湖町 7. 足利町 8. 勝山村

- 昭和4年測量
昭和45年改訂
昭和55年改正
1. 宇野七九中等測量昭和56年10月完成
2. 標高調査は昭和58年5月実施
3. 境界は昭和57年5月31日現在
4. 水深線は昭和58年測量の測深図に2.0

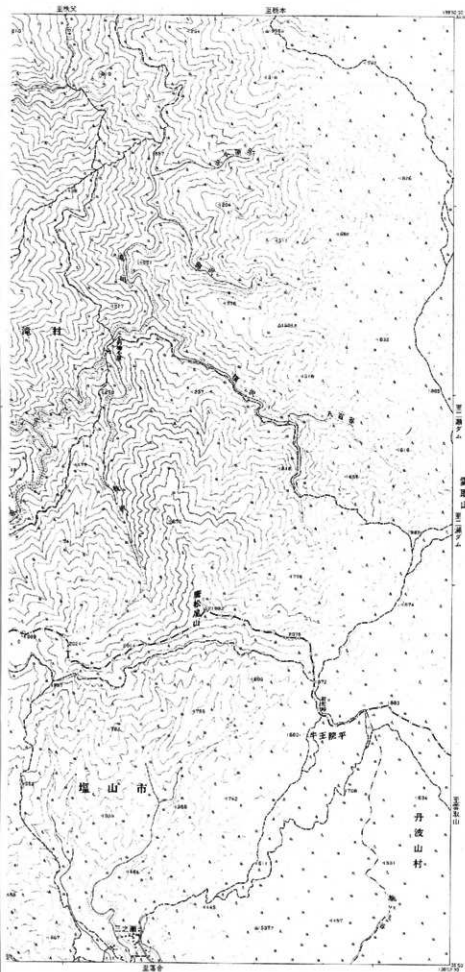
1:25,000 河口湖西部

昭和59年10月30日発行 (3巻別) 許可証(建設)第4号
著作権所有 国土地理院





分布図 37



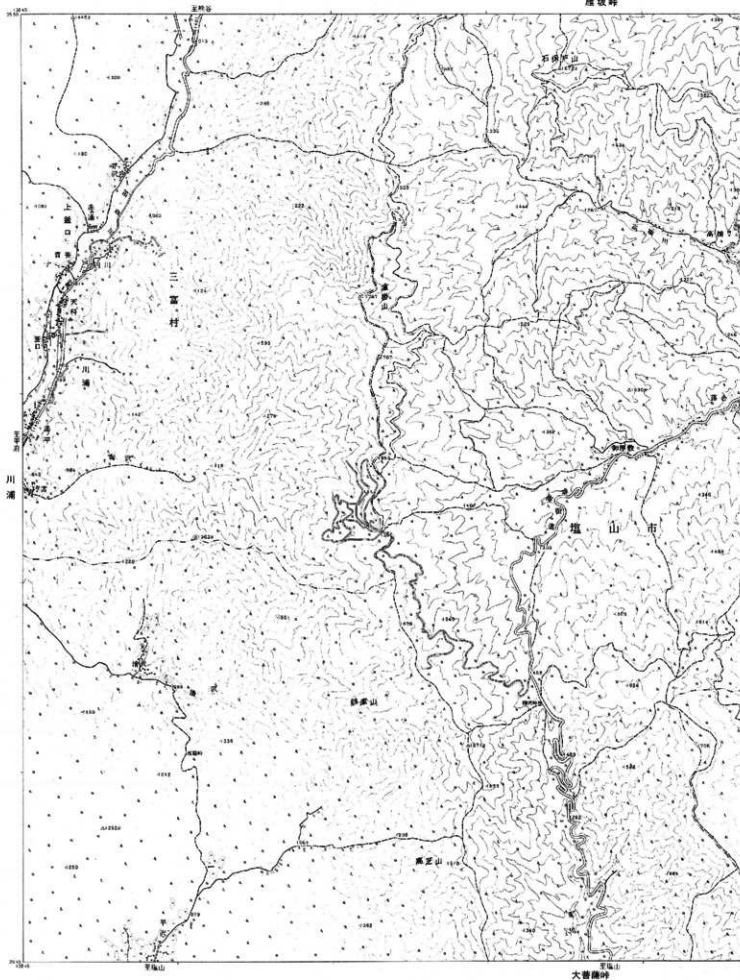
地玉集
A. 丸文郡 大津村

山梨集
B. 山梨市 三沢村
C. 塩山市
D. 北都留郡 丹波山村

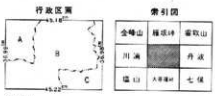
- 昭和48年調査
1. 使用した空中写真其は昭和47年10月撮影
 2. 現地調査は昭和48年6月実施
 3. 採集地昭和45年3月12日現在

1:25,000 雁坂峠

昭和49年12月20日発行 (3色刷) 許可号(環)第108号
 若狭地質研究所発行 国土地理院



分布図 38

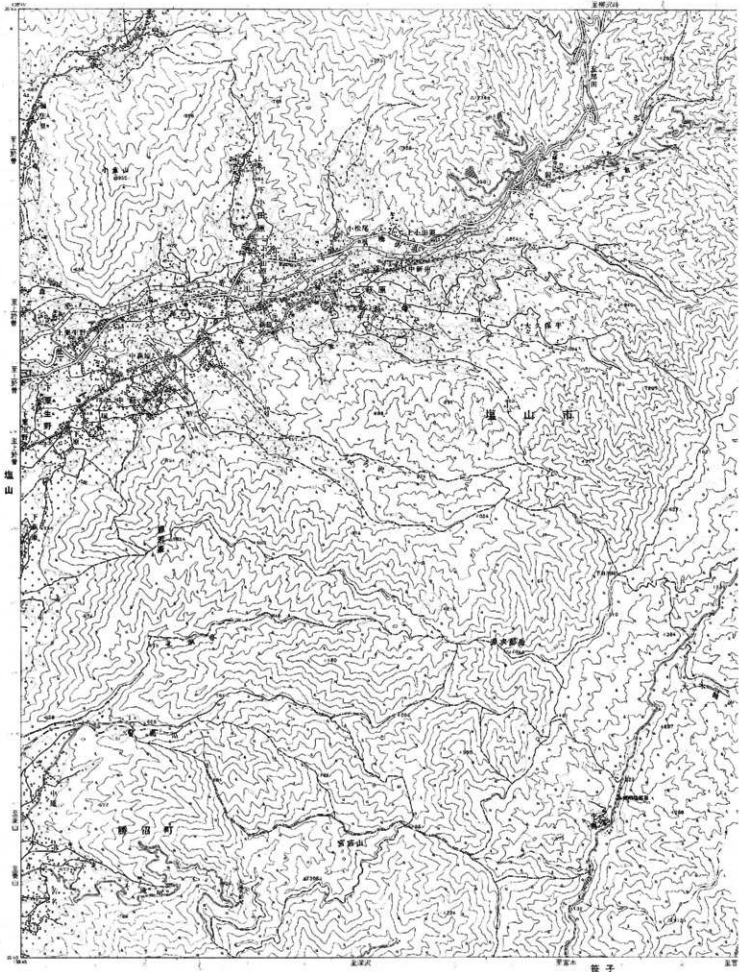


山脈通
 A. 天台山 二五村
 B. 塩山 丹波市
 C. 北前山 柳沢山村

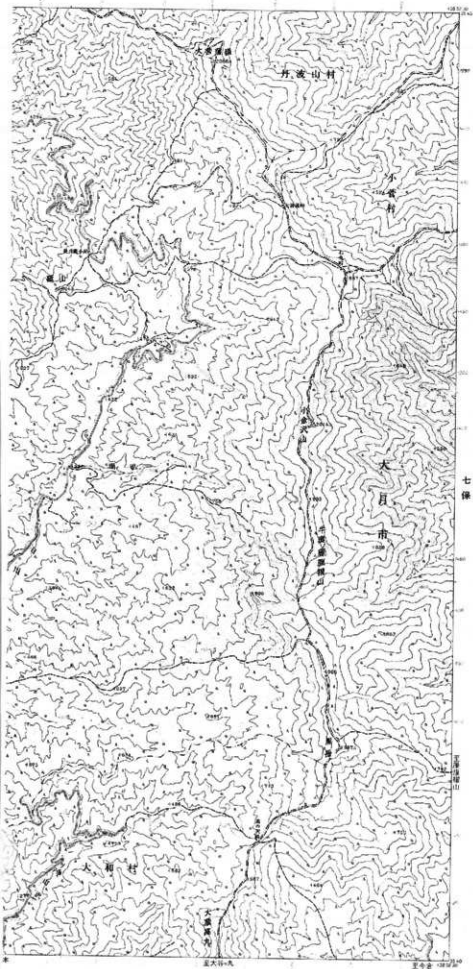
昭和46年測量
 1. 変更した空中写真は昭和47年10月撮影
 2. 現地調査は昭和48年7月実施
 3. 境界は昭和49年3月12日現在

1:25,000 柳沢峠

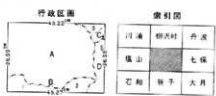
昭和50年1月30日発行 (3色刷) 許可号(建設)第千6
 著作権所有発行所 国土地理院



分布图 39



七保

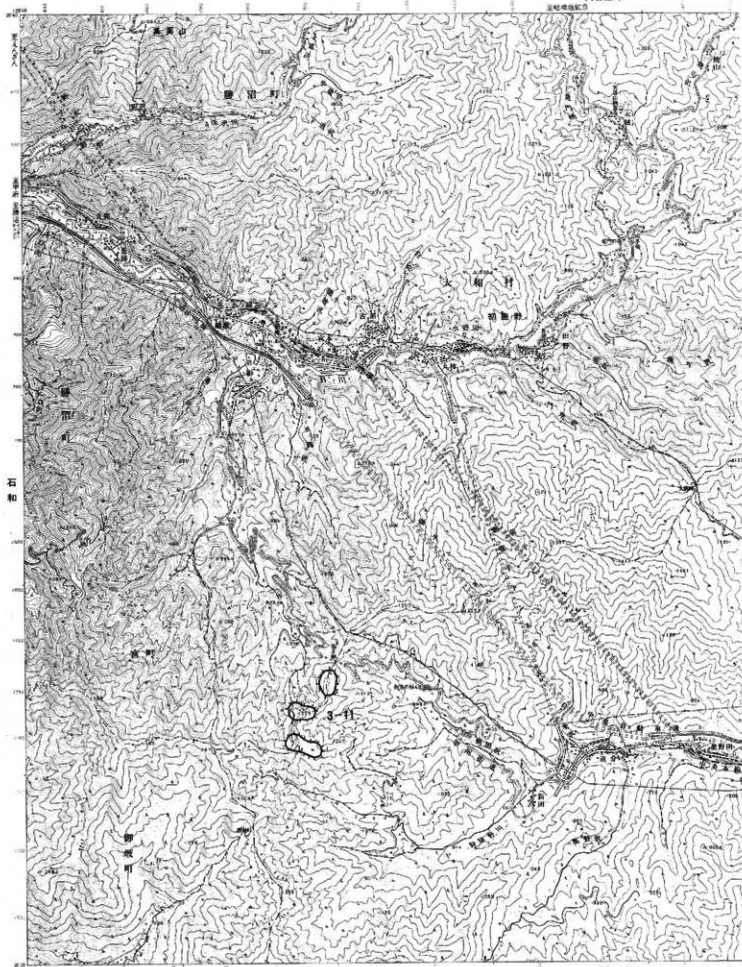


山脚圖
 A: 大月市
 B: 大菩薩嶺 1. 柳沢村 2. 丹波村
 C: 北郡區 3. 丹波山村 4. 小菅村
 D: 大月市

印刷縮尺與量
 1. 縮尺 1:25,000 中平直線以昭和47年10月測製
 2. 縮尺 1:25,000 中平直線以昭和46年7月測製
 3. 縮尺 1:25,000 中平直線以昭和49年3月11日測製
 縮尺 1:25,000 中平直線以昭和49年3月11日測製

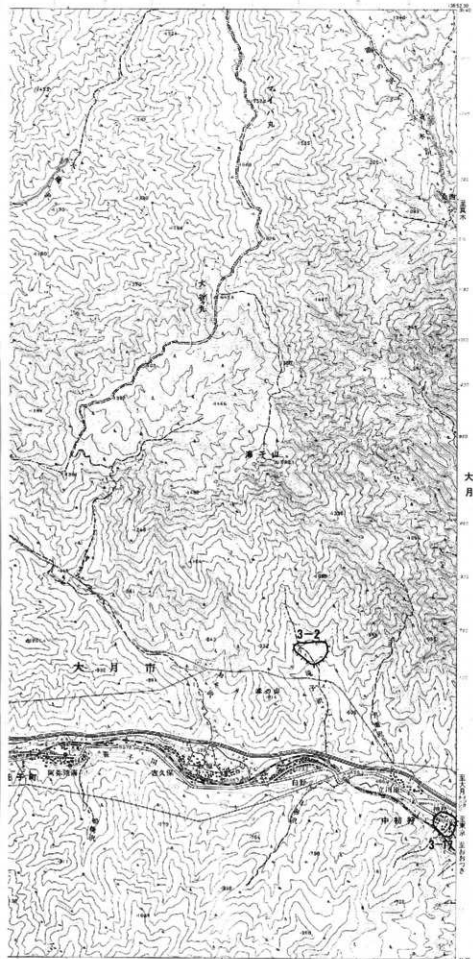
1:25,000 大菩薩嶺

昭和50年2月28日發行 (3色刷) 沖野(株)印刷製本所
 製作編者東京地行 國土地理院



分布図 40

- 3-2 鐘ヶ沢屋敷
- 3-11 笹子峠烽火台
- 3-17 和光屋敷



- 山梨県**
- A. 東山梨郡 1. 穂積町 2. 大和村
 - B. 大月市
 - C. 東八代郡 3. 一宮町 4. 御成町

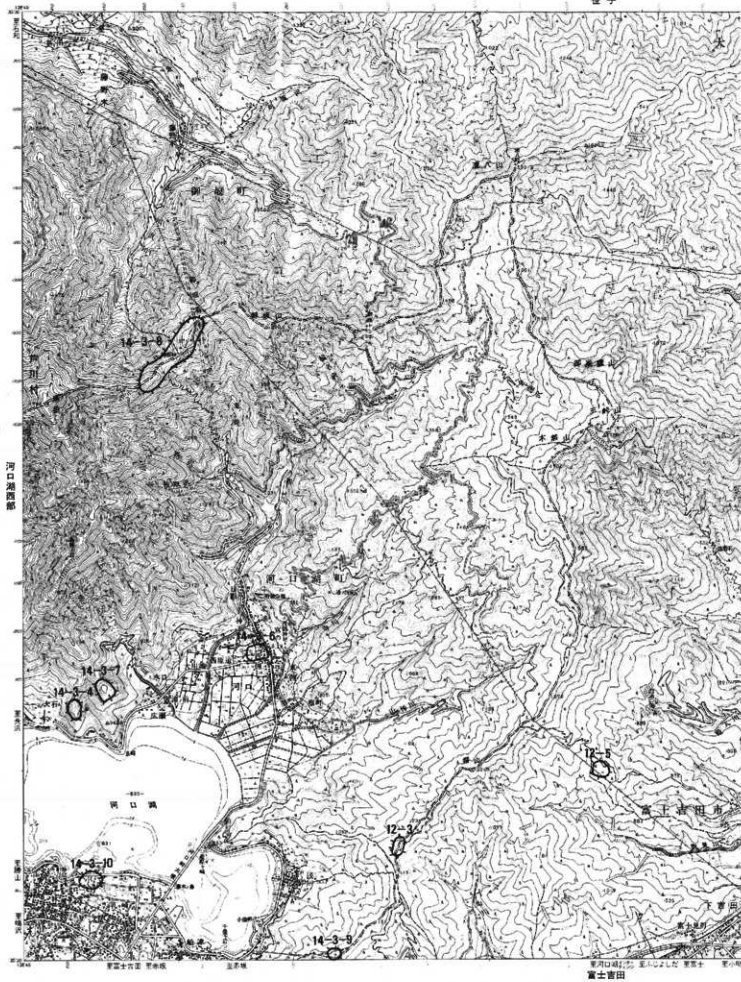
大正10年測量
 昭和45年改測
 昭和52年修正測量

1. 昭和57.7.23中止測量昭和59年10月補測
2. 昭和測量は昭和52年10月実施
3. 境界2箇所、52年3月10日現在

穂積町と大和村の境界は一部未定

1:25,000 笹子

昭和53年12月20日発行 (3巻第1) 許可号: 保製登第47号
 著作権所有者発行会 国土地理院



分布図 41

- 12-3 新倉御前山
- 12-5 上暮地御殿山
- 12-8 上暮地館
- 14-3-4 大石の城山
- 14-3-6 河口氏屋敷
- 14-3-7 広瀬の城古山
- 14-3-8 御坂城
- 14-3-9 天女山烽火台
- 14-3-10 船津鐘撞堂
- 14-5-1 倉見屋敷
- 14-5-3 長者屋敷
- 6-4 境館



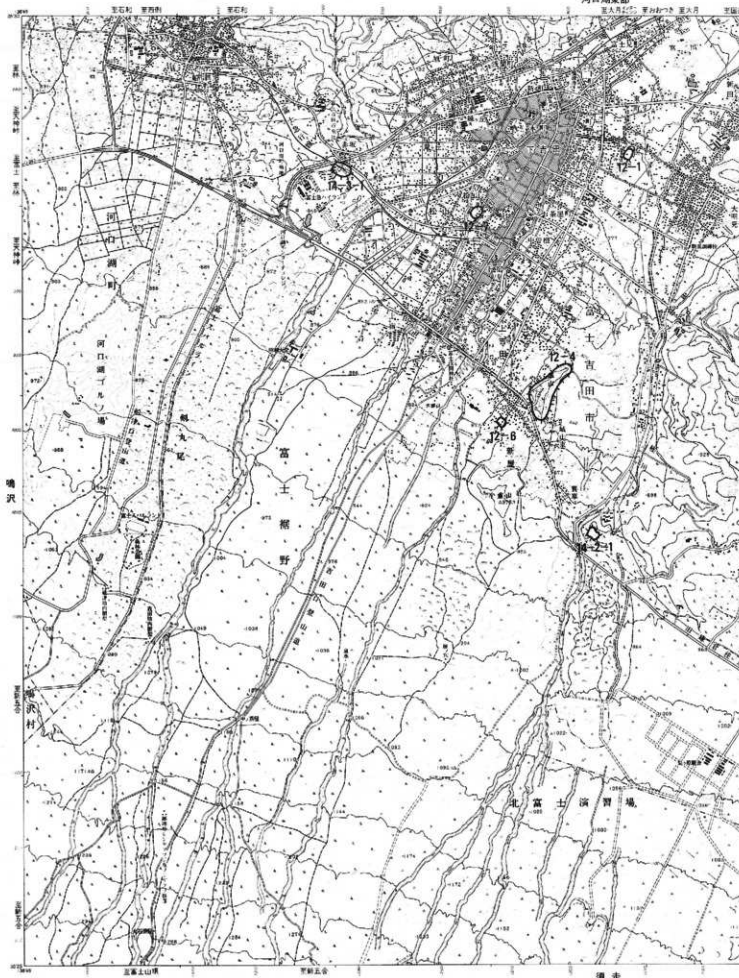
- 山梨県
- A. 奥六代村 1. 御地村 2. 戸川村
 - B. 大月市
 - C. 都留市
 - D. 早倉編組 3. 河口編組 4. 善徳町
 - E. 富士市西南

大正10年測量
昭和45年改訂
昭和62年修正測量

- 1. 変更なし(変更箇所は昭和62年測量補正)
- 2. 現地調査は昭和62年9月実施
- 3. 境界は昭和62年3月01日現在
- 4. 等高線は昭和62年測量の成果図による

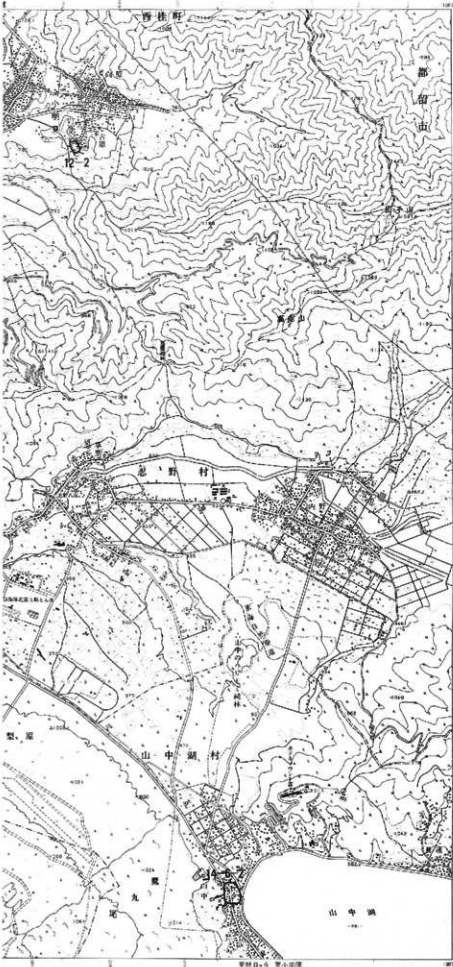
1:25,000 河口湖東部

昭和63年9月30日発行 (3色刷) 計25(複製5)876
著作権所有製版行 国土院印刷

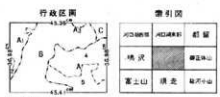


分布図 42

- 12-1 下吉田館
- 12-2 古原館
- 12-4 吉田城
- 12-6 新屋館
- 12-7 松山館
- 14-2-1 忍野鐘山
- 14-6-2 山中氏屋敷
- 14-3-1 赤坂墨址



富士山



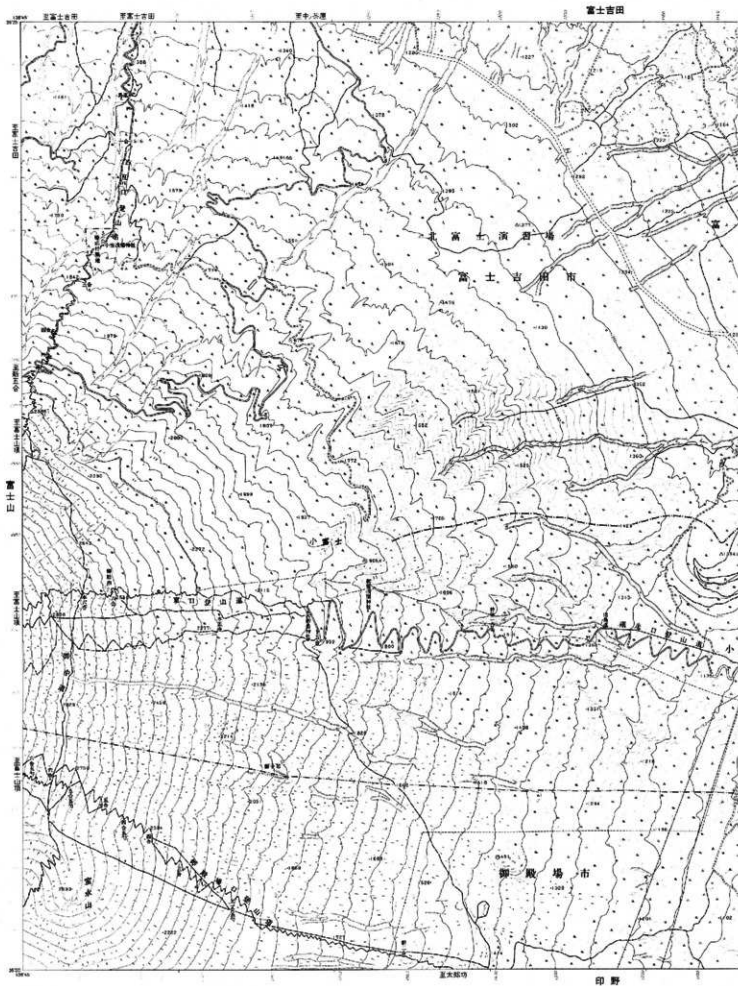
- 山梨県
- A, 南都留郡 1, 河口湖町 2, 峡沢村 3, 西桂町
 - 4, 忍野村 5, 山中湖村
 - B, 富士宮市南
 - C, 新編市

大正10年測量
 昭和10年改正
 昭和15年修正測量

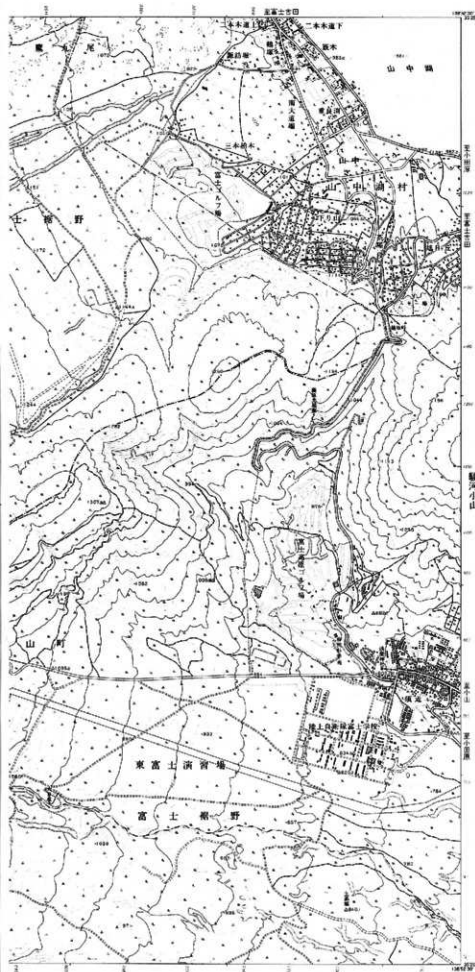
- 1, 実測(大正10年)及び昭和15年12月撮影
- 2, 現地調査(昭和15年)及び実測
- 3, 地形図(昭和15年)及び10:1現尺
- 4, 測量線社昭和15年測量の測量図に2:5

1:25,000 富士吉田

昭和14年(11月30日)發行 (3色刷) 許可号(独製)第27号
 著作権所有者発行所 国土院理院



分布図 43

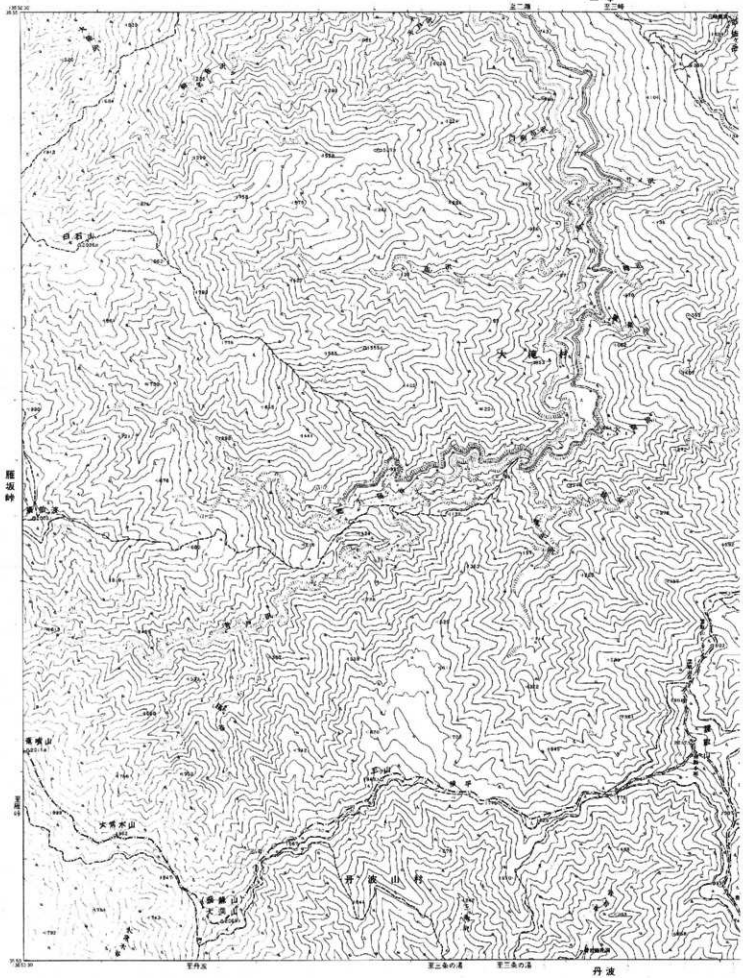


- 行政区域**
- A. 富士吉田市
B. 南相模郡 1. 山手町 2. 駿山町
- 山梨県**
- A. 富士吉田市
B. 南相模郡 1. 山手町 2. 駿山町
- 静岡県**
- C. 駿東郡 小山町
D. 御殿町

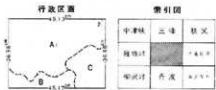
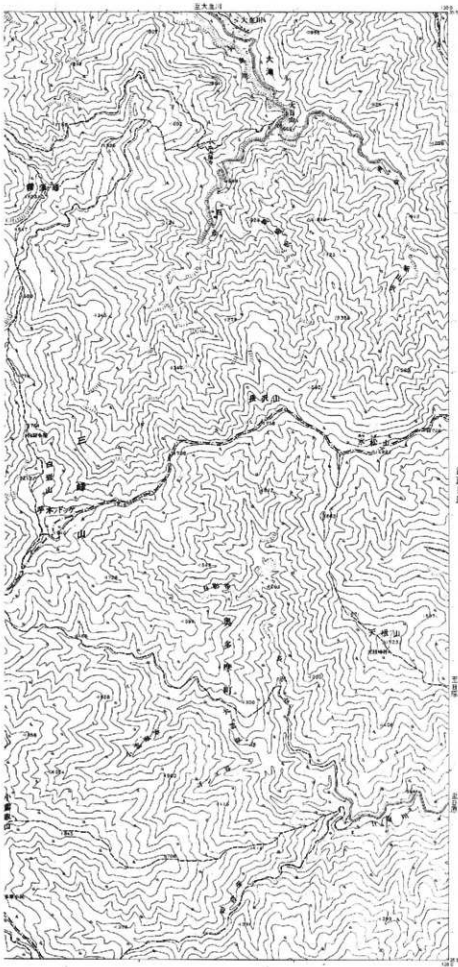
- 大正10年測量
昭和48年改正
昭和52年修正測量
1. 境界は中間等高は昭和51年12月撮影
 2. 境界線量は昭和50年4月3日算
 3. 境界は昭和52年3月10日現在
 4. 境界線は昭和50年測量の境界線に1.5
富士吉田市と小山町の境界は一部東正
山中津村と小山町の境界は一部東正

1:25,000 須走

昭和54年10月30日発行 (3色刷) 計画法(地製)第4号
製作場所有発行所 国土地理院



分布图 44



埼玉县
 A 秋田县 ① 大湫村 ② 九戸町

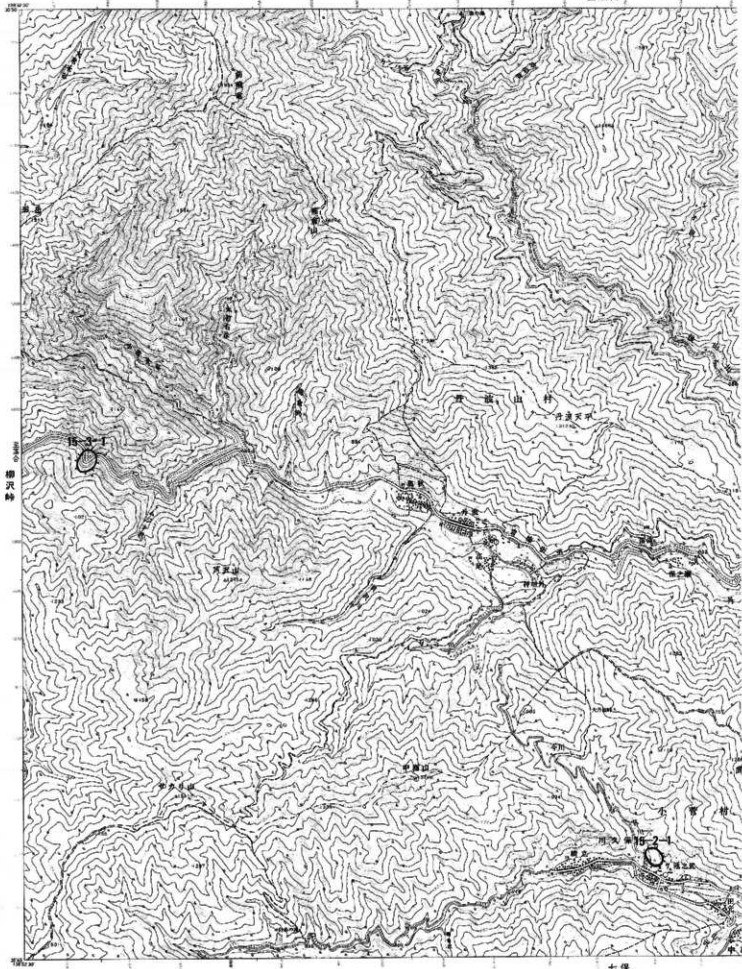
山梨县
 B 北都留郡 丹波山村

東京都
 C 西多摩郡 奥多摩町

昭和46年測量
 1. 使用九宮寺等高度図47年11月編刷
 2. 地形図資料48年6月編刷
 3. 地形図資料49年3月5日編刷

1:25,000 雲取山

昭和49年12月20日発行 1:3色刷 25コマ(複製6コマ)
 著作権所有者発行所 国土地理院



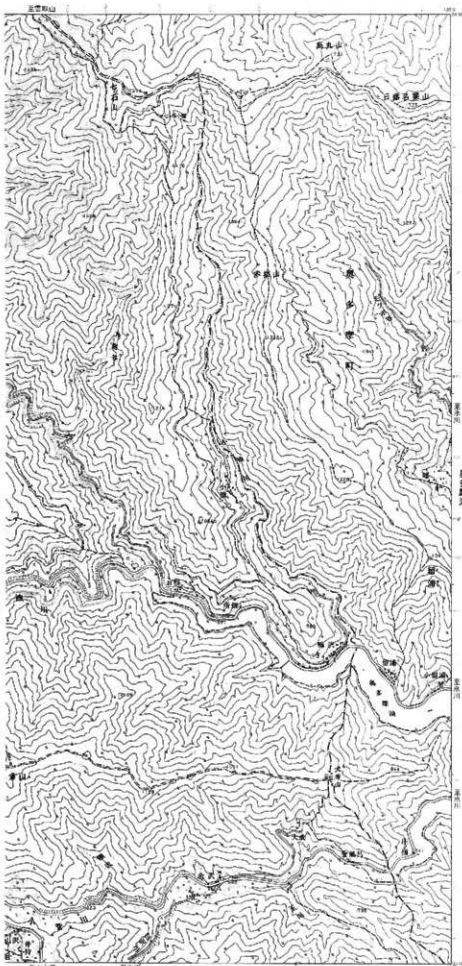
柳沢峠

七條

分布図 45

15-2-1 小菅岩

15-3-1 信玄屋敷



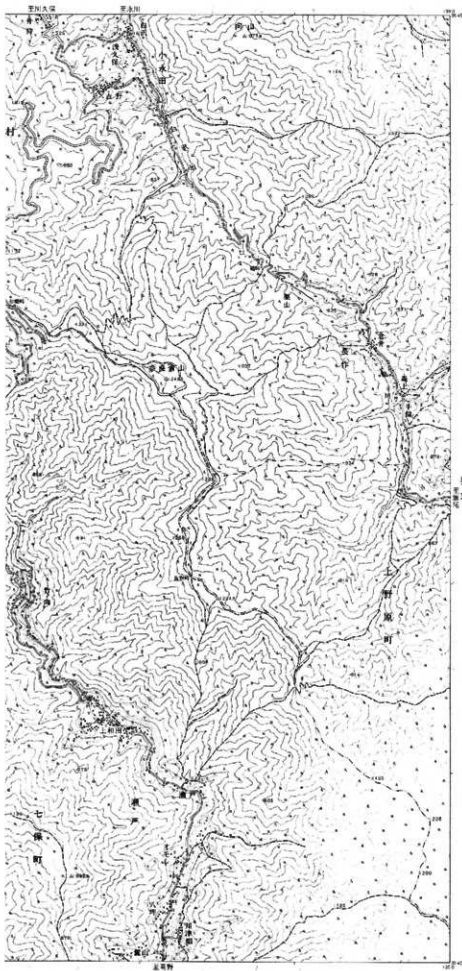
山梨県
A. 北郡 1. 丹波山村 2. 小菅村

東京都
日. 日野市 高. 高野町

- 昭和48年調査
1. 使用した空中写真は昭和47年10月撮影
 2. 地形調査は昭和48年7月実施
 3. 境界は昭和48年3月4日現在

1:25,000 丹波

昭和62年1月30日発行 (3巻) 発行所(株)5等4
製作場所 東京行幸 国土地理院

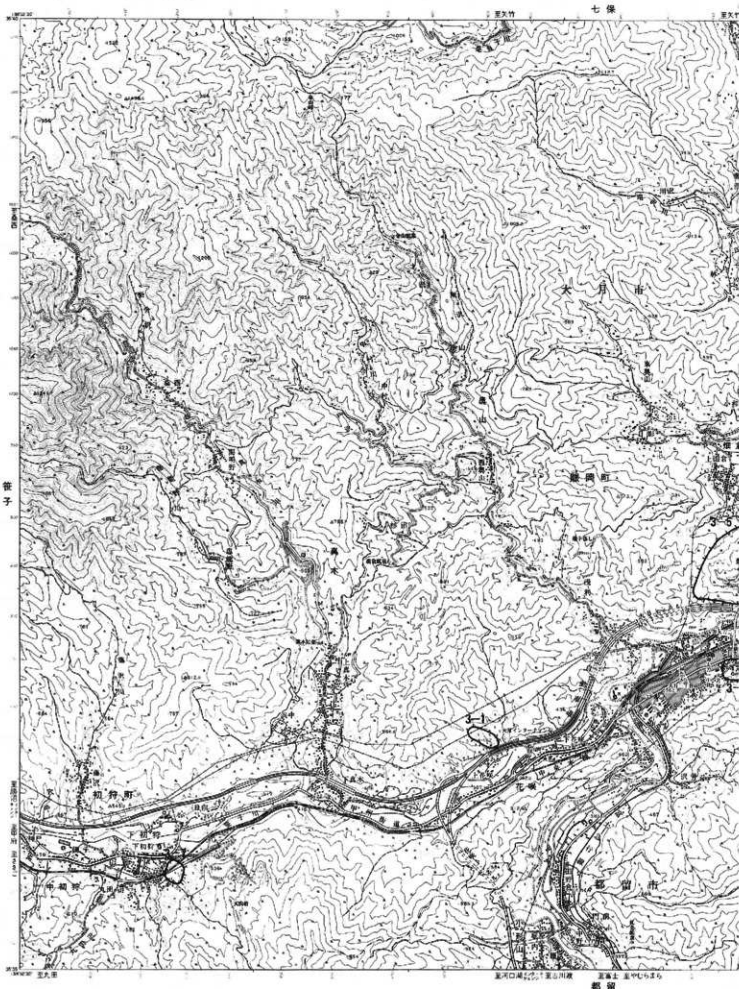


東京都
A. 大井町 東京都
山崎郡
B. 北野原町 1. 丹波山崎 2. 小室町 3. 上野原町
C. 大井町

昭和49年測量
1. 使用1:25,000等速比例尺47年10月撮影
2. 標高調査は昭和48年7月実施
3. 境界は昭和49年3月1日現在

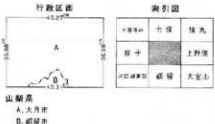
1:25,000 七保

昭和50年2月28日発行 (3色刷) 発行所(複製)東京
製作所(複製)東京 国土院



分布図 47

- 3-1 花咲鐘撞堂
- 3-5 岩殿城
- 3-6 駒宮砦
- 3-7 河内屋敷
- 3-10 駒橋御前山
- 3-12 猿橋の城山
- 3-13 妾婦屋敷
- 3-14 丹後屋敷

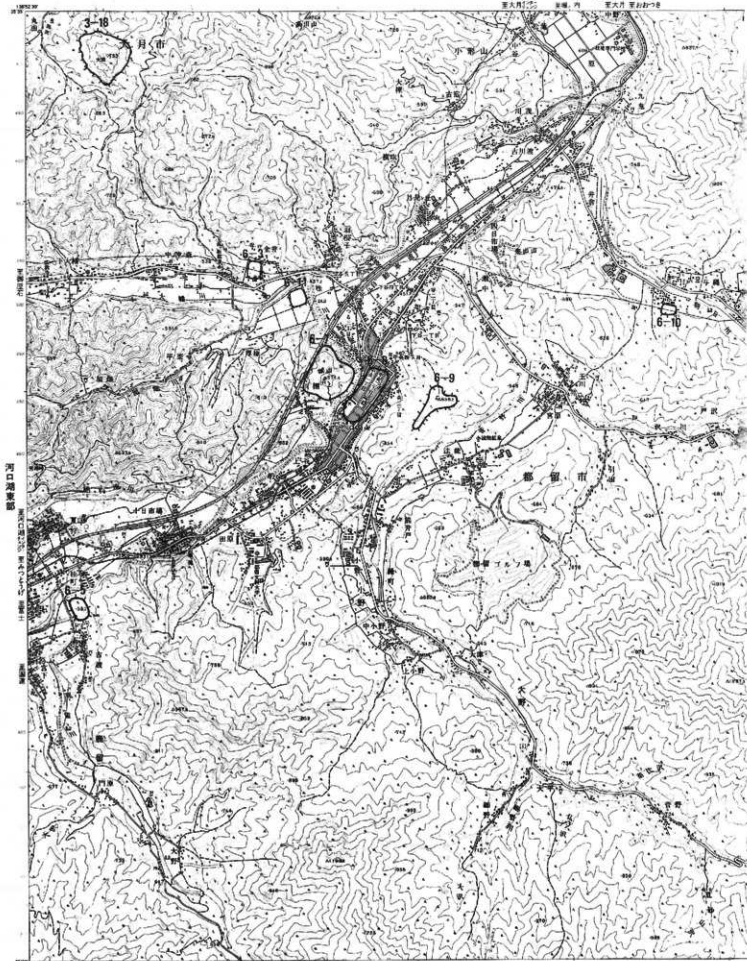


縮尺 4 年別量
縮尺 45 年別量
縮尺 50 年別量

1. 採用した空中写真は昭和 51 年 12 月撮影
2. 現地調査は昭和 52 年 10 月実施
3. 縮尺は昭和 48 年 7 月 22 日現在

1:25,000 大月

昭和 53 年 8 月 30 日発行 (3 巻第 4 号) 許可号 1 国領 7 第 4 号
製作所 国土院行 国土院理院

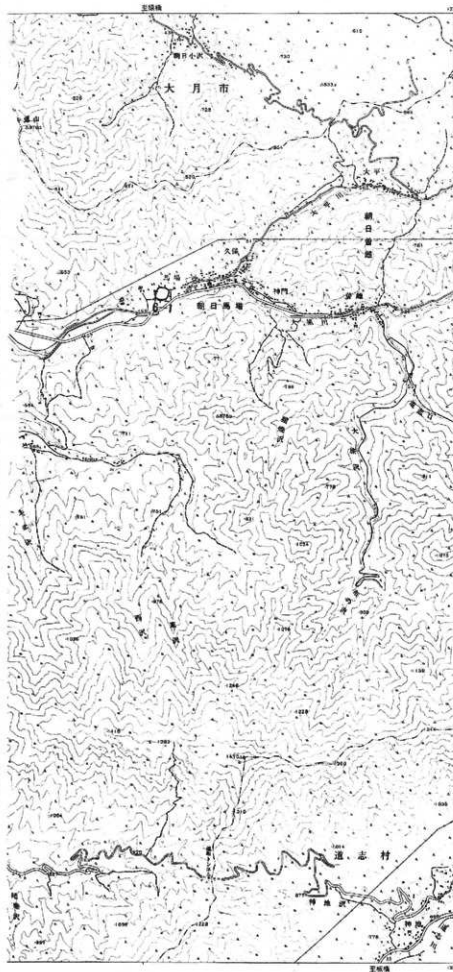


河口湖方面

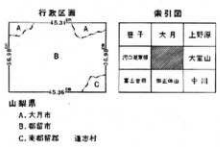
御正体山

分布図 48

- 6-1 朝日馬場館
- 6-3 中津森館
- 6-5 古渡城山の烽火台
- 6-7 勝山城
- 6-8 谷村城
- 6-9 谷村の烽火台
- 6-10 与繩館
- 6-11 道生稲
- 3-18 近ヶ坂鐘撞堂



大室山

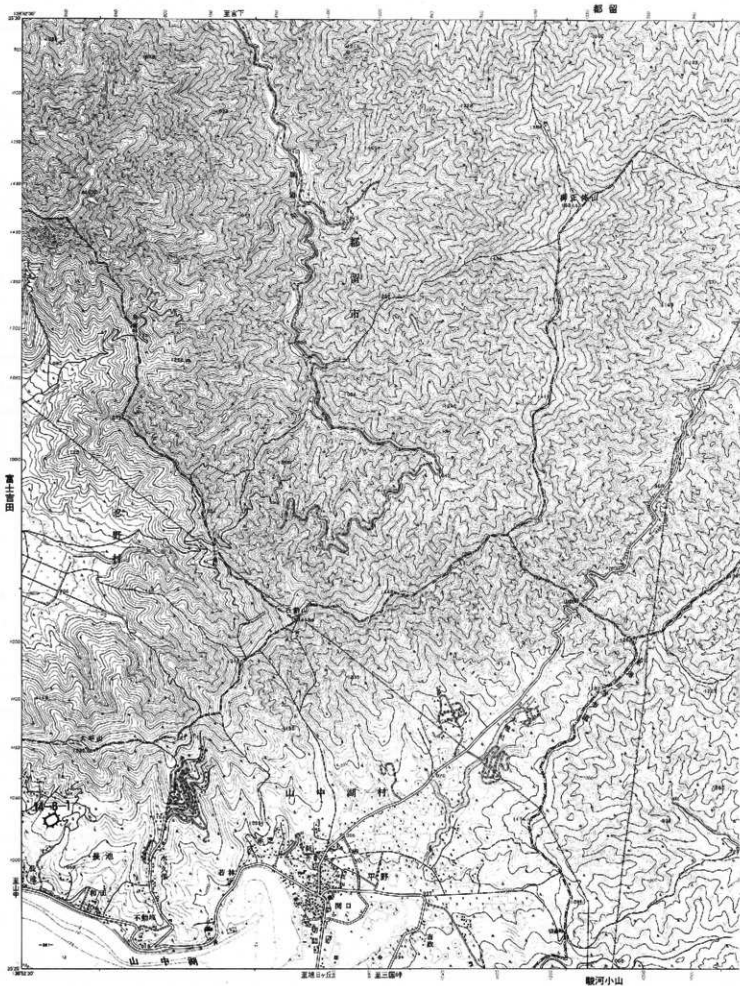


昭和4年測量
昭和46年改定
昭和57年修正測量

1. 使用した空中写真は昭和51年12月撮影
2. 標高調査は昭和59年12月実施
3. 沿革は昭和48年7月24日現在

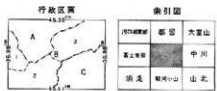
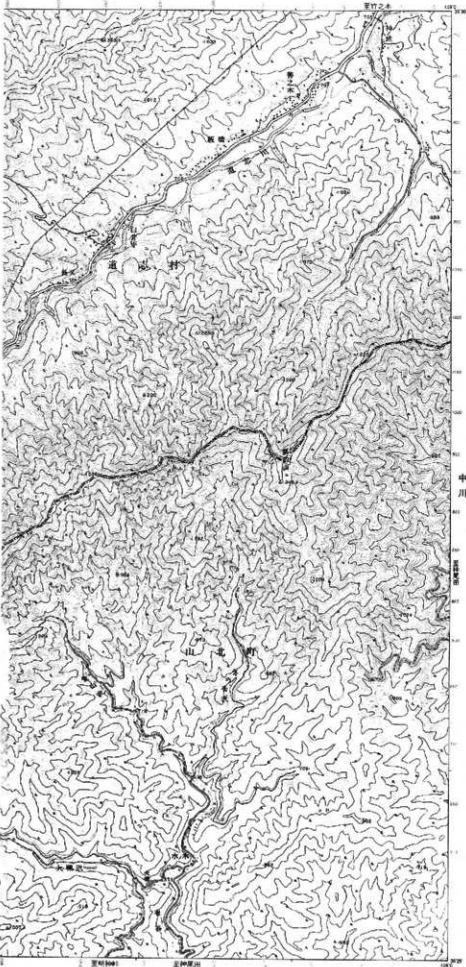
1:25,000 都留

昭和53年10月30日発行(3色刷) 計可在(複製も禁) 6
製作編者 国土院 国土院



分布图 49

14-6-1 和田殿屋敷



行政区画
A. 山形市
B. 山形郡
C. 山形市

索引図
大雪山 山形市 中川 山形市 山形市

山形市
A. 山形市
B. 山形郡 1. 志野村 2. 山中瀬村 3. 道志村

山形市
C. 志野村 山形市

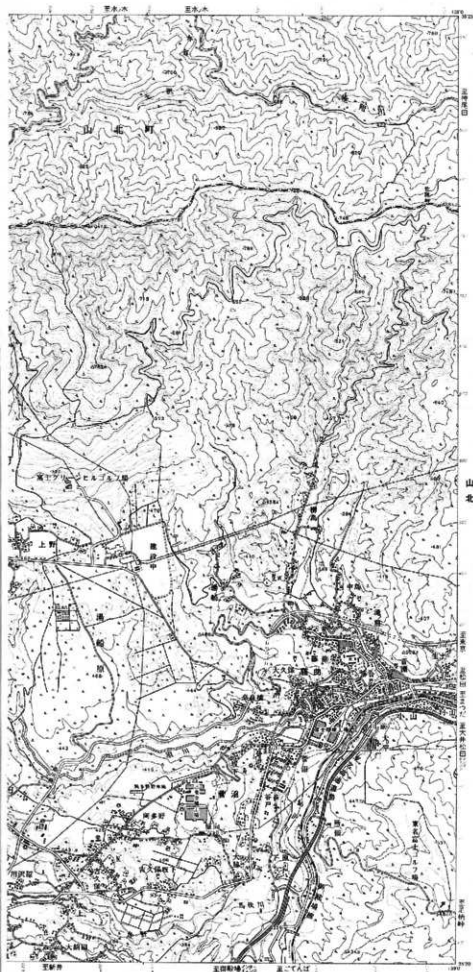
昭和 4 年測量
昭和 48 年改訂
縮尺 25,000 倍正量
1. 標高 1.7 公尺等高点は昭和 51 年 12 月撮影
2. 境界線資料は昭和 48 年 8 月実施
3. 境界は昭和 48 年 7 月 25 日現在
4. 境界線は昭和 38 年測量の境界線による

1:25,000 御正体山

昭和 53 年 9 月 30 日発行 (3 巻刷) 計 4 頁 (複製 6 冊 4 冊)
著作権所有 国土院 国土院



分布图 50

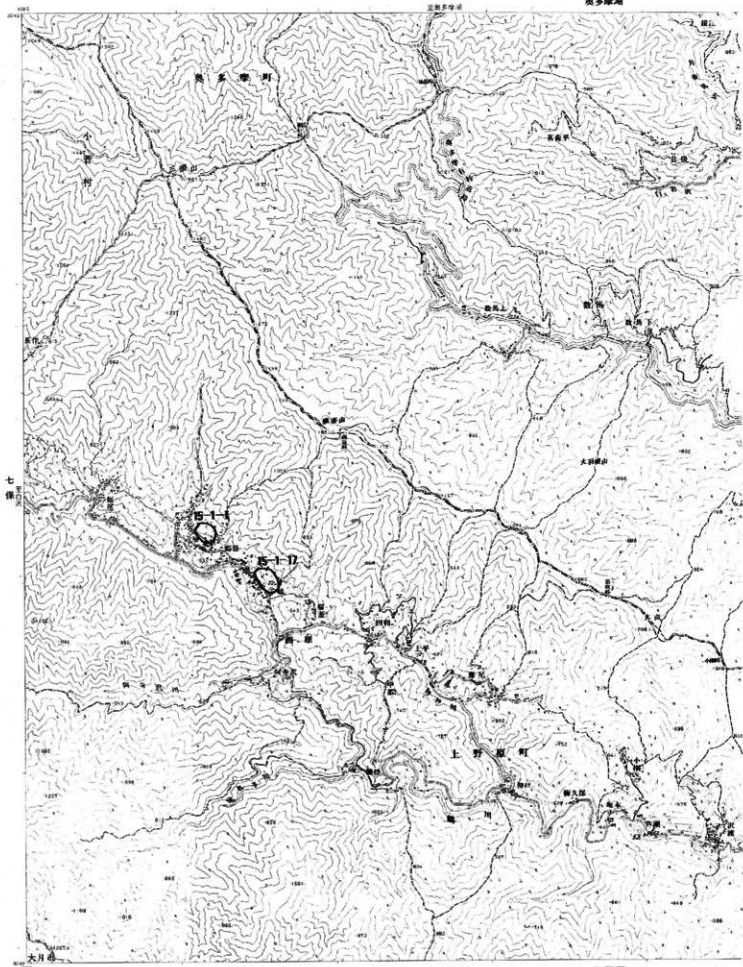


- 山代系**
A. 京都屋敷 山中町村
- 神楽川系**
B. 足柄上郡 山北町
- 静内系**
C. 駒東郡 小山町
D. 御正所

- 昭和4年測量
昭和40年改訂
昭和50年修正測量
1. 標高は10年中等算出(昭和54年12月換算)
 2. 標高換算は昭和52年5月算定
 3. 境界は昭和52年2月22日確定
 4. 山中町村と小山町の境界は一級測量
 5. 境界線は昭和30年測量の測量図(2)を

1:25,000 馬渡河小山

昭和54年11月30日発行(3巻期) 許可令(種製)第474号
国土地理院発行 国土地理院



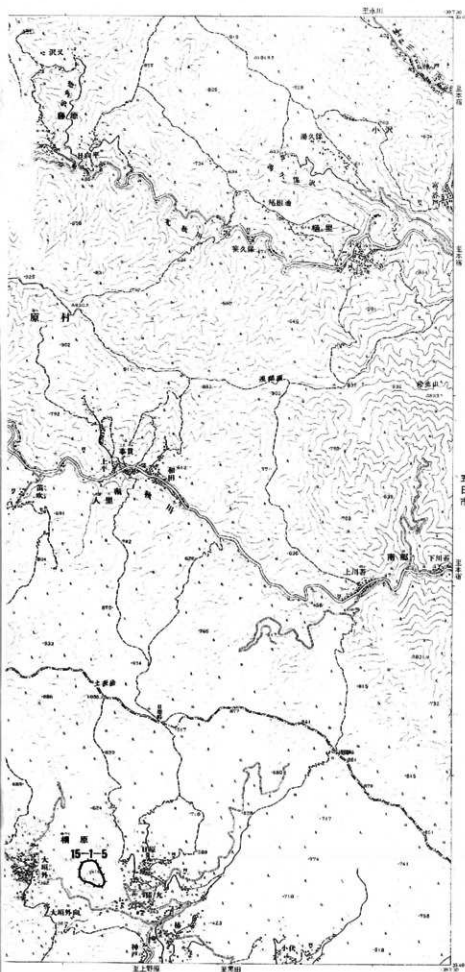
七
保

大月

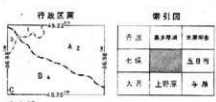
上野原

分布図 51

- 15-1-1 丹波屋敷
- 15-1-5 猪丸城山の烽火台
- 15-1-17 下 城



五日市



- 東京部
- 山 西多摩郡 1. 美多摩町 2. 梅原村
- 山 關東 郡 北郡編郡 3. 小室村 4. 上野原町
- C. 大井町

昭和44年測量
 昭和20年修正測量

1. 使用 L. T. 空中写真は昭和24年10月撮影
2. 標高測量は昭和55年5月実施
3. 境界は昭和58年4月2日現在

1:25,000 猪丸

昭和57年1月30日発行 (2色刷) 許可令(独)第68号
 著作権所有者発行社 国土地理院



大月

大室山

分布図 52

- 3-3 鎌田氏館
- 3-4 斧座御前山
- 3-15 網之上御前山
- 15-1-2 内城館
- 15-1-3 四方津御前山
- 15-1-4 大倉砦
- 15-1-6 松留館
- 15-1-7 長峰砦
- 15-1-8 矢坪坂の古戦場
- 15-1-9 栃穴御前
- 15-1-10 牧野砦
- 15-1-11 鶴島御前山
- 15-1-12 鶴川館
- 15-1-16 沢殿屋敷
- 15-1-18 古城
- 15-1-19 殿地
- 15-1-20 御屋敷



与湖



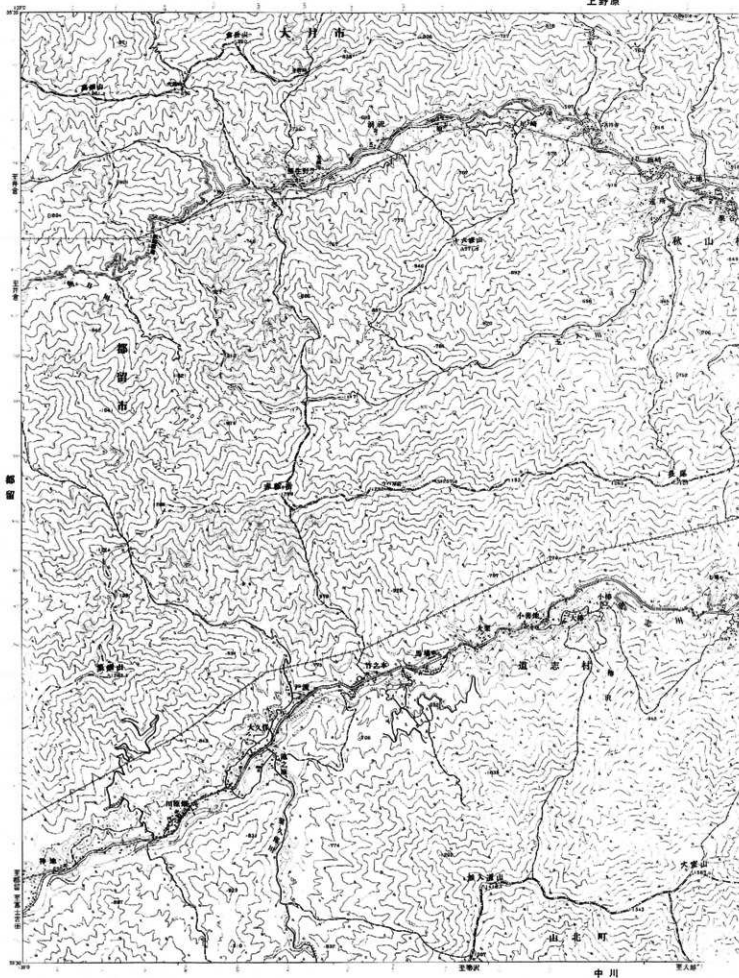
- 山脈
- A. 大宮山
 - B. 北野山
 - C. 南野山
 - D. 津久野山
- 神倉川
- 新野川

昭和4年測量
 昭和14年改正
 昭和40年改正測量

1. 使用した空中写真の撮影時期は5月撮影
2. 地形調査は昭和49年5月実施
3. 測量精度は±0.5m以内

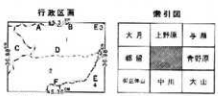
1:25,000 上野原

昭和50年11月30日発行 (3色刷) 許可(2) 建設省第4号
 製作所 国土院発行 国土院



分布图 53

14-4-1 道志鐘撞堂



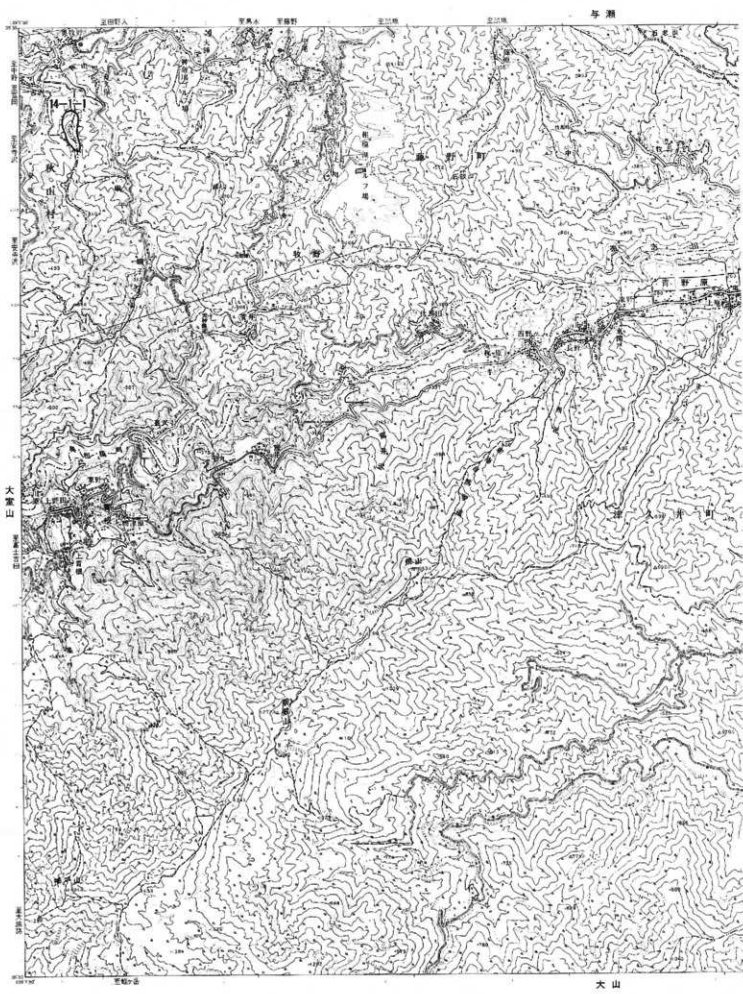
- 行政区画**
- 山麓界**
- A. 大月市
 - B. 北相原郷 上野原町
 - C. 榎原町
 - D. 栗原宿郷 1. 和志村 2. 渡辺村
- 神奈川道**
- E. 津久井郡 3. 藤沢町 4. 津久井町
 - F. 足柄上郡 山北町

昭和4年測量
 昭和44年位置
 昭和55年修正測量

1. 法務省土地院測量部測量
 2. 地籍調査に際して55年8月実施
 3. 測量は昭和48年4月2日現在

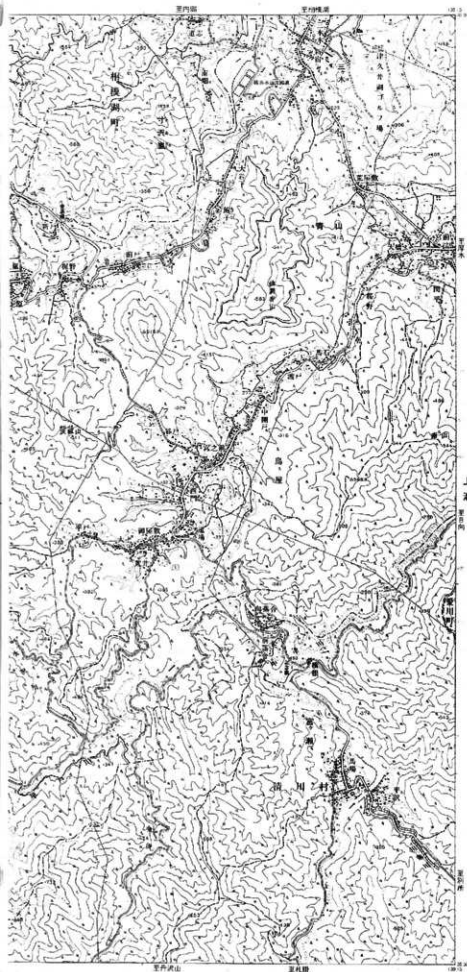
1:25,000 大室山

昭和37年10月30日発行 (3色刷) 研究会(複製)第4号
 著作権所有者発行所 国土地理院



分布図 54

14-1-1 一子沢の城ヶ峰

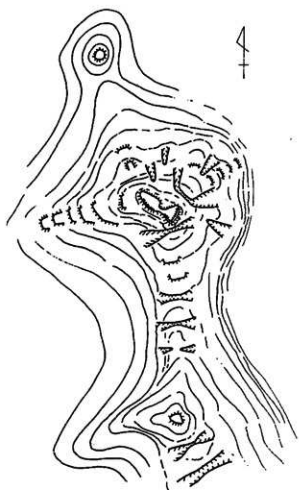


- 山形県
A. 青森県 秋田県
神宮川
B. 津久井郡 1. 藤野町 2. 掛橋町 3. 津久井町
C. 安中郡 4. 湯沢町 5. 安比町

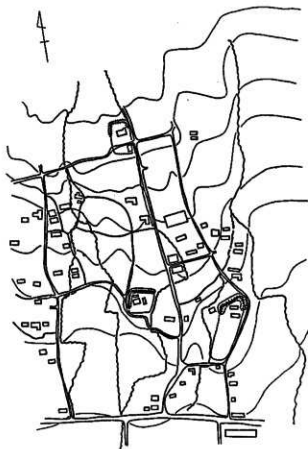
昭和4年測量
昭和44年改正
昭和50年改正測量
1. 資料は、国土庁等より昭和50年6月提供
2. 現地調査は昭和50年8月実施
3. 発表は昭和48年3月16日現在

1:25,000 青野原

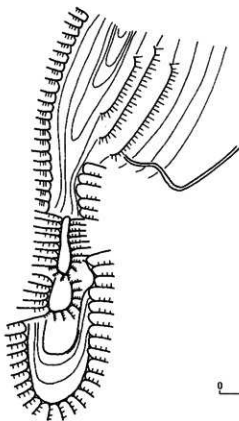
昭和77年12月29日発行 (3色刷) 許可(独製)第17号
製作場所青森県庁舎 国土地理院



小物成山



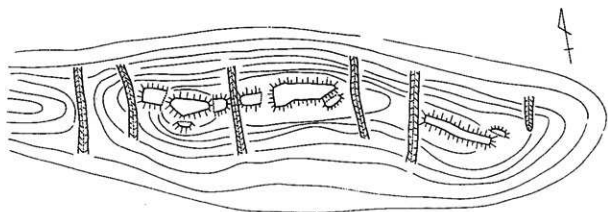
西横森遗址周辺図



御岳の城山

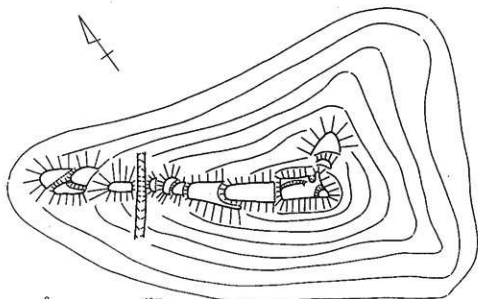


0 100m



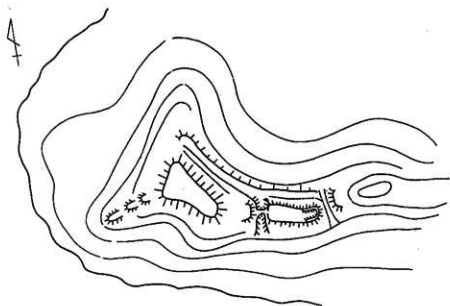
0 100m

牧野砦



0 40m

棚穴御前山



忍野鏡撞堂烽火台

山梨県の中世城館跡
—分布調査報告書—

編 集 山梨県教育委員会
発 行
発行日 昭和61年3月31日
印 刷 しらかば印刷社

